

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 7

情報宣傳研究資料

第十五輯

戦争か平和か

ナチズムとボルシェビズムの世界政策

内閣情報部

310
137

オットー・クリーク

戦争か平和か

ナチズムとボルシェビズムの世界政策

内閣文庫
八四九六号 冊
和書



本輯は情報宣傳に關する資料として事務上參考の爲め
オットー・クリーク著「戦争か平和か」を翻譯せるものなり

昭和十五年九月

310

137

序 言

先づ「戦争か平和か？」と言ふ問題から出發して、漸次歩を進め、體驗による出来るだけ明白な解答を試みる事にしよう。

一九三八年九月三十日の正午頃、列國の新聞記者はミュンヘンからベルリンへと車を走らせて居た。その前夜、ヒトラー、ムッソリーニ、チエンバレン、グラヂェの間には、差し當りヨーロッパに逼迫して居る「戦争勃發の危険」に、ピリオドを打つべき協定が結ばれて居た。此の列車に乗つて居た新聞記者連中は、ニュールンベルグのナチス黨大會開會當時から、此の金曜の朝に至る迄、何週間も激勞を續けて居たのだつた。彼等は来る日も来る日も、ベルリン、ブラーグ、ロンドン、パリ、ワルシャワ、コブノ、スペイン、バルカン諸國、モスコ、ニューヨーク等から来る多くのニュースを読み、色々の論説や註解に現はれた事實とか意見とかを、相互に關係づけようとして居た。彼等の努力は、自己の體驗を、記載された各種の事件と結びつけ、全世界の人々、殊に歐米の數億にのぼる人々の心を動かして居る問題——「戦争か平和か？」——に對する見解を確立せんとするのにあつた。

彼等はその個人としての體驗を、ヨーロッパの歴史が實際に作られた場所に求めたのであつた。それは最早、嘗てツェルサイユに於て條約が記述調印された當時、世界の中心たりしパリではなかつた。世

界の中心は、此の數週間に、ロンドンでもニューヨークでもなくなつて居た。ニューヨーク——それはアメリカニズムが、ナチズムやファッシニズムと戦つて、人類の新なる福利を齎すべき所だ。此の記者達の大部分は、一九二二年以來、年々リガの總會には參列したが、ジュネーブで世界歴史が迫る道を、最早追求する事は斷念して居た。彼等はそのドイツ滞在によつて、世界史はヒトラーによつて作られると云ふ事を是認し、「戦争か平和か？」の鍵はヒトラーの手中にあると思つたのである。

さて彼等はニュールンベルグで、總統の布告が讀み上げられた時、會議場の傍聴席に座を占めて居たが、ヒトラーが此の會議の最終討議の席上で、ズデーテン地方の運命に對して、斷の信號を發するや、いち早く電話に殺到し、續いてベルヒテスガーゲンに車を走らせ、更に其處からベルリンへ、ベルリンからゴッデスベルグへ、其處から再びベルリンへ赴いたのであつた。此處で彼等は、戦争逼迫の爲直ちにドイツを立ち退くべし、と云ふ本國政府の命令に接した。ドイツは英佛飛行機の爆撃圈内にあると思はれたから、國境で更に事件の發展を見る爲に、彼等は早くもパーゼルとアムステルダムに、その事務所を作つて居た。

四列強の責任者が相會して談合し、それに依つて平和の曙光を見出さうと云ふヒトラーの決斷は、記者等をミュンヘンに呼び戻し、我々ドイツ人及び外國人は、朝から深更に到る迄決定を待ち受けた。夜半の一時、遂に妥結の文書が到着した。タイプライターにかちりついて、無茶苦茶に働き續けた數時

間、習慣的に電話にとりついた數時間、——それはやつと我々から去つたのだ。チェンバレンは我々の出發より數分前、再度ヒトラーの許に車を驅つた。英獨間の平和確立に就いて、此の兩政治家の人物を反映した聲明が公表されるであらう、と云ふ事を我々は既に知つて居た。

「平和！」——それは我々の談話の常套語であつた。我々は神經の恐ろしい緊張から逃れた。旺盛な生氣、我々の倦まざる労働の生の泉——それは我々と共に逸脱した。我々は心から喜ばしい氣持で祝つたが、それは何かよい仕事を完成した人間にのみ與へられる喜びであつた。我々の仕事の成果は、職業的見地から見ても上々のものであつた。我々の同僚の外國人も、彼等自身に就いて、眞理の爲に勇敢に戦つたと言ふ事が出来た。我々が一緒に車を走らせてから間もなく、一人の未知の人が我々の間にやつて来て、「ほんとうに戦争にはならないのですか？」とききでもしたら、我々はそんな疑問を一笑に附した事であらう。總統邸に於ける會談の友好的音調を、我々は讀者より遙によく知つて居た。そして心から解放された幸福に浸りながら、バイエルンの高原を越え、チューリンゲンの山地を登り、再び北ドイツの平原に向つて、車をひた走りに走らせたのである。

併し此のドライブは永く、やがて夜が訪れると、誰も彼も考へに耽けるのだつた。我々は來るべき日の任務を考へ、我々も同行すべき獨軍の進駐に就いて考へた。どうして速かに第一地區へ、それから第二地區へ進出したか？總統は最初何處でズデーテンドイツ人に挨拶するだらう？ チェッコ人は抵抗するだ

らうか？此れに對しては、誰も「否」と答へた。併し一人の外國人はそれに附言して、
「若し彼等が抵抗しなければ、ドイツの東南進出は易々たるものになるであらう」と云ふと、又他の者は

「此の平和は高價なものだ。それはフランス人から總てを奪つてしまふ。小協商國をも、ドイツに對する對ソ軍事提携をも、東南諸國との交易關係をも、フランスは多くのものを失ひ、イギリスはその代價を支拂はなければならない。」と言ふのであつた。

要約して言はう。我々はハツレとベルリンの間で、再び平和の陶醉から呼び醒まされ、多くの政治家の名、與黨野黨の諸計畫、バルカン諸國やチッコスロヴァキアの經濟上の數字、ソヴェトの發展に就いての推測、合衆國、英國、フランス等の軍事的強大さ、チッコ人及びスロヴァキア人に對するドイツの企圖に就いての憶測、國境線確定の諸計畫、各種の戰術的吟味——かうした事が、總てチャーナリスト獨特の、簡潔な、彈力ある議論の魔法釜の中で、目茶苦茶に掻きまぜられる事になつた。

汽車がベルリンの手前で止つた時、我々は又「平和は何處に？」と云ふ問題を論じ初めた。そして此の問題は、我々の歸還旅行の後問もなく、第五地區の境界を確定した大使會議の決議を論じ合つた時にも、取り上げられたのである。その當時我々は、最早人民投票はないであらうと云ふ事も、ドイツとチッコとの對立は緩和されるであらうと云ふ事も、既に知つて居た。一體平和は訪れるであらうか？それ

(4)

ともヨーロッパに於ける兩陣營のあらゆる感情と對立が、再び復活するであらうか？解放行動決定に當つて、獨軍のズデーテンドイツの一都市への進駐に同行した一夜にも、我々は此の點に就いて話し合つたのである。

ベルリンとパリ、ロンドン間の緊張は、その當時既に我々の意識にのぼつて居た。我々が此の夜、問題の個々の點に就いても、又「戦争か平和か？」と云ふ運命的問題に就いても、意見の一致を見なかつた事は言ふ迄もない。二三時間、兩陣營の罅隙に橋が架けられた事はあつた。併し總ては再び元の獸阿彌になつた。外國新聞の用語を用ひて言へば、所謂民主主義國家と全體主義國家の對立である。

かくて私は此の夜、世界戦争勃發以來、公正にして即物的な公論を吐かうと努めて居る人々が、知つて居るあらゆる事柄を、一卷の書物に纏め上げてみようと決心したのである。

(5)

目次

序言.....一

第一章 行爲人と所有人.....一

一七八九年から世界戦争まで.....五

民主主義戦争.....三

兵に對する機械及びホルシエビスト.....三

回 想.....五

第二章 所有人の獨裁.....五

ヴェルサイユ條約.....六

保障妄想.....七

辯護士と相場師.....八

ソヴィエト・ロシアへの道.....九

回 想	102
第三章 ボルシェビストと所有人	106

國民とマルキシズム	109
ロシア草原の人々	118
光は東方より	123
レーニンとトロツキー	124
ヴェルサイユ會議のボルシェビズム援助	125
共産主義の機械人	125
ボルシェビズムの世界煽動	126
スペインの内亂	127
回 想	128
第四章 行爲人の勝利	127
所有人からの離脱	129

自由の獲得	129
ヴェルサイユの終極	131
豫防戦争に對する勝利	132
回 想	137

第五章 民主主義の將來	131
ボルシェビズム反動	133
第二豫防戦争	135
回 想	136

第六章 文明の革命	137
所有の現品目録	139
反歐大陸	139
回 想	133

第七章 権力か能力か	134
------------	-----

戦争か平和か

——ナチズムとボルシェビズムの世界政策——

第一章 行爲人と所有人

人間と云ふものはあらゆる事物の尺度である。人間の口にする所のものに對して疑問を投げて、我々は「何か?」と云ふ問題を確定したいと思ふ。今日、全人類にとつて何よりも關心を持たれて居る言葉は「戦争か平和か?」と云ふ言葉であつて、これを言ひ換へれば、「戦争は起るだらうか?」と云ふ言葉である。

此處に我々は、我々の通俗的政治觀の土地（それは藪と岩だらけで、不明瞭で不確實な概念の種子が蒔かれて居る）に、熟慮の杭を打ち込むのである。待て暫し。一體此の問ひは正しいものだらうか? 實際平和は來るであらうか? 戦争とは何であらう? 學校流のありきたりな解釋をしようとしてさへ此の問題をスラスラと解く事は出來ない、先づよく考へてみよう。戦争はそれ自身決して軍事的物ではない。戦争が武力行使と同意義なのは歴史學の中ではかりであり、戦争が軍隊の動員と共に開始され休

戦と共に終結すると者へて居るのは、連続的な戦争に倦み疲れて居る民族だけである。けれども實際に於ては、戦争は多様な力の行使である。

然らば平和とは何か？ 平和は文書と簡條で作られると思つて居るのは、弱小民族だけである。平和は二國乃至數ヶ國の民族間に、各種の力の行使が完全に廢された時にのみ、存在するものである。ところで今日、ヨーロッパや世界の何處にかゝる平和が発見されるだらうか？ それは實際に親善關係に依つて結ばれて居る個々の國家間に存在するのみである。一方かゝる國家と雖も同じ様に他の國家群と和解して居る。それは妥協への意思に依らず、實力の行使に依つて決定される和解である。平和はヨーロッパにも、世界にもない。

密かに行はれる封鎖、一般的物的加害、道德的貶下と誹謗、煽動に依る神經の攪亂——是等は今日各國民が互ひに用ひて居る武器である。

一九一四年から一九一八年に至る迄、我々にとつて、否、これより先既にバルカン諸國にとつて、更に後にはポーランド及び邊境諸國、ソヴェトとその敵國、スペイン、續いて全東アジアにとつて、實力行使の最高度、ありとあらゆる武器の動員をなすに至る迄擴大された戦争——我々は數十年來此の戦争の中に生きて居るのである。現代では、「戦争か平和か？」ではなくなつて居る。何故ならば我々は、事實上の平和状態は戦争によつて中絶される事がある、と云ふ危険を冒して居るからである。

我々は永續的な戦争状態を眞の平和に轉化せしめる——若しそれが歐米人の力に餘らないならば——と云ふ課題の前に立つて居るのである。

此の戦争はヨーロッパに於ける二陣營の對立に基づき、既に一七八九年のフランス革命の勝利以來存在し、二十世紀に至つてその特徴となつた。其の一つは當時の勝利者及び其の子孫の陣營であり、他はフランス革命のあらゆる原則、即ち自由主義及び民主主義の反對者の陣營である。彼等の勢力は増大した。フランス革命の治世百五十年の後、ドイツ人及びイタリア人は、他民族の人々と結合した。此の結合は、自由主義及び民主主義の所有理想に對して、人間最高の行爲力への發展と云ふ理想を代表する。所有人と行爲人が對立し、十九世紀の革命と並んで二十世紀の革命が登場したのである。此の革命はドイツに於てはナチズムの勝利となり、イタリアに於てはファッシズムの勝利となつた。それは世間で一般に言はれて居るよりも、遙に強く歐米の諸民族の心と魂を揺り動かして居る。

さて一步を進めて、二十世紀の此の革命の程度を測つて見る事にしよう。それはその深さに於ても、幅に於ても、如何なる歴史的事件とも比較し得ないものである。何故ならば、此れ迄、我々の爲に唯獨り世界史を作つて來たヨーロッパ人の大闘争に於て、常に問題となつた事は、移住と戦闘、新植民地と新牧場地の爲の進路を開く土地に於ての、ヨーロッパ人諸力間の平衡にあつたからである。如何なる革命も結局侵略と云ふ事に落付いたものである。その対象は他大陸の人間の爲に狹隘にされ加之人口過剰に

なつた限られた土地ではなかつた。一方の完全な敗北とか、或はより高い段階に於ける均衡などと云ふものが問題になつたのではなく、對照は外部の大侵略地方へも押し伸ばす事が出来たのである。

今日歐米諸民族の五億七千萬乃至五億八千萬の人間は、相接して竝立し、殆ど同程度の文化、同程度の軍備、技術的能力、精神的發展を有する同じ様な生活形態の中に押し込められて居る。今日問題になるのは、同民族の發展段階に於ける高低の均衡ではない。新領土獲得の可能性もなく、一定の土地に押し込められた民族の一部の者が、他の者以上に所有すると云ふ事は肯すべき事であらうか？ 持てる者はその所有物を守り、持たざる者は平等権を要求する。

併し持たざる者にとつて、所有は權利及び義務の平等程、重要なものではない。彼等は人間自身の中にそれよりも高い目標を置いたのであつて、彼等の目的とする所は人間の變革であり、人類一般の發展のより高い段階である。彼等の革命の目標は、人類を所有の過重から解放する事であり、人間に内在する精神的、肉體的諸力を、より高い行爲に昂揚させる事に依つて、人間を向上せしむる事にある。彼等は物質の彼岸に均衡を求めて居る。それ故に二十世紀の此の革命は、白人の文化世界に於ては、嘗て見られなかつた程偉大なものである。

兩陣營、兩陣營の責任者たる人々、即ち持てる者と革命家——此の兩者は、上述の力強い運動と物質を超克して、共に勝利に導く力を今尙持つて居る。彼等は戦争を、眞の平和に依つて終結させる事が出

来る。此の革命の勝利のみが和平たり得る事は確實で、此の革命の敗北は戦争の繼續である。何故ならば、此の革命を人間の中に抑壓する事は、最早不可能だからである。

一七八九年から世界戦争まで

今日の人間——所有の人間と義務及び行爲の人間——がどうなつたか、と云ふ事を想ひ起して見よう。人間は權利を持つて居る者だらうか、それとも義務を持つて居るものだらうか——此の問題は永久に關心を持たれる問題である。人間が權利を持つて居ると云ふ理由は、その力を用ひる程度の差こそあつても、皆同じ様に高等な生物だからであらうか？ それとも若し人間がその義務を履行するならば、それで權利を持つて居ると云へるだらうか？ 國家は持てる者の共同體であらうか？ それとも労働者と日傭人の共同體であらうか？

廣く歴史的回顧の眼を投げるならば我々は此の點に止つて居るわけに行かない。何故ならば、ヨーロッパ人が十五世紀から十六世紀にかけて、突然その眼を未知の世界に轉じた時、彼等にとつて所有は行爲よりも貴いものになつた事を、我々は知つてゐるからだ。先づ有力な者が土地發見の物質利益を識り、皇帝や王はメキシコから金を、アジアから紫袍(君主の衣服)を、印度から眞珠を、支那から茶を、アフリカから奴隸を得た。これに續いたのが諸侯及び大商人で、彼等は探險家を送り、後には大軍を派遣して

他大陸侵略に乗り出す事が出来、地下の岩石、豊饒な耕地、木材及び果物、あらゆる天然富源、益々多くの金銀寶石等を獲得した。最初に世界を制覇したのはポルトガル人で、スペイン人がこれに次ぎ、更に後にはフランス諸國の軍隊、オランダ及び英國の傭兵と掠奪兵が覇者となつた。かくしてヨーロッパ人は確固たる植民地を建設する爲に、大舉して海外に渡り、追放者や宗教上の狂信者等が北米の東部海岸に第二の故郷を求めた。英人は南部で、佛人は北部で。最初の十年間と云ふものは、獲得した土地を自力で開墾したり、奪掠した奴隸の手に依つて開墾させると云ふやうな事を彼等は考へつかなかつた。彼等は地下に成長しつつある各種の結實を無選擇に採り、その最善の使用法を發見しようと努力し、極めて容易な收穫の利益を故郷に送つたのである。

北米東海岸に定住した男女は、實際最初の移民となつた。彼等がその土地から日々の糧を得る爲には期待に反した過激労働に自ら従事しなければならず、又絶えず從來の土民と闘争しなければならなかつた。併しその土地は彼等にとつて貴重なものになつたのであつて、彼等はその植民地を、北米の廣大な諸地域に擴大し、同じ體驗と困苦を共にした者同士で、一つの共同體を作つた。かうして自然な方法で國家が出来上つたのである。

さて此の北米に於ける所有關係が複雑多様になつて、移民相互の間に取引關係が生じ、各共同體が自ら法律を制定し初めると、(特に祖國イギリスから離叛した後は) 次の様な問題が起つて來た。

(6)

即ち、何世紀も前からちやんとした境界壁で分割されて居るわけでもなく、總ての者が外敵の來襲と天災を防禦しなければならぬ義務を持つて居る此の國では、一體共同體は如何にして個人を保護するか、と云ふのである。

これらの人々の體驗は、眞偽取りませた夢の様な物語となつて、滔々としてヨーロッパに流れ歸つて行つた。そして所有慾を刺戟されたヨーロッパ人の思考は、再び共同體の生成と、今や、「北米合衆國」となつた此の國の諸法律の誕生を促したのである。

かくて土地發見と云ふ革命的體驗、ヨーロッパ第三階級の致富、元來島國に閉ぢこめられて居た英國の國家政治的發展、精神的哲學的革命、北米移民の實地經驗と使命——かうしたものから、自由と呼ばれるところの、否寧ろあらゆる形式と變化に適合した言葉で言へば、「デモクラシー」と言はれるところの國家説が生れたのである。所有が決定的なものであり、元來は人類共同體の唯一の要素として考へられて居た義務を踏みつけた國家及び共同體の解釋——世界に贈られたものは、これであつた。十八世紀から十九世紀にかけて、人類の意思と體驗から歴史を作つた人々は、巨萬の富を得た英國庶民、物慾に汲々たるフランス市民、物質的富を惠與された合衆國の市民等を目撃したのである。

一七六二年、ルソーは「民約論」を書いた。フランス革命の急進的な波が引き去ると、此の革命の結果、貴族及び僧侶階級に對する第三階級の興隆と共に、平民世界の時代が始つた。人類の自由、平等博

(7)

愛が要求せられ、此の要求が少くとも哲學的狂信者の頭腦から、現實的人間の頭に移されるや否や、それは所有獲得の自由と云ふ事を意味するに到り、此の地上の財物を所有する権利の平等が欲せられるに至つた。そして世人は、土地と物質の「無限性」を突然發見して、此の所有を永久的なもの、即ち永久に分割し得るものと考へた。かくて人間の義務は黙殺せられ、人間の権利が喧傳されたのである。十九世紀に於けるフランス國民國家の成立——その誕生の爲にはナポレオンの擡頭と没落が必要だつたのであるが——は所有人國家の具體化である。

フランス革命から二年前の一七八七年、イギリスの羈絆を脱した北米合衆國は、その憲法を發布したが、その各條に述べられて居る目的は、此の新國家の市民に依つて獲得された財産の保護であり、嘗ては「持たざる」國であつた此の國の所有に對する権利の確定である。これと同時に、有産階級を共通の國家的利害に結びつけようとしたのであるが、彼等に義務を賦課せず、單に所有權を保護したのに過ぎなかつた。

英國では紡績機、自動織機、蒸氣機關の發明の時代、即ち一七五〇年から一七八〇年の間に、工業市民階級が形成され、所有に對する権利は、貴族から庶民と云ふ廣汎な階級に移行した。彼等は土地は獲得しなかつたけれども、その代り他の價值、即ち土地と同價値の金錢を手に入れたのである。差し當り有産階級の歴史を更に辿つて見よう。イギリスは極度に資本主義的な帝國主義國となり、そ

の鐵の輸出は既に一七九七年に初つた。一八一〇年には既に五千臺の蒸氣機關を有するに至り、此れより先一七九九年には印度の廣大な地域を攻略して居た。その翌年にはマルタを占領し、一八〇五年にはトラファルガル海戦でフランスに勝つた。工業は綿の輸入増加と共に發達し、十九世紀初頭に於けるケープタウン及オーストラリア植民地建設と、對ナポレオン戰爭の結果、オランダ及びフランス植民地の獲得とは、イギリスを富ませた。そして英人は殆ど義務を顧みないで居られた。彼等は窮乏の手から遠く離れたから、もう永久に物質と云ふ天富で食つて行くことが出来ると思ひ誤つたのである。その反動もあつたが、英國の責任者達はそれに妨げられず、その所有權を次第に擴大して行つた。一八三二年の選舉改革（特記すべきは之れに依れば、選舉權を有する者のみが國民である）は此の權利を財産に結びつけた。此の所有民主主義の完成は十九世紀初頭の英國史を示して居る。十九世紀——それはエヂプト及びアフリカの大部の占據、ブール人鎮壓、印度の完全な侵略、武器で保護された英國貿易の世界的發展の時代である。

合衆國では所有の憲法が、新所有地へ行く移民の權利を保護した。此の國はやがて遠く大陸の中部に至るまで分割されたが、一八二五年以來の入國開始につれて、又最初の大洋汽船と共に、新しい所有の亡者共がアメリカめがけてやつて來た。既にその父或は祖父から所有權を受けついでた者は富豪となり、土地に對する權利を貧民と抗爭した。一八四八年カリフォルニアに金が發見されるや、東部の貧

民は雪崩をうつて大陸を横断して西部に流れ込んだ。移住、殊にドイツからの移住が増加し、一八五〇年にはハンブルグ、ニューヨーク間の航路が開かれた。一八五九年石油が発見され、續いて内亂が勃發して、その結果有産階級の諸権利は更に不動なものになった。その間に南米では獨自の國家形成が成就されたが、そこで行はれた革命は、單に所有權確定の爲の闘争に過ぎなかつた。合衆國は一八九二年、(これより先、既に保護關稅制度が採用されて居た)移民制限、——先づ支那人に對して——を始めなければならなかつた。續いて一九〇七年には移民の一般的制限が行はれたが、ユダヤ人はこれより六年以前、既にニューヨークに覇を唱へ始め、一九〇六年にはモルガンに依つてステイプル・トラストが創設された。アメリカはユダヤ人の指揮下に、全世界のアメリカ市民の所有權に對する要求を持つた經濟帝國主義を始めた。アングロ・サクソン人種は所有の民主主義を最も鮮明に刻印した。

フランスの運命はこれと趣を異にして居た。フランスは本來、英國より更に満ち足りた快的な市民性の中に浸つて、小さい家をしつかりと我物とし、庭園や僅かばかりの葡萄園に對する權利を確定する事で満足して居た。フランス國民は人權とか、自由、平等、博愛等と云ふ事に大騒ぎをやり、又實際それ以上、生活の平穩と云ふ事に關心を持つて居た。それだからこそフランスは、今日マルキシズムとボルシエビズムの中に表はれて居るあの民主主義の、自然的變質の温床となつたのである。既に一七九六年、フランスではバブーフの著書の中に、プロレタリアート獨裁のスコロガンが記され、一八四一年には共

産主義運動の基礎がスイスに置かれた。ついで一八四七年には共産黨宣言が發表された。民主主義的思想の急進化の影響はフランスの人間の間にあつた。マルキシズムは人間の完全な平等と云ふ理論を發展させ、所謂無盡藏の所有の分割を要求した。共産主義は國家的境界の破壊の下に、インタナショナルの宣傳によつて、マルキシズムの理論を實際化しようとした。一八六七年、マルクスはその資本論を書いた。パリでは一八七一年、共産黨政府の蜂起に依つて、マルキシズム理論を眞理化せんとする試みが行はれた。それから多少の差こそあれ、過激な徴候を持つたマルキシズム及び共産主義の、インタナショナル的組織が作られた。ユダヤ主義は此處でも民主主義の精神的實際的應用の指導權を握り、市民的安易の爲のフリーメーソン組織は、ユダヤ的使嫉的、マルキシズム的共産主義的煽動の地盤を與へた。そして民主主義は次第に急進主義に身質をした。併し下層からの壓迫が激化すれば激化する程、腐敗した富裕な上層階級では、産業英國の建設と、一七八九年のフランス革命の理論から、何度も何度も歸された權利の保護に對して、益々氣をつける様になつた。

一方、民主主義には、東ヨーロッパで派が生じ、民主主義思想は汎スラブ的煽動と奇妙な結びつきをして、後のチエッコスロヴァキア領、ポーランド、バルカン諸國等で發達した。ベルギーでは數人の王の下に純資本主義的な國家建設が始つたが、彼等は自分等の懷を肥やす爲に植民政策を行つて、然る後植民他を彼等の國家に賣りつけたのである。民主黨と反對黨とが最初に大和解をした直前、フランスは



漸く北アフリカの植民地を完成したが、これが爲對英關係上の損失は大きかつた。それは既に一八三三年から一八四七年の間に仕遂げられたアルジール占據を基としたもので、フランスはモロッコに侵入し、英・露と結んで、何等の躊躇なくドイツに對するその要求を貫徹したのである。

民主主義は次々に現はれる敵と戦ひながらも世界中にその凱旋行列を貫徹實施し、それが爲に民主主義國家の人々には莫大な物質的利益が齎らされた。民主主義の亮々たるラッパが鳴り響いてから早くも一年にして、即ち一七八九年のフランス革命勃發直後、此の革命の兇行防禦の爲に、反對派の最初の仕事が見はれて來た。それはフランス革命に關する英人ブルケの觀察で、フランス革命の國民議會の言論と、合衆國の憲法の實際の中に滲透して居る原理、國家は契約によつて生ずるものなり、と云ふ原理を斷然拒否したものである。ブルケの説によれば「國民」は民族であり、血統、性向、歴史的運命の結合なのである。

此の英國哲學者は、英國に於ける民主主義の發展を身を以て通過したわけではないが、フランス革命に對して、表面上嫌惡を示して居るばかりでなく、義務の主權に代る所有の主權に對して、自覺して精神的に反抗し、人類の運命に關する思想を形成して居るヨーロッパの人々に、彼の思想は影響を及ぼしたのである。

十九世紀に對する反對の聲が揚つたのは、十九世紀がその第一年を踏み出す以前のことであつて、民

主主義の中に生きるべき運命が與へられて居る、と云ふことが幾分なりとも氣付かれる前の事であつた。民主主義に對して、事實上の精神的反對の指導を握つたのは、ドイツ民族、殊にプロシヤの國民であつた。同時代の人々が盡く自覺して居たわけではないが、蓋し自然の率直な感情から出たものであつた。併しドイツの精神界はこの反對論に疲弊し或は反動に墮したりした。ドイツの精神界はあらゆる政治的事物に於て立ち遅れたが、時にその意志に反しても、反フランス革命の温床であり、少くも民主主義の飽滿した市民性に對する反抗の温床である。ヘルデル、シルレル、又、多くの機會にゲーテが書いた事は、政治的意思としては行き互らなかつた。それは政治的見地に立つた思想ではなかつたからである。併しそれは思想を喚起した。我國の古典作家の性格の強さと精神的卓越性は、それ自身多くの者にとつて、民主主義と遊戯的合理主義に對する反抗を意味して居る。ホイヒテの「ドイツ國民に告ぐ」は行爲人の告白であり、メーゼルの書いたオスナブリュックの歴史はフランス革命に對する下ザクセン人種の力強い精神的闘争である。シャルンホルンスト、グナイゼナウ、シュタイン等の軍人ドイツは、國民困苦の聲を以て行動し、それに依つて所有を攻撃したのである。それは同時に「古きもの」と民主主義に反抗し、犠牲と義務に對する召集を行つたものである。

さて反民主主義の歴史は、その後十年の間、唯一途に攻撃の道を辿つたわけではなく、對民主主義闘争とは何等關係のない色々の事件にそつて、屢々各種の思想が喚起された。一八〇四年ナポレオンは舊

ドイツ帝國に止めを刺さうとしたが、これによつてハプスブルグ家の弱體化が始まつた。若し此のハプスブルグ家の衰微がなかつたならばプロシヤの強化——ひいてはドイツ主義の強化は起らなかつたであらう。自由戦争^(一八一五)の際、滿身これ犠牲と義務の思想に溢れて、ナポレオンを所有權の獨裁官と見做した青年達は唯古いハプスブルグ王家に反對して幅をきかす事が出来たのである。一方、階級國家に關するシュタインの思想の中には、反民主主義的論證があつて、それはいはゞ人間行爲の評價と組合制度固執を述べたものであつた。自由戦争に於けるドイツ國民の覺醒は、形式上事實上、條約と權利の國家とは反對の結果になつた。國民皆兵の兵役義務は、その起源に於て、又各民主主義國やドイツで何十年も散々踏み迷つた揚句ナチスの第三帝國が再び採用した様な純粹な形式に於て、所有と特權の世界觀に對する最も強烈な攻撃である。自由の戦争の歌、自由の英雄讚美、ドイツ民族を、自由戦争から十九世紀に運びこんだ獻身救國の傳説——かうしたものの中には、メッテルニヒの反動の壓制や、市民的自由主義の邪道の中に生活して人々を唯、義務を獻身的犠牲の觀念に溢れた共同生活の思ひ出が辯護して居る。民主主義には、意識的に對立して居る生活用式を固執する此の状態は、仲々強靱だつたから、十九世紀のドイツ史の危機には必ず獻身的な團結民族がドイツに現はれて居る。唯ユダヤ人の侵略者が地盤を得た所では、思想と努力が彼等に依つて、西歐民主主義の利益の爲に攪亂せられてしまつた。フランスやイギリスでも反抗的氣運が起り、十九世紀中に多くのキリスト教的社會團體が生れて、所

有權拒否と「社會的危險」の認識から、非民主主義的教義をたてた。これ等一部の團體は、その純キリスト教教義を民主主義國家説に對立せしめ、他のものはキリスト教の理想に立ちかへる事によつて、巧みに國家の要求を參照した。併しいづれにしても、キリスト教の社會的團體を通して、國家生活の發展に及ぼす政治的影響はあり得たらうと思はれるのであつて、キリスト教はそれ程力強い作用をしない事が證明されたのである。併し此の不成功に終つた試みの中にさへ、反抗的意思は表現されたのである。のみならず英國では、チャーチイズム^(一八三六—一八四八年間英國改進黨が採つた急進主義的運動)の運動が民主主義的原則の擴大に反對して、一八三二年の選舉改革と、一八四七年の十時間労働制採用を貫徹したのは有名な事である。

民主主義世界に對する反對運動は、更にイタリアの歴史の中にも現はれて居る。革命的マツチニと、國家政治的カプールとを持つて居るイタリア國民國家の前身は、史的哲學的傾向を持つた人々の眼には急進社會的な、民主的な、極度にカトリック的な、又民族國家的な、色々の思想が雜然と入り混つた物の様に見える。併し一八三二年に於けるマツチニの運動から、一八七〇年の法王領占據に至る間に今日の國民的イタリアを作つた人々の政治的意思は、漸く形を整へつゝあつたイタリアの國民から、あらゆる行動を通じて献身を要求した。この國民こそ、民主主義的國家の生活からの離脱を意味するものであつた。ナポレオン三世の時代に、市民的フランスが若いイタリアをハプスブルグ家に對し、又法王廳に對して保護した時でさへ、イタリアはさう單純に、フランスの民主主義的哲學を受け入れはしなかつた。

又その法律制定に當つても、英國仕込みの經驗を範にとつて、その通りに作りはしなかつた。國家を築き上げる人々の前には、他の色々の任務が横つて居たのであつて、イタリアは多くの點から見て、それ自身の法律を作つたのである。イタリア國民はハプスブルグ家に反抗してその國家を完成した。カンパーの様な構成的政治家にとつては、十九世紀には全く理想的と思はれて居た民主主義の原理を、此の闘争に利用する位はあつたかも知れない。併しそれさへなかつた。イタリアはハプスブルグ家に反抗し、かくして過去の反動で、民主主義に外観上の基礎づけを間接に與へて居た中心勢力を弱めた。ハプスブルグ家の勢力が弱まれば弱まる程、ドイツに於ける固有の國家政治的思想の發展は自由になり、國家原理に對して自由平等博愛と云ふ時代遅れのスローガンを振り廻し、こんな皮相な標語で、利己的自由主義經濟そのものゝ反動を隠さうとする可能性が、民主主義にとつて益々少くなつて來た。

イタリアは十九世紀末、植民地獲得によつて一大強國となり、ドイツと政治的に結合して、兩國の思想上の關係は交錯した。一時三國同盟の政治的勢力は、弱少なりと評價された事もあつたが、獨・伊兩國の精神的關係は終始貴重なものであつた。

さて十九世紀の政治的勢力から、屢々遠ざかつて居たドイツには、ビスマルクの帝國が發展した。ビスマルクはその政治的闘争の初期には、權利に對する要求の反對者であつた。又彼は國家的利己主義を助けて、その「權利」を得せしめようとして、用捨なく努力したが、市民的利己主義には反對した。一

八七一年の國家建設は、市民的民主主義的世界に拮抗して行はれたものであつた。一八四八年の國民議會は、全然民主主義思想に牛耳られて居たから、その目的を達する事は出来なかつたが、ドイツ國民の一般的氣分は反民主主義的のものであつた。ドイツの思想人が既に十九世紀の中葉に受けた教育は、民主主義國家を攻撃の目標として示さなかつたが、民主主義の發展には、最早適合しなくなつた知識であつた。フリードリッヒ・リストの著書や、ランケの「ドイツ史」を深い認識を以て味讀した者は、最早民主主義になつては居られなかつた。假令ランケは、ドイツの自由黨が説く様な民主主義の誤られた説を、世間に向つて聲を高く辯護したとしても、彼は民主主義者ではなかつたのである。この反民主主義の發展は、國民の上層部と下層部で大きな隔りが出来てしまつた。その後の發展では、ドイツに於ける普通選挙権採用と、色々の事情に基づいた妥協政策の爲に、ビスマルクが反民主主義の積極的闘争から遠ざかる程、又政治の frontline にある人々が、益々民主主義的態度をとる様にならばなる程、ドイツ國民の精鋭分子の思想と、彼等の日常の仕事とは、益々フランス革命の原則から背離して行つた。若しドイツ國民が十九世紀の最後の三分の一に於て、民主主義的になつて居たら、君主政體の有無に拘らず、又ウイムヘルム二世とかその他の皇帝の様な人物が現はれても現はれなくても、どつち道その思想を脱却して、協調への道を、つまり西歐民主主義との妥協への道を發見した事であらう。世界大戦前に書かれた英・佛の歴史の著作の中で、あらゆる「協調」政策を試みても、ドイツは「無能力」だ、と言はれて居るところ

のものは、幸福にもドイツ民族大衆にとつては、民主主義的になり得ない、と云ふ事だつたのである。

ドイツ國民の中に眠つて居る反民主主義の勇敢な反抗力を、喚起し支持しさうに思はれる様な政治的中心勢力がドイツにはなかつた。併しドイツの生き方は他の民主主義國家とは違つて居て、彼等に對して、意識的に反對の立場に立つて居たわけでも、又彼等と提携して居たわけでもなかつた。一九一四年以前に、永い間英、佛、合衆國、英國自治領等との間の、各種の關係を通して、大西洋を廻る思想と行動に於て、又大西洋から地中海やパナマ運河を過ぎ、遙にアジアに至る迄、世界のあらゆる英領と共に一單位を構成して居た世界があるが、ドイツはかう云ふ世界のまつたゞ中に立つて居たのではなかつた。

政治眼を用ひれば、二陣營のこの發展は、既に大戰前明瞭に現はれて居たのであるが、ドイツはその點で、民主主義國家の強力政治確立に與らなかつたと言ふものゝ、正に所有權と云ふ意味で、ドイツはその勤勉さ、商人の巧者振り、發明家の業績などで、これに對する特殊の要求を持てれば持つたかも知れなかつた。ドイツの敵國はこれに反對しないだらう、と云ふのは若しそんな事をすれば、彼等の所有權がドイツに侵される懼れがあつたからである。諸外國の對獨取引は相互に利益を齎した。ドイツに向つて鋒が向けられたのは、諸外國がドイツ國民の中に、民主主義思想を持つた人々には不可解な得體の知れないもの、即ち一種の隠れた力を嗅ぎ出したからである。此の力はビスマルク帝國（ビスマルクの後繼者達は、ひきつゞきこれで食つて居たが）の經濟的、政治的興隆と結びついて、諸外國にと

つては特に危険の様と思はれた。それ故に列國は同盟してドイツを包圍し、佛、露、英の三國は夫々利己的利害關係から、此の包圍政策の帯を完全に作り上げる爲に、各々分擔の仕事をやつたのである。

一八九一年、獨・露の再保障條約廢棄通告の直後、佛・露の同盟が成立した。一八七一年の恨を忘れぬ復讐の國フランスの提案である。一九〇四年には英・佛の接近を見、一九〇七年には英・露間にベルンヤ、アンガニスタン、中部アジアに就いての協調が成つた。一八九八年及び一九一二年に試みられた獨・英和協の努力は水泡に歸し、民主主義諸國は不氣味な敵に對して武装おさ／＼怠りなく、先づ此れに對する政治的宣傳と云ふ武器を以てし、更に世界に向つて此れを匈奴なりと稱した。

一八七〇年から一九一四年に至る此のドイツは、精神的指導の完全な相反的二陣營に分裂し、一方には經濟的「進歩」の人々、即ち極度の資本主義人があり、これに對してニイチエ、ラガルデの如き文化生活上の多くの改革者があつた。その頃新教教會で堂々と戦つたが、今日では既に政治牧師連から忘れられたドイツの闘士、文學藝術上の俊英の人々等も、後者に屬する人達であり、ドイツ科學に携はる人々と學生とは、生來の反民主主義であつた。民族的反民主主義的目的意識を持つた最初の結合——ドイツ青年運動は彼等の間から生れたものである。一八九六年「渡鳥會」（青年徒歩旅行獎勵會、一九〇一年創立とい言はれる）が創設され、リュツクサクを背にしてドイツの諸所を渡り歩いた青年達は、初めの中こそ随分亂暴な行爲もあつたが、彼等が民主主義者でも自由主義的資本主義者でもなかつた事は確實である。彼等の欲して居た

のは他國の生活とは異つたものであり、又、市民的議會ドイツと、當時のドイツ政府の雰囲気に含まれた生活とは異つたものであつた。彼等はあらゆる著者の書物——假令それがドイツの人間の積極的本質を喚起する事が殆どなくても——若しそれが平凡な饒舌家の言はない事を述べて居れば、喜んで讀んだのであつた、チェンバレン、ワグナー、ステファン、ゲオルゲ、ニィチエ等は此れ等の青年に大きな影響を及ぼした。

青年達はかう云ふ人々の書物を讀んで、全部が全部了解するわけにはゆかなかつたが、彼等が野宿の篝火を圍んだり、又その當時は滅多に泊めてもらへなかつた古い農家で一夜を明かす様な時、かうした書物から得た生半可な智識に話の花を咲かすのであつた。此の青年達は、殆ど自發的に結合して更に大きい一團となり、此の集團は一九一二年、ツエラ河畔(リエール河の原流)のマイスナー高地に於て、共同生活の新しい、有用な形式を懸命に作り出さうとしたのである。彼等は全ドイツ學校聯盟、及び後の在外ドイツ人聯盟を、一八八一年に創立した國粹政策の代表者でもあつた。

彼等は既にその當時から、その秀英な力を國境地方のドイツ人から得て居た。「國民社會主義」と云ふ言葉は、一定の政治的意思形成と結びついて、最初ズデーテン地方のドイツ人の間に生れたものである。一九〇四年、クニルシュ、ユング、クレープス等に依つて、此の地にドイツ労働黨が作られ、數年後ドイツ國民社會主義労働黨と呼ばれた。此の政黨は極度に反マルキシズム的、反民主主義的、反社會主義

的で、又反ユダヤ主義的でもあつた。一九一二年のドイツ青年は、國境地方ドイツ人の間に起つた此の體驗を知つて居たし、又反ユダヤ主義の知識もあつた。彼等が最も好んで旅行したのはヘッセンやフランクンの地方であつたが、これらの諸地方は、既に此の地域の小町村に於けるユダヤ人勢力の大々的侵入の結果、反ユダヤ主義闘争が最も熾烈だつた所である。

ドイツ青年の間に起つた此の發展は、勿論外國には知られなかつた。又知れても理解されなかつたであらう。イギリスやフランスで考へられて居たドイツは、經濟的發展に躍起となつて居るドイツであつて、それは屢々世界に於けるその進出の最前線に、純資本主義的思想を持つた人間の代りに、體驗を元として獨創的に働く人間を働かしたドイツであつた。かうした闘士達、此の無氣味な連中——彼等が最前線で受け持つたドイツの爲の政治的任務は成功したのであるが、ベルリンでやつたのでは決して出来なかつたものである。——彼等はドイツを非常に「危険」な存在にし、他國から猜疑の眼を以て見られるものにしたのである。それはバクダッド鐵道建設にたづさはつた人々、モロッコ、新ドイツ植民地等に於ける人々、又は支那、南米、英國諸領土に於けるドイツの青年商人だつた。

聯合國は此のドイツ主義に向つて戦備をととのへ、既に一九〇四年、英國は東亞に於て切實に必要を痛感されるその艦隊を領海に集結せしめた。一九〇八年、エドワード七世はニコラス二世を訪れ、又ウエルヘルム二世、フランス、ヨゼフ一世をも訪れた。併しエドワードの企圖して居た所はロシアを味方

に引き入れる事であつた、かくて一九〇九年ツアールのロンドン訪問となり、一九二二年、英・佛協定成立、これに依つて既に海上勢力は分割され、フランスは地中海、イギリスは大西洋、ロシアはバルチック海を保持した。同年ボアンカレは第一回のツアール訪問をなし、翌年彼はフランス大統領になつた。民主主義諸國は對獨戰を欲し、遂にそれを實行した。一九一四年七月、ボアンカレがベテルスブルグを訪問して知つた事は、フランスは汎スラブ主義煽動に成功し、それに依つて戦争への發展にある前哨が、巧みに占領されたと云ふ事であつた。如何にドイツが逼迫せる戦争を避けようと努力しても、續く十日ばかりの間に、外交的芝居と云ふ手を用ひて、兎に角ロシアの動員は戦争を勃發させるであらうし、細心に造られた幾多の外交的駐屯所の手を経て、イギリスをも戦争に巻き込むであらう——ボアンカレは此の事をはつきりと考慮する事が出来たのである。

(22)

民主主義戦争

一九一四年八月一日、遂に暴力が始められた。此の瞬間歐米諸民族に屬する殆どあらゆる人間の意識は同一同義であつた。彼等は義務の人間になつた。忽ち戦争に捲き込まれた歐洲列強で、國家の責任を荷つたあらゆる人々、軍人は勿論の事である。窮すれば逆すとか、避け難い事實と強制とは、人間を訓育して迅速にその本性に立ち歸らせた。此の一九一四年八月一日に、民主主義によつて、人間生活の

間に勢力を得るに至つた色々の原則とか、財産とか、収入の増大とか、云ふ様な事を考へる者は誰一人として無かつた。此の最初の一週間に、ヨーロッパ交戦國の義務人社會外にあつた少數の者は、國家の保護を受ける事が出来なくなつた。彼等は後になつて初めてその「道理」に立ち歸つたのである。

國境に進軍した兵士達は、十九世紀の生活を、一見「幸福」らしく見せかけて居た總てのものを清算して居た。全戦線に於ける彼等の叫びは「自由」であつた。到る所で此の言葉が、同じ意味で用ひられた。併しそれは、嘗てフランス革命の平等、博愛と竝んで讚美された、あの自由を意味するものではなかつた。それは一八一三年、幾多のヨーロッパ青年が、打倒ナポレオンを叫んで、戦争に赴いた、あの自由を意味したのだ。即ち人類の息の根をとめる大不幸から解放される事である。我々は自己の生命を賭して、ヨーロッパ人を彼等から救ふ使命を持つて居るのだ、と云ふ考へは、政治的には明白ではないにしても、兎に角各兵士の意識の中に一樣に打ち込まれたものであつた。誰も彼もその敵の政策を憎んだ。それは此の不幸の責任は、敵にあるのだと信じられて居たからである。

(23)

實際世界戦争の最初の一月と云ふものは、總ての兵士は戦場で共同の敵に向ひ、外交上の同じ方法に向つて敵對して居た。共同の敵——それは彼處でも此處でも、イギリスに於てもドイツに於ても、又フランスやイタリア、ロシア、其の他あらゆる参戰國に於て、人間の運命などは少しも關知せず、人間の思考も目的も、困苦も苦惱も、希望も力も知る事のなかつたあの同じ外交術である。民主主義諸國の

かう云ふ外交官達は、官僚主義者間の和解、一定の特権的社會層に屬する人々の間の和解を促進した。かうした階級は、全く若干の國家の憲法と同じ様な觀を呈して、民族の運命を決すべき權利を、到る所で持つて居たのである。各國の此の種外交官は、殆ど同じ様な知識、精神的前提、觀點、又、書法、話法の同じ様な方法、討議の席上に於ける同じ様な辯護と攻撃の仕方仕事に携はつた。民主主義の重病に感染した上述のドイツに於ても、他の諸外國に於ても全然軌を一にして居た。公文書の内容は、各國殆ど同じものだったのである。外交官等は國民の生活から遠く離れて、獨自の存在を享受して居るのだが、それにも拘らず彼等は、お互ひにベテンの掛け合ひもし、功罪取りませ善惡相交へて、國民の運命に對する決定權を握つて居たのである。

歐洲列國の外務省や、國會の法律家がつた此の文書の中では、國民の本質と云ふ物は全然無視されてしまつた。國民とは、此れ等の全權委員達にとつて、未知の概念であつた。ドイツでは世界戦争の歴史に關して、三十冊以上の部厚な文書が集められ、談話の記録や註の原文、手に入れる事の出来る限りの秘密訓令等が集められた。一八七一年から一九一四年に至る、歐洲政治に就いての此の文書の卷々の中には、外交官の他に尙國民と云ふものもあると云ふ暗示は爪の垢程も見られない。成程「英國人」「フランス人」「ドイツ人」などと云ふ事は言はれる。併しこれ等の國民の中で實際に歴史を作る生きた方に就いては、一言も洩らされて居ない。討議の席上で「國民」と言はれるのは、單に世俗的な概念で述べら

れるに過ぎないのである。國民に對する彼等の見方は、丁度ブリツヂ遊びやスカート遊び(一種のカ)をやる者が、お互ひに定つた言葉で、一見經驗から得た此の遊戲の原理を話し合つて居る様に見える。實地には幾度も覆された原理の事を言つて居る様なものである。彼等は一定の前提に従つて「挑戦する」(カルク)が、それと同じ様に、國民をいはゞトランプか點取り札の様に、外交遊びの中へ賭けたのである。まるで國民を、手玉にとる事が出来るとでも思つて居る様なやり方で、國民を納得させる事も刺戟する事も、仕事に著かせる事も、仕事をさせないでおく事も出来るとでも思つて居る様な仕方である。彼等は和戦共に、彼等の好きな様に出來ると思つたのである。ところで、挑戦によつて手に入れたものと當にして居た相手のトランプを、偶然がテーブルの上に出してくれないで、敵の手にあるカードには、自分の所謂經驗に照して考へたのは、全く違ふ具合に切札がある事を知るブリツヂ遊びの男の様に、此の外交官達は全く思ひ違ひをやつて居た。ブリツヂ遊びの男は負け、同様に此の外交官達は一九一四年の七月、その賭事に負けたのである。その償ひをしなければならなかつたのは國民であつた。

戦債問題は簡單明白であつて、世界戦争の戦債に就いて、その種のものとしては屢々すぐれた大部な書物で、證據になるものが澤山出たが、さうした書物によつて明かにされた以上に、明白なものなのである。ドイツは此の戦債に到底堪へられまい、と云ふのが各論説の一致するところである。假令英語や佛語では、それ程公然とは言はれないとしても、實際ヨーロッパ各國に於ては、ドイツは挑戦を受けて、

遂に戦争に捲き込まれたのだ、と云ふ事に各論は一致して居る。ハプスブルグ王家とその外交の役割は暴露せられ、舊ロシアの人々の責任は確認された。復讐好きな一九一四年のフランスは、戦時負債の山を負つて、客観的な歴史研究の前に立たされて居る。此の場合戦争賭博で、一番上手に「挑戦する」者は、自分だと思つて居る打算的な商賈人の英國が、最高賭金の危険を賭して、その欺瞞政策を行つたと云ふ事は、世界史の前に最早蔽ひ隠される事は出来ない。此の三國は、勝負の爲に何百萬と云ふ人間の生死を賭けたのだ。彼等こそ戦争の責任者である。

此の責任は、なにも一九一四年の七月から始つたのではない。ドイツに對する使賊は、既にそれより十年も前から始められて居たのである。カルタがテンプルの上に出されると、ドイツの手には、きまつて期待して居た平和の札は發見されなかつた。ドイツの外交官は他國の外交官の持つて居ないものを持つて居たのだが、賭事では下手であつた。併し彼等は正直だつた。彼等は既に「挑戦」された際、負け居たのだ。又實際勝たうと思はなかつたのである。彼等の志す所は、戦争を何等の損失もせず避ける事であつた。「無勝負」こそ彼等の目標だつたのである。列國は自ら、己が手の中にある札も、相手の手にあると察せられるものも、一樣に戦争の危険に賭けた。ドイツの勝負は、時に痛ましくさへあつたが、當時の外交官は、少くとも此の無様な「挑戦」の大なる危険を意識して、ヨーロッパに於ける政治的經濟的勢力を賭けたのであつた。

一八七九年、獨逸同盟が成つたが、それは鋒先をフランスに向けたものではなく、寧ろそれとは反對に、對佛關係を好轉させ様と云ふ、ビスマルクの明白な企圖を持つたものであつた。一八八三年、イタリアの参加によつて、此の同盟は擴大されて三國同盟となつた。かくてドイツでは、フランス側からの攻撃に對する懸念の重荷を幾分なりと卸す事が出来た。一方、ドイツの方には、攻撃的意思は全然無く、ビスマルクは地中海に於ける埃、伊、英三國の共同作業と、ヨーロッパに於ける獨・佛の協力を考へて居た。ビスマルク時代後も、モロッコをめぐる危機に際して、切札を持つて居た人々や、勝負は我が手中にありと思つて居た人々が、時に拳を固めて卓子を叩く時でさへ、ドイツは常に與へる方の側だつたのである。かうした事情の背後には、大抵大勝負をやらうと云ふ意思よりも、寧ろ困惑が隠されて居たのである。

ドイツが平和のカルタを出すといつても、英、佛、露の外交官や政治家は、自己の立場を辨明する様なデエスチャーをして、周囲の國に訴へた。經濟、株式市場、新聞等は此の勝負の岡目八目連であつた。かうしたものに向つて、こんな事が言はれた。「此のドイツ人と云ふ奴は勝負事が不手くそだ、トラングをやるなら、奴等は先に札を知らしておかなければならなかつたらう。奴等のやり方は正々堂々として居ない。次の勝負には一か八かきめなければならぬ様にしてやらう……かくて「平和の闘技」がハーグ會議に用意され、今や世界列國は、遂に國民待望の平和を與へんとして集つた、と大袈裟に囃したて

知らされた。各種の計畫が立てられ、外交勝負では、將來の希望と云ふ奴で、「挑戦」が始められた。輿論の演壇にはジャーナリストと代議士が派遣されて、外務省の討議の席上で一笑に附せられた、色々の考へが宣傳された。彼等のやり方を見ると、まるで今にも、平和が實際大いに促進されさうに思はれた。

ハーグ會議の卓上には、多くの計畫がのぼされてあつたが、それに應じ様とする者は無かつた。列國は最初の決定的言葉を、ドイツに委す事を心得て居た。此の時ドイツが「ノー」と云ふと、列國は計畫の危くなつた事に、如何にも絶望した様子を見せて、頭の上で手を叩いた。計畫——それは若しドイツが「イエス」と言つたならば、列國は何とかして採用されなうと思はれるものであつた。かくて此の時から、人類に對する最大の欺瞞が始まつたのである。

人類の歴史上、如何なる時代に於ても、信仰と物質とは不即不離に並存して居る。人々がキリスト教擁護の爲に、信仰心から十字軍に馳せ参じた時にも、商業上の目的がそれに關係して居た。又、キリスト教徒の間の、精神的大變動たる宗教改革も、經濟的利害關係と無關係であるとは云へない。ところで民主主義は、人間の信仰を完全に、徹底的に物質的利害關係の爲に悪用する事に成功した。而も、人類將來の精神的靈的諸問題の解決に當つて、いはゞ物質的利害關係を此れに入りこませただけではない。さうだとしても、それは當然であらう。何故ならば人間は信仰のみで生きる事は出来ないから。民主主義は

人類を戦争に追ひ込み、此の戦争に依つて經濟的利害關係を救ふ爲に、人間の信仰と平和への憧憬を悪用したのである。

民主主義諸國の指導者達は、その國民に對して、次の様に言ふ事は出来なかつた。

「我々英佛の政治家は、ドイツ人に對して不安に襲はれる。と云ふのは、我々の民主主義よりも、更に強力であるかも知れない、何だか無氣味な力がドイツ人の内に潜んで居る様に思はれるからである。」

又彼等は、いつそのことドイツ人を、全世界の所有の分け前に與らせまい、とする事を認める事は出来なかつた。それ故に彼等は永年に亘り、而も益々精巧にこしらへ上げた煽動によつて、「我々民主主義者は善で、完全な民主主義者たらんしなないドイツ人は悪だ」と云ふ事を、國民に明かにする事に成功したのである。彼等は又自由、平等、博愛、社會主義と云ふ言葉を悪用し、一七八九年のフランス革命と云ふ百科全書から生れたスローガンは、いつも、「諸君は此の氣高い理想の味方であり、ドイツ人はその敵である」と云ふ主張の線に引き寄せられたのである。とどのつまりドイツ人は、言葉の上でも繪の中でも、他國人には野蠻人と見られ、ヨーロッパに襲ひかゝらうとして居る匈奴だと思はれる様になつた。彼等が此の大々的な煽動出陣の爲に利用したものは、復讐好きなフランスの不安と憧憬であり、アメリカ人の野性的な素朴な物の見方であり、真理の知識を、商利の爲に抑壓する事の出来る英國人の能

力、等であつたが、彼等がかうしたものを利用して、以て今日に至る迄何等の變化もないヨーロッパ問題に利せんとしたのである。

此の煽動の發明者達は、こんな危険きはまる賭事^{賭博}の思想を、情報局から情報局へ、新聞から新聞へ、雑誌から雑誌へ、書物から書物へと傳へ傳へて行くだけでは満足しないで、詳細な統制組織を作り、それを通して此のスローガンが、歐米諸民族の中で、特にかうした煽動に敏感な層から出て、どの範圍まで大衆に滲透したかと云ふ事を確定する事が出来た。大衆と云ふのは、技術及び發明、所謂世界經濟、株式取引所、投機等に依つて、表面的な遊閑的生活をかち得た民主主義諸國の平民階級を指して居る。

相場で儲けて、六間ある住宅を手に入れたばかりで、さてヨーロッパ文化の精神的所得を身につけて、此の文化の源泉に慣れ始めて居る者は、野蠻人と言はれて居る不愉快な彼等の競争者に向けられた此の煽動に、最も敏感なのである。かう云ふ人間はまだ仲々素朴な所があつて、どんな虚言にも騙される、又所謂いかものに影響される事が多い。飽滿な生活に達したばかりの、かう云ふ市民層の人々は、秘密共済組合制度の統制組織の中に總括される。彼等はそこで、彼等の低い精神的水準に巧みに適合させられて、外観上の無意味さと、尊敬と位官の階梯で縛りつけられる。數多くの講演の夕やフリーメイソンの秘密集會所の席上では、かう云ふ我慾で、未熟な、極度に傲慢でもどんな負擔にも堪へて、非常に精勵な人々に對して、何處の國でも、似而非幸福と似而非善根の教説が説かれたのである。かくて十九世

紀から二十世紀にかけて、民主主義の近代的「世界觀」が出来上つた。所謂道德的生活原理の狡猾なユダヤ的タルムート(ユダヤ教の法典)的説明から、野蠻人の様な鯨飲に至る迄——此のフリーメイソン秘密集會所で説かれた事、行はれた事、それは總て「文化」と云ふものであつた。獨・英・佛の皇族、古い名家の子息、及び個人的には全く尊敬すべき人々——かう云つた者をメンバーとするフリーメイソンの秘密集會所と、やはり獨・英・佛等の諸國や合衆國にあるユダヤ的、煽動的、秘密集會所とを比べて見ると、その作用に於て大差はなかつた。各國はその眞の文化状態に相應じた秘密集會所を持つて居た。一九一四年前後のドイツもその例に洩れない。今日アメリカ西部のフリーメイソン秘密集會所に於ける、カーニバルの騒ぎに至る迄、それは何等選ぶ所がない。かうした總ての事實の機智は何處にあつたか？、完全に民主主義とユダヤ主義との國家指導の手の中にある、二三の中心階級から、民主主義、商業、及びユダヤ主義の爲の思想を、有産者になつたばかりの、眞の此の胸糞の悪い平民階級へ導き、かくて眞の社會主義の「危険」に對して、救援軍を作ると云ふ可能性——此處にあつたのである。

下層階級に對する防衛(それは此の際やはり關係があつたのだが)は遂に世界戦争に迄發展した。眞の社會主義に對する防衛は、ドイツに於ても、諸外國に於ても、既に戦前から實際困難になつたので、フリーメイソン秘密集會所はあらゆる國民の會員が入れない様に閉鎖された。それは物質的利得に祝福された此の陰謀——フリーメイソンのユダヤ的民主主義の犠牲としては、確實でなくなつた陰謀——を

何人にも覗かせない爲に、いやに有難さうな誓約などをふりまはして、色々の勿體ぶつた神祕がかつた仕業をして閉鎖されたのである。

此のフリーメイソンの秘密集会所の中に、政治的権力が發生し、それは世界戦争當初の數ヶ月に互つて、ドイツに對する煽動者たる役目をした。そして此の一團の間に、今日でもその一部は、依然として民主主義防衛の先陣を承はつて居る人々の統率の下に、一九一七年、國際聯盟の思想が生れた。ウィルソン、ベネツシュ、世界戦争中のフランスの各大臣、當時の英國諸閣僚、ベルサイユ會議に列席し、後にはジュネーブで支配的地位を占めんとした人々——彼等は皆特殊階級のフリーメイソンであつた。歐米の多數小都市に於ける尊敬すべき小商人、技術家、官吏等の爲に、民主主義と所有の「思想財」を、適當に切つて案配して居るフリーメイソン制度の秘密部隊——彼等は此處に屬して居たのである。外交官等の文書から、世界戦争の責任に就いての眞理を探し出して、大儲けをした人々は、若しその金肥りの手で、フリーメイソン制度の歴史と對獨煽動の歴史とを、戦争準備の歴史に結びつけて書くならば、彼等は二倍の儲けをするであらう。

大戦前ドイツに居た妖魔は、民主主義諸國の高等諸官廳で生れ、此の運河を越えて驅られて來た戦争獵犬の群であつた。同じ様な意思を持ち、同じ様な種類の人間が、全戦線に相對して進軍したのだが、かうして敵味方に分れた彼等も、此の戦争獵犬共をヨーロッパから徹底的に追拂ふ事を、同じ様に希望

して居たのである。戦争勃發と同時に人類の最も恐るべき悲劇が始まつた。戦ふ者が欲した事は、敵も味方も皆同じであつた。ドイツをも含むあらゆる國から、政治、經濟及び全公共生活に於て、所有の禮讃者となつた總ての責任ある人々を、驅逐せんとする使命——彼等の本來の使命は正に此れである、と上から彼等と呼びかける聲はなかつたのだ。自由主義者も民主主義者も、マルキストも共產主義者も、彼等は皆、大戦前には物質に對して、同じ様な迷信に促はれて居たから、進んで生命を世界戦争に賭けようとした義務人に對して、反對の立場に立つて居たのである。

義務は呼ばず、顧慮せず、唯行動を起すのみである。人間の力と崇高さとの絶大な喚起は、全人類に襲ひかゝる苦難を、一致して克服しないで、ヨーロッパ諸民族相互の争闘の爲に利用された。併し戦線の到る所に、眞の前線兵士、眞實律氣な義務人が居たから、戦争の第一部は、兩軍とも同じ様に兵の本分であつた。民主主義が、その手段たる物質と機械とを、完全に賭ける事に成功したのはその後の事である。

兵に對する機械及びボルシェビスト

世界戦争前には、ヨーロッパ人同士の進軍は、常に人間對人間の争闘に於ける勝利への意思によつて指令されたものだつた。或る國民を攻撃する事、或は他國民の攻撃を防衛する事、——即ち戦争と云ふも

のは次の様な観念と結びついて居た。あらゆる經濟的、技術的手段を以て、國民から振ひ起された兵と、その全兵器に依つて、出来るだけ迅速に國境を越えて他國に侵入する事こそ、最も重要な第一の任務である——かうした考へと結びついて居たのである。敵を攻撃する事は、戦争の場合當然な任務の様に思はれる。又これと關聯してよく考へられる事は、敵地に我が兵力を展開させるや否や、敵は出来る限りその國土と人民の破壊殺傷を防ぐ爲に、どうしても抵抗せざるを得なくなる、と云ふ事である。兵略と云ふものは——メシュリーフエン・プラン(プロシアの將軍)の中にその完成した姿が明白に見られるのだが——恐らくは非常に早く、又出来るだけ地の利を得た場所で、防禦抵抗せんとする敵を攻撃して、その前線を突破する事にあつた。かくて多少とも防禦力の薄い地域を占據する爲に、敵兵力を出来るだけ掃蕩しなければならぬ。

敵が自國を掃蕩し侵入する場合も、此の計畫は殆ど同じであつて、侵入した敵を攻撃して、戰略上出来る限り有利な地點を確保し、攻撃を受けた該敵の戦線を突破して、出来るだけ多くの敵兵を捕虜とし、それから敵に占領された地を大した抵抗も受けずに奪還する事——これが問題であつた。此の場合決定的なものは兵隊——即ち歩兵であつて、歩兵は、假令如何に各種の技術的兵器で助けられても、此の様な軍事的作戦の進行とか突入の場合には、白兵戦に於てその體力、精神力、膽力等を賭けなければならぬのである。かう云ふメシュリーフエン・プランの實施で特色あるものは、タンネンベルヒの戦役であ

る。此の戦役で防禦に當つた東部戦線のドイツ軍は、出来るだけ有利な地點に據つて、侵入ロシア軍に攻撃させる様に仕向け、これを突破し、何千と云ふ露兵を捕虜にしてから、敵に占領された地を奪還したのであつた。

「メシュリーフエン・プラン」は世界戦争勃發當初にも、西部戦線で敵地占領の爲に用ひられた。此處では、ドイツの土地の奪還が重要だつたのではなく、敵を動かして、或る一地點で決戦させる目的を以て、敵地に侵入する事が問題であつた。敵の前線突破に成功してからは、獨軍にとつて、パリに到る道は易々たるものになつた。マルヌ(セーヌ川の支流)に到る迄の獨軍の進軍は、メシュリーフエン・プランに依つたものである。佛軍はマルヌ河畔の戦闘に於て、俄かに強力な物質的手段と、同時に又個々の兵の勇氣をも賭けて、獨軍の突入を阻止し、戰略的對策に依つて、メシュリーフエン・プランを斷ち切つたのである。

此の場合我々の興味を惹く事は、個々の戦況ではなくて政治に及ぼす反作用である。そこでマルヌに於ける獨軍の前線突破成功後メシュリーフエン・プランを嚴格に遂行すれば、パリ占領に依つて、對佛戦の終結が可能になつたのではないかと云ふ問題が提出されなければならない。佛軍は最初の防禦戦（それはドイツの勝利に歸したのだが）とマルヌの戦役の間に、獨軍をフランス國內深く導き入れてしまつて、爲に獨軍は、戦争遂行にとつてそれ迄一般妥當だつた方則に適應出来なくなつたのである。即ち佛軍は兵力のみならず、後年彼等が久しい間、軍備縮小に就いてやつた、色々の解明の中で、potential de

「Guerre」と稱したものの、ドイツ語で云へば「戦争遂行のあらゆる可能性」をも見積つて居たのである。彼等は大戰の最初からその軍隊、英兵、英國の經濟力、合衆國の軍需品、封鎖、政治的手段、特に對獨逸勦等を以て出陣をしたのであるから、マルヌに於けるドイツの勝利さへ仕方がないと思へば思へた筈である。否、恐らくは政府のホルドー移轉後バリが陥落しても、本來の國土の三分の二以下に國力を限縮されても、戦路上一時英國から離隔されても、かうした状態の下に於て、英佛海峡沿岸地方の支配が獨逸の手に委せられても、泣寝入りになつたのかも知れない。單なる空だのみではなくて、かゝる場合にも尙英・米・露等の各國及び獨逸行爲から、得る事が出来た色々な力を實質的に算定し、それに基づいた事なら、何事も諦められた筈である。

世界戦争は、既に一九一四年の八月になると最早戦場に對峙する兩軍間の軍事的作業ではなくなつて、殆ど全世界に擴げられた、政治的、經濟的、軍事的、宣傳的作業であつた。此の事は我々ドイツ人に、はフランス人よりもづつと知られて居なかつたのである。フランス人は既に一九一四年以前に、戦争と云ふあらゆる概念の、此の殆ど革命にも類する變化を理解し、反獨的外交の賭事に、ドイツの數倍にも及ぶものを賭けて居たのである。

開戦當時、我々には一體經濟的武裝と云ふものが殆どなかつた。又政治的戦争遂行の諸種の技術的手段にかけては、我々は何物も持たず、世界海底電線、大新聞、情報局等は我々の敵の手中にあつた。個

々の勇敢な義務人たるドイツ兵は、大膽な自己の賭物の失敗を、いつも防禦と攻撃と云ふ他の手段で償ひ得た敵と戦ふ事になつたのである。此れは世界戦争の最初の意外な出来事であつた。

又我々は第二の革命的變化を、づつと遅れて感知したのであるが、此の變化は戦争作業の地域的大擴張と密接な關係を持つて居るものであるから、英國人やフランス人には、既に戦争勃發以前から、少くとも彼等の戦術地域に對してだけは、意識にのぼつて居たのである。フランス人はマルヌの戦役以前に、大戰前の時代のあらゆる經驗に照して考へられたものより、遙に廣大なフランスの土地を獨軍に放棄する用意があつたのであるが、此の場合次の様な考へが重要な骨子をなして居た。即ち、戦時中の占領は過去何世紀の間には直ちに與へられたような意義を、媾和締結後に持つものかどうか、と云ふ事は疑はしい、と云ふ考へである。昔の戦争は、一方が全く困憊してしまはない中に、最早最後の力を賭けられなくなるか、又は全く精神を涸らしてしまふ時に終結を見た。さうすると戦勝國が戦敗國の土地を我が物とし、此れを保有するか、又は平時に際して他の財物を交換するかしたものである。戦争に依つて獲得された土地が戦争中生じた犠牲に對する物質的、精神的、政治的賠償を戦勝國に提供したと云ふ事は、此の様な戦争遂行にとつて自明な前提であつた。新しい土地、又は豊かな土地は、戦勝國民の福利増進を意味したのである。

封鎖、先勝の敵の背後からの煽動、敵國民に對する飢餓戦術、敵に對する様々な政治的影響——かうし

たものに依つて、受けた侵略が再び償はれる事があり得れば、今述べた前提は最早正確なものではない。さうなれば遠く撤兵する事も出来る。攻撃して来る敵に對して、虚をついてその兵站線を延長せしめ、技術的に非常に困難な破目に陥らしめる事が出来る、それは敵兵の士氣を著しく沮喪せしめ、攻勢にある敵に、前線を突破される危険を少くさせるのである。

占領と云ふ事だけでは戦争終結の決定的条件とならなくなつたが、一方、戦前參謀本部の諸計畫が頼りとして居た戦略的算用は、その内容的意義を失つて居る。フランス人は此の経験を世界戦争の全般に亘つて得た。而もそれは彼等の役にたつたのである。そして西部戦線に於ては、此の経験は既に我々の不利となつた。戦争の後半に至つて、我々が此の経験に對して支拂はなければならなかつた犠牲は更に大きなものであつた。何故ならば、ロシアのボルシェビズム化に依つて始められ、又地中海沿岸のあらゆる地方に於ても、その他の雑多な原因から生れた、世界政策のあらゆる原則の完全な變化に遭遇してドイツが東ヨーロッパでやつた廣大な地域の占據は、ドイツにとつて無價値なものになつたからである。西部戦線に於ては、未だ我軍は優勢を誇り、而もすつかり休戦の用意をして居た大戦第四年の何ヶ月間に於てさへ、我々は此の世界政策を賭する事が出来なかつた。ポーランド、ウクライナ、ルーマニア等に於ける所有、遠くアジアに及ぶ占領、スエズ運河に至る進駐——かうした總てのものが、平和談判の要因として、西部戦線に於ける兵力均衡の時にさへ賭けられなかつたのである。

これ迄ヨーロッパ人の政治的算用の中で、未だ賭けられた事のない事實が、土地の占據と云ふ事と相對して現はれた。それは國民の大部分が戦争を欲しないと云ふ事實である。突然政治上の問題になつて來たのは、それは未だ各國政府に全然明かではなくても——最早地中の物質的財物だけに止まらず、土地を耕し、土地から財寶を取り出す人間であつた。ウクライナは農産物に缺け、従つて自發的に勞働する農民が無くて、我々にとつては重荷であつた。バルカン諸國に住む人々は、我々が其處に軍事的支配者として居ても、我々に對していさゝかの服従心なく、バルカンは當時價値の多いものではなかつた。

ヨーロッパ諸國民間の和解に際して、最早占領と云ふ事はかりが決定的なものではなくなつたが、此の事實は後になつて更に明瞭に現はれて來た。そしてこれは、人間相互關係のあらゆる大變化と同じ様に、戦争中突如として人の意識に上り、次にその中に沈み、後になつて再び覺醒されたものである。一九一四年に経験した自らの運命から、土地及びその埋藏物の大部を、敵の手に委ねても、敵を撃破し得ると云ふ事を、既に知つて居るフランス人は、それにも拘らず一九二三年には、ルール地方占領に依つて、全然間違つたカルタに賭けてしまつた。當時フランス人は、ドイツの、否、そればかりでなくヨーロッパの重要工業地帯を軍事的に占據すれば、自然賠償では得られないような富が手に入ると考へて居た。彼等は何等利を得る所なく（何故ならば後の賠償協定は少しも利益がなかつたから）ドイツの大工業地帯を再び放棄しなければならなかつたのだ。彼等は所有を動員する事が出来なかつた。それには正

に人の自發的精神が必要である。戦争中及び戦後になつて證明された事實は、ドイツにもフランスにも非常な不利益となつたもの、否、悲しい哉ヨーロッパの何人の利益にもならなかつた次の様な事實であつた。それは、決定的なものは所有ではなくて、これを取扱はなければならぬ人間の意思である、と云ふ事である。所有が大きければ大きい程、物質が莫大であればある程、此の物質を相手にする人間の自發性は益々重要になつて来る。

さて以上の事を認識して、進んで戦争發展の中で歩を進めて見よう。マルヌに於ける戦況膠着と塹壕構築の後、その當時の數ヶ月間、獨りイニシアチブを握つて居たドイツのおなじみのシュリーフェン・プランに従つて、東部戦線では戦争が繼續された。併しドイツにとつて、此の地方でも亦、占領と云ふ事は大して問題にならなかつた。何故ならば、東部で獲得した土地のお蔭で、食料供給の可能性を強化する望みは與へられたが、それは過ぐる戦争の際に當然であつた程には、我々にとつて有用ではなからう、と云ふ認識が、ベルリンの責任ある人々の中にも生れたからである。我々は東部戦線で敵と雌雄を決し、これを徹底的に撃退しようと思つて居たが、我々が此處で經驗したものはナポレオンの運命に外ならなかつた。敵は益々後退し我軍はゴルスに於て露軍の前線を四百軒ばかり突破したが、廣大無邊なロシアでは敵を捕獲する事は出来なかつた。敵は常にドイツ軍の前方で集結しては退却する、撃破される、集結する、再び退却する——と云ふ有様であつた。我軍は兵站と兵員兵器の補給の爲に、莫大な人員を

使用しなければならなかつた。かくて西部戦線に於ては、我軍の力は最初の見積りより弱くなつたのである。

これによつて我々は、英國もフランスも一兵對一兵の初期の戦ひや、歩兵時代を過ぎてから、漸く氣がつく様になつたあの力を、その後は西部戦線で賭けなければならなくなつた。あの力——それは鐵である。近代戦に於ける物質の意義を豫感して——惜しむらくは單に豫感したゞけで——獨軍の責任ある人々は、西部戦線が膠着してからと云ふものは、ベルダンの前で砲兵隊を大々的に参加せしめて、以て佛軍を屠らうとした。彼等は砲兵の力を買ひ被つて居たが、佛軍はよく防戦した。併し鐵に依つて兵を殲滅せんとする此の最初の試みは士氣の爲に失敗に歸した。一方此の試みの結果として、その後英・佛の側に一定量の物質が動員される事になつたが、それが爲に永い間には我々を遂に敗者たらしめざるを得なかつたのである。此の戦術の第一人者はフランス側ではニベイエだつた。最前線の場合に限らず、一線一線と味方の兵が敵の塹壕に飛び込む前に、鐵に依つて敵を殲滅させる爲に、彼は擲彈筒——突撃軍と重砲兵の同行——を發明した。人間は物質より強いものであると云ふ事を證明するのが、今やドイツ兵のなすべき義務であつた。ニベイエの擲彈筒は不成功に終り、ドイツ兵又よく防戦して持ちこたへた。彼等は二ヶ年の間、英・佛の連續射撃に堪へたのである。

ドイツ國民はこれを助けた、彼等は飢餓に悩み、礦物の不足と闘つた。ドイツの戦時工業に従事する

労働者は餘りに少く、婦人も男子と共に働かせられた。二ヶ年を通じて、物質上我々は来る週、来る週も一分一厘他國に劣らなかつた。又砲兵の改良、工兵、塹壕戦等で、英佛人が發明したのも、合衆國の軍需工場で考案された事も、我々だつてやつたのである。その量は問はず、その技術的完成はしばらくおき、物質に關しては我々としても敵國が自由にし得た確實さを以てやつたのだ。併し此の種の戦争の法則として次の事が明かになつた。即ちあらゆる科學兵器は敵から直ちに模倣されると云ふ事である。併し如何なる技術も、如何なる物質も、結局兵の精神には及ばず、これこそは、何と云つても決定的なものであつた。兵の精神——それは物質に對する最良の防禦法とよく協調し、眞に危急存亡の場合にはその多くの同胞の生命の爲に自らの生命を投げ出さなければならなかつた義務人である。

世界戦争の此の方面に於て、我々は攻撃用武器及び敵側の物材及び所有の優越性に對抗する防禦武器の完成を志し、我が戦士はかうした敵の多くの優越性と戦つて、その永遠の榮養を勝ち得たのである。西部戦線では我が榴弾兵が参加し、又我が突撃隊、飛行家、潛航艇員も参加した。一方ではより高い人間能力が物力に抗してこれにたへて行かなければならなかつた。百臺の敵機を射落す飛行家は、敵の自由に出來る物質を、その百倍も破壊する。一航海で敵の十隻乃至二十隻の武器輸送船を撃沈せしめる潛航艇は、百分率にすれば非常な優秀な成績で物質に對して勝を占める。二十名乃至三十名の兵が操縦する一機械は、敵側が何千と云ふ人員、或は何百と云ふ機械を用ひ、それがためには前線に賭けられた

生命を、何千何萬となく費さしめたであらうと思はれる様な殲滅力を發揮する。

英、佛、米及びその同盟國の過剰な物的所有に對して、二年も抵抗をなし得たのは、唯ドイツ人の士氣と精神的優越性があつたからで、此の同じ人々が、更に一人對一人の戦ひに於ても、敵兵に對してよく抗戦し、以て功を收め得たのである。義務人、前線闘士、莫大な物的所有等が、英佛兩國に依つて同時に賭けられた戦闘で、勝利を得たのは我々である、何故ならば西部戦線に於ける世界戦争の此の方面で、我々はよく前線を持ちこたへたからである。我々は眞に全力を傾注し、全國民の健康を賭けて封鎖に耐へ通した。又我々は、此の年に行はれた煽動と云ふ政治戦にも、ドイツ國民の激烈な精神的抵抗によつて左右されなかつた。物質に對する我が兵の抵抗手段は三つあつた。飛行家、突撃隊、潛航艇がそれである。飛行家はよりよい發動機用器材と、發動機機械の大有りに依つて、次第に征服せられ、潛航艇は軍人でない一人の市民の爲に敗北した。即ち或る商人が見積つたところに依ると、同盟國側の所有の一部分を、次から次へと潛航艇の餌食にするよりも、軍需品及び食料品に於ける彼等の殆ど無盡藏の所有から、一時に多くのものを犠牲に供した方が割に合ふと云ふのであつて、ロイド、ジョーヂの發見にかゝる護送と云ふのは、二十隻乃至三十隻の船が、軍艦の護衛の下に束になつて航行するのである。此の結合した所有方に双向つて進むドイツ潛水艦は、漸く彼等の一部分を撃沈させるのが積の山であつた。のみならずその際自ら破滅すべき危険を冒したのである。此の護送は、小さな潛水艦内の若干

の勇敢な人間と彼等の微弱な抵抗武器に對して、物質的威力を賭けた事を意味する。それは一資本家——何百萬金を費す事が出来、而も更にそれ以上のものを懐にする——の打算に依つて、勇敢な精神が征服された事である。次に、突撃隊はタンクに届した。此の點に關しても決定を下したのは一商人であつた。多くの英國保守黨員の中で、今尙最も旗色鮮明な反獨家の一人であるウインストン・チャーチルが、或るクラブでした算定に依ると、聯合國が持つて居る鐵所有の優越性は、彼等をして鐵を榴弾や爆彈にして敵兵に浴せしめるばかりでなく、それをタンクにして敵兵を蹂躙せしめる事をも、可能にすると云ふのであつた。彼等には西部戦線の到る所で、小さい移動要塞を塹壕から走り出させる事が出来る程、豊富な鐵がある、と云ふ事を彼は確定した。かくてドイツ側では固定して居た塹壕が、聯合國側では移動出来る様にされたのである。

人間對物質の此の闘争は、戦争中よりも、その後になつてからの方が、人々にはつきりわかつて來た。我々が有する軍神は、兵としてのヒンデンブルグであつて、工業を動員した人としての彼ではない。又シュリーフェン・プランに従つて行はれた大戦闘たる、タンネンベルヒの戦役の勝者としてのルーデンドルフ、戰場及び國內に於て、繰返しく人力を發揮させた人としてのルーデンドルフである。又我々の英雄は、敵機と云ふ物質に立ち向ふ、戦士としてのリヒトホルフェンであり、ゲーリングであり、又突撃隊の數多の兵である。フランスで崇拜される者は物質戰の創始者ニペイユであり、タンクと

云ふ兵器を戰術として用ひる事を心得て居たフオッシュである。又ドイツに比してその物質的所有の優越性を、絶えず佛人に見せびらかす事によつて、佛人の士氣を鼓舞した。クレマンソーも此の種の人間である。英國で崇敬されるのは、ロイド・ジョージとチャーチルであるが、彼等は我々に對して物質を動員した當の人々である。かうして見ると、ドイツでは兵としての英雄が稱讃せられ、他國では經濟界及び工業界の有力者をも兼ねて居る政界の指導者が尊崇されるのである。

彼我兩方に於ける義務人と物質の闘争に關しては、戦争に就いて單に外から聞いた知識しか持つて居ない人々よりも、前線の兵の方がよく知つて居る。彼等は「戰勝」國に於ても、「戰敗」國に於ても、而も色々の時代に、此の體驗を思ひ出した。ドイツの第一線の兵は、彼等が義務人であつた事、そして永久に義務人たり得る事を決して忘れはしなかつた。英佛の第一線の兵は、何年か後に至つて、所有の豊富と云ふ事にばかり執着した生存は、彼等が前線に於て生命を賭して教へられた目的の眞價を認めないものであると云ふ事を感じるに至つた。その後年の経過と共に、凡そマルキシズムの理論からはかけ離れ義務の上に建てられた社會主義が、ヨーロッパ諸國民の闘士と、國防諸團體の思想を、益々強く把握するに至つたが、兵と社會主義のかゝる結合が生れた時こそ、物質的威力に對して、第一線の義務人が最も激烈に抵抗した時であつた。兵は物質に依つて殲滅されず、物質に依つて決して完全には壓服される事はなかつたのである。

諸外國の軍事専門家が書いた多くの書物の中では、世界戦争の西部戦線に於ける此の物質と兵との闘争から次の様な結論が引き出されて居る。即ち、シェリーフ・プラン、國民の安寧を兵の力に據らしめる事、——それはもう全く時代遅れだ、と云ふのである。戦争が人間の全生活に波及し、經濟戰政治戰が革命的現象を帯び、鐵と火薬が或る期間の間人間より卓越したものになると、「情を知らぬ戦争」に於ては、兵は無方で、國民の物質的容積が總てである、などと云ふ結論する事が出来る。と考へられるのである。世界戦争に最後の決定を與へたのは、英・佛・米等の列強でもなく、又これ等諸國の兵や、軍需工業の労働者でもなく、諸原料、鐵、油、火薬等の所有でも、戰略的優越、經濟技術的優越でもない、と云ふ事、——上述の専門家はそれを見落して居る。ドイツの兵は一九一八年の夏及び秋を通じて、終始かうしたあらゆる威力を向ふに廻はして抵抗したのである。若しかういふ慘虐と低劣の中で、何人も豫想し得なかつた出来事が起らなかつたならば、恐らく彼等は更に長期に亘つて抵抗し續けた事であらう。

大戦中最も苦戦抗争しなればならなかつた過去の多くの誤謬を克服してから、しようと思へば、恐らく我々は次第に東部戦線の大占據を利用するに至つたかも知れない。世界戦争に於ては、最早占領と云ふ事が最後の決定を齎すものではなくなつたのであるが、それはさうなると、戦争中には占領地から、封鎖による被害を償ふべき、物質的諸力を集め得ないと云ふ事を意味する必要もなくなつたのである。我々はハプスブルグ家の裏切りに始末をつけて、中部ヨーロッパの全ドイツ人を集結せしめて、

民主主義に對する、不可侵の要索にする事が出来たかも知れない。又、トルコやバルカンを斷念する事が出来たかも知れない。若し民主主義が自分に向けられた不思議を最後の決戦の爲に利用し、極悪の敵たるボルシェビズムを我々に向つて動員しなかつたならば、かうした總ての事は行はれて居たであらう。クレマンソー、ロイド・ジョージ、ツイルソン、及びアングロ・サクソン人種では最大の煽動家たるノルトクリッフ、フランスの新聞及び宣傳の黒幕達、ニューヨークの諸新聞を牛耳つて居るウォール街の銀行家達——かう云ふ連中は一九一八年の夏、皆ボルシェビズムと手を握つたのである。此のギャング的武器に屈したのはドイツ國民だけであつた。ドイツ國民はその兵を見殺しにした。それが戦争終結だつたのである。

民主主義の所有妄想にとりつかれた、各國首都大衆の最も陋劣な野獸的本能、マルキシズムと共產黨宣言の中で、その凱歌を奏したユダヤ人の解體戰術——かう云ふものがドイツ國防力を、内部から骨抜きにする爲に、銃後のドイツに賭けられたのである。英佛國民の國防指導者、合衆國の資本家達は、労働組合の事務室、カフエー、共產黨の暗黒街のホテル等から、ユダヤ人文士とマルクス主義的使喚者とをフリーメイソンの秘密集會所に招き入れ、其處でパンフレット作成、ドイツ國內に於けるボルシェビズム的解體の傾向等に就いて彼等と協議した。民主主義國の市民は、一七八九年のフランス革命の賤民共に身を委したのである。マルクスはユダヤ教法典に適つたその著書を、ロンドンで書いたのであるが、

民主主義の全史を通じて、イギリスは此の瞬間迄、マルクス主義的ボルシェビズムの危険に對して抵抗力を持つて居た。世界の富力が充滿して居た英國では、依然として誰にも多くの出口が與へられて居たから、活動力のある人々は何も絶望の虜になる必要はなかつた。煽動者はその破壊的活動の、人的材料を全く發見しなかつたのである。合衆國では、當時未だその所有が非常に莫大なものであつたから、無産階級を下水溝の中で、くたばらせて置く様な贅澤が敢てされて居た。萬一窮狀が餘りにひどくなれば成金の慈善をやつて、全然有産階級の走狗になつて居る新聞の手を借りて、飢餓大衆に對する感化の効を擧げた。かくて困窮は麻痺せしめられたのである。

これに反して、フランスは絶えず過激主義に脅かされて居た。フランスの市民階級は、一七八九年のフランス革命とナポレオン戦争の間に、過激主義を克服しなければならなかつたが、若し革命的勢力を愛國的スローガンによつて、外部に反らさなかつたならば、又若し、血に渴した國民の、ギロチンに凱歌をあげた欲望を「敵」に向かはしめなかつたならば、恐らくそれは成功しなかつたであらう。フランス民主主義は、常に帝國主義的理論を以て、革命の暴民から身を守らなければならなかつた。若しフランスがラインに向つて進軍出来なければ、少くとも北アフリカの一部を侵略しなければならなかつた。さうでなければ、パリーの暗黒街の人々が、愛國の聞聲をあげて、所有階級の邸宅に侵入し、街の廣場でギロチンを前にして、悦に入る様な日が来ないとも限らない危険があつたのである。一八七一年、革

命政府の蜂起にあつて、パリは漸くそれから逃れたばかりである。先づ國民に對する對獨報復の叫びが、市民議會を助けて再び確乎たる地位を保たせた。フランス國會議員は、誰でもその主義に於てジャコベン黨で、國會の演壇上ではフランス革命の抒情的テナーであり、それと同時に、政府に於ては、又國會の委員會に於ては、俗物でなければならぬ。ギロチンの物騒な思ひ出の中に、絶えず現はれて居る過激主義に至る限界は、フランスでは戦争勃發まで慎重に守られてゐた。

人間絶滅の爲に、それ迄唯の一回も一定の限界迄は投せられた事もない鐵の大量に依つても、ドイツ人を完全に敗北せしめる事が出来ず、全所有の動員が水泡に歸した一九一八年の夏の幾月かの事、フランスでは、困苦絶望の結果、これ迄守られて居た過激主義への限界が越される事になつた。それより一年前、フランス軍隊に於て、殆ど既に動かすべからざる事實になつた暴動を遂行した人々が此の仕事に加はつたのである。パリの戦時宣傳局では、共產主義的理論の教科書に依る、ドイツの國內擾亂が討議され、ロンドンもニューヨークもこれになつた。ロンドンやニューヨークでは全然不安を知らず、人々は徹頭徹尾大資本主義企業家的な考へ方をして居た。

それ故總ては極めて簡單の様に思はれた。マルクスはプロレタリアートの理論を書き、プロレタリアートを驅つて革命に赴かしめる術計を發展せしめた。ドイツ國民は封鎖に依つて、殆ど餓死に類せしめられ、かくて彼等の中からプロレタリアートが生れた。だから此の子飼ひのプロレタリアートを驅つて、

マルクスが指示した道に赴かせさへすればよかつた。かうしてプロレタリアートは、故意に煽動され、無意識な狂暴状態で、互ひに争闘しなければならなかつた。労働者に對して取扱ひつけて居る方法を用ひれば、此の暴動をいつでも終熄させる事が出来ると考へられた。英・佛・米の企業家が、競争場裡でストライキを起させる爲に、労働組合のユダヤ人坊主に若干の金を握らし、これを煽動したとて、少しも不思議はなかつた。萬一の時には、警察や検事團の手を借りて、これ等の連中を厄介拂ひする事が出来たのである。競争者側にストライキが起れば、必ず大利得の可能性を齎らした。ドイツ國民をボルシェビズム化しようと云ふのは、いはばかうした考へからであつた。

ドイツに派遣され、ドイツで仕込まれたボルシェビストと、ペテルブルグのボルシェビストとの結合に對しても少しも懸念されて居なかつた。ロシアがボルシェビズムを貫徹しようなどとは考へられなかつた。聯合國がアジアに持つて居る軍隊は、一旦西部戦線の戦争が終結すれば、最高の資本主義的利得と結びついて居る「再建」の爲の熟し切つた果實として、ロシア侵略の爲に賭けられる筈のものであつた。のみならず聯合國は、ロシアと残存ドイツとの中間に新しい國を置かうとし、その爲に既にポーランド人及びチェコ人の一隊を作つてあつた。東歐及びアジアに於ける民主主義の此の前哨は、ロシアの社會革命家達と關係があつたのだが、かう云ふ革命家達の中には、フリー・メーソンの秘密集會所やマルキシズム的民主主義的結社を通じて、聯合國側に個人的に識られて居る者も多かつたのである。ロシアは

資本主義の有になるべきものであるのみならず、民主主義の手に歸すべきものであつた。ドイツは、その時、優秀な武装軍隊を抱へて居る民主主義諸國の循環によつて、完全に包圍されて居た。ドイツ國民自滅を目的として、ドイツに派遣されたボルシェビストなどは、二三の遠征軍に依つて壓服する事が出来たのだ。ドイツに對して、眞の民主主義に至る發展路をすつかり用意する前に、フランス革命の範を遵奉して、一度ドイツに「過激派的塵殺の淨化風呂」をつかはしてやるのが、眞に民主主義の神聖な使命であると考へた民主主義理論家も亦居たのである。

此の計畫は成功し、世界戦争はその正常な終極の直前に、戦争遂行上の、革命的第三の變革に依つて終結を見た。即ち武力抵抗を根絶せしめ、國民一般の抵抗に大打撃を與へる爲に、暗黒街の亡者連を鏡後に動員する事に依つて、大戦を終極に導かしめたのである。

回 想

成程所有人を助けた多くの同盟國もあつた、又人間は狂氣沙汰の所有慾の奴隸になつた、それにも拘らず十九世紀の民主主義、經濟的、技術的進歩、交通の發達、民主主義の支配下にある政治的組織、フリー・メーソン、ユダヤ主義等と並んで、一つの反對派があつた。それはヨーロッパの全民族の間に、永遠に注目される様になり、ドイツの青年の間にも、イタリアに於ても更に發展を續けた。併しこれと並

んで、フランス革命の抑々の始りから過激主義と云ふ危険なものもあつた。

民主主義は世界戦争勃發の直前、マルキンズムに對する嚴密な分析と、廣大な内的自己清算を伴ふ根本的改革の道を進むか、それとも單に表面上の「幸福」、即ち生存の基礎としての所有を固守しようとするか——二者その一つを選ばなければならなかつた。

世界戦争は所有の爲に行はれたが、それは先づ一撃の下に所有人を撃退した。義務人は彼等の當然占むべき地位を占めた。併しつゞいて所有が動員され、義務人は過激主義が動員されるに至る迄、物質に抵抗した。

義務人と物質、及び民主主義と第一線のドイツ人優秀分子との間の協定は、新しい法則の數々を明かにしたが、それは嘗て幅をきかせて居た見解や法則を革命的な力で覆した。最早兵ばかりが、戦争で決定的なものではなくなり、戦争は最早決戦に依つて解決されるものではなくなつた。戦争は兵力、經濟力、技術力、一般政治力の解決の總體なのである。戦争終結にとつて、占領は最早必ずしも決定的なものではなくなつた。國民は更に戰勝の爲の勇氣と卓越性以外の他の力を自由にする事が出来なければならぬ。

ところで民主主義諸國は、歴史的に優勢な物質の力を持つて居つたのにも拘らず、ドイツの義務人に對する戦争を、徹底的に決定させる事は出来なかつた。彼等は一時的に、ドイツ人を國內で攪亂させた

のに過ぎない。民主主義は世界戦争の準備と遂行に依つて、第一に永遠の戦争と云ふ運命をヨーロッパに負はせた。民主主義は先づ勝者となる爲に、ヨーロッパに於て革命的にして過激的な、止まる事を知らない色々の力の赴くがまゝにしておいたから、民主主義自身最早此の力を制御出来なくなつて居る。民主主義はその自衛の爲に、最後に動員したものを、再び突き離さうとし、又、少しも手綱を引き締めもせず、思ふがまゝに走らせた物質を、休戦となればすぐにも再び捕へる事が出来ると考へて居た。民主主義のやり方は、恰も一九一八年十一月十日のヨーロッパが、その基本構成に於て、一九一四年七月三十一日に、未だ戦争も知らずに目醒めた時のヨーロッパと同じであると思つて居る様な風であつた。民主主義が唯一つ差別をつけたがしたのは、當時危険に類して居た優勢が、今や一見永久に安全になつた、とした事である。

かうした考へを持つて、民主主義列強はヴェルサイユ條約會議に參集した。

第二章 所有人の獨裁

休戦直後の數ヶ月間、ドイツは深刻な絶望と地獄の魔法釜の中に生活し、民主主義諸國は勝利に酔つて居た。既にギロチンの血の臭を嗅いだバリの民衆は叫んだ。

「カイゼルを絞罪にせよ！」

我が敬すべきロイド・ジョージも、ロンドンに於て選挙戦の爲に演壇上から獅子吼した時、これと同じ様な叫びを口にした。塹壕内の生活から故國に生還し、ドイツの國外では、義務人の氣高い義務を自覺して居た、殆ど唯一の人間たる民主主義國家の前線兵士達も、やはり所有と勝利の陶醉に捉はれた。民主主義國家及び東部ヨーロッパに於てはフランスの特殊保護の下に、或は國家的形體として、或はフリー・メーション的共和國として登場した國々の國境の彼方に於ては、大戦前及び大戦中に、對獨煽動に依つて捏造された總ての事が、ドイツ國民の責任であると云ふ事を、唯一人疑ふ者は居なかつた。ウイルソンは民主主義を永久に密つた方法で、彼の外交上の覺悟を以て、ドイツ國內の疲弊を煽動すべきモットーを暗黒界に供給した。

「血の渴望に獵立てられた我々の眼の前で鞭たれよ、笞打せられよ、然らば我々は汝を恭順な夫として養ひ、恐らくは後日、民主主義の門弟として我々の末席を汚さしむる用意を有するものである。」

(54)

素朴 者から制御され易い事、他にその比を見ないドイツ人に對して、かうした説法が毎日の様に行はれた。シャイデマン(社会民主)及びその徒は、英艦の水兵達が暴動を起して赤旗を掲げたのは、自分達に好意を見せたのだと信じた程である。

而も此の様な作り話は、英國水兵がドイツ海軍の暴徒に對して、唾を吐きかけた同じ日に廣められたのである。

ドイツ國內の一部秩序が復活されると、それはヴェルサイユの御歴々及びその隨員等にとつて、餘りにも速すぎる出来事であつた。動員された暗黒界に對して、何人もその生命を保障されない間は、残忍な暴力とフランスの侵略慾、及びイギリスの所有狂の威壓的條約に、ドイツ人をして無理にも署名させる事が未だ出来ると彼等は最初考へて居た。ミュンヘンのユダヤ人殺害者(殺害者がユダヤ人)、ベルリン、ブラウンシュバイヒ、ブレーメン等のボルシェビスト煽動家(煽動家がボルシェビストである事—譯者)が民衆を煽動し、ドイツに於ける秩序維持の少數人に對して、動員せしめた背後には、前述のモットーを與へた英佛の戦争通信員が居たのである。此の新聞人達は、ボルシェビストの次の間で無作法にのさばりかへり、彼等と一緒に居たのであつた。此の新聞人達は、掠奪葡萄酒や三鞭酒を飲み干して居た。彼等はワイマールの國民議會にも現はれて過激派の人々を激勵し、殊にライン地方に陣取つて、フランスの政策を助成しようとした。フランスは次の様な計畫を用意して居た。先づ後方から進撃して來る佛軍の丁度前線に當るライン地方に、常にボルシェビズム

(55)

を置いておき、佛軍に表面上の秩序を保證する、さうすればボルシェビズムに對する嫌惡と平和渴望は、ライオン地方の住民をして、フランスに服従せしめるに至るであらう、と云ふのである。

併しドイツ國民は自己に飽く迄忠實であつた。假令一時は何百萬かの者が動搖したにしろ、國民はやがてその内的本質への歸路を見出し、敵の暴力を脱する事は出来なかつたが、少くとも完全な没落を避ける事が出来た。その當時既に、ドイツ史の來るべき二十年とは言はないまでも、その十年先までの概觀を先見し、ドイツ國民の眞の本質を、一大變革に對する計畫の基礎たらしめた少數の人々は、一般大衆には知られて居なかつた。何千と云ふ人々は義勇兵となつて、その生命を外的秩序の再建に供し、何百何千と云ふ人々は、都市、町村に於て、ベルリン政府よりも、遙により政府を樹立する爲に助力した。數百萬の同胞は、少くとも國民議會選舉の目には、マルキシズム及びボルシェビズム反對の投票用紙を持つて分室に入つた。彼等はその身近に恐ろしい亂脈を見、これに對して何事か策を講じようと思つた。併し殆ど大政策には思ひを致さなかつたし、他日威壓條約の最後の決定の前に立つべき事さへ考へて居なかつた。

ツェルサイエ會議の民主主義列強は、若しドイツに於て、彼等の新しい二つの同盟者が突然彼等と抱き合はなかつたならば、ボルシェビズム動員とドイツの國內擾亂に成功しなかつたであらう。ドイツのマルキストは相應じて暴動を起し、それから一週間ばかり過ぎると三つのグループに分裂した。その一派

は非常に速やかに自覺し、その主だつた者は、大抵ツェルサイエ條約の最後の決定以前に、早くも世界及び公的生活から退陣した。彼等は革命に捲き込まれたが、再び秩序と勞働への歸路を見出したのである。「マルキスト」が國民議會に於て、ツェルサイエ條約反對の投票をした事を、我々は忘れてはならない。それは實際マルクスの徒でもなく、又決して共產主義者でもボルシェビストでもなかつた。マルキストの他の一派は暗黒街に止り、ユダヤ人及びその仲間、漸く煽動によつて生活する事が出来たに過ぎなかつた。

かう云ふ系列の人々の中から、後になつて共產黨議員が出たのである。

次にマルキストの第三の者は民主主義を演じた。第二インタナショナルの人々がそれで、彼等は既に戦前から萬國會議に於て、エリオ(政治家)、ツァンデルベルデ等の同士、否英國労働黨の指導的人物をも見做つて、「教養あるマルキストにして民主主義者」たる態度を學んだ。彼等は衣服としての國際「カッタウエイ(Couture 背褸、モーニング等の前襟を急斜に裁つた一種の訪問着)」を知り、そしてアスバラガス、牡蠣、ザリガニ等を上品な方法で食べる事を心得て居た。

第二インタナショナルのかう云ふ人々が持つて居た唯一の望みは、彼等がイギリスやフランスで見ても、範とした人々を、常に満足させておくこと云ふ事であつた。此の「戰勝國」の社會主義者から要求されたものは、盲目的に行はれた。彼等に加はつたのが、當時勢力のあつた民主黨議員で、彼等は全體として

はヴェルサイユ條約に反對したが、一部には、尙多くのフリー・メーションや素町人根性の俗物も居た。彼等も亦一つの憧憬を識つて居たが、それはフランスの過激派社會主義者、或はイギリス自由主義「マンチエスター派」(自由貿易主義の一派)の保護者たる見解の忠實な味方たらしとするものであつた。

これは同盟者(聯合國と地)の「グループ」であるが、他のグループを構成した者はカトリック教會を主宰とした中央黨(舊教黨)であつた。

戦前ドイツのカトリック教は野黨であつた。と云ふのは、多くの單獨聯邦からなつて、従つて教會勢力を扶殖する多分の可能性に恵まれた國家から、カトリック教が期待して來た總てのものが與へられなかつたからである。カトリック教會は舊帝國議會の議會戦に於て、徐々に「進歩黨」と自由主義グループとに結びついて行つたが、かう云つたグループの革新計畫は、此の中央黨にとつて、出来るだけ多くの議席数を約束して居た。次にカトリック教はヘルトリンク首相の當時、一時戦債の償還をやり遂げようとしたが、それは成功もしなかつたし、又格別ドイツにとつて失敗ともならなかつた。それは全く表面だけに引つかつた中途半端であつた。何故ならば、ヨーロッパに於ける政治的經濟的發展の深さに就いても、流れに就いても、何等の知識なくなされたものだつたからである。

暴動がすむと、カトリック教會は、勝利者と見做して居たグループの人々と通じて、無趣味な冷酷な取引をしようとした。カトリック教會の算用に依ると、社會民主主義者と民主主義者だけでは力が弱す

ざるが、カトリック黨が入れば、多数を占められると云ふのである。「ワイマール聯合」と云ふ言葉はカトリック黨一團の中に刻印された。カトリック黨は、此の聯合から離脱すると威嚇的言辭を弄して、ドイツ・カトリック教會の利となる事を實現しようとした。暴動が大きくなれば大きくなる程、紊亂が熾烈化すればする程、後になさるべき整理工作は益々大きいものになる筈である。又さうなればカトリック教が勢力を得る可能性は益々増大して行く、此の政策には、ドイツ的見地と云ふものは見られなかつた。ライン地方では祖國を裏切る者が出で、國民議會では表面ばかりの愛國心が説かれた。人々は恰もヴェルサイユの民主主義國家に反抗して居るかの如く振舞ひ、ベルリンのアドロン・ホテルに於て、エルツベルグ(カトリック)をして、クレマンソー(フランスの政治家、ルサイユ會議の議長)の使者と條約を結ばせた。ワイマールでヴェルサイユ條約の裁決が與へられなければならなかつた時、カトリック黨に依つてその地位に就けられた國民議會の議長ブローレンバッハは、動機の改竄をやつて議員を欺き、エルツベルグは表面上ヴェルサイユで定められた「承認」に就いて虚言を吐いた。カトリック黨はヴェルサイユ條約調印に對して、社會民主黨より遙に多くの責任を負つたのである。若し第二インタナショナルの人々の俗物的愚鈍と、カトリック教會の自發的援助とが無かつたならば、ヴェルサイユの民主主義のお歴々は、その威壓的條約を實現させる事は出来なかつたであらう。應々は歴史を研究して、ドイツから「否」を唱へれば、それはドイツに對する新たな暴力行爲に導かずして、寧ろ新たな討議に導いたと云ふ事を既に知つて居る。

ドイツに於ける反民主主義の歴史は、此の時代からは書かれて居ない。と云ふのは、此の反對黨は數多くの小聯合に分裂したからで、漸く挿語が残つて居るのに過ぎない。かくて或る日の事、前線兵の隊伍の中から、三人のナウムブルグ獵兵の騎兵が馬に乗つてワイマールにやつて來た。エルツベルグ死刑の命を受けて來た三人の素朴な兵士である。彼等はエルツベルグを發見する事が出来ないうで歸つた。國民議會に於けるツェルサイユ條約採決に對する絶望的な闘争は、若干の男女の意識の中に、彼等が殆ど失神せんばかりに、突如として彼等の眞の義務認識が現はれて來るのを見た。ナウマンの様に、大戦中、微力ながら自發的に、ドイツ國民の精神的革新の爲に生命を賭した人々が、ツェルサイユ條約受諾を憤つて、遂に死を決するに至つた事を我々は忘れてはならない。それにも拘らず、國民議會の黨派内で一致した「反對」は、民主主義に對する根本的闘争にとつて、全く無意味なものであつた。國民議會の責任者達は「議會を革命記念祭的」に演じた。彼等はまるで未だ舊議會の席に臨み、委員會で附帶動議を通過させる事と、一種の重大性を保持する事が肝要であるかの如き振舞をしたのである。

ツェルサイユ條約

ツェルサイユ條約受諾の日、民主主義は實際全歐米民族の間に、權力を持つ事になり、ツェルサイユ條約の力を借りてその法則を作つた。この際英佛民主主義陣營の人々は分裂した。フォッシュとクレマンソ

ーは單に權力を行使する事に賛成し、ラインランド占領を欲したばかりでなく、「ベルリンへ」と云ふのが彼等のスローガンであつた。彼等に自由行動を許しておいたとしたら、彼等は恐らく東歐及びアジアに大兵を送り、その結果、少くとも戦禍を見ずには、ロシアはホルンシェビズムの手に歸する事が出来なくなつたであらう。彼等は又その内心で恐らくチェッコ軍隊を輕んじて居た様に思はれる。チェッコ軍隊はホルンシェビズム防衛の命令を受けて、ロシアの廣汎な地域を守りながら、統率の溺體に乗じてホルンシェビズムと事を共にし、數多くの列車の中で強奪された財寶を、チェッコスロヴァキアに運んだのである。

ところで反對派の人々は、民主黨議員や法律家に屈し、東部及びアジアの軍隊は解體され、チェッコ軍團は歸國した。民主主義國はロシアに自らその始末をさせ、西部ではラインに踏み止まつた。そして東部には、條約に依つてフランスの保護國を幾つか作つた。力の人間に對する勝利は、所有と法規簡條の勝利であつた。「勝利者」の側でも、行爲人、従つて義務人は民主主義から完全にのけ者にされた。ツェルサイユ條約の條款は能力に依つて生ぜしめらるべき決定に結びつけられないで、唯徒らに簡條に結びつけられただけであつた。かくて最後に残つた公正な政治家もシャット・アウトされ、發言したのは僅かの辯護士とフリー・メーションだけであつた。フランス人の本質にとつて、又(パリに居れば)イギリス人とつても、用語の整つた法律規定と、萬人の理想に就いての無害ではあるが態とらしい朗讀の混合物以上のもは何も重要なものはないのである。その好例は所謂國際聯盟の規定である。かうしてベネツシ

ユ、ポール・ボンクル、ブリアン、ウィルソンと云つた様な人々はクレマンソーより有力な人物になつた。我々は簡條政策の代表者遂に、彼等がヴェルサイユに於て、その任務を十分になした、と云ふ事を認めざるを得ない。ドイツに對する強制組織が案出せられ、此の組織には、刑法典の様に、判決效力に於て、警察力が與へられたのである。

民主主義諸國の完全な主権の前には、ヴェルサイユ條約を拒否しようと思ふ計畫、否單にさう云ふ意志でさへ夢想に過ぎないものではなかつたらうか？ ツイマールの國民議會に於てさへ最後になつて現はれ、ドイツ國民の間には尙一段と強烈に感じられて居た、ヴェルサイユ條約反對の氣勢は、單に無用な、プラトニクな激昂に過ぎなかつたのであらうか？ 外交上の見地から見ても、ヴェルサイユ條約を拒否すれば、必ずやドイツの情勢悪化を齎したであらうと云ふ事は、我々の今日知つて居る所である。併し一九一九年五月のドイツ國民は、ヴェルサイユで起つた經過に就いて知る所が實に少かつた。ニュースはフランス又はイギリスの新聞から來たのであるが、これらの新聞はその報導を色々に曲げて、ドイツ新聞に掲載してもいい様にし、同時に英佛の欲する政治的傾向を、ドイツ人の頭腦に叩き込む様にした。

一九一九年の前半、ドイツでは外國の宣傳が相當に行はれた。殆ど全部の大新聞が十一月暴動の爲に力を入れるか、或は後になつて同じ行動をとるかしたのだが、かう云ふ新聞は英佛諸新聞の見解を模倣して、己が技倆以上の事をやらうとした。ヴェルサイユでは刪外に居たドイツ通信員等は、何物も聞く事が

出來なかつた。彼等の大部分は、どの新聞社に屬して居ようと、一樣にヴェルサイユ條約受諾に反對して居たのであるが、彼等の見解をドイツで代表させるには、その原料を持たず、従つて有効適確な力に缺けて居た。ロイド・デューデは、ヴェルサイユ條約の各點の全的拒否をも忍び、對獨交渉と迄は行ななくても、聯合國の主要列國間で新たに討議を始めよう、と云ふ考へをすうと前から持つて居た事を、我々は今日知つて居る。若しウィルソンが反對に出會つたとしたら、恐らく彼はその古い諸計畫の體驗した事であらう。フランスはヴェルサイユ條約に對する國民議會の裁決より四週間以前に、掌を返して再び實力に訴へる事は出來なかつた。何故ならば、さうしようと思つても英米の援助を受ける事は不可能であつたらうから。

さうすればヴェルサイユでは恐ろしい罵言が聞かれた事であらう、そしてドイツ代表は恐らく出發を餘儀なくされた事であらう。又、後になつて實際にとられた様な手段を告知したかも知れないし、或はさう云ふ策を講ずる事さへあつたかも知れない。併しまだベルリン迄は軍を進めはしなかつたであらう。聯合國側はあらゆる方法に訴へて、實力行使の危険を除かうと努力して居たのだが、各國の國內にはそれ程波弊が感じられて居たのである。それ故に英佛兩國は、協同でベルリンに一つの宣傳局を組織し、これをアドロン・ホテルに置いた。此の宣傳局はその後本質的にはフランスの指導下にあつて、ドイツに對してヴェルサイユ條約受諾の味を鹽梅してやらうとした。此の宣傳局こそ、エルツベルグを先陣に立て

たヴェルサイユ條約調印の絶對的與黨達が、その材料を得た情報の出所だったのである。聯合國側は此の調印派の代表達を、單に無器用にスバイ的材料で換綴した様な體裁でもなく、又間接にフランス援助者として利用したような觀も呈して居ない、此の宣傳局は外交的にカムフラージュされて居たのである。そしてその代表者達が、當時のドイツ各大臣や國會議員等に對する話し振りは、まるでベルリンに於けるヴェルサイユ會議の代表然たるものがあり、又間接に意見を交換媒介すべき全權を持つて居るかの様であつた。彼等はその後、若しドイツがヴェルサイユ條約を二もなく受諾するならば、何かドイツの爲になる事があるだらうなどと云ふ事を匂はした。若しドイツが何等の留保條件なく受諾するならば、それはヴェルサイユの列強の意に適ふ事にならう。さうすれば列強は相互に難關に立たせられないですむだらうから、と云ふわけである。又、これに對しては、後日誰しも必ずドイツに感謝する事であらう、と彼等は言つて居る。所謂四つの名譽問題に關する欺瞞が、アドロン・ホテルで發見された。皇帝引渡しの要求、所謂戰爭責任者の處罰、ヴェルサイユ條約の戰債形式等を實現する事は、國民議會では難かしくあらうと云ふ事を、聯合國側はよく知つて居た。そんなわけで、結局此の名譽問題の點の削除は承認されるだらう、と偽られたのである。ワイマールに於ける國民議會が此の事を討議し、名譽に關する點を削除すると云ふ留保條件を以て、ヴェルサイユ條約受諾を決定した時、アドロン・ホテルからは折返し(而もヴェルサイユに其の上の請訓もせず)此の留保條件は受け入れる事は出来ないと發表された。ベルサイユ條約に對

して、一定の留保條件の下に、一旦諍意を表したカトリック黨及び社會民主黨は、その翌日には止むを得ず、總てを無條件で受諾しなければならなくなつた。

併しドイツの屈辱が最も深刻に現はれた事實は、決して此の國會の欺瞞に關した事ではなく、全ドイツに關する事であつた。帝國には議會に於ける反對派の中にも、或は國民の反對派の中にも、その派の信望を荷つてさへ、ドイツの指導を引き受ける事の出来る者は唯の一人もなかつた。ヴェルサイユでドイツを代表した兩派遺員、——その中に居た社會民主黨員もカトリック黨員をも含めて——は條約受諾反對を決議した。此の代表の中には、特殊の地位にあつて、ドイツ經濟に對する責任を負ふた人々も居た。彼等はワイマール「政府」に條約拒否を要求したが、それは一切を賭けたのではないと云ふ事を彼等も承知して居た。併し議會組織と云ふ意味に於てさへ、帝國宰相になるべき適任者は無かつたのである。

ヴェルサイユで全世界を向ふに廻し、ドイツに残された最後の信望を救つた外相ブロッケンドルフ・ラントアツは決して政治的指導者ではなかつた。又、兎角する中に、軍事的大結合に纏められた義勇軍の先頭に立ち、あらゆる危険地域で、外的秩序の爲に盡瘁した將軍等も、政治に就いては何も知らなかつた。解體に類しか軍の司令部はコルベルグにあつたが、數知れぬデマが報じた様に、若しフランス軍が既にルール及びマインへの進駐に著手したとすれば、ドイツはこれに抵抗する事が出来るかどうかと云ふ見地——コルベルグで起つた事は、唯かうした見地に立つて、軍事的にばかり觀察された。ヴェルサイ

ユの列強間に横はつて居た政治的難局、軍事的境界を遙に越えた戦争に於て、その頃ドイツでさへ依然として持つて居た抵抗の當然な可能性——かう云ふ事に就いてコルベルグでは少しも考へられなかつた。それ故に、コルベルグからも、ワイマール政府の二三の人々に對して、少しも有利な影響は及ぼされなかつた。此の人々は、最後の瞬間に至る迄狐疑逡巡して、コルベルグに間合はせると云ふ口實の下に、その怯懦を蔽ひ隠さうとした。人物も無かつたけれども、ドイツに在る抵抗力の集中點と云ふものがなかつたのである。

それ故に又、ヴェルサイユ條約の全責任は、唯、民主主義の政治家の肩にばかりかゝる事になつた。彼等はその欲するまゝに自由に振舞ふ事が出来た。彼等はドイツ國內の反抗、指導力の缺乏について充分な智識を得て、彼等が何を決定するに至らうと、ドイツでは異議なく是認されるだらうと云ふ事を知つた。一九一九年に起つた事は民主主義のやつた事である。責任は彼等にある。

此の戦争が終ると、ヴェルサイユの民主主義列強は、平和を樹立するか戦争を續行するか、二者その一を選ばなければならなかつた。彼等はかくも勇敢な抵抗にあつた後に、その相手と率直に意志を疎通させなければならぬと云ふ認識に達する事も、或は残忍にも故意に二陣營を保持する事も、どちらにも選ぶ事が出来たのである。此の二前線と云ふのは、義務人の意志に依つて生れたものではなく、所有人の行爲と過誤に依り、一七八九年のフランス革命思想を、俗物的、物質的なものに發展させる事に依り

ドイツに對して、政治的經濟的平等權を拒否する事に依つて、既に戦前起つて居たものである。民主主義列強は戦争を選び、その結果、彼等の意に反して、遂に二十世紀革命を起さしめたのである。

若し彼等が、白色人種の將來に對して、ほんとうに責任を感じて居るヨーロッパ人として考へ、又行動したならば、何とかして現在を打開しなければならぬと云ふ考へを起した事であらう。又彼等自身の陣營に於て、義務人は四ヶ年も絶大の勇氣を以て堅忍したのだと云ふ事、又他方、彼等は義務人を所有と物質を以て威壓出来たのでなく、最後の鬭争の決定的な數ヶ月に於て、ドイツ國民を欺いてその信用を奪ふ事が出来たのに過ぎないと云ふ事を、よく考へなければならなかつたであらう。彼等にして少しでも自己批判があつたならば、各人が提携して再出發の努力を致す曉には、飢餓と世のありとあらゆる物資の缺乏とを伴つた戦争の恐しい苦難を、四年間も堪へ通した國民やドイツ前線兵の力でヨーロッパにとつて何か新しい物が、少くとも戦禍の迅速な克服が生れ得ると云ふ事を、自らに言つてきかせなければならなかつたであらう。

若し彼等がそれを欲しないならば、彼等は必ずや單に利己的利害關係から、正に彼等の所有の爲に、少くとも次の様な間を提出しなければならなかつたであらう。即ち、一千万の有能な人間を犠牲にし、民主主義諸國にとつて、非常に貴重な巨額の物質を失はしめる戦争の災禍を、どうしたら除く事が出来るかと云ふ問題である。又彼等は、少くとも自分等の爲に、尙明かにドイツ國民の中に存在する力を、如

何にして人間としての誇りを傷けずに利用する事が出来たかと云ふ事を考へざるを得なくなつたであらう。一敗を喫して、僅かに残骸を止めた反民主主義の者が、再起して新たに二前線を形成する、此れを如何にしたら最もよく妨げる事が出来るか？——彼等はかうした問題も提出しなければならなかつたであらう。何故ならば此の二前線を驅逐する事こそ結局民主主義諸國の目的だつたからである。大體上に述べた様な熟慮の結論は次の様にならざるを得なかつたらう。即ち、我々(民主主義諸國)は被征服者にも所有の分け前をとらせる、所有は民主主義、人類の平等、博愛、自由に就いての我々自身の學説に従へば、我々の昨日の敵のものでもあると。

それとは大いに違つて居る！ヴェルサイユの列強は次の様な原則から出發した。所有こそ我々に屬するものだ！我々の勝利の意味は、此の所有を増大せしめる事以外の何物でもあつてはならぬ。成果は我々のものだ！「平和條約」の意味は、此の成果を齎したあらゆる手段を、國際法上の原則として、我々の爲に永遠に確定し、武力を以て此れを守る、と云ふ以外の何物であつてもならない。一九一八年十一月九日の状態が永遠なものたる事、即ち勝者は有産者にして、敗者は無産者たる事を我々は欲する。勝者なるが故に、我々が爲す事は善であると我々は確信する。従つて他の者が爲し、又將來爲さんとする事は常に惡である。今日の状態こそ天則である。——彼等の出發した原則は以上の様なものであるが、これに従つて次の一文が作製された。

エルザス・ロートリンゲンの沒收に依つて、我々は我々の復讐心を満足せしめる。フランスは是非此の特権を必要とする。其の他は「我々は奪取しない、但し我々の定めた道徳的權利に依り、我々に屬すべきもののみは「要求する」。その際我々は、人間、土地、礦物、工業的施設等を全然平等に取扱ふ。總ての物は我々にとつて所有である。土地は我々の爲に作物を實らし、工業は我々に利得を與へ、人間は我々の爲に勞働しなければならぬ。さればドイツ人は我々の奴隷である！

ザール地方、植民地、及びライン左岸とは「道徳的」ペールを被せられて要求された。一九一九年のフランス人は、他日ザール地方を再び返還しようとは考へて居なかつた。彼等は此の土地を、フランス軍に依つて鎖縛めにしよととし、ジュネーブの聯盟當局が、單に形式上の存在を續ける事を欲した。「民主主義の祝福」——とりもなほさずザール地方民を、永久に奴隸化し彼等から搾取する事が、同地方の住民をして、十五年後には、喜んでフランスの腕の中に飛び込んで来る様にさせる、とフランスは確かに打算して居た。ドイツの植民地に對しては委任統治制が與へられたが、此の制度の意義は、元來は所有權の回避ではなくて、相互に嫉視し合ひ、皆一様に正常なりと思つて居る戰勝國を統制する事に過ぎなかつた。ヴェルサイユで承認さるべき權利——英米側に參加する權利、差し當りザール地方占領と該地方支配に參加し得る權利——に依つて、ライン左岸の地はフランス領と見做された。一九一九年のフランスは、ラインがやがてフランスの國境になり、ラインランドの住民も、徹底的に搾取され鎮壓され

れば、フランスを愛する様になるだらうと云ふ事を確信して居た。聯合國はその支配権の都合上東部ヨーロッパに作られた國家、即ちポーランドやチェコスロヴァキアの爲に、勝手にドイツから土地を奪つた。これらの國境で行はれた表決は、ヴェルサイユ列強の内部的軋轢の結果に過ぎなかつた。列強は例によつて此處でも掠奪物を嫉むんだのである。聯合國は支那、シヤム、リベリヤ、モロッコ、エヂプト、土耳其、ブルガリヤ等に就いての規定に依つて、ドイツから總ての權益を奪つてしまつた。

聯合國は、ドイツの所有権没收を規定した箇條の中に、暴力的處置をも添加した。又、ライン左岸地方を、一定期限後には、フランスに與ふべきかどうかを公表し、占領地返還の可能性を自論んだが、慎重を期して、撤兵後の此の地域に就いての規定を作つた。ヴェルサイユの數人の中心人物は、ドイツ人に與へらるべき民主主義の幸運を、ドイツ人は少しも理解しないであらうから、やはり何か與へて、やる必要がある此の同僚を、諦めた方が寧ろ得策だらうと云ふ氣持を、おぼろげながら感じて居た。だから少くともフランスに對して、完全に且つ永久に軍事的保障を與へようと考へた。此れこそ既にルドヴィヒ十四世が、フランス國境とラインに狭まれた此の地方を劫掠させた時に、得ようとしたものであつた。ドイツの軍事的支配から完全に免れ、従つて要塞地帯から離れて、フランスの軍事的支配下に入つた廣大な土地を、獨・佛の間に永久に介在させようと云ふのである。フランスは如何なる場合の爲にも、攻撃戰の爲にも、フランスの土地から獨領へ至る開進地を置きたかつた。聯合軍の入城後、無意味な約束

をさせられたラインの住民に、此の地域から佛軍が撤退した曉には、フランスの要塞の砲を前にして、永遠の戦場で生死すべき運命が與へられる筈であつた。ラインの住民は、若しフランス人になりたくなければ、永久の不安と苦悶の下にのみ生活するドイツ人にならねばならなかつた。

聯合國はドイツの所有権没收に關する規定に混するに、更に飢餓戰の繼續及びドイツ經濟の永久の劣等化に對する、あらゆる手段を以てし、終には全ドイツ國民を「收用」した。兎に角ヴェルサイユ條約中に書き下された賠償規定は、ドイツ國民をして永久にバリ、ロンドン、ニューヨークの主權者、銀行家、株主等の奴隸たらしめる事以外の何物でもない。何たる無限の「幸福」ぞ！六千萬以上の男女子供を、幾世代にわたつて勞働奴隸として持つ事！而も「道德的」理論附けまでして！吾人は平和の支持者である、而して吾人が強力たるべき爲には、ドイツの勞働奴隸の汗の結晶に依つて吾人は、健康に幸福に生きなければならぬ、などと云ふのが彼等の言ひ草である。

聯合國は此の様に、飽く迄己れを善良な道德的な者と思つて居たから、何等の思慮もなく、一人で立法者、檢事、判事、警察を兼ねるに至つた。ドイツはヴェルサイユ條約の、所謂第二百三十一條の調印を強ひられたが、それは、戰爭がドイツとその同盟國の攻撃に依つて挑發されたものと云ふ、恥知らずの虚偽を含むものであつた。

ヨーロッパの人々は、不遜にも極端な手段に訴へ、彼等が作製した箇條の中で、引渡し要求を受けた

者及び前ドイツ皇帝に對して、彼等が審判者として判決を下す権利を有する事を確定したが、我々は此れを決して忘れはしまし。此の要求こそは、「國際道徳法及び條約の神聖を極度に蹂躪して」なされたものである。

此の同じ不遜さから作られたのが、ジュネーブの聯盟の國際裁判所である。既に一九一七年、フリーメイソンは成金俗物と半可通インテリの僭越さで、パリの一會合に於て、「國際聯盟」創立を要求したが、此の聯盟は彼等の生活原理に従つて、國際的問題中の「權利」を口にし、同時に此の「權利」を遂行すべき權力を持つべきものである。

フランス革命の思想は低下して遂にこれ等の人々に迄達したのだ！當時のチェッコ人代理人、謀反人、後のチェッコスロバキヤ大統領、ベネツシユ、ウイルソンの使節、及び多くのフランス人等はこれに屬する人々で、その中には後に彼等の國民の大「英雄」としてジュネーブの演壇上で獅子吼した者も居る。嘗てルソーは、人間は善良なりと説いたが、それは人間そのものを意味したのである。彼はその社會契約の中で、人類共同體を純物質的に解釋したが、共同體の義務範圍に於ける「個人」の消失が人間生活の意義である、と云ふ事だけは彼とてもなほ知つて居た。一七八九年のフランス革命の後裔たる二十世紀の飽滿した民主主義者は、善良なる人間に關するルソーの言葉を「余は善良なり」と云ふ淺薄な空辭にし、平等、博愛、自由と云ふ言葉を、子供の様な素朴さで解釋して、次の様に附言して居る。

「此の世の所有は、唯善良な人々にのみ是認せられる。彼等こそ權利を云々する權利を有する唯一の者であり、刑罰の權利は彼等にのみ與へらる。さて我々のみが善良なのだから、此の權利を有する者は我々に限られて居る。」と。

此の俗物共は自ら創造主を以て任じ、同時に隆々たる黄金時代の正當な享受者だと考へた。彼等は又此の勝手に考へた幸福を、永遠に保證する者たらんとしたのである。彼等はヨーロッパの人道保護と義務人及び行爲人救済の爲に、その國民の血を犠牲にした彼等の敵の頸を踏みつけて恬然として居た。彼等は次の様な命令を發する事が出来ると思つた。

「世界各國民はジュネーブに代表を派し、我等の任命せる書記官長に、或は我等の部下が占有せる事務局に於て、政治上の考へ方、行ひ方、その中止法等をその都度照會すべし。我等は此の代表の上に評議會を置き、評議會にのみ世界に對する裁決權を與ふ。聯盟の全員集會に於ては、その他の者に對して協力の外見を與ふ。我等が永遠なりと宣言せる黄金時代の状態が、萬一攪亂さるゝ事あらば、先づ我等聯合國はその責任者を確定す。他國、即ち同盟國はその後に至つて我等の決定を是認すべし。反對は容れられず。我等は「攻撃」とは何ぞや、を確定す。我等の行爲は斷じて攻撃に非ず、罪過に非ず、犯罪に非ず。我等の心に適はざる事こそ常に攻撃なり、犯罪なり。我等より發する最初の指令に依りて十字架に匍匐する者こそ災なれ。我等は彼を粉砕し、かゝる國民の婦女子の上に呪の言葉を

浴せん。我等は彼等を、冷血にも大戦中のドイツ人婦女子の如く餓死せしめん。我等はかゝる「犯罪者」に對する戦に於て、我等の子弟の血を犠牲に供せんとは斷じて考へず、我等は「責を負ふべき」國民より飲食を奪ひ、彼等をして血を流さしめ、彼等に對して制裁を宣告せん。云々。

二十世紀の政治革命の一部が、ヨーロッパの空気を淨化して後、ジュネーブの聯盟規約をも含んだ此のヴェルサイユ條約が、白色人種の大なる屈辱であつた事を、理解しない様な人間が今日でも未だに居るであらうか？ それは人間が勝利者に數へられるなら、彼を物質的享樂の生物たらしめん爲、敗北者に數へられるなら筋肉のついた骸骨たらしめん爲に、此の世に於ける神的實在たる人間の身體から、心臓と頭腦をもぎ取らうとしたものである事を、彼等はわからないだらうか？ 人間は何事かを企て、前進せんとする時のみ存在し、その力を永遠に向上發展せしめんとする時にのみ生きて居る。然るにヴェルサイユ條約は、人類の永久の休止状態を欲して居るのだ。此の人間——それはヴェルサイユ條約の被害者も、或は此の條約のお蔭で黄金時代の思澤に浴する様になる者も一樣に——無限に弱體化して自分自身の中に、一九一九年の民主主義者が豫感したよりも、遙に健全な向上進展の力を發達させる事を不可能にするならば、それは人間を殺す事を意味するであらう。

保障妄想

かくて人間は表面上ヴェルサイユ條約受諾の日に敗北した。生存はいはゞ純物質的のものになつた。歐米各國の過半の者は、ヴェルサイユで作られた情勢に心から満足した。彼等は我々の中にある人間的なものを總て不愉快な無用のものとして拒否した。何故ならば例の「幸福」があつたからである。彼等は富み、且つ勝利者なのだ。少し端正な態度をとりさへすれば、短時日の中に富者の食卓の末席を汚し、此の世の富を思ひのまゝに享受出来る、とドイツでは考へられて居た。

一度再算して見よう。ドイツ、オーストリア、ハンガリー、トルコ、ブルガリアは戦争に負けたのだつた。此のドイツの三同盟國は、一九一九年當時非常に微弱でみぢめな状態であつたから、概して反民主主義派には數へられず、ドイツは依然として孤軍奮闘の態であつた。北米及び南米に於て、白色人種の一員ではないが、白人文化の恩恵を受けて居る總ての者を算入すれば、ソヴェト・ロシアを除いて當時約五億六千萬の歐米國民が居た。此の五億六千萬の中で、ドイツ人は六千五百萬であつた。絶対に確信を持つた所有人の四億九千五百萬が、奴隸化されるべき六千五百萬に對したのである。そして此の六千五百萬の中で、ヴェルサイユ條約受諾の日に(大きく、大膽に見積つて)恐らく五百萬人が、彼等に要求された運命を意欲して居たであらう。彼等ばかりが尙十九世紀の革命に對する反對者だつた。残る六千萬のドイツ人は、ヴェルサイユ條約受諾の日に、パリ、ロンドン、ニューヨーク等の奴隸主から、パン、ベーコン、ラード、熱帶果實等の分前を頂戴するつもりで居たのである。

それにも拘らず、世界 所有人たる四億九千五百万の者の責に任ずる指導者達が、歐米諸国民の中に依然として存在して居た高々五百万の義務人に對して、ヴェルサイユ條約受諾のそも／＼の目から恐れを抱いて居た事は不思議である。外觀上は爾後永久に終る事のない様に見えた此の黄金時代が、再び瓦解せしめられはしないか、と云ふ不安の中に彼等が生活したのは、既に會議中からの事であるが、これは調印後に至つて切實に頭痛の種となつた。人間がその中に持つて居るあらゆる人間的なものを、完膚なき迄に失つてしまふ程、完全に屈從する事は明かに出来るものではない。良心は發言してヴェルサイユの人々及びその國民に次の様に言つた。

「人間を簡単に奴隷にしたり、物質披ひにする事は出来ない。又、さう容易に強奪する事は出来ない。そんな事は徹底的に屈服させられた國民でさへ甘んじまい。奴隷共が逆へない様に、所有人に屬する者達に對する嫉視の念が起らない様に、少くとも此れに對する保障が作られなければならない」と。それ故に民主主義及び反民主主義の歴史は、ヴェルサイユ條約調印の直後から、此の條約に對する保障探求を以て始るのである。

所謂戰勝國とドイツの代表者が、調印の爲にヴェルサイユの鏡の間に集合するに先だつて、英・佛・米の三國は同盟條約を協定し、ヴェルサイユ條約の殆ど各條に於て、云々されて居る様々な道徳とか正義のただ中に居ながら、戰前の聯合國組織に歸する事が適當とされた。ロシアを合衆國と取換へたゞけであつた。

海の彼方のアメリカには、ヨーロッパ民主主義の長老が居て、そこでは一般に民主主義的「道徳」の皮相な意識があつた。實に聯合國は、此處からドイツに對する大所有戦の物材を得て居たのである。英佛の間ではヴェルサイユで一種の條約が結ばれたが、此の條約は、徹兵後の地域に對する、特殊の保障手段と見做される規定を、萬一ドイツが犯す様な場合には、フランスを保護するものであつた。一方佛・米間の同様な同盟條約の締結は、佛・英間の此の軍事同盟の効力發生に對する條件であつた。此れに適應する諸條約はヴェルサイユで調印され、英國議會、フランス國會、ワシントンの上院で承認される筈であつた。ツイルソンが歸國した時、ワシントンではヴェルサイユ條約が受諾されず國際聯盟に加入する事は拒否された。かくて同盟條約は暗礁に乗り上げた。民主主義世界は外交戦に敗れたばかりでなく、所有人の赫々たる政治的成果の直後にも、敗北の憂目を見なければならなかつた。併しそれは彼等自身の責任だつたのである。

所有人の社會意思は極度に過大評價されて居た。合衆國人の様に、ヨーロッパの此の事態を前にして居るばかりでなく、所有獲得の大なる可能性を期待して居る者は、他人の所有の保護に對する責任に就いて、自力でその所有を最早評價さへ出来ないう者達に比べて、樂觀的な考へを持つて居ない。フランスは合衆國を必要とした。戦争はそれを充分に證明した。聯合國は合衆國の援助を借りてさへ勝利を得られ

ず、ヨーロッパの暗黒街の人の手をも借りたのだ。或る程度生命の安全を求めようとすれば、少くとも合衆國の全政治的經濟的威力を、毎日その背後で感じなければならなかつた。アメリカの協力なくして何の封鎖ぞ！ワシントンの人々の關心なくして何の賠償ぞ！アメリカが拒否した時、ジュネーブの聯盟は既に損害を蒙つて居た。若し世界列國の半が参加しなければ、制裁（經濟的にせよ軍事的にせよ）を實行する事は困難である。合衆國が一枚加はらなくては、切角まとめられた民主主義の力も全然此れを振ふ事は出来ない。民主主義ヨーロッパの豫言者と見做されて居たワシントンの人々が、突然不参加の意を表すると民主主義及びヴェルサイユ條約の獨裁に對する道德的權利さへ、掻き集め寄せ集められた。合衆國の拒否は所有人の政策上の一大失策であつた。さあドイツはどうするだらう？——ヴェルサイユ條約の批准直後、早くもロンドンやパリでこんな質問が發せられた。

ドイツにある五百萬の人々は、世界には人道の爲にヴェルサイユの此の自殺に向つて利用し得る何物かがある、と云ふ事を此の時に及んでも豫想しなかつた。彼等は全くその窮乏と戦つて居て、そんな暇がなかつたのである。合衆國の拒絶的態度が、英國に大きな反應を及ぼしたと云ふ事を、彼等は知らなかつた。彼等はカッツ暴動の前後、ベルリンで政權を握つて居た人々が、所謂戦争犯罪者引渡しを回避する事に成功したのを見て驚嘆した。實際は民主主義組織の弱點に過ぎなかつたものを、彼等は恐らく己が政府の長所だとさへ思つて居たのであらう。ドイツと合衆國との間に、特殊な平和状態がつくられ

たのだと云ふ様な記事が一時新聞に現はれた事がある。一體アメリカ政府は、實際ヴェルサイユ條約を受諾しなかつたのか、と云ふ様な質問を怪訝な顔をして發する者が方々に居たのである。此の事實を確認してから、更に一步突込んで考へ様とした者は殆ど一人もなかつた。

これに續く數ヶ月の間にさへ、ドイツでは政治的意図は感じられなかつた。英・佛の間には、ヴェルサイユ條約實施に關する盛な論争が行はれ、ポアンカレの勢力擡頭と共に、フランスは絶対に實力行使を欲した。一方ロンドンでは、選挙も過ぎて、ロイド・ジョージが「カイゼルを死刑にせよ！」と云ふ叫びで、必要な投票數を掻き集めてしまつてからはむしろ、やがて来るべき政治的經濟的難局を、冷静に處理すべしと云ふ傾向が起つた。併し實際のところは、ロンドンでは我々の意を迎へるかの様に見えたのではなかつた。實力を用ふるよりも、寧ろ政治的から經濟的に變へられた方法に依つた方が、大きな利得が得られると考へられたのである。

カンヌ、ジュネーブ、スバ等で會議が催され、一體にヴェルサイユ條約に従つて算出されたものは、一つ残らずドイツに要求された。併し代表者達（既にドイツ人も隨時その仲間入りをする事になつたのだが）が、互に腹藏なく話し合つたならば、一般人はドイツの自發的協力を重視して居る事、それ故に、永續的でないと見られて居る規定を、緩和する用意がある事を、英國人に見抜せる事が出来たであらう。ドイツの野黨はこれに關與しなかつた。ユダヤ人ジョーテナツは、カンヌに於て獨、英、佛語の演説を

同時になし、ヴェルサイユ條約の全部は、事實上實行不可能なる旨を、極めて正確に述べた。併し彼は此の演説から、今や總ての事が改革さるべきであるとの結論を引き出さなかつた。ラーテナウは彼にとつても、かくも祝福された民主主義の状態に、何等の變更が加へられない様に、他人の要求を履行する手助けとならんとしたのである。

ドイツ政府の代表は他の會議に於てみちめな役割を演じた。スバではフェーレッツバッハが、恐らく國民議會(彼はヴェルサイユ條約受諾の爲にそこで根本的に貢獻した)のあの時を思ひ出して涙を流した。此の様な各種の會議の一席上で、若し假りに「否」と言つた大臣があつたならば、その大臣のベルリン停車場歸還に當つては、數百人の人が集つて、彼に拍手を送つたであらう。又恐らくは二十四時間以上は續かなかつたであらうと思はれる。拒否を、必ずや英雄的行爲と見做したであらう。一九二〇年及び二一年には、少くともドイツの反對意思を證すべき機會が少くも引き續き十回は徒らに過ぎ去つた。ヴェルサイユ條約調印後間もなく、反民主主義の立場をとり初めたイタリアに對して、當時ドイツの諸新聞は、英佛の新聞と競争で侮蔑の辭を弄したのである。

既に世界戦争最中の一九一五年、イタリアが聯合國側に參戰して間もなく、ロンドンで要求を提出し、これが満足されなかつた事を、我々は屢々忘れて居る。一勝一敗の後、イタリアはメビアーベの戦(イタリア人は *Vittorio Veneto* の勝利として祝つて居る)於てその義務人を參加せしめ、大奮戦をした

獨逸の前線兵を敗つた。此の戦場で、物質が演じた役割は、西部戦線の大戦場の場合に比して、實際遙かに貧弱なものであつた。イタリアが此處に注いだ血の犠牲はその権利を要求した。ヴェルサイユ、トリアノ、セント・ジェルメイン等の條約はイタリアを失望させた。一九一九年フューメ(イタリアは既にこれを占領して居た)をユーゴスラヴィアの爲に明渡すべしと要求され、これにはダマンチオが反對した。彼はフューメに一獨立國をつくり、これに独自の憲法を制定したが、それは彼の創建にかゝるカルナロ共和國と云ふ名に従つて *Carta del Carnaro* と名付けられた。兎に角此の憲法には、創造する者の権利と云ふ觀念、共同體の訓練のよく行きとどいた組織的な仕事と云ふ觀念が見られる。従つて此の憲法では、國家の利益保護と云ふ事が必然的に、當時のイタリアが統治の目安として居た民主主義の諸原則を拒否する事になつた。つゞいてムッソリーニの統轄の下に、ファシスト黨が結成された。まだヴェルサイユ會議が續行され、イタリアの民主主義とフリー・メーション(彼等は勝利の榮譽を我物なりと要求した)が、その全盛を誇つて居た一九一九年の三月二十三日、早くもアイルランドにファシスト闘争聯合が設置された。「マルキシズム的腐敗に抗せよ」と云ふのが、此の聯合の叫びであつた。彼等は階級の利害を國家の利害に從屬せしめる事 要求した。それは假令、時の王者民主主義に對する直接攻撃にはならなくても、反民主主義の發言であり、要求であつた。かくて一九二二年十月、ファシストはローマにその軍を進めたのである。

當時ドイツでは、民主主義の核心とフリー・メーションとに對する此の反抗について、どれだけの事が知られて居ただらう？ フリー・メーション——これこそジュネーブ聯盟の創造者であり、ヴェルサイユの虚偽道徳の創造者である。イタリアに於ける如上の變革の世界政治的意義に就いて、ドイツでは何等感得せられる事なく、他にもその例の多い一國內の革命的試みだと思はれて居た。そしてファシストの成功に對して、直ちに向けられた必然的な妨害は、あれやこれやと小喧しく批評された。ムッソリーニは徐々に選挙を切り抜けて戦ひ通し、一九二四年には、ファシスト議員をして全體の三分の二を占めしむるに至つた。彼は一通りならぬ反撃を受けた。若しムッソリーニがマルキスト議員殺害（ファシスト黨はその責任者とされた）の後に、直ちに事を起さず、憲法改革を貫徹して居なかつたならば、一撃の下にイタリアに於ける民主主義自由主義、議會制度、フリー・メーション等を絶滅する事は出来なかつたであらう。

對外政策に於てもムッソリーニは——先に結果を言へば——彼独自の道を歩んだ。それは恰もドイツでは、忠實な隨員がフランスの急進社會黨員やイギリスの自由主義者の驥尾に附して、必ずドイツにも黄金時代のおこぼれを持つて來て呉れるだらうと、一般に想像されて居た時代に相當して居た。彼は一九二四年フェューメに關する闘争をまとめ、ロカルノの件（ロカルノ條約）も同時にやつた。併し彼はパリ郊外で出来た條約（ヴェルサイユ條約）の辯護者ではなかつた。彼はロカルノ條約締結こそ、ヨーロッパの政治の中

にドイツを引き入れる事に過ぎないと思ひ、従つてそれは彼が根本的に盡力する條約變更の第一項目であると見做した。國際聯盟にかけた期待が、否軍備縮少にかけた期待さへも、實現されない事が明かになり、既にヴェルサイユ條約の中で、民主主義そのものゝ原理に、完全な欺瞞が施されて居る事を認めると、彼は早くも、ヨーロッパに於ける民主主義の道を、共に歩むまいと決心したのである。

ムッソリーニが既にローマ進出の用意を備へて居た時代に、ドイツでは舊帝國遺物の瓦解、頭巾暴動インフレーションに依る舊所有の解消等が起り、ドイツ人は結局絶望か反亂かの一つを選ばなければならぬ様に思はれた。それにも拘らず義務を固守した數百萬の人間が居て、此の危機に對して斷乎として抵抗力を振ひ、假令最早報酬は得られなくとも、彼等の日常の仕事に着いた。彼等は飽く迄踏み止まらうとして力を盡した。併し彼等は生存しなかつた。彼等は氣高い目的を持つた人間ではなかつたのである。彼等が朝考へる事は、夕方迄には疲労困憊してしまふだらうと云ふ事だけであつて、翌朝再び晩迄の一片のパンの爲の闘争を始める爲に、健康な眠りを望んだのである。それ以上の事をするには、彼等は力に缺けて居た。併しこれらの人々が集つて出来た一隊は、一九二三年ライン地方に於て、ポアンカレの部隊に對して守勢的な抵抗をした。英雄——我等のシュラーガター（ドイツの愛國家、一九二三は死ぬ事を知つて居た。ミュンヘン、ランズフート、ユルンベルグ、チューリンゲン、中部ルー地方、ライン地方等でヒトラーは彼の最初の部下を發見した。義勇軍からは來た人々は整理の任務に就き、

工場から来た労働者は、單に精神的健康に基づいて、マルキシズム、民主主義、否共産主義をも排斥した。當時のアドルフ・ヒトラーが、民主主義に反対する事はおろか、寧ろこれを克服する意思を、早くも持つて居る唯一の人間であると云ふ事を、はつきりと知つて居たのは僅かに數百數千人に過ぎないが、何百萬と云ふ人々も、無意識には既にそれを知つて居たのである。彼は一九二三年十一月九日の業績を敢行した。二十世紀革命の、最初にして永遠の英雄達は、何等の武力を持たず、併し此の革命のあらゆる美德と精神的基礎とを身につけて、老毫れた獨裁者連の無知と商人的利己主義の砲彈の中へと進軍する。

世界史は國民社會黨員のやつた此の最初の犠牲戦を見て、且つ驚き且つ訝つて、一日その呼吸を停止する。民主主義の代辯者は、ドイツに關する濟度し難い無知を曝露する。彼等はミュンヘンに反動が起つたと主張し、カイゼル及び皇太子とヒトラーを結びつけて考へる。彼等は又、ミュンヘン事件の背後には、「帝國の榮華を」ドイツに再現する爲の舊保守黨が居たと主張して居るが、彼等はナチズムに就いても、ドイツ人の精神に就いても、ドイツの實際の窮狀に就いても何等知る所がないのである。

此の頃既に後のドーズ案の準備にとりかゝつて居た大使會議は、その討議を一日だけ中止し、フランスの新聞には制裁が要望された。併し英國はこれを斥け、フランスは簡單な脅嚇だけで満足した。フランスでは(當時一般にヒトラーの此の犠牲戦とドイツに於ける世界政策との間の關係を知つて居たもの

があらうか?)一九二三年十一月九日から現はれた輿論に依つて、若しフランスがルール地方の失敗にも懲りず、更に武力を行使しようとしても、英國はこれと事を共にしないであらう、と云ふ事が認められた。英國はフランスに對して、海の彼方の同盟國(米國)を失つた事を思ひ起さしめた。そこでは、その當時も、實力行使の考へは、ドイツを經濟的に抜きさしならぬ様にしよう、と云ふ企圖の背後に隠れて居たのである。

ドイツに對する了解は、英國にも合衆國にも、爪の垢程も見出されなかつた。併し彼等は自分自身の事を懸念して、方法を少しばかり變へようとした。即ち、武力の爪を隠して、あらゆる消極的なものを退場せしめ、ドイツに對して積極的に臨まうと云ふ提議が出た。又、ドイツに於て、表面上は協調の様な觀を呈すべき政策の爲に、何等かの勢力が獲得されるだらうと云ふ期待が述べられた。いはゞ親善關係の間に搾取しようとする爲に、嘗ての敵と食卓を共にすると云ふ事——これが新しい合言葉であつた。

辯護士と相場師

聯合國はドイツ人に所有の分け前を與へたくなかつた。日に日に餓えて行き、その日々のパンの爲に戦つて居るドイツ人を助けて、再びほんとうの人間にしてやらうとはしなかつた。此の世界の問題への

道、大使命、富、發見及び發明への道を思ひ切つてドイツ人に與へようとしなかつた。唯ヴェルサイユで作られた前線だけは多少煙幕で蔽ふておかうと思つた。彼等はドイツ人を、いはゞ第二等の人間として、彼等自身の戦線に引き入れる事が出来るだらうと考へた。ドイツ人を勝手に働かせて、時に甘言を以てたらし込む事——これが新しい方法であつた。ドイツ人に金を與へ、同時にその金の高利を得、ヴェルサイユ條約の原理に基づいて、ドイツ人の奴隷労働の成果に期待した總ての事が達し得られるかも知れない——こんな組織が英國で研究された。所有政策の方法を、如何にして極度に洗練するか、と云ふ事を發見するのが問題であつた。これを先づ、ドイツに課せられた實現不可能な政治的債務を、經濟的強制債務に變へる事に依つてやらうと云ふのであつた。即ち軍事的進入に依る不斷の威嚇に代ふるに、經濟的賦役官を以てしようとしたのである。

かくてドーゾ案商議が始まり、ワイマールの組織前線には經濟界の指導者達が押し出した。彼等は迅速に兵站から抜け出て來たのだ。彼等の多くは、所謂定評ある實業界の指導者や金融界の大立物であつたが、他人に稼がせておいて、少くとも自分だけはそれに關係出来る機會が來るのを待つて居たのであつた。彼等はバリやロンドンの富豪と食卓を共にする事が出来、胸肉を取られてしまつた鶏の骨を噛めと言つて與へられると、それで満足し切つた。それですら既に「幸福」だつたのである。

アメリカからドーゾ「將軍」が來た。モルガン及びウォール街の代表者で、スマートな實業家であ

る彼は、ドイツ人が彼を憎んだ理由がどうしても判らなかつた。彼は何を携へて來ただらう？ 専門家と銀である。銀では商賣をする事が出来たのだ。メキシコにあるモルガンの銀鑛は不景氣だつた。若しドイツが、當時鑄造される事になつて居た硬貨の爲に銀を買へば、ドイツはこれを特價で買つて、豫算で貨幣利得を得る事が出来た。ドーゾ「將軍」は、當時彼と向ひ合つて座を占めたドイツの代表者が、何故單に此の利得の一部分の取引をして、全體の取引をしなかつたか、わけが判らなかつた。彼一個人にとつては、これでさへ損失を意味したので、彼は機嫌を損じた。若しモルガンが市場から出拂はせながつて居た銀を、ドイツがすつかり買ひ取つてやつたならば、恐らくドーゾ案はドイツにとつて多少もつと都合のいいものになつて居たかも知れないのである。

今や政治は當分の間、武器と簡條で行はれないで、統計で行はれる事になつた。政治家達は互ひに取引所用語で話し合つた。一方ミュンヘンではヒトラーに對する審理が行はれた。ドイツ國民は安定した通貨に依つて安心させられた。此の通貨は、ドーゾ「將軍」がドイツに來る前に、ドイツ自身の方で作られたものである。ボルシェビズムはドイツ自身の方で征服され、ルール地方、ザクセン、チューリンゲン等で共産主義自の暴動に勝つた義勇隊は、聯合國の意思に逆つて進軍した。若しドーゾ案討議の相手たる經濟界の指導の人々が、こんなに早く此の厄介物から解放されなかつたら、その方が聯合國の氣にかなふ所だつたのであらう。

數ヶ月の討議の結果、遂に専門家連は一つの賠償案を完成した。此の案はロンドンで各國政府から徹底的に論議され、一九二四年國會に提出、辛じて多數を得て採決されたものである。此の國會の票決は、ドイツに於ける議會政體の適用が既に喜劇になつたと云ふ事を明かにした。野黨の一部は一身の安全な間だけドーズ案に反対したのに過ぎなかつたのである。「經濟」が勝利を得、ロンドンとニューヨークの株式市場は満足した。ドイツはクレジットを興へられたのである。ベルリンには列國實業界の巨頭を銀行家が多く來訪し、我々の肩をやさしく叩いて次の様な事を説明した。

「君、奴隸の鎖なんか、君が此の先もすうと今の様に勤勉ならすぐとれちやふよ。だけど僕等は勿論君を一先づ縛つとかなければならんだ。」

此處で賠償問題の歴史を一々詳説しても意味がない。ドーズ案に於ても、更に後のヤング案に於ても、否一九三二年のあの恥さらしなローザンヌ會議に於ける英・佛有力者の考慮の中できへ、ドイツ人を搾取しようとする民主主義の原則には何等の變更が見られなかつた事を、我々は確認するだけで充分である。聯合國がドイツから商品を買はうとしないで、唯金を得ようとした時、彼等自身の考へ方の根底に於てさへ、既に大きな誤りを犯して居た事を、彼等は遂に認識するに至つた。併しかう云ふ認識に到達したのにも拘らず、彼等が殆ど十年間も我々から賠償を要求し續けたのは、正に彼等が經濟理性に反しても、單にツェルサイエの所有要求權を固執した事をを證明するものである。所有人には此れ以外に出來な

い。彼等は現金を見たいのだ。

ドイツにとつて先づ經濟的にはクレジットと云ふ富が充満し、次に恐慌と云ふ貧困で溢れた此の時代には、政治は辯護士の仕事となつた。辯護士は經濟界及び株式市場の人々の全權委員であつた。聯合國が目論んだ取引に、當分適合する政治的狀態の中に、ドイツが常に一定の間隔をおいて陥つて居る様に、彼等は工作しなければならなかつた。ドイツにクレジットを興へて、高利を搾り取らうとするならば、ドイツは信用するに足る體裁をして居る必要があつた。此の様な時代に聯合國はドイツと條約を結んだのであるが、それは併し辯護士達に對して、政治的な點に於てさへも、ツェルサイエ條約の原則が少しでも放棄されない様に監視せよ、と云ふ特別な委任をして結ばれたものである。若し我々がクレジットの利息を拂へず、賠償計畫が難關にぶつかれば、直ちに辯護士達は我々に幾分政治的束縛を加へる様な命令を受けた。さうなるとジュネーブのドイツ代表者の監督は、勝手な口をきく事が出來た。一年前には今にも、我々の頸に抱きつきかねなかつた同じ英佛兩國人に對して、如何に論證を示したとしても少しも効果がなかつたのである。

實際、理性の命する所に反すれば反する程、我々を更に固くツェルサイエ條約の各箇條に縛り附ける爲に、此の計畫はジュネーブの民主主義列國に依つて、躊躇なく續行された。ドイツ國會に於けるドーズ案承認直後の一九二四年九月、ジュネーブでは聯盟總會が初つたが、此の總會に當つて、所謂「調書」

を以て、聯盟規約の附則に従ひ、ヴェルサイユ條約の條約行爲を補はうと云ふ試みがされた。國際聯盟に關する規定の中で未だ明瞭でないもの、又軍事的經濟的制裁を嚴格に實施する上で、妨げとなるもの總てを、新規定で代へよう云ふのである。對獨戰決議の爲に、何時でも多數票を得られる様に、聯合國は聯盟統率の下で、英佛及び東歐のフランス保護國の間に、對獨特殊同盟を作り上げようとした。ベネツシユは此の敷週間、特に一種の聯合軍、即ちいはゞ聯盟軍或はフリーメーソン軍編成に盡力して居たが、此の軍隊は常に適當な用意をして居て、いつでも大民主主義國及びその保護國の參謀本部のお役に立つ筈であつた。併し此の「調書」計畫は、英國海軍の常識の爲に坐折した。

ジュネーブではエリオト、マクドナルドが此の「調書」の調印をしたのであつた。マクドナルドはロンドンで失脚し、彼に代つて外相になつたのはチェンバレンであつた。チェンバレンはフランスで擡頭した政治的團體（外相はブリアン）を利用して、別な方法でドイツをヴェルサイユ條約に縛り附けた。彼は賠償問題の經驗から既に學ぶ所があつたのである。ドイツの手を借りれば、恐らくヴェルサイユ條約の効力を再び發揮させる事が出来るのだが、何故反獨政策をとらなければならぬのか——彼はかう思つたのだ。チェンバレンは、まるで前後を忘れた者でなければ出来ない様な憎み方でドイツを憎んだ。彼はその考へ方に於て、英國人と云ふよりも寧ろフランス人であつた。フランスが來るべき對獨協定で流さなければならぬ血に對しては、彼は少しも責任を感じて居なかつたので、若し必要ならばフランスを

煽動して、對獨戰を開かせよう云ふ用意を着々と進めて居た。併し世界戦争で民主主義國家は疲弊して居たから、戦争企業の一種の休止は彼に快く思はれた。それ故に彼はベルリン駐在大使に、當時の外相ストレーゼマンとロカルノ會議の豫備交渉をする様に訓令した。

事は英・佛・米三國同盟の頓坐から始つた。英國を完全にフランスに結びつけようとしなければ、これは又してもチェンバレンにとつて不快な事だが、フランスが再三再四要求した撤兵地帯の特殊の保安を、ドイツに課さなければならなかつた。かくて條約行爲の草案が出来たが、それはドイツに再び調印させる事に依つて、撤兵地帯の秩序維持に對する、ドイツの義務の再保證を含んで居た。同時にフランスは、當時ヴェルサイユで目論まれた限界を越えて、ポーランドとチェコスロヴァキアを、此の條約行爲に引き入れる事に成功した。ポーランドとチェコスロヴァキアとは、全然控へ目な態度をとつて居た合衆國の代りになつたわけである。此の制度に於ては、英國は最高の保證人に過ぎなかつた。ドイツは辛じて、軍事的制裁の爲の特殊義務を逃れた。ドイツが此の讓歩を與へられたのは、對獨戰以外の戦争はロカルノで考へられなかつたからで、若しドイツ以外の國に對して戦争をしなければならぬとすれば、何の爲にその戦争でドイツに制裁參加を義務づける事があらうか？——聯合國はかう思つたのである。一九二五年十月、ロカルノで調印された此の條約に對する提案を、當時のドイツの責任者は反對要求をしてから取り上げた。彼等の中で最も極端な樂觀主義者達、例へば外相ストレーゼマンも事態を次の様

に考へて居た。彼等は三度もヴェルサイユ條約に調印したのだから、これに對しても何か取引する事が出来ると思ふ、と云ふのである。彼等は「Jugglers」(聯合)と云ふ危険な政策に手を出した。英佛はドイツの要求に就いて談合したが、此の要求は實際的可能性を極度に過ち評價して、ザール地方及びオイペンマルメデーの返還を始めとし、ドイツがヴェルサイユ條約に對して要求すべき總てのものを含み、英・米・佛の軍隊に依つて占據された地域の解放をも含んで居た。チエンバラレンとフランス外相は、同時にロカルノ條約及び所謂反作用、即ちドイツの反對要求に關する討議を、簡単にロカルノ條約調印を要求する點に迄持つて行つた。次に彼等はヴェルサイユ條約の個々の規定の不安定を、表面上ヴェルサイユ條約の諸規定と密接な關係にある新しい要求と結びつけた。かうして彼等はロカルノ條約で危険な時に立ち到つたが、此の時ドイツ人は彼等の要求を後日更に討議すべしと云ふ單なる約束に甘んじ、條約に調印をしたのである。

(92)

最早ドイツの反對要求に對する討議は行はれなかつた。民主主義は忽ち元の残忍さを發揮し出し所有人は再びその姿を現はした。ドイツ代表がロカルノ條約調印の爲、一九二五年十二月ロンドンに来て、ドイツ外相が約束を促すと、英國人は冷淡な顔付をした。ブリアンは不在であつた。世界の耳目に衝動を與へる様な條約の調印は特別嚴肅にやらなければならない、と云つて彼は辯解した。フランス外交政策のチンドン屋は、又かう云ふ役をも上手に演じたのだ。彼はフランスの將軍連や經濟界の指導者達、

及びロンドンやロカルノの外務當局の人々に對して、聯合國が再び好意を見せてドイツ國民の肩を叩かうとする時に、ドイツ外相に二言、三言お世辭を言つてやると云ふ事で奉仕したのに過ぎなかつたのである。

民主主義列國は非常に冷酷であつたから、例の反作用に就いて、少しでも討議するどころか、逆にヴェルサイユ條約の權力組織を、ロカルノ條約調印直後更に加工修正した。彼等はポーランドとチェコスロヴァキアを、その本來の企圖に反してロカルノ條約の加盟國にしてから、此の二國を常任メンバーとして國際聯盟の會議に列せしめ、それに依つて、「世界の法廷」に於ける英佛の優勢を強化した。此の新しい欺瞞に就いて協調が成立しなかつた時、彼等はジュネーブに於てさへドイツに對して退去を命じた。ドイツはそれから一年たつて、彼等の豫定の意思だとして聯盟に迎へられた。ブリアンは又々大平和演説をやらなければならなかつた。

(93)

此の時既にチエンバラレンは權力聯合の第一交渉をやつて居たが、それはその翌年、軍縮會議の豫備會談で明かになつた。ヴェルサイユ條約の中で、民主主義國家が進んで引き受けた軍縮義務の履行が終ると、聯合國はドイツの要求に慘酷な拒絶を與へた。一ヶ月、二ヶ月、年一年と交渉は永びき、フランスは軍備を擴張した。イギリスは少しく躊躇はしたが、それは他日ジュネーブに於て、海軍軍備の平等状態(それは英國に、格別の費用をかけなくても世界制覇の保持を許すであらう)を實現させる事が出来ると假

定して居たからである。併し英國は、ジュネーブでその要求した軍備比率の貫徹に際して、評價したであらう力を誤認して居た。

賠償會議に於て、専門家が何回も討議を重ねたにも拘らず、又、クレデットも與へられたにも拘らず、ドイツはかゝる間に、益々深刻化して行く經濟的窮境に陥つて、一九三一年七月、ドイツの財政破綻は明かになつた。ドイツ中央黨の政治的希望は崩壊した。一九三一年七月十三日の銀行恐慌の後ブリュッセル首相が世界各國の援助を求めてパリ及びロンドンに行くと、頗る冷淡なあつかひを受けた。民主主義諸國は、常に彼等が保持し、且所謂「協調」の時代に組織的に作り上げた「ジークフリート線」(此の意に於いて居る)——ヴェルサイユ條約全原則の百パーセント實行と、權力と云ふ「ジークフリート線」に立ち返つた。聯合國が此の時代ドイツに許容した唯一の事は、佛・英・米諸國軍のラインライド撤退であるが、それも撤兵地帯に關する諸規約に再び調印させ、ヤング案(此の案は經濟的禍害を著しく促進した。)に對する無意味な義務を、ドイツに課して後行はれたものである。併し此の撤兵は相互の諒解に少しも寄與する所とならず、各國軍はフランス要塞地帯が完成してから、始めてラインラントを引き上げたのである。ドイツが軍事的に占據する事を許されない地域に、要塞地帯を前にしてフランス軍をその儘置いておくと云ふ事は、軍事的見地から見ても無意味な事であつた。併しフランス軍の戰略は、此の要塞地帯に軍隊を入れる事を斷乎として命じた。殊にフランスに於ける當時の新兵徵募狀態では、此の要塞地帯

に充分な兵を置く事はむづかしかつたからである。

民主主義諸國は、一九一九年から一九三一年に至る迄、實際何物も犠牲にしなかつた。彼等は所有人の要求貫徹の方法を時々變へた。その要求は飽く迄殘存し、ヴェルサイユ條約の諸規約は保持されたのである。

ソヴェエト・ロシアへの道

クレデットがすつかり盡きると、英・佛には再びドイツにクレデットを與へて、更に政治的拘束をしようかどうか、と云ふ問題が起つた。當時の首相ブリュッセル博士が、パリ及びロンドンで出席した二會談に於て、(而もヨーロッパの殆ど全部の定評ある外相と合衆國の専門家が参加した一會議に於て)對獨第二回クレデットの試みに對する反對が決定された。

實力行使が再び始つた。ドイツの民主主義は放棄された。英・佛の政策上の打算は、ドイツに政治的變化が起るだらう、と云ふ事にあつた。當時のドイツに、どんな政治的發展が豫想されて居たか、と云ふ事を確認するのは、今日でも興味のない事ではない。英佛の政治家合衆國の専門家等では各々その見解が違つて居たが、一九三二年より一九三四年に至る間の政治的方法の動搖は、此の點から明かにされるのである。ニューヨークではパリやロンドンよりも金を賭ける冒險が大膽であつた。將來ドイツには購

買力が出るだらうと思はれたのである。何故ならば、ユダヤ人銀行家の數々の關係を征服して、ヨーロッパに於ける英・佛の度を過ぎた資本主義的努力に對抗し、恐らくは他日平衝勢力を持つ様に、ベルリンにしっかりと地盤を得ようと云ふのが、常にニューヨークの銀行家の計畫だつたからである。ドイツの發展を英・佛では多少更に重大に見て居た。一九三〇年九月十四日、ヒトラーは選挙の勝利と彼の政策の進展に依つて、豫想以上の勢力を得たのであつた。萬一實際に、——これが當時一般の考へ方だつたが——ナチズムがドイツに於ける他の國家的努力と結合して、政權を握る様な事があつたら、意外な出来事に對して用意する所がなくてはならぬ、と考へられた。ヒトラーが實際成功しようとは考へられて居なかつた。寧ろドイツ全體が混亂に陥るだらう、と云ふ事が豫想され、ドイツを再びボルシェビズムの侵略から解放してやるのが恐らく英・佛軍の任務であるかも知れない、と云ふ様な考へ迄も遊ばれたのである。持に「賢明」で目先のきく人々は、差當りドイツに於ける反ボルシェビズム運動が如何に熾烈を極めようとも、ボルシェビズムはモスコワからワルソーを通つてベルリンへ入るだらうが、適當な時に此のボルシェビズムと協定を結んだ方がいゝ、と云ふ考へをチラホラ持つ様になつて居た。それはユダヤ人陣營の見解であつたが、ドイツの所有入たるラーテナウはその典型となり、政治上の彼の一味の者と共に、既にラバロ條約(一九二二年、イタリーの阿)に於て此の道を辿つたのであつた。フリーバーがヤング案の失敗に基づいて總モラトリアムを實施してから、金に目が眩んだ政治家達は

ーザンス會議の準備をした。此の會議に際して、一九三二年六月、當時の帝國政府及び英・佛首相は、多くの専門家と共に、第三の賠償計畫を立てようと努力した。一九三三年七月、ロンドンで開催された世界經濟會議の思ひつきはローザンヌから出たものである。それは大戰後、ヨーロッパに於ける最後の大會議で、全く失敗に歸したものであつた。例の反作用は零に等しかつた。

ドイツから意外な事が起るかも知れないから、それに對する用意をする事が是非必要であると考へた政治家達は、同盟者を探し求めた。彼等は一九一九年に足を停めた所から事を始め、ロンドン、ワシントン間の會談が開始された。併し合衆國には、不介入の原則を放棄する様な傾向は少しもなかつた。そこで彼等は他の同盟者を探さなければならなくなり、それをソヴィエトに見つけたのである。

ドイツに於ける民主主義の放棄がロンドンで決定されると、殆ど一九二六年から一九三一年迄杜絶して居た英・佛對ソヴィエト間の關係が、異常な熱心さで再び探り上げられた事は非常に注目し得る。此の方向轉換はさう單純なものではなかつた。何故ならば、ボルシェビズムと手を握る政策は、西歐國民にとつて決して快いものではなかつたからである。此のカルタを見せて勝負をする前に、彼等は親政策宣傳の爲に、相當の期間を費さなければならなかつた。かうした事には西歐諸國の政治家の常套手段として、表面上先づ簡單に競争思想を利用した。ドイツはソヴィエトと條約を結んで居なかつたか？ラバロ條約及び一九二六年のベルリン條約がある。ドイツがソヴィエトの援助を借りて、祕かに軍備を

ととのへて居た事を、世界列國は知らなかつたのか？ だから何で遠慮する必要があらう？——列國は自國民にかう言つた。ドイツに許されてる事は英・佛には尙更許される筈である。「ドイツはその政策を單に戦争の爲に行ひ、我々英・佛は常に平和にのみ仕へる者である。」——昔からかう説かれて居るではないか。併し此の對ソ提携の宣傳は有效な成果を見なかつた。それ故に交渉は數年間に亘つて、比較的祕密裡に行はれたのである。

ロンドンでは既に一九二九年に、對ソ外交關係が再びとられ初めて居た。その確固たる救世軍信仰に基づいて、ボルシェビストの中にも人間を喰ぎとつたマクドナルドは、議會の意見を無視して、再び對ソ會談を始めた。「シチー」はこれに對して別に感情を害しなかつた。實業界は英國政府にとつてそれ程大きいものではなかつたのである。ソヴェト大使のロンドン駐劄直後、「ブラッダ」が、今後英國に於ける共產主義的煽動は一段と激化されるだらう、と報じても英國實業家は別に不安を感じさへもしなかつた。

一九三〇年の夏には、未だフランスの陸軍大臣だつたタルジューは明かに反ソヴェト的態度を持して居た。併しフランスは一九三一年の中頃、而も意識的に英國と競争して、反ボルシェビストのエルベツト大使を召還してから、佛ソ關係は正の命令を與へた。一九三一年八月には、既に條約交渉が開始されて居たが、それは圖らずも難關に逢着した。フランスはポーランドをも含める事を提議したが、ソツ

ヴェトはこれを拒絶した。のみならずケー・ドルセー(フランス外務省)は此の交渉に當つて、當時ソヴェトの軍事的援助を、少しも重視しなかつた參謀本部とは反對の立場をとつた。

併しエリオは此の反對を押し切つて、一九三二年十一月、條約を成立させたが、ソヴェトはこの條約の中でベッサラビアを放棄して居る。かくてフランスは、同時にその保護國ルーマニアの御用を務めたわけである。併しフランスは此の仕事で、ポーランドを道連れにする事は出来なかつた。これより先、ワルソー政府は七月にソヴェト不可侵條約を結んで居り、独自の政策でフランスの先手を打つて居たのである。

モスコの獨裁者はフランスに對して、共產主義的煽動は行はない、と云ふ常套的聲明を行つた。此の聲明が阿諛的虚言である事を疑ふ者は一人もなかつた。併しフランスは、最初政治的範圍のみを説明したのに過ぎないこの條約に依つて、對ソ軍事同盟に至る道を開いたのであつた。ソヴェトはジュネーブへの道を開き、リトビノフはジュネーブに於ける、ボルシェビズムの最高煽動員として任命される事になつた。

併し英・佛はそれからもう一度足を停めた。けれども、ソヴェトに對して、再び正常な關係を樹立した事は、彼等を満足させた。ドイツではナチズムが權力を握り、かくてドイツ包圍の鎖を更に狭める必要が起つた。ソヴェトに對する正常關係と佛ソ條約とは、何時でも軍事同盟にする事が出来たのであ

る。ヒトラーが全権を握つて、先づ國內秩序の確立に成功してから、一九三三年十月十四日、聯盟及び軍縮會議から脱すると、英佛はリトビノフの目の前に、聯盟總會の入場券をつきつけさへすればよかつた。かうなるとリトビノフはスターリン及び赤軍を側にして、フランス及びチェッコスロヴァキアとの軍事同盟締結を、わけなく遂行する事が出来た。

目的設定に就いて、英・佛が意見一致を缺いた爲に、バルトウの方で何等の障害なくモスコへの道を進む事が出来る様になる迄、一九三三年十月から一九三四年四月に至る間、尙ナチス、ドイツに對する政治的依歸みに一短期間を要する事になつた。英佛當局は、兎角尻ごみして居る政治家や國民に對して、ボルシェビズムと條約を結ぶ以外に道はない、と云ふ證明を、再三提出してやらなければならなかつた。一方バルトウは先を急いで、一九三四年の四月には簡單に交渉を中止した。そこで英國はフランスを支持する必要が出来、フランスは佛ソ同盟の所謂直接的利益を獨り占めする事さへ出来た。そして此のボルシェビズムとの同盟に對して、全責任を負ふて居るエリオは、國民に表面上の大成を指示して安心させる事が出来た。フランス國民はそれでも尙疑念を持つて居たが、エリオは多數票を確保したのである。素朴なフランス人はボルシェビズムに就て何等知る所がなかつた。ソヴェットの事が問題になると、彼は嘗てのロシアを考へた。ロシアは帝政から解放され、一見民主主義と去る事遠からざる國家形式をとつた觀があるが、かう云ふ考へ方はフランス新聞一般の見解であつた。フランス國民に危懼の念を

起さしめたのは、金であつて、ボルシェビズムではなかつた。ロシアは戦前のフランスに、小資本家にとつても素晴らしい公債の利子を傳達してくれたのだ。ところが此のロシアが突然支拂を停止した。國會議員の投票に、重要な意義を持つて居る數千數百のフランス人は、此れを手痛く感じたのであつた。

佛ソ同盟をフランス人に否ざわりよくさせようとするならば、一九三三年の「ロシア」は帝政ロシアより安全である、と云ふ印象を與へなければならなかつた。エリオは此の點でフランス國民を完全に欺く任務を自ら引き受け、條約締結に先だつてソヴェットに赴いて、自國民の爲に一冊の書物を書いた。此のひどいまやかしの背景に就いて研究する事はフランス人の任務である。エリオが、(兎に角、後に全然ボルシェビズムの煽動に委せられた約二十人のジャーナリストを伴つて) 十四日ばかりのソヴェット滯留の間に、實際とは反對の事を、精密に個々の點まで確定したと云ふ事——此れは事實である。彼は軍事的には強力で經濟的に強大な、社會的には幸福な國を自國民に見せたのである。

既にロンドンに於ける世界經濟會議開催中、西歐民主主義國家の間に、ボルシェビズムの強固な地位を作るべき準備工作をして居たリトビノフは、一九三四年九月、ソヴェット代表としてジュネーブに乗り込んだ。これより先既に締結されて佛ソ軍事同盟は、一九三五年五月二日に公表され、續いてチェッコスロヴァキア間の軍事同盟の公式發表が同月十六日に行はれた。かうして民主主義諸國は、ドイツを敵として、ボルシェビズムと第二回目の條約を結んだのであつた。

回 想

民主主義は所有讃美を振りかざし、歐米に於てその統治を始めた。十九世紀全體を通じて、民主主義は歐米諸民族の生活の現實問題に對して、不可解な程無批判な態度をとり、所有など義務や行動程重大でない人々に對して争闘を續けた。そして民主主義諸國人の所有が増大すればする程、利己主義は益々成長した。

世界戦争はドイツに對して行はれた。ドイツは恐らくその有力者で、民主主義の所有意思を模倣しようとしたかも知れないが、實際は國民の廣汎な大衆とその精神的指導層に於て、物資の誇大評價に對する義務と行爲の原則を代表して居たのである。世界戦争の兵は、ヨーロッパ何れの國の兵も、最初は義務人であつた。彼等は物質の爲に敗北した。それにも拘らず、ドイツは歐米民主主義諸國の全所有に對して抗争した。併しドイツは、民主主義諸國の責任者が、マルクス主義及びボルシェビズムの暗黒界の人々と事を共にし、ドイツ兵前線の背後で革命を起した爲に、遂に一九一八年の後半に至つて初めて屈服した。

民主主義はそれから再びボルシェビズムと袂を分つた。併し(それに就いては後章で更に述べる事にするが)民主主義はロシアに於けるボルシェビズムの確立を少しも妨害せず、寧ろ實際にそれを促した。

ツェルサイエでは所有人の野鄙な私慾が世界の地上權に迄高められ、彼等はドイツ國民に對して、爾後何百年か民主主義の爲に奴隸勞働を課さうとした。此の奴隸勞働を權力によつて遂行せんとする試みは失敗し、ドイツ人を自由意思の奴隸にしようとする試みも挫折した。

ツェルサイエ條約及び賠償經濟の基礎の上に建てられた民主主義の凡ゆる經濟的打算は、衰れにも崩壊した。民主主義が一九三一年、此の崩壊から取り出した結果は、ドイツから身を引き、ドイツの民主主義者をして、その運命に委せる事であつた。民主主義國家は、先づ援軍として、ボルシェビズムを間接に利用しようとする考へを、再び持ち始めた。彼等はナチズムとボルシェビズムが、中歐で闘争を起すであらうと考へ、その場合、ヒトラーの勝利より、ボルシェビズムの勝利の方が望ましい事を、彼等は隠しては居なかつた。

ヒトラーの威力が益々強大となり、ナチ外交政策が最初の徴候の中に益々多く現はれて來ると、ロンドン及びパリに於ては「和協」の人々(彼等は依然としてベルサイエの原則に期待をかけて居た)が、英・佛・ソ軍事同盟を以て、ナチズムに對する豫防戦争の實力と可能性に依る、ドイツ包圍の完成と見做した人々の爲に、次第に退けられるに至つたのである。

ナチスドイツはボルシェビズムが「國際聯盟」へ入れられた一九三四年にはツェルサイエ條約に對して何等の企てもして居なかつた。國際聯盟及び軍縮會議から脱退して、初めて正しい道が開かれた。ナチス

ドイツはヴェルサイユ條約の個々の規約修正に就いて、民主主義諸國と戦線で討議し、實際には同時に更に強く此の條約の鎖に縛られる様な考へは絶対に持つて居ない、と云ふ事が民主主義諸國に證明された。ドイツは自ら進んで孤立に陥つたが、それにも拘らず佛ソ軍事同盟は完成された。その公表が一九三五年五月に至つて、初めてなされたと云ふ事、即ちヒトラーが國防の自由を宣言してから行はれたと云ふ事は、外交的形式の事務に過ぎない、此の同盟の締結は、これよりすうと以前に終了して居たのである。

英・佛兩國に於て、ボルシェビズムと、——而も一九一八年の場合の様に、ボルシェビズムの暗黒界との間接的關係に依つては、公然とボルシェビズムの國家と——提携して行かうと云ふ意思が現はれた時は、恰も英・佛當局が當時のブリュニング首相に、ドイツに對する再度の大クレデット提案を拒絶し、公式に「和協」政策に結末をつけた時に當つて居た。

それ故に我々は次の様な事を確認するものである。

一九三四年で、百四十六年に及んだ民主主義の歴史は、そのボルシェビズムとの關係に於て、實に密接不可分なものある事を、我々に二度教へて居る。所有人に對する行爲人の斷乎たる抗争に當つては、民主主義の絶滅と全歐文化の破壊を目的とした勢力と同盟する事に依つてのみ、自己保全の道を講ずる事が出来る、——民主主義は此の様な思ひ違ひをして居る。ボルシェビズム暗黒街を動員しなかつたな

らば、民主主義列國は一九一八年に、ドイツ軍前線を擾亂させる事は出来なかつたであらう。民主主義列國は、一九三四年、ボルシェビズムとの公式の國家同盟に依つて、ドイツ行爲人の勝利を、十九世紀に對する二十世紀革命の勝利を、造作なく妨害する事が出来ると思つた。

ところが民主主義諸國の政治家は非常な考へ違ひをして居た。彼等は實際對ソツイエト同盟に依つて、ヨーロッパ全國家の、ドイツ、イタリアのみならず、英・佛自身のあらゆる行爲人の革命的意思想著しく刺戟し、自分自身を危険に陥し入れたのである。ボルシェビズムにとつては、スペイン、チエッコ、スロヴァキア、フランス、英國、全英世界帝國等への道が開かれた。それに依つて民主主義は、對ナチズム、對ファシズムに於ける同盟者を得た。併し民主主義の此の同志は人類の敵なのである。

我々は殆ど百五十年に亘る民主主義の歴史を辿り、此の史的體驗から民主主義の本質を説明した。民主主義は利己的であり、獸的であり、又反動的である。その側にはボルシェビズムが肩を並べて居る。ボルシェビズムの歴史を述べ、その本質を闡明する事は次章の任務である。

第三章 ボルシェビストと所有人

ボルシェビズムの根本思想は、一七八九年のフランス革命であつて、民主主義のそれと同様なものである。その源泉はフランス革命の一流の人物達が、その智識と思想を汲みとつたあの清水ではなく、遂にはルソオの思想もそれに轉化せしめられた、あの唯物主義の廣い緩漫な汚らしい流れである。

最初の言葉は明瞭だ、「人間は善なり」と云ふのである。これはルソオの言つた言葉であるが、彼は社會に就いてのその數多くの夢想の中で、現實の人間の跡を追つて居たのである。カルヴィンが彼に影響を與へた。キリスト教義の變化、カトリック教會の華麗との絶縁、當時のブルジョアの蒙昧に向つて、故意に對立された剛健無趣味な宗教生活への復歸——かうしたものがルソオに義務の豫感を與へた。併しカルヴィンはその宗教をジュネーブ市民の打算的な唯物主義にも適合させた。今日我々が人間を見る様な眼で、ルソオが彼の時代の人間を評價する氣持を持つて居たとしたら、彼は天才の恩恵を得たに違ひなかつたらう。ところが彼の活動は、自分自身の生存の殆どプロレタリアの零圍氣の中ばかり限られた。彼は「高處」を見た。「高處」——其處では上層の、否實際は物質的に豊かな階級の人々が居た。収入を生み出す財産と別荘とを持つた人々である。かくてルソオの命題たる「人間は善なり」は、既に彼自身に於てさへ、人間が善ならば、あらゆる人間は同權を持つべきである、と云ふ要求になつたのである。彼自

(106)

身も所有の平等に對する要求に近づいた。

フランス革命の國民議會に於て、ジロンド黨員及びジャコピン黨員として奮闘しい空想に浮身をやつし、その冷酷な演説で死刑を要求したルソオの亞流は、その言葉を飾る爲に具體的な思想を用ひる時は、ルソオの命題の中に、唯所有の平等に對する唯物的要求を見たのに過ぎなかつた。彼等にとつては、物質的なものの中のみ自由、平等、博愛があつたのである。金の中ではないにしても、少くとも土地の中に、家屋の中に、商品の中に、収入の元となる特權の中の自由、平等、博愛であつた。人間は善良である。人間は自由である。此の命題の中に基礎を置いた要求は、一七八九年のフランス革命では、既に次の様な要求になつて居る。即ち、「他人所有する故に、我も亦所有すべし」と云ふのである。

自分達の祖先や兄弟に依つて開かれた此の世界（その海の彼方には新しい國家が誕生し、英國はその富を利用したのだが）に就いて、當時の人間の智識はどんなだつたらう？ 世界の富は無盡藏で永遠なものである、——彼等の智識はかうした間違つた信念に傾いて居た。だから此の信念から出る推斷が、次の様になるのも尤もであつた。

「運命が人間の爲に、此の世界の無限永久な所有を提供してくれたのなら、人間の平等が認められた時代に、何故各人は此の永久無限の所有を同等に享有してはならないのか？ 人間が自分の眼前に在るものを、別段奮闘努力しないでも、好きなだけ手に入れ得る權利を與へられて居るならば、人間に

(107)

内在する能力體力を、自分や子孫の爲に利用せざるを得ないと云ふ事を、どうしていつ迄も固執して居る必要があらう？」

フランス革命は所有意思の一段階の中に發展したものであり、第一階級に屬する二階級に比して、これ迄所有權を與へられて居なかつた第三階級の擡頭、及び革命當時所有を獲得した人々に對する、プロレタリアートの進出の中に發展したものである。新たに權力を握つた人々の中で、所有階級に屬する者達は、既に一七八九年憲法を制定して財産調査をやり、又所有階級の有産市民と非所有階級の無産市民との差別を作つた。パリの庶民は、ギロチンばかりが支配する暴力時代に於てさへ、妄想觀念に驅り立てられた革命指導者と完全に一致して、何を措いても斷頭に對する日當を要求した。金を支拂つた者の所は門前市をなし、支拂をしなかつた者はギロチンにかけられる危険にさらされた。殊に其の者が、フランス革命の理想たる自由平等、博愛を聲高らかに説く事を心得て居る人々の中から出た場合は、その危険が大さかつた。過激な煽動者を外國や東方戦争に轉じたのは、所有思想の仕業だつたのである。

民主主義はフランス革命から發展したもので、その原則とする所は次の様なものである。即ち、所有階級は多數を形成し、従つて國家、警察、軍事的權力、司法、全公的生活を自由にする權利を有する、と云ふのである。所有階級は刑罰權を持ち、又所有階級各個人の利益を配慮する爲に、權力を賦與されて居る。彼等はその手許に轉げこんで來る新所有は、何によらず自己のものであると要求する權利を

持つて居る。此の權利と權利の效力を、充分に發揮させる手段は銀行であつて、彼等は所有階級社會の一員として、植民地獲得と此の時代の技術的發明の利用に參加して利得を得る爲に、かうした銀行に金を運び込む事が出来るのである。

國民とマルキシズム

此の民主主義所有階級に對する、下層階級からの反抗は既にフランス革命の中に現はれて居る。セント・ジュスト、又ロベスピエールも色々に態度を變へたけれども、その或る場合には、プロレタリアートの獨裁、第四階級の全所有支配を要求し、その際彼等は、此の第四階級は數に於て遙に多數を占め、従つて此度成功した革命の理論に依り、人類の共有財産となつたものを支配する權利を有する、と論證した。英國ではかう云ふ反抗的氣勢が揚らなかつた。又合衆國ではいつも抑壓せられ、フランスでは所有階級の物質的權力と、此の目的の爲につくられた政治的組織及びフリーメイソンの組織に依つて制壓された。併し所有階級がその支配を百年乃至百三十年持ちこたへる事に成功しても、それは決して彼等の勝利ではない。又實際勝利ではなかつたのである。大衆を向ふにまはして、己が所有意思を擁護して居る民主主義諸國の少數所有階級は、實際は此の大衆の隱忍に依つて生きて居るのである。大衆は彼等より健康な本能と、より良い良心とを持つて居るのである。民主主義國家では、大衆の上に所有階級

の全權委任者たる辨護人が大陸の椅子に坐り、議會の議席を占領して居る。教會と學校は所有階級の意思に奉仕する様に仕組まれて居る。政治家、即ち所有階級の全權委員が言ふ事も、教會の牧師が説く事も、國家の教師が話す事も大衆は信じはしない。大衆はあらゆる指導に對して懷疑的である。彼等の遙に優れた力を以て、あつさり所有を破壊もせず、お餘りのお据分けに與つて居る大衆は、もう百五十年以來自身自身に頼つて居る。彼等は徳義を持つて居る。全體に對する義務の觀念である。彼等は假令如何に煽動的説教に依つて精神的に毒されようとし、最後の瞬間には決して尻込みするものではなく、進んで貧乏籤を引き、物質的窮乏の運命を引き受ける。それどころか、精神的活動の平等さへ與へられない、と云ふ運命さへ引き受ける犠牲的精神を持つて居る。剩へ彼等は現代の知識からも閉め出されて居るが、これに對して實力的反抗もせず、來るべき將來には純物質的創造物としての所有が、自らの中で崩壊し、人間の實際的平等（所有に於てはなし、義務に於ての）への大道が開かれるであらう、と云ふ健全な眞正な希望を常に彼等の心の中に抱いて居る。彼等は彼等の仕事に價すべき最高の報酬と、彼等の生存の最大の物質的保證を欲して居る。併し彼等は總ての者を奴隷にする所有の敵である。

ドイツの國外で、多くは民主主義権力の中樞のさ中であつて、今日の大臣や議員よりも、人間の發達に關する知識を多く持つて居る少數の人々から、繰り返し次の様な説が述べられた。今日マルクス主義的煽動家や共産主義的煽動家の手中にある英、佛の大衆に安んじて力を與へよ！ 而らば諸君は數ヶ月を出

ずして新しいフランス、新しい英國を持つてあらう。大衆の健全な意識は、諸君の國を自ら國家的生活の形式に導くであらう。而して彼等はいく形式の中で、假令彼等を破壊工作に、ボルシェビズムに導かうとする者があつても、全體の福祉建設の爲に、彼等の力を捧げるであらう。云々。

歐米國民のアリアン人種大衆は、人類の技術的進歩に伴はれたあらゆる苦惱、肉體的、精神的困苦に堪へた。彼等は何人も、如何なる時代にも、受けねばならないあらゆる絶望を克服した。何故ならば、彼等の誰もが、キリスト教の教義、博愛の訓、文明の民主と義的教説と、現實の狀態の間には大きな矛盾がある事を知るに至つたからである。併し彼等はそれでも働き續けた。彼等は誰でも、人權に就いてフランスの教科書の中に説かれて居る事を實地に驗さうとして、所有階級の隣人の家に行かなかつた。又暴力を以て他人の所有を無難作に奪ふ様な事はしなかつた。英國民の中流階級及び労働階級の人々の中で、日曜日に英國教會で説かれる教説から、實踐的結論を引き出す者は誰もなかつた。彼等の誰もが、全體に對する義務への率直な態度に依つて、所有階級より遙に強い事を證明したのである。

十九世紀を通じて、大衆は非常にしつかりした氣心を持ち續け、マルキシズムや共産主義の煽動の全盛期にも、所謂労働者の指導に當る者が煽動しても、健全な本能に依つてこれを克服した。此の大衆の搖ぎない善良さのみが、民主主義國家所有階級の主權を救つたのである。英國では、プロレタリアートが僅かばかりの贈物に依つて誤魔化され、ニューヨーク、シカゴ、サンフランシスコ等では、プロレタ

リアートの魂の窮乏の前に、富者の扉が全く閉ざされて、肉體の困窮には一時凌ぎの施し物で取り繕はれた時、彼等に此の絶望を生き抜かしたのは人間の驚くべき健康だけであつた。一八四八年の馬鹿げた、遊戯的ブルジョア革命や、一八七一年、絶望の餘り勃發したパリ・コミューンの暴動から、所有妄想の蔓延を伴つたボルシェビズム的革命が、大衆の頭上に降りかゝらなかつたのは、フランス國民の常識がこれを妨げたからである。

籲つて考へて見ると、社會に關する不動の信念を持つた、かうゆう大衆を組織して、一つの國家——民主主義の所有國家と趣を異にして、十九世紀の創造力に考慮を拂ふのに適して居る様な國家——を作る事がどんなに容易な業だつたらう、と云ふ事が認められる。此の世界の土地から出る豊富な食料で大衆を飽食させる事が出来たであらう。そればかりではない。彼等は原料の利用と、機械の發明の物質的驚異に關與する事が出来たであらう。精神力は非常な發達を遂げる事が出来て、誰でもその勞働範圍で發明者、發見者、とりもなほさず創造的人間になる事が出来たであらう。自分の精神が暗示したものを、自分一人の爲に利用しようなどとは、最早誰でも考へなかつたであらう。若しも一八七〇年頃、歐米諸國民の中に、大衆の意思を國家の爲に利用する事を知つて居る天才が現はれたとしたり、我々はあの世界戦争の恐ろしい苦惱を嘗めずにすんだであらうし、又民主主義經濟のあの非常に由々しい災禍を蒙らずにすんだであらう。

かうゆう災害を受けて、その代りに人間の凡ゆる思考は、否人間的なものに對して強烈な情感を持つた人々は、十九世紀の最終の十年に於ける獨特な經濟——國民經濟に向つた。彼等は現存の物質的狀態に對して、目的イデオロギ―と云ふものを作り上げた。かう云ふ學者の中で、歐米諸國民の幾多の人間が、技術を發達させる同じ様な能力、同じ様な智識、同じ様な精神的努力、心、感情生活等を持つて居ると云ふ事を考へたものは先づ一人も無い。各國の歴史から學んだ經驗、原料、技術的發明——さう云つたものが、これ等の何百萬の人々の自由に委されて居る。それではかう云ふ人々の幸福の爲に、心情や精神の豊富な寶で、大地が與へて呉れる食料や所有で、何をしたらいいのか？ 誰もかう云ふ問を發するものは無かつた。人間は事實何を追求して居るのか、誰もそれに就いては顧慮しなかつた。

大臣や議員として君臨して居る辯護人、銀行の頭取、大工業の巨頭等が、所有階級の爲の最大利得原則として作つた状態は、當然の事として甘受され、そして商品の動き、原料の利用、金錢の動き、外國爲替管理、統計表の數字の並べ方等に就いて、どの「説」が最も所有階級の最大利得に適合するか、と云ふ事が統計と「論理」を以て算出された。その結果は、民主主義國民の精神生活の悲惨な荒廢であつた。今日でも依然として英・佛の諸大學で續けられて居る此の西歐國民經濟の中に、新鮮な刺戟が持ち込まれたとすれば、それはドイツから出たものである。ドイツの凡ゆる國民經濟學教授、政治家、名士達は、既存思想とは違つた新しい物の考へ方をするには愚物であつた。併し突如として此の荒野の只中

に一つの「學説」が現はれた。そしてそれは純唯物的なものであつたのにも拘らず、所有階級に向はな
いで、大衆に向つて呼び掛け、彼等に毒を注いだ。これはマルキシズムである。

マルクスは人類幸福の基礎として、階級闘争の勝利、一七八九年革命の勝利階級たるブルジョアを含
む所謂特権階級に對するプロレタリア獨裁の宣言をした。彼は更に、歐米諸民族がその歴史的存在
の開始以來、その中に生きて來た社會、種族、國家、民族——彼の時代の言葉を籍りて言へば國民——
の覆滅を宣言し、國民に對する大衆のインタナショナルに依る勝利を要求した。各國のプロレタリア
ートは「生産手段の一般社會化」に依つて、經濟上の主權を手中に收め、「幸福」な身分になる、と云ふ
のである。マルキシズムは所有の無限と平等と云ふ信念から「餘剩價值」と云ふ結論をとり出す。マル
キシズムの教へる所に依れば、生産と現存財の利用に際して、勞働をしなければならぬ大衆より、所有
階級の方が利得を得る事が多い、と云ふ。

此の理論が大衆の中に持ち込まれた時、彼等はインタナショナルに對しても、階級闘争に對しても、
さう大した關心を持たなかつた。併し「餘剩價值」と云ふ事には夢中になつた。それは誰にも判り易い
「學説」であつた。大衆はマルキシズムを實際に徹底させる事に對して、常に不安と恐怖を感じて居た。
彼等はマルキシズムの指導者が革命演説を行ふと、共鳴の叫びをあげる事はあげたが、家に歸つて彼等
の誰もが考へた事は次の様であつた。

「俺の黄金が上り、物價が多少安くなつたら、それで俺にとつて『社會主義』の事成れり、と云ふのだ
らうか？」

此の大衆を指導する任に當つた者が、歐米民族のアリアン人種出(アリアン人はユダヤ人の對として用ひらる)の者だつたなら
ば、一人として餘剩價值の此の形式を發見する者はなかつたであらうし、又、インタナショナルや階級
闘争を宣言しようと考へた者も無かつたであらう。大地との接觸を一切離れ、あらゆる社會に没交渉
な、完全にインタナショナル的人間だけが、一七八九年のフランス革命(それは數千年世界に流布され
た共產主義的理論と、多くの曲解された哲學觀とが興へたものだ)に依つて興へられた材料から、苦勞
して漸くマルキシズムと云ふ建築物を造り上げる事が出來たのである。所有の門前に、反亂の喇叭を
吹奏する爲には、ユダヤ人が現はれる必要があつた。マルクスはあらゆる根據ない要素を集め、あらゆる
善い素質を破壊して眞の社會主義としたが、それは單に人間を物質から解放する事で、例へば人間を
所有から救ふと云ふわけには行かなかつた。一八六四年、ユダヤ人はマルキシズムの理論に基づいて第一
インタナショナルを創立し、ヨーロッパ各國の社會主義的各政黨がこれに参加した、公使はユダヤ人が
なつた。

第一インタナショナルが解散すると、一八八九年に第二インタナショナルが創立された。第二インタナ
ショナルには理論より更に實際が加味され、その主要要求は八時間勞働制であつた。そしてその示威運

動はメーデー祭であつた。第二インタナショナルはその多くの要求に依つて、理論的にはマルクスより更に眞の社會主義に近づいた。併しユダヤ人が會堂でタルムト(ユダヤ教法典)を講ずる様に、毎日マルクスの著書に、新解釋を加へる社會主義者の專制下に生活が行はれ、第二インタナショナルの官僚主義は、殆どユダヤ主義に依つて調整された。各黨派には、屢々分立の運動はあつても、何と言つてもユダヤ人が勢力を持つて居て、彼等は急進派側にも修正社會主義者側にも屬して居た。ヨーロッパ各國の社會主義政黨が黨會議を催せば、ユダヤ人がその演壇に登りヨーロッパ各首都に於ける第二インタナショナルの會合に際しては、ユダヤ人がその議長席を占めた。平民階級出身の少數社會民主黨員の健全な本能はこれに反抗し、二三のユダヤ人は時に舞臺裏に置かれた。ユダヤ人問題は略々一八九五年以來、あらゆる社會主義的組織の中で、重大な内部的討議の對象になつた。併しユダヤ人は一九一四年に至る迄、その地位を固執した。大戰勃發直後、彼等は社會主義政黨や全第二インタナショナルに於て、早くもその勢力を失ひ、彼等の意見は通らないで、戦争クレデットは承認されたのである。

ユダヤ人の一部は中立國に逃れ、其處から彼等のマルクス主義的煽動を續けた。又他の一部は交戦國に踏み止まつて、反對黨設立の爲に社會民主黨を切り崩して行つた。ヨーロッパの義務人は、インタナショナル及びマルクスの階級闘争を覆したが、マルキストユダヤ人は、既に一九一五年には此の義務人に對する闘争を開始した。彼等は端西のツィムメルワルドに來つて會議を催した。参加者は主としてユ

ダヤ人辯護人及び生活破産者であつた。此の會議からはあらゆる交戦國へ、否軍隊へ迄、宣傳文書が飛び、それに依つて彼等に反亂暴動を説き、戦争終結に對する憧憬を弄び、飢餓に瀕した人々の神經を刺戟した。併しその當時は、未だ民主主義諸國の指導者と手を握つてやつたものではなかつた。戦後になつて聞くと依ると、此の煽動はドイツ國內よりも佛軍の間に、遂に廣く傳播されたと云ふ事で、暴動は辛じて鎮壓されて居た。一九一七年「ツィムメルワルド會議」はその第二回の會議をストックホルムで開催した。その間にドイツでは自主的な人々が社會民主主義から離脱し、英佛當局は煽動を軍隊及び國民から再び撃退した。

さてストックホルムでは、既に或る程度英佛の責任ある大臣やノースクリッフの宣傳と氣脈を通じて、反獨的氣運ばかりが見られた。ストックホルムへ行つたドイツ獨立社會民主黨の代表者は、彼等が國家を裏切る行爲をやつた事に氣がついた。彼等こそツィルヘルムスハーフェンに於ける水夫暴動の發頭人だつたのである。ヨーロッパ各國に於ける窮狀が大きくなればなる程、擡頭し出したボルシェビズムに對する抵抗は益々弱くなつた。此の煽動は合衆國では殊ど効果無しで終つたが、それは軍需工業で莫大な利得が轉げ込み、物質的窮迫が抑制されたからである。英國では少數の理論家がボルシェビズム思想を弄したが、大衆はこれを斥け、フランスでは國家が勝利を得た。ドイツこそ歐米諸國民の中で、此のボルシェビズム進撃の唯一の犠牲者であつた。一方ユダヤ人はその東部邊疆に於て、ボルシェビズム

勢力の國家的組織に成功したのである。

ロシア草原の人々

今日ボルシェビズムは全ロシアに指令して居る。即ち一億六千六百萬の人間を意の儘にして居るわけであるが、その中の一億二千八百萬は、何等の緩衝地帯なく舊ヨーロッパ・ロシアの地域に住んで居るのである。又ボルシェビズムは莫大な地下富源、二千三百三十萬平方料の地域に互る耕地の富を自由にして居る。此のロシアは如何にしてボルシェビズムに侵略されたのであらう？

我々が往古の歴史的發展から知つて居るところに依れば、東スラブ族は十世紀にドニエプル河沿岸に住み、此の國の崩壊後北東の大ステップ地方——今日のロシア諸河地方——に移住した。彼等は此の地方に住んで、當時の文化世界から殆ど完全に隔絶されて居た。廣大な草原地帯の東部及び東南部はアジアで、人跡未踏の原始林地帯であつた。北部は氷に閉され、西部にはドイツ人、リトアニア人、ポーランド人が住んで居た。南部は一種のステップで、此の草原を通つて、遊牧の民がアジアの高山地方からヨーロッパへ進出したのである。

此の草原地帯に住む東スラブ族は、モスコイ國家が次第に發展するにつれて、當然安全な交通路と港を求めようと努力したのである。この努力は今日に至る迄ロシア人の本質にその名残を止めて居る。紀

元一千年頃、東スラブ族はビザンチンのキリスト教を引き繼いで、かくして港灣及び交通路に對する努力は南方へ、ダーダネルスへ、コンスタンチノープルへ向けられた。此の努力は時に——ビーター大帝の時など——他の地方、例へば白海やバルチック海等にも向けられた。併し黒海沿岸と、遙かの地中海沿岸とは絶えずロシア民族の魅力であつた。確固たる目的を持つた政治意思は此の民族に特有のものでなく、それは陸軍と政府によつて初めて與へられた。東スラブ族は二百年間も韃靼人の治下にあり、その間韃靼人から何等の思想的影響を受けなかつた。寧ろ此の時代にモスコイ政府の主權勢威が、特に確立されたのであるが、それはモスコイの國君が韃靼人の總督であり、彼等の力を行政組織に利用する事が出来たからである。だから傳統的に時代から時代へと、生き永らへて行くロシア草原地帯の人々の意識にとつては、今日に至る迄、モスコイは權力の中心地なのである。

トルコ人が一四六一年コンスタンチノープルを占據してから、正教派教會——今日の所謂ギリシア・カトリック教會——の牧師はモスコイへ赴き、ロシア草原地方に一宗教を持つて來たが、それに神祕説と信仰に依つて、元來物質的本能に基づいて地中海方面に出口を求めんとするロシア人の努力を支持して居る。正教派教會の牧師は、その專制的意思をロシア皇帝の專制主義説と結びつけた。教會と皇帝は同一である云ふ觀念は、數百年を通じてロシア人の國民的信仰の内容であつた。

ロシア國民は殆ど千年の間ヨーロッパから引き籠つた状態を續け、歴史は黙々としてその側を通り

過ぎた。教會は國民の智識を狹隘な境界内に閉ぢこめ、精神的大運動は發展する事が出来なかつた。ヨーロッパの技能、智識をロシア國民に採り入れる事は、二三の偉大な皇帝に任せられて居ただけである。併し彼等の事業には常にロシア人の本性たる不斷の平等と云ふ、恐ろしい力が重ね加へられて居たのである。

十九世紀に至つて、初めて「改革」時代が始つた。フランスに進軍した皇帝軍の將校がその先陣を承はつたのであつて、彼等は西ヨーロッパを發見した。彼等はロシア、ドイツ、フランス等の農民生活の比較をやり、その實際軍務を通じて西歐司法制度、市政等を學んだ。かくてロシアには急激な發展が始つたが、ヨーロッパ諸國の方ではそれに就いて少しも氣がつかなかつた。此の發展は、次の様な一様のテンポで進んで行つた。ヨーロッパ思想が採用される、一人の人間が他の世界から全く隔絶されて、書齋に閉ぢ籠つてそれを充分に消化する。それは或はロシアの二三の都市にある討論會などで加工される。と云ふ様な工合で、各思想は直ちに過激化する。そこからツァールの権力に對する反抗が生れ、革命計畫が目論まれる。國家がこれに對抗し、過激主義は更に成長する。遂には虛無主義が生れ、秘密結社が作られて、大臣暗殺の準備がされる。ポーランドの如く、往々にして特にヨーロッパの激しい影響下に立つロシアの或る地方では、反帝權の地方的反亂が起るが、これさへも鎮壓される。併し帝政の専制主義の方策は新しい反亂を惹起せしめる。

一八六一年以來、「農民解放」が始まるが、それは改革と云ふ範圍を出ない。實際には農民は解放されず、經濟的意思や精神的努力と云ふ點では、ミア(ロシアの村)と云ふ共同體及び組合に結びつけられた、農民に對する地主の権力を奪つたのに過ぎない。併しかうして農民を地主から解放した事に伴つて、やがてロシアに資本主義經濟が入つて来る。農民は身代金を出して自由にならなければならないから、貴族は金を手に入れる。又貴族は農民が提供せざるを得ない耕地に對して、俄かに色々と策を講じなければならなくなる。耕地の收穫は賣る必要が起り、その金には利子を生まさうとする。ロシアの貴族は對外穀物經濟を始めるが、やがて其處から信用經濟が生れる。かくて農民は、農業に關しては毫も理解を持たぬ貴族を通じて、間接に、資本主義經濟過程の連鎖の中に嵌め込まれるが、その體驗するところは唯資本主義經濟の不利な點ばかりである。抑々ロシアに於て知り得る限りの利益と云ふ利益は、貴族がその懐に收める。その上司法制度、市制、行政制度等の未完成な改革が行はれる。一八七四年には、全國民の兵役義務が實施され、農民は五ヶ年間も町へ、或は少くとも新しい社會へ出て、五百年前のロシア農民が知らなかつたものを見る。併しこれと同時に都會人が田舎にやつて来る。都會で秘密結社の一員だつた者は、屢々帝權の干渉を受けて、地方小都市や田舎に追放される。かうして流刑者は金を携へて來り、都會の服装を見せる。彼等がその頭の中に入れて來る過激思想は、ヨーロッパ哲學の片鱗を曲解して組立てたものである。かくてその昔泰平無事な生活をして居たロシア人の中に、民主主義ヨ

ロシアから出た思想の資が運び込まれるが、ヨーロッパ大衆の健全な本能は傳達されない。ロシア人はその採擇するものを、書物から読みとるのであるが、民主主義諸國の人々は、彼等の健全な本能に就いては、決して本を書いた事はない。書物は大衆の埒外に生活する文士のものであつた。ロシア人は學問的物的書物に對してよりも、煽動的文書に對して遙かに敬意を拂つたのであつて、かうした文書は此の世紀の變り目頃には、大部分既に共產主義的思想に傾いて居た。

ロシア政府は権力で思想を彈壓し、極力、經濟干渉を行はなければならなかつた。貴族は金を湯水の如く使ひ、耕地を破壊した。國家は補助を要したから、貴族と同様にヨーロッパからクレヂットを受け、併しその代りに利息を拂ひ返さなければならなかつた。國家は税を得る爲に、經濟を國家に縛りつけて居なければならなかつた。又、ロシア國民の扶養を一手に引き受けて居る大衆から、その穀物を取り上げて外國に賣り、それで金を作らなければならなかつた。金融逼迫がひどくなればなる程、大衆扶養の必要は益々顧みられなくなつた。鐵道が建設されれば、それは交通上の必要の爲ではなく、國家が最も都合よく、最も安價に穀物を外國に輸出せんとする爲であつた。

智識階級が益々過激化し、國家に對する要求が益々多くなればなる程、政治的課題に益々大きくなり、改革毎に巨費を費し、行政の爲に収入増加が必要になつた。かてゝ加へて、帝政が十九世紀後半及びその後に行つた對日戰の費用が重つた。借款はパリで出来るだけだつた。ドイツは耳を藉さなかつた

からである。そして借款の爲にパリに來た帝政政府の委員は、フランスの思想をロシアに持ち歸つた。此の思想は更に過激運動を呼び、かくて空饑又空饑の永遠の循環であつた。遂に前世紀の末、工業創立時代がロシアを訪れて、資本主義の凡ゆる缺陷を曝露し、資本主義の利益は唯一つも現はさなかつた。かくて石炭、鐵等の鑛物採掘が始められたばかりの地方では、早くも都市大衆の完全なプロレタリアート化が出来上つた。工場は亂立し、何等の經濟的熟慮も拂はれず、農民は田舎から都會に吸收された。彼等は事業が振はなくなれば餓死するに任せられた。ロシアに於ける最初の社會民主主義的制度は、一八九五年に組織され、一九〇四年には不幸な對日戰が行はれた。その翌年ロシア最初のマルクス主義的革命が起つたのである。

光は東方より

マルキシズムを大衆に滲透させるには、たつぷり二十年を要したの事であつた。何故ならば、マルキシズムは一八八三年、ブレチャノフに依つて、ロシア智識階級の間で齎されたものだからである。一八八五年には、最初のマルキスト演説家がロシアの都市に現はれた。マルキシズム及び共產主義の煽動者——彼等は最初ロシア田の者は一人もなく、外國から派遣された者であり、而も多くはヨーロッパの社會主義政黨及び第一第二インターナショナルのユダヤ人の代表者であつた——はロシアに來て意思を持たない大

衆を見出した。彼等は大衆の窮乏の度合と、ロシア教會の神秘説を利用する煽動者の夫々の能力に應じて、民衆を思ふが儘にする事が出来た。智識階級は分裂し、その一部は、金、株券國債等の、賣物になる有價物を手に入れる爲に、自爲の富、即ち貴族の土地、後には原料をも利用した。ロシアに居ては、生活にも衣服にも大した金は要らなかつたが、國境を越えれば、此の同じ金で、リウエラ、バーデン、デン、或はその他の歡樂場の賭博宿で、嘗て見た事も無い、すばらしい生活が出来たのだつた。そして歡樂では、西洋世界のあらゆる所有人を凌駕する事が出来たのだ。金を出せば、その罪をロシア教會の神秘的な香煙の中に消滅させる事が出来ると云ふ樂しみが、依然としてロシアに残つて居た。さて智識階級の他の一部は、虚無主義理論の新しい神秘説の中に隠れたが、ユダヤ人は此處でも亦その仕事を始めた。千年前ビザンツからロシアに渡つて、廣い草原地帯の中に、殆ど外部からの影響もなく保存されて來た精神——智識階級の三つのグループには總て此の精神が滲透して居た。此の精神から「汎スラブ主義」が生れたのであるが、それはロシア人が、いはゞ混亂せる西洋を略取し、西洋に「純ロシア魂」を移してやると云ふ運命を、委託された者であると云ふ説であつた。

我々はキリスト教の發展から出發しなければ、ボルシェビズムの危険と、大戰前既に東歐に感じられた、ヨーロッパにとつての脅威を斷定する事は出来ない。隣人愛の純粹な思想、神に對する信仰、即ち人間に於ける義務に對する信念——かう云つたものは何千年もの間我々の心に傳へられて來たが、それ

に就いて書かれた教説は、一般人間的な根源を持たないものである。それは未だに残つて居る最初の記述の中にあり、當時の「既知」世界の人間の間には矛盾に曖昧にされて、既に地上のキリスト變容説話の中にもあるものなのだ。それは或は地中海の人間であり、或は北歐、中歐の山嶽、森林地方の間——文化の劃然たる限界の人間であつた。ギリシヤ人及びローマ人は地中海的人間ではなく、彼等の文化的事蹟はアリアン人的仕事である。此れに對して、ギリシヤ文化が始つて以來ローマの歴史を一貫して、東地中海の人間の西方への努力——西方に抗せんとする努力があつた。「光は東方より」——小アジア及びギリシヤ海岸から、西洋に向つて説かれた常套語は、數百年もかう叫んだのである。

此の東地中海の人間は、フェニキヤ人的、セム人的本質を豊かに持つて居た。近東、即ちユーフラテス、チグリス河畔及びエチオプトの大植民地が瓦解してから、後に残つた人々は、例へばカルタゴ其の他の地中海沿岸海港の人々の様に、生存の内容を、他國民の財貨獲得の中に求め、それで商業をしようとした。彼等は可耕地の擴張、即ち侵略に依つてその生活を豊かにしようとしなかつた。又彼等は、藝術作品に依つて生存を豊かなものにする事、神々を敬仰する事、大建築物を築造して彼等の信仰を充溢させる事等は殆ど關知しなかつた。塑像を作り、柱を彫刻する爲に大理石を運ぶ事もなく、寧ろ塑像を買ひ、より高い利得を得て他の點でそれを償はうとした。彼等は今日のスペイン海岸、ゴール(フランスの古名)の大西洋海岸の住民、否バルチック海岸の住民からさへも、珍しい礦物や手工品を手に入れ、それ等

(例へば琥珀)を東洋で他の品物と交換して利益を得た。
此の商人達がキリスト教教義の傳播者となり、キリスト教は彼等に依つて北國未開人に對置せしめられた。東地中海の此の商人精神は、かのビザンツ(コンスタンチノープル)を作つたキリスト教の形となつて、最も強烈に現はれたのである。

民族移動のゲルマン人種——それは掠奪慾から起つたものではなく、東地中海の上述の人々の南部及び東南部への進出を防ぐ爲に、突如として起つたものである——が、ビザンツのキリスト教よりも、寧ろローマ及び地中海のキリスト教に多く接觸する事が出来た、と云ふ事を、歴史が我々に教へて居る。ゲルマン族はビザンツの牧師の勢力範圍で吸収されてしまひ、彼等は地中海の他地方で文化の發展に關與した。ビザンツのキリスト教は他く迄純東方的なものとして、即ち殆どユダヤ人的なものとして残つた。併し此の「キリスト教」はモスコに至り、ロシア草原地帯民族の、地中海進出の自然的努力を育てた。それは海港を得んとする物質的慾望、ステップの隔離状態から解放されたいと云ふ物質的慾望ばかりではなく、憎惡に基づいた、神秘的、攻撃的な宗教だつたのである。

此のキリスト教帝國の牧師官僚主義は、モスコに向ふアジア遊牧民の進出にあつて退き、其處で同じ様な教會建築、同じ様な牧師階級層、人間感化の同じ様な技巧を携へて、それから先何千年かにわたつて根を下した。そして此れ等の牧師は、此の地の愚かな住民に、近東地方の壯麗な教會や地中海岸の

結構な宮に對する憧憬を齎した。働くばかりで祈る事を知らぬヨーロッパ人に對して、彼等は隔壁を築いたのである。

ジャンコ・ジャンフがその著「反ヨーロッパ暴動」の中で闡明して居る様に、此處に汎スラブ主義の核心がある。ピーター大帝を始めとし、反墮政策を持って、コンスタンチノープル征略をやつたモスコ及びベテルブルグの各皇帝は、此の神祕教を手にして活動した。ロシア人の權力意思は、實はユダヤ人的本質に影響された一宗教だつたのである。

ロシア帝政がアジアの原始林を侵略してウラヂオストク迄進出し、白海やバルチック海を窺つたのは、常に外部からの影響で、止むを得ずコンスタンチノープルから轉じたのに過ぎなかつた。邊境國(フィンランド、エストニア、リトニア等)シベリア蒙古、ヘルシア等が憧憬の的となつた事は斷じてない。憧憬の的は依然としてコンスタンチノープル及び地中海への近道であつた。又帝政と教會の緊密な結合に當つて、正統派教會の權力擴張は、常に帝政政策の目標であつた。

それ故に歐洲智識及び歐洲制度のロシア侵入と同時に、一八五六年、ヨーロッパ列強がパリ條約の中で、此の宗教政策的要求を放棄する様に、ロシアに強制した時、ロシア帝政が嘗めなければならなかつた敗北は残酷なものであつた。此の條約に於て、英佛、墮普、ロシア及び新興イタリアは、政治的には依然としてトルコの宗主権の下にあつたバルカンの正統教會保護に對して、共同保障を引き受けたので

ある。

併し汎スラヴ主義は、既に一八四八年、ブラーグに於ける第一回にスラヴ民族會議に於て、セルビア、ハンガリー、オースタリー、ブルガリア、ボスニア、ヘルツェゴビナ等の三百四十名の代表が一聯合を作つた事に依つて、新しい營養と方向を得たのであつた。此の聯合は表面上ヘルデルの國粹思想に影響されて居たのであるが、背後にはやはり宗教的狂信があつた。皇帝及び政府の政策は列強と條約を結び、バルカンに於ける正教教會の保護を放棄してしまつた。汎スラヴ主義の非公式委員は、民衆の間に促進されて居る運動に依つて、バルカンに於ける政治的勢力のみならず、宗教的強行政策の勢力をも取り戻さうと努力した。ロシアが英國に向ふ事が出来なかつたのは、英國がロシアにコンスタンチノーブルを與へたがらず、又汎スラヴ主義の中にある宗教的権力を漸々感づいて居たからである。こんなわけで、ロシアは先づオースタリーに向つた。オースタリーはハプスブルグ家の國で、既に當時から内部的に弱體化し、西洋の第一防禦線としては突破出来るものであつた。恰もビザンチン教會や東地中海のキリスト教が、紀元三、四世紀のゲルマン人に向つた場合の様に、それは西洋に對する優越感と憎惡の本能に横溢した征旅であつた。かくてロシアの大公達が、オースタリーに對してバルカンで行つた政策は、ビザンチン教會が造つたロシア人の本質と、密接に結びつけられる事になつた。

此れで舊ロシアに於ける思想及び闘争の怒號狂亂状態が判るであらうか？ 上述の大公達の中には、

依然として教會の神祕説に支配されつゝも、時にはヨーロッパの方に眼を向け、金利を欲するインテリもあつた。一方ロシア農民は此の神祕教を推進力とした政策の目的物として、否、更に虚無的狂亂の對象として生活して居た。ロシアにとつては二つの道があるばかりであつた。その一つは、西洋と接觸する事に依つて、全ロシア國民の間に、ビザンチン教會の神祕教から解放された、全く独自の生活を形式すべき完全な變化、（それは十年の月日では出来ず、恐らく百年にして成就されるであらう）が起る事であり、他は知識階級が西洋模倣に陥る事であつた。大衆は他く迄此の神祕教の中に促され、従つて彼等はあらゆる運動——それは彼等の中に、兎に角此の神祕教と關聯せしめられた思想を持ち込んだのだが——の犠牲とならざるを得なかつた。

先づ最初に、知識階級の模倣慾を促進する爲のあらゆる事が起つた。フランスはクレヂットを與へ、英國はオースタリー及びドイツに向つて汎スラヴ主義を利用し、此の協定の背後に於て、その地中海に於ける主權——とりもなほさずヨーロッパのみならず全世界に於ける主權——を強化したのである。ドイツはビスマルク政策の意味で、ロシアに對して永續的平和を欲して居たが、併せてそのロシアを理解して居なかつた南方に向ふロシアの神祕教に就いて、ドイツは知るところが少かつた。英・露・佛間の協約は、ドイツに對する汎スラヴ主義の積極的な利用だつたのである。

眼を西洋に向けた知識階級が、遂に帝政と結合して、クレヂットと所有意思の有に歸した時代、正し

此の時代に、知識階級の他の一部は、例の神祕教を超越して、マルキシズムと（殆ど數ヶ月に限られた迅速な發展によつては）同時に共產主義の影響を蒙つた。それは濼給の官吏と、精神的精進が少しも充足されない學生とであつた。かう云ふ知識階級の中には、ユダヤ人、殊に渡り者のユダヤ人の子孫が居て、彼等は幾分金まはり良かったものだから、その息子達に學問をさせる事が出来たのである。かう云ふユダヤ人の子弟はタルムート（ユダヤ教法典）學夜を出ると直ぐ大學に入學した。彼等はタルムートを色々と分析する様になつて居たが、それと同じ様に、彼等に傳へられたヨーロッパの智識を「分析破壊」しようとした。彼等はそのユダヤ人としての本質に、特に迎合した「理論」に出會つた。マルキシズム及び所有説は、志ある者には所有獲得の權利あり、と云ふ事を述べた。ロシアの生活法則に依れば、ギリシヤ舊教僧侶の息子、小官吏の息子等は、貴族及び政府高官から、離間されて居た。其處には鬭争相手にしなければならぬ階級があつたのである。併し上述の學生も、大學で此れ等の特權階級の子息達と一時は共同生活をして居た。彼等が其々に消化した智識は、ヨーロッパの場合と違つて、特權階級の者に對してはその權利の主義強化と云ふ意味では作用せず、又非特權階級の者に對しては、過激思想の強化と云ふ意味では作用しなかつた。何故ならば、特權階級も非特權階級も——非特權階級中のユダヤ人も——同じ様にロシア教會の神祕教と結合して居たからである。

それ故に各大學に於ける特權階級の子息達は、ロシア人の本質を問題にせず、非特權階級中の學生討

論會に出席し、彼等と思想を交換した。そしてその結果過激化せられた。彼等はそのロシア人的本質に従つて、貴族階級或は高官官吏層から離脱したが、それはヨーロッパで起り得る場合より、遙に容易なものであつた。彼等はマルキスト、共產主義者、無政府主義者等の俱樂部へ入つたのである。

ロシア人はヨーロッパ人とは全然違つて、完全にその思惟——果しない草原地帯の住民にふさはしく、いつ迄もいつ迄も同じ事を繰り返して考へこむ——に没入する事が出来、新らしい環境に全く同化して、環境のなすがまゝになる對象になる。革命的な、無政府的なロシア人の此の結合の中で、只ユダヤ人だけは依然として元のまゝであつた。彼等は此處でも亦その仕事をやつた。上流階級崩れのロシア青年に、煽動と暗殺を仕込む事を忘れなかつたのである。彼等はかかる青年達を充分に利用して、國家の行政に關する諜報を集め、ロシア貴族、農業、獲得すべき原料、等に就いての智識を得た。

かくて「革命家以外の何者でもない」階級が出来たが、國家は此れに對して只權力を以て拮抗する事が出来るだけであつた。ところで國家の官吏が、革命的グループ出のかう云ふユダヤ人、男子も婦人も、男學生も女學生も、總てシベリアに追放すると、其處で事實上彼等は新しい討論會を作つたのに過ぎなかつた。

此の土地は追放者に、必要なものを與へた。勞働は必要でなかつた。草原地帯は更に廣大で、思惟は無限に、否、無に歸して行つた。生活の限界は消失した。此處では國家の威力は微々たるもので、國家

の限界は容易に克服され、逃亡は簡単であつた。ユダヤ人のお蔭で、逃亡者は誰でも諸外國の社會主義團體に入れて貰へた。彼等は第二インタナショナルから學費の支辨を受けて、チュリッヒやジュネーブで學んだ。此處には「實際運動家」、即ちピストルを發射した英雄とか、爆彈を投げた奴とかが亡命して居た。レーニンもトロツキも此處で成長したのである。ヨーロッパの社會民主主義的グループは、チュリッヒとジュネーブから過激化され、「マルクス主義革命の英雄」に就いての報道は、此處からヨーロッパの労働大衆に傳へられた。第二インタナショナルの指導者はチュリッヒやジュネーブに演説家を集め、ヨーロッパの賃銀要求労働者や罷業労働者に彼等を送つた。レーニンは既に一八九六年、彼が未だロシアで下獄して居た時、ヨーロッパに於ける此の唯物的大衆を煽動する爲の無味乾燥な形式を次の様な文章で書いて居る。

(132)

「資本に依る労働の搾取を絶滅するには、唯一つの手段があるのみである。即ち、労働手段に於ける私有財産の排除、あらゆる工場經營、鑛山及びかかるあらゆる土地の膨大財産を、全社會の所有に移す事、労働者自身に依つて管理された共同の社會的生産此れがさうである」云々。

此れはボルシェビズム獨裁の實地に、適用を受けた餘剩價値の形式である。

舊ロシアに對する此のマルクス主義的煽動使喚の反應は大きかつた。資本主義の西洋に類つて居た智識階級は、此れに對して防禦策を講じ、國家政策を西洋民主主義に適應させようとした。英

國やフランスで、あの危険極まる暗黒界が、ロシア程ひどく幅をきかさないのは、只此れ等の國々が民主主義的國會を持つて居るからだ——ロシアの人々はいかう云ふ誤謬にとらはれて居た。そして英・佛の實際には健全な大衆の思想に就いては、何等知るところがなかつた。そしてロシアに於ける過激的共產主義組織の進展は著しくなつた。

既に一九〇三年、マルキシストの分裂が起つた。その一派はボルシェビキで、此の派は、欲する所の「より多い」者、即ち過激派で、彼等は完全な革命を行つた。又他の一派はメンシェビキで、欲する所の「より少ない」者、即ちブルジョア民主主義を、社會民主主義に發展させようと努力した者達である。

此の他にロシアでは尚、第三のグループとして無政府主義者が現はれ、彼等は絶えず左翼からボルシェビキを驅り立て、過激主義に赴かせた。舊ロシア國會——國會模倣に對する貧弱な試み——の自由黨、右翼黨等は、單に過渡期にとつて意味を持つて居たのに過ぎない。

(133)

革命黨支持の大衆は農民政策を提供した。當局はミル(前出ロシアの村岡(有名詞ではない))の農民に對して、公平財産の代りに私有財産の可能性を與へる事に依つて、四百萬乃至五百萬の農民を路頭に迷はせた。そこで彼等は潮の如く都市に流れ込み、工業労働者に成らうとした。不作と飢饉とは過激主義を激化し、やがて、精神生活は完全に革命的無政府的煽動に支配されるに至つた。

大戰勃發當時、ロシアは、人類の歴史上嘗て一國家が經驗した最も不平な状態にあつた。即ち最早皇

帝の國でもなかつたし、民主主義國でもなかつたのである。ロシア人の特質に適する様な、健全な改革の基礎は築いたくもなかつた。外債はあるし、経済的には外國に依存し、土地の收獲と原料を利用する事は未だ國民に許されて居なかつた。精神生活にはロシア人何千年來の神祕説が混入され、アリアン人に對する東地中海の憎悪でいつばいになつて居た。或は既にボルシェビズムが存在して居たのである。教會は最早都會の大衆に對して何等の勢力なく、農民は解放されたとは云へ、窮乏して居た。又、國家は神祕的信仰達成の慾望と、物質的所有の慾望の虜になつて居た。外部から少しでも衝撃を與へれば、それは帝政ロシアを瓦解させるに違ひなかつた。此の紛亂をよく識つて居た少數の者の唯一の期待はロシア大衆が、西部戦線で英佛が勝利を得る迄、ドイツ軍をドイツ領内にしつかり引き留めて置く、と云ふ事であつた。さうすれば突如として幸福が西洋から、そして民主主義からやつて來る事になる、と云ふのであつた。併し此の期待は東プロシアの戦場で粉碎され、ロシア軍が潮の如く國境内に退いた時、帝政は既に終りを告げて居た。併し帝政からボルシェビズムに移る間には、何等の形成的な政治力もロシアに存在しなかつた。東方から濟度の光は來ないで、己が肉を引き裂く開が來たのである。

レーニンとトロツキー

一九一七年の初め、ドイツ最高統帥部からロシアへの通過を許された封印付の車に乗つて、スイスカ

らロシアボルシェビスト黨の勢力がやつて來た。此れより先、レーニンは獄中生活及び追放者としての一定期のシベリヤ生活を終つてから、スイスをそのアヂトに選んだ。彼はデュネロフでユダヤ人の一團を身近く集め、彼等は共產主義國家の實際的統治に就いて、毎夜カフェーのテーブルを圍んで、その理論を討議した。トロツキーはこのグループの一員だつたのである。一九一五年、スイスの急進共產グループは、ベルンで會議を催したが、當時交戦國の代表者は未だ此れに参加しなかつた。一九一七年に、ツィムメルワルト會議の核心をなした者は、此のボルシェビストの常客席仲間のメムバードで、肉體的には充分な休息をとり、戦争の體驗は少しも嘗めた事がなく、只理論一點張りの連中であつた。レーニンとトロツキーは、其處でリープクネヒトや交戦國から來たその他の者と相會した。かくてユダヤ人の政治化されたタルムート學者及び無政府主義者のインタナショナルを造るべき礎石が置かれたのである。

その日常の政治的思惟の練習と、革命的計畫との默的なエネルギーのお蔭で、次第に此の歐洲ボルシェビズム細胞の指導者になつたレーニンとトロツキーとの間には、常に或る對照があつた。此の對象はソヴィエトロシアに於けるボルシェビズムの歴史を一貫して、全く色々と違つた形をとり、又様々な段階を経て發展した。

レーニンは純然たる理論家であつた。彼はマルクス主義と云ふ文字や解釋に束縛され、ボルシェビズムの一種の法王として、數多くの著述の中で、此の解釋をマルクスの個々の命題に與へたのであつた。

それ故に後になつても、ボルシェビズムロシアの闘争的グループは、常にレーニンを引合ひに出した。彼の理論と解釋とは決して一義的ではなかつた。レーニンも一つの問題の各理論的説明、實際的説明の形態に従つて、彼等に見解を述べたが、それは彼を闘争の勝者にさせたところで、原則的に言つて、ボルシェビズムはレーニンにとつて正しいものであつた。だから彼は此れをソヴィエトロシアのみならず、實際全世界に實現したいと思つたのである。彼がロシアに來た當初は、幸じて自分と云ふものを通す事が出来た。彼はドイツ最高統帥部の、封印した車に乗つたので、ボルシェビストの同志に對してはまづい和解をやつてしまつた。

ボルシェビズム革命誘動當初の数ヶ月の間、トロツキーはレーニンに比べて遙に大衆に近づいて居た。彼は大戰中屢々ジュネーブからフランスに渡り、フランス外務省關係で、フリーモーンの影響を受けて居る官吏や、ユダヤ人銀行家に對して、色々の個人關係を持つて居た結果、旅券も手に入れたし、通行權も得た。又、ロシア皇帝が未だ「フランスの忠實なる同盟者」であつた時分、パリに於て反皇帝工作をも敢てする事が出来たのであるが、その手段を彼はその時々から採つた。例へばロシア帝國の國力持續問題が、フランスでだん／＼疑はれて來ると、彼は皇帝をその責任者にして、彼自身のボルシェビズムの目的の爲、宣傳にフランスの社會主義者を巻き込んだ。トロツキーは大戰中フランスから合衆國へも行き、其處でボルシェビズムの宣傳をしようとした。彼はロシアに於ける事態の進展に驚

き、イギリス、スエーデンを経てペテルブルグに歸り、其處で直ちに實際の革命工作に取り掛つた。マルクスを解釋する事はトロツキーの仕事ではなかつた。彼の得意とした事は、徒黨を集め、行列を組織し、巧みな演説で大衆を釣る事であつた。

ケレンスキーを没落させたのはレーニンではなくてトロツキーである。一九一七年七月の第一反亂は失敗し、ボルシェビズム革命の、最も小心な文學者居候の一人たるシノブエフ（彼は既にゲーペーウの綾刑吏に片付けられて居るが）とレーニンはフィンランドに逃れ、其處の荒地に身を隠した。トロツキーはペテルブルグに止つた。十月革命はトロツキー一人の仕事で、而も彼はタルブルグ軍の間に巧みな煽動をして、此れをやつたのである。彼は軍隊に向つて、諸君は戦線へ行つてはならぬと説き、彼等に永遠の平和を約した。トロツキーは革命的煽動の全表面に互つて活動し、そのお蔭で効果を收めた。レーニンは十月革命を躊躇したのであるが、彼が眼前に見出した事實は、彼にとつて既にボルシェビズムの始りから、マルクスの教科書と一致しなかつたのである。彼は倒れたがトロツキーは彼よりもよい直覺を持つて居た。

十月革命は當初廣大なロシアでは何等の抵抗も發見せず、官僚政治の全機構は此れについて行つた。皇帝はケレンスキーの爲に廢せられた瞬間、聖者の外觀を失つた。と云ふのは、下級牧師の一部がボルシェビズムの極り文句を眞似して喋り出したので、國民の間にあつた教會と皇帝を結ぶ縁が斷ち切ら

れたからである。プロレタリアートには將來いゝ環境が訪れるやうになると云ふのだから、彼等も亦恐らく正教會の官僚政治の中で、此れに關與する所があつたのである。機械的機能ばかりをめざして居た統治機構は、此の廣大なロシア全國にわたつて利用される事が出来たのである。

急進マルキシズムの理論を忠實に遵奉して行はれた政治は、次の様な規定を持つ事となつた。即ち、所得、利得、利息、賃銀、収益等の廢棄、がそれである。「收用者の收用」が實施され、貴族、僧侶、市民等は「清算」された。此れに對する抵抗は振はず、反抗が試みられればチエーカ(ソグイェトの)の死刑執行人が活動した。ボルシェビストは誰でも、マルクスの理論と、それに就いてのレーニンの解釋の中に記されて居る事を實行する権利を持つて居た。併し其處にはマルキシズム適用から来る結果もあつて、それはボルシェビズム煽動家の手に餘つた唯一つの事實である。第四階級即ちプロレタリアートは、マルクスが要求した共產主義經濟の、あらゆる基礎が記されて居る事を知れば、忽ち感奮蹶起し、善良な意思に依つて、彼等自身の幸福と利得を得べき労働に就くであらう。——マルクスは此の様に説いた。「收用者」はその所有を「收用」に委ねなければならなかつた。マルクスに依れば、かくて物質的生存の無限の幸福が始る筈であつた。

此の理論はロシアに於けるボルシェビズム支配が始まると忽ち役に立たなくなつた。持たざる者は持たんとし、持てる者は絶體に失ふ事を欲しなかつた。此の良き意思の理論は、社會の上層でも、中層でも、下層に於ても教を顯はさなかつたのである。かくて工業、農民階級、國家行政、市町村行政に關する全マルキシズム理論は直ちに崩壊し、レーニンに依るマルキシズム解釋は總て無意味な事が證明された。マルクスに依れば、實に勞せずして産をなした當ての收用者の所有が、今や人々に與へられる事になつたが、彼等はさうなると自發的に労働しようと思へなくなつた。大衆の解釋に従へば、此の所有は永遠の幸福の爲ばかりでなく、永遠の怠惰の爲の基礎だつたのである。

クレムリンの獨裁者は、初め何處迄も盲目だつた。彼等はその教科書と註解を信用し、マルキシズムが最初の決定的瞬間の決定點で、完全に崩壊した事を、恐らく數ヶ月にわたつて全く理解しなかつたもの様である。ボルシェビズム革命のお蔭で與へられた土地、原料、工場、官廳、教會所有地、公園、娛樂機關等の莫大な所有を大衆はどうしたらよいか手の下し様がない、と云ふ事を、クレムリンの獨裁者は漸くのこと次第に氣がついて來た。

此の認識がレーニンやその周邊の人々の間に確められると、以前にはやんやとめてはやされた「プロレタリアートの自由」は、プロレタリアートに君臨する支配者の專權となつた。それはユダヤ人一小團體の獨裁であつて、此のグループに入る事を許される者は以前シベリアやシベリアに居て、特にレーニンの恩寵を蒙り、マルキシズムの解釋や文學的曲解に參加した者に限られて居た。統制命令と同時に「自由」は強制となり、數ヶ月にして他のあらゆる階級を根絶したプロレタリアートの所謂無階級社會に

は、かくて統制及び被統制の兩階級が生れた。統制者と云ふ獨占的小名士階級が、初め一九一八年から一九二一年に至る迄、完全に團結した事は少しも不思議ではない。命令遂行の爲にはボルシェビズムの中央權とチエーカの鞭があつた。かくてマルキシズムの理論は、少くとも統制階級の人々による統計に於ては、俄然正しい事が證明された。

クレムリンのエダヤ人獨裁者の統治はこんな風であつたが、彼等は命令を發すると、直ちにそれが行はれたものと思つた。又例へば、ドネツ盆地の何處かで、石炭を何バーセントだけ増産させる必要がある、と云ふ事が決定されると、彼等は直ちに、統計事務の責任者に、その算定の中へ、此の増額を證明濟として記入させようと云ふ決議をしたのである、ロシア國民の本性とロシアの土地の廣大さの故に、此の狂氣沙汰の制度は數年間持續した。

マルクス主義の説く所に依れば、生産手段が社會化されれば、生産は自ら運行するもので、又善良な意思の缺けて居る所には、強制と統制とが此れに代へられたから、これから幸福を齎すべき生産が始まる筈であつた。帝政時代既に貧弱であつた工業の中で、一九二〇年二月一日迄に、百萬の労働者を有する四千三百の工場が「社會化」され、三十萬の労働者を擁する四千六百の工場、即ち小工場は差し當り舊態のまゝに放置された。原料利用の貴重な工業生産は小範圍の戦禍を償ふ事が出来た唯一のものでつたのであらうが、それは社會化に依つて葬られてしまつた。一九二一年の二月、全工業生産は平時生産の

十パーセントに減少したが、それはソヴェットに於ける人間生活の發展にとつて、農民經濟の完全な瓦解程、決定的なものではなかつた。

ボルシェビズム實驗が始まつてから、數ヶ月すると、早くも都會人は田舎の人間に對して、田舎の人達は都會の扶養をソボツテ居る、と言つて非難した。穀物の不足が告げられたが、それは收穫が無かつた理由にも依るけれども、又收穫物が脱穀されず、收穫物輸送の交通機關が用立てられなかつたからである。此處に於てクレムリンの統制者は、先に都市プロレタリアートの思ひがけない惡意を發見したあの認識に従つて、農民の「惡意」を知るに至り農村に對する膺懲の師を用意するに至つた。此れに當てられたのが大戦の歸還兵で、彼等は此の時から殺人、燒打、掠奪、強奪等を全ロシアに蔓延させた。

マルキシズムの原理は、貴族及び農民の私有財産を公共財産に引渡す事であつた。實際一九一七年、土地及び土地から期待される收穫の全管理は、町村委員會、農業委員會、ソヴェット農業部等に與へられた。實際土地の法則に従へば、労働無しでは何物も土地に生じないのであるが、長期に亘つて土地から收穫をあげようとする、此の労働に就いては少しも考へられなかつたのである。

併し一九一九年、早くも此の農業社會主義は再び放棄され、農民達はその間に、共產主義の理論には遙に遠い原理に従つて、自分達ですつかり分け取つて居た。比較的富裕な農民は、農民階級全體が、貴族から取り上げた土地を貧農から買取つた。貧農の一部は不良の一群と共に都市に流れ込んだが、彼等

はボルシェビズムの天國が、これから高賃銀の工業労働を増大してくれらうと想像して居たのである。都會人を幾分でも扶養する事が出来る爲に、統制階級は共產主義理論を完全に放棄して、没收した土地を委ねた農民から穀物を取らうとした。

彼等は都市の爲に收穫の強制徴収を指令し、その爲に赤軍を當てた。最早共產主義的でも、社會主義的でもなく、全く專制的な此の「農業政策」の結果は、人類が嘗て體驗しなければならなかつた、最も恐るべき飢饉の一つであつた。ボルシェビズム主権者の公式報告と、各種救援隊の報導に依れば、當時十六ヴォルガ州に於ける千三百七十萬の人間、(それはヨーロッパロシア人口の十パーセントを遙に超えるものだつた)が何ヶ月の間、一片のパンも口にしなかつたと云ふ事が考へられる。一九二二年の春には、此の飢饉は三千五百萬乃至四千萬の人間、即ち人口の三分の一を襲つた。外國救援隊の正確な報告に依ると、一九二二年十二月、サマラ州では、住民の九十九パーセントが一片のパンさへ手に入れる事が出来なかつたさうである。飢饉の結果はコレラと發疹チブスの蔓延で、救援隊の報告に依れば、當時二百五十萬乃至三百萬の人間が此れに斃れたと云ふ事である。此の飢饉災害の犠牲になつた者は、總數五百二十萬を算出せられる。工業生産の最後の殘餘も崩壊した。トロツキーは全國民労働力の最後の動員を行はうとして失敗し、マルキシズムとユダヤ人徒黨の獨裁は瓦解した。

併しボルシェビズムは尙餘命を保ち、年一年と成長した。ソツイエトでは獨裁者が統治を續け無意味

な試みは無数の人間の人力を浪費せしめ、様々な原料の途方もなく莫大な量を破壊し、ヨーロッパが供給したあらゆる機械を烏有に歸せしめた。ボルシェビズムに依る社會解體の煽動者は、共產主義的マルキシズムの毒を多くの人間に感染させ、第三インターナショナルの方で、國民の間にある暗黒界の勢力を作り上げた。その手段は何處から來たものであらうか？ 又、此のボルシェビズムの毒を傳播させ、成長させる可能性を與へたのは誰であらうか？

ジェルサイユ會議のボルシェビズム援助

毒は増殖した。無の「理論」の毒は、多くの屍體がボルシェビズムの路傍に横つた時にも、ロシアで豊饒な温床を發見した。若し人間を此の毒から解放しようと思ふならば、徹底的に毒を根絶しなければならぬ。併しボルシェビズムは——此れこそ人類史上の決定的轉換であり、ジェルサイユ條約と同様の意義あるもののだが——モスコーに於ける獨裁が崩壊した瞬間、ジェルサイユの獨裁者に依つて救はれた。

一九一八年、ボルシェビズム暗黒界と協約を結んだ民主主義(此の協約は民主主義に勝利を齎した)は、ヨーロッパ史上數ヶ月(此の數ヶ月の間に、恐らくボルシェビズムとマルキシズムを根絶し得たんだらうが)に互つて、ソツイエトに於けるボルシェビズムの後退する勢力に支援を與へた。バリ及び

ロンドンの政治家は、一九二一年、モスコと關係を結ぶ事に依つて、ボルシェビズムの主權者に對して切札を與へたわけだが、彼等は今日迄それに依つて生活して居るのである。英・佛兩國の國民は、此れ等の政治家の行爲を黙過したので、ヨーロッパ諸國が十五年間に亘つて、マルキシズム及び人民戦線の様々な實驗の材料となり、民主主義の泥濘の中で育つて居る暗黒界の攻撃に曝された事に對して、責任を負はなければならなかつた。西歐とモスコ、即ちボルシェビズムと民主主義（ラバロ條約のドイツ人發起人も亦此れに數へられるのであるが）の間に結ばれた最初の協定は、歐米諸國民の安全と文化に對して行はれた犯罪の嚆矢であつた。それは此の條約によつて、文化に對する攻撃前線を本質的に強化する事以外には、何事もなし得なかつた敵との協約であつた。民主主義諸國の政治家が、未だヴェルサイユで弱奪物の分割に就いて協議して居る間、即ち既に一九一九年三月二日、煽動術では異常な經驗を積んで居るボルシェビズム煽動家が、ソヴィエトで共產主義インタナショナルを樹立して居た。同年六月、ドイツ代表の出發に當つて、パリで彼等に石を投げつけた民衆の中には、既にモスコの命令を受けた煽動家が居たのである。民主主義の政治家とその社會民主主義の一味の者が、永遠に定められた世界主權者として殆ど全世界に君臨したかの觀があつた數週間の間に、一方クレムリンのユダヤ人は、民主主義に對するボルシェビズム的攻撃の組織——「第三インタナショナル」と稱する——を作つた。かくて直ちに煽動家のドイツ派遣が開始されたが、それはドイツ人が、ヴェルサイユ條約の壓迫の下

で反抗するだらう、と考へられたからであつた。反民主主義的意思を親ボルシェビズム的意思に造り變へようと云ふのであつた。モスコ政府は更に共產主義運動の代表者を印度、近東地方、ペルシア、トルコ等に派遣したが、それは丁度ヴェルサイユ其他のバリ郊外に於て、此れ等の地方を、所謂戦勝國の間で分割しようと云ふ談合が行はれて居た時である。更にそれから、民主主義諸國の政治家達が、いつ迄もとりとめのない會議を開いて、二、三の電柱納品をドイツに免じてやるべきか否かなど、相談し合つて居る間に、ボルシェビストはポーランドとトルコを襲つた。彼等はウランゲル（アロシヤの元帥）及びデニキンに對する軍事的防衛を組織し、日本との最初の紛争を起しても何等恐れる事はなかつた。此れ等の軍事的任務上、先づ編制する必要のあつた赤軍の爲に、彼等は充分な人間を持つて居た。兵隊は少くとも食ふには困らなかつた。ヨーロッパの豊かな小麥畑の眞只中にあつても、一片のパンさへ得る事が出来ないために、田舎から逃れて行つた農民青年は赤軍に徴集された。

一方ではボルシェビズム經濟と行政がかうして全く破局に陥り、軍事的見地から見れば容易ならぬ交戦を續けて居るのに、モスコ政府は、ボルシェビズム國家を承認して貰ふ爲に、ロンドンとパリで外交的交渉を始めた。個々の詳細な點に互らなくても、ボルシェビズムの此の鐵面皮な煽動の結果と、民主主義が、自らの利益を脆くも放棄した結果とを、しつかりと念頭に置けばそれで充分である。一九二一年三月十六日、ロンドンに於て英ソ協定が締結されたのである。そして此の協定と共に西歐資本主義勢力

が反ボルシェビズム煽動を持続的に經濟援助をする時代が始つた。又同時に、アジア及びバルガ地方で作られた全「白軍」は結束をつけられた。英佛が白軍解體を遂行したのである。一九二一年三月二十日、トルコはソヴィエトにバトムを割譲し、翌二十一日にはリガに於てポーランド、ソヴィエト間の媾和條約が結ばれた。赤軍はワルソー直前まで進出したが、そこで敗北した。それにも拘らず媾和はボルシェビズムにとつて有利であつた。ボルシェビズムの獨裁者が體驗した最も危険な反亂——クローンスタットに於ける海兵反亂——は一九二二年三月十九日に鎮壓された。同年四月九日、レーニンは第十回共産インタナショナル會議の席上で、「戰爭共產主義」の崩壊と、ネップと稱せられる「新經濟政策」の開始を宣言した。

此れより一年にしてジュネーブの會議が催され、ボルシェビズム獨裁者と英佛との諸外交上の協調を理由として、ソヴィエト代表も此の會議に列席した。ユダヤ人ラーテナウを首班とする當時のドイツ政府代表者はドイツのインフレーション克服で一商賣しようとした國際財力の煽動を受けて、此の政府の性質上それは當然な事である。一九二二年の第二復活祭に、ソヴィエトとラバロ條約を締結した。

此れは現代人の記憶から、既に殆ど消失した事實である、ところで、如何にしてボルシェビズムが更に生存を續ける事が出来、民主主義が此れと抱き合ひをする事が出来たのか？

ユダヤ人ジャーナリズム及び文士の廣汎な層は、一九二一年、早くもクレムリンのボルシェビズム獨

裁者と結合するに至つたが、それはヨーロッパの諸新聞紙上で、ボルシェビズム煽動の爲に彼等のお役に立つ爲であつた。ノースクリップ(イギリス)の宣傳事務所からヴェルサイユ會議に赴き、其處からジュネーブの聯盟へ行つた人々の一部分は、ジュネーブ湖畔のカフェーの御常連であり、更に又、此のジャーナリストだつたのである。彼等はセンションを求め、人目を惹くに足る國家解體の政策を求めた。今日に至る迄、充分な支拂ひを受けて、ボルシェビズム煽動の仕事をやつて居る此の層(その後更に増大した)は、バリ及びロンドンの諸新聞の、ユダヤ人編輯人と色々の關係を持つて居た。民主主義の政治家は、今日と同様既にその當時から、徹頭徹尾虚偽の材料に基づいた政治的行爲や、評判、申傷等に依つて壓迫されはしなかつた。一九三二年以來の反ナチズム煽動は、ヴェルサイユ條約の一般的不足に基いて、當時既に全ヨーロッパに向けて行はれた戰術の繰返しに過ぎない。援助を辭せぬ煽動家の一團は、ドイツでもボルシェビズム宣傳家のお役に立つた。ドイツではヴェルサイユ條約とインフレーションに對するドイツ人の當然な反抗が、幾多の理論家を送り出したが、此の理論家達は、ドイツ國民救助の爲の試みを進んで「ボルシェビズム的思想」を以て行つたのである。

民主主義諸國の政治家を著しく煩はした此の煽動組織は、トロツキーの仕事であつた。そしてクレムリンの獨裁擁護の爲に、此の組織に奉仕したのは兵隊、即ち飢饉の爲に赤軍に投じた農民子弟であつた。彼等の兄弟達は一九一四年大「蒸氣ローラー」に乗つてヨーロッパに進軍したのだつたが、それと同

じ誠實な恭順さで、彼等は「赤きツアール」の呼聲に従つたのである。赤軍兵の一部も農民から成り、彼等は感激狂喜して赤いクレムリンの招集の聲に従つたのであつた。彼等は所有を得て、此の獲得をホルンビズムの成果だと思つた。ロシア農民ほどの時代でもさうであつたが、彼等も亦デニキンの所謂西方或は東方から脅かす危険に對して、進んで彼等の土地を防禦しようとした。彼等が皇帝直參の者として、舊帝政時代の將校に指揮されて行つた間は、喜んで行動を共にしたと云ふ事は特記すべき事柄である。

政治委員が赤軍に派遣せられ、ロシア農民の明白な所有意思とはどうしても一致しないホルンビズム理論を流布すると、此處に初めて農村青年は眼を開いて、此の委員に抵抗した。彼等は耕地から連れて行かれはしたが、少くとも戦争に携はる者の列には加へられなかつた。ロシアの兵隊は、上つ方の參謀本部で起つた事には全く無關心であつたが、政府の命を受けた委員が命令を發しようとする時だけは、農民が暴動を起した。例へばクロンスタットの事件などはそれである。此處ではベテルブルグの體驗で、ホルンビズムに對する眼は鋭敏になつて居た。農民達は赤軍に入つた當時、ユダヤ人の一團が皇帝に代つた事を、決して心よく思つて居なかつた。飢えた都會人の農民に對する憎惡は、徹底的に無政府主義的な水兵に煽動されたクロンシュタットの赤軍兵士を驅つて反抗させた。トロツキは、滿身農民に對する憎惡に燃えて居る都會人労働者を武装させ、大舉暴動農民に當らせる事に依つて、漸く此の

反亂を鎮壓する事が出来た。

ソツイエトに於けるその後の發展と、五、六百萬の死者に對する赤い獨裁の意思貫徹にとつて決定的なものは、獨裁者の説法と大衆の神秘説との間の調和であつた。ロシアのユダヤ人は農民や都會人と共同生活を營んで居なかつた。併し彼等が都市の大衆と村落の農民を前にして、辯士の高壇から辯説を振ふ段になると、ロシア人の心を説得し、此を毒する爲の言葉と思想が滾々として涌き出るのであつて、かうした業はアリアン人の一寸出来ない所である。ピザンツ此の方、紀元始つて以來一千年間の東地中海に於ける本能生活から、ロシア人の心の中には自己否定の衝動が根ざして居た。そして此の衝動はユダヤ人の破壊説に依る煽動で強化された。草原地帯の人間は、何千年の間、唯二つの教を聞いたのに過ぎない。それは如何に努力しても、常に水泡に歸してしまふ、かくも無限無邊の廣漠たる土地で、個人の存在、否一般人間の存在が無意味であると云ふ事と、それから西洋に對する憎惡とである。此の迷信はユダヤ人に依つて、更に強く效力を發揮させられるに至つたが、教會も亦西洋的説教をやつたのである。先にロシア大公達は、汎スラブ運動で大衆を反西洋的にしようとしたが失敗した。すると次にやつて來た人達は更に殘忍に、神秘的に、頹朽ヨーロッパの事や、たちの悪い無氣味な獣であり、地獄の恐慌である資本主義の事に就て語つた。貧困や絶望と云ふ惡魔は、聖徒を禮拜すれば驅逐されるものではなく、マルキシズムに依つて、生存の一理論、一變化に依つて驅逐されるものである、と彼等は説

いた。トラグターと機械は聖徒となり、マルキシズムの小冊子はバイブルとなり、ソヴィエト人の會議室はロシア國民の教會となつた。

マルキシズム理論の妄想に鞭撻され、僭越にも一億六千五百萬の人間に君臨しようとした人々や、彼等の狂つた言葉を、ロシア人の空虚な魂が感激して受け入れたのだなどと、俄かに感じるようになつた人々が、先づ力強い精神的味方を得たと思ふのも決して不思議ではない。恐るべき慘狀と、東、南、西の三方面に對する赤軍の戦争の最中にあつて、英國で始められた外交交渉の破産恥は、此處から明かにされる。當時既に談判員だつたリトヴィノフは成功した。彼がペテルブルグやモスコイから連れて来て、ロンドンで平和主義者の團體や、フリーメーソンの秘密集會所、反對派の社會主義者クラブ等の眼を眩まして分散させたボルシェビストの同士は、やがて彼に次の様な事を認めたと言つて來た。それに依ると、英國人は全く商賣上の理由から、シテイー街では、従つて政府内でも、進んでソヴィエトと提携する用意がある、と云ふのであつた。

商人はドイツがイギリスの邪魔をしないかと懸念した。又合衆國も猜疑の眼を以て見られた。此の時代に、ヨーロッパ及び歐米間の經濟の發展に就て、頗る狂氣ぢみた憶測が流行つた事を忘れてはならない。ドイツのインフレーションは、金錢の價値、貨幣本位に關するあらゆる説、國民經濟等に就ての人間の考へを始めて破壊してしまつたので、誰も彼も、人類救済の計畫をたてるは天命なりと感じた。ド

イツを經濟的に復興させ、何か大きな仕事、即ちロシアの内部的再建と云ふ仕事で、ドイツを合衆國の大番頭にならせて、ドイツが必要とするクレデットの利子と賠償金支拂を可能にしてやる事が、最も策を得たるものである——かうした考へ方は廣く行きわたつた考へ方で、世界の支配的銀行界に迄及んだのである。聯合國側では、俄然ドイツ人の能力を認め、ドイツ人に、そのクレデットの出來るだけ高い利息をニューヨーク、ロンドン、パリ等の銀行に收めさせ、それをロシアの方に廻してやらうと思つて、ドイツ人の働き振りを利用しようとした。合衆國のミドルウェスト開發に際して、ニューヨーク銀行の巨頭達は、早くも此れと似た様な仕事をやりはしなかつたらうか？ 只違つた點は、上の場合の仕事は遙に大きかつたと思はれるのであるが、それはまだ手入らずの土地に初めて人間を連れて行く必要はなく、經濟的には全く何もない土地の住民に食料を供し、然る後に彼等を其處へ運び入れた機械に就かせただけだつたからである。ともかくこんなわけでソヴィエトは大工業生産國となるに至つたが、同時に、他國の世話にならないで、自らを養ふ事が次第に出來る様になつたのである。

ジュネーブの經濟會議では此の様な理論が論議された。ソヴィエトの「外交官」は、此の會議で、相當な資本家に成るが爲に金ばかりを必要とする人間の役目を、非常に巧みに演じた。世界中の銀行家は此の様な仕事に關心を持つて居たが、中にもユダヤ人銀行家はその先鋒であつた。と云ふわけは、クレムリンで實際政治をとつて居るのはユダヤ人だと云ふ事實があるから、ソヴィエトにクレデットを與へ

ても充分辨濟して貰へると思はれたからである。彼等は此のユダヤ人がボルシェビズムの演説をやつてもそれは大目に見る事が出来ると思つた。それは寧ろ巧妙な戦術と考へられた。ロシアに於けるユダヤ人資本勢力の強化は、この戦術で實現されたのである。當時英佛及び合衆國の多くのユダヤ人經濟學者は、此の意味の論説を至極あからさまに新聞に發表した。

かくて早くも一九二一年、民主主義の唯物論と所有意識は、ボルシェビズムの唯物論と所有意識と相會した。そして既にその翌年には相互の競争が起つた。一九二三年ドイツのインフレーションが頂點に達し、ルール戦争が勃發すると、ソヴィエトは一時不利な立場にさへなつた。ドイツは俄かに關心を持たれ始め、幾何位ドイツに注ぎ込む事が出来るか、又、此れから幾何位利息を儲ける事が出来るか、と云ふ問題ばかりが、ロンドンやパリで取り上げられた。ドイツにはドーゾ案が與へられ、ソヴィエトは忘れられた。併しクレムリンのユダヤ人獨裁者は此の大危機を切り抜けた。彼等は既に若干の特許を貸して金を手に入れ、金をロシアから輸出して爲替商賣をやつて居た。新しい經濟政策が始つたのである。

ヅエルサイユ條約に關係した人々が、かうしてボルシェビズムの宣傳家を救済した効果は、ヅエルサイユ條約そのものの中にある獸的な所、有意思の効果に劣らず大きなものである。此れ以後、行爲人の戦線は暗黒界から連れて來た煽動軍反亂軍の力を借りるユダヤ人の國家解體の戦線に對立した。此の戦線の者は民主主義思想と云ふ器具を以て働くが、此の思想の絶體の徹底を武器として利用する。又極端な唯

物論を携行するが。平安を願ふ本能、西洋に對する憎惡の本能（數千年の孤立生活の間に發達し、從つてロシア人の魂の中にしつかりと喰ひ入つてしまつて居る本能）と結びついて居る。此のボルシェビズム勢力は、物質的所有及び原料を根據として居るのではない、少くともその傳播の最初の數年間はさうでなかつた。ボルシェビズム勢力が最初その足場にしたのは、ロシア人の心的力の卑しい悪用である。マルキシズムのタルムード的理論はロシア人の心的體驗で裝飾された。マルクスに依つて暗黒街から所有界へ侵入を開始したユダヤ人は、俄然王座を占むるに至つた。彼等はその意思をモスコイから宣言し、その際ロシア草原の住民は彼等の傭兵である。而も彼等は此の住民を兵隊として利用するばかりでなく、そのあらゆる肉體的な能力を使用する。何故ならば彼等はマルキストだからである。彼等の考へ方は唯物的である。彼等は此のロシア人の集結した力と、彼等に煽動された全歐米プロレタリアートに依つて、徹底的に行爲人をアリアン人を絶滅させ様と考へて居る。此の勢力の黒幕はモスコイのボルシェビストばかりでなく、總ての政治經濟上指導的地位にあるユダヤ人であつて、ユダヤ人は一九二一年及びそれ以後、モスコイのボルシェビズム獨裁を、クレヂットと政治的同盟で強化したのである。又かうした人々に屬する者として、同じく此の政策の道連れになつた者を擧げる事が出来るが、彼等の迷夢こそ深いもので、行爲人の優越さを敵に廻して、所有人がして呉れる守護と民主主義の完全さとは、軍事同盟、從つてボルシェビズムに屈從させる事にのみあるのだと考へたのである。

モスコウのボルシェビズム煽動家は、ロシア人の本質のお蔭と、民主主義諸國指導者の愚昧さのお蔭で彼等に與へられた可能性に就て、此の數年の間に強い自信を得たに違ひない。彼等は此の二面政策を國內にも國外にも行へば、先づあらゆる切札を自由に出來たのである。彼等は國王や大統領の許に大使を派遣する事が出來、同時に國會では社會黨共產黨の先に出て煽動をやり、工場では勞働者の間に煽動的宣傳を弄する事が出來た。彼等はマルクスの國際主義を淺薄な平和演説で稱讃し、それと同時に、殆ど宗教的な熱狂さで帝國主義的政策を實際に行ふ事が出來た。彼等が國際的煽動をやれば反軍國主義者になつて居るが、一方ソヴェトでは、先づ當分は大資本主義國のそれに餘り劣らない軍備を赤軍に施して居る。彼等はフランス革命の遺産から自由をスローガンとしてとり、ソヴェトの政治及び經濟に於ける、事實上の政體としての獨裁を、此の自由を以て讚美したのである。

クレムリンのユダヤ人主権者の、此の二面政策を行ふに當つて、最初は完全に一致して居た。ところが後になつて、此の政策の個々の場合に就ての意見が區々になつた。原則に於ては彼等は皆一致して居た。スターリンにしても、又スターリンがゲーペーウの殺人者の手に委ねた犠牲者にしてもさうである。彼等は此の二面政策の色々の形態が、時に實行されるとなると、その速度、方向、活動力等に就て意見の不一致を來して相争つたのである。

共產主義の機械人

一九二一年、彼等は共同して新しい經濟政策を實施し、農民から現品租税をとつた。農民に所有を委して、農業共產主義を後日に延期した。かくて再び穀物賣買が行はれ、金錢は國內に流通した。工業は國家資本に總括され、トラストが生れた。併しその財産は理論上プロレタリアートのものになつて居るが、實際は國家の主権者の手中にあつた。世界貿易に對する關係が復活し、英、佛、獨、米の大會社には、ソヴェトに於ける重要原料開發と工場設立、特殊商品の輸入等の許可が與へられた。世界各國の首都にはソヴェトの貿易代表が入り込み、供給品を取り寄せ、商業契約を結び、隨時支拂もした。經濟クレヂットに對する政府の保障は、最大範圍内で利用された。ソヴェトは、少くとも表面上、戰爭共產主義の責と、マルキシズム制度崩壞の責を償ふ爲に、外國商品は廉價に仕入れた。

それは形式に於て、ヨーロッパ資本主義經濟の模倣であつて、政治及び經濟の獨裁と、唯物主義的見地に依つて與へられた形式である。生産物を純マルクス主義的に得ようとする間は、それには人間の意思が入らないものであるが、此れに新しい原動力を與へようとするのである。此れも亦マルクス主義的解釋から來る誤謬であつた。實際、今日大部分唯物主義的に行はれて居る西洋資本の經濟が可能なのは、西洋資本經濟が、全世界の原料を自由にし、全世界の交易の可能性を自由にして居るからではな

い。西洋資本主義經濟は物質力に依つて生命を得て居るのではなくて、物質力の壓迫を受けても、倦まずたゆまずその能力を提供して居る人間に依つて生きて居るのである。ソヴェエトにはかう云ふ原動力が缺けて居た。

此の新經濟政策の結果は、各人の活動を抑壓して、經濟を完全に官僚政治化する事であつた。唯物主義的基礎の上に立つては、進捗しなくなつた企業を動かす爲に、繰返し補助金が與へられた。生産はそれ自身貧弱な平時生産の七十パーセント迄増加したが、貧困は著しく深刻化した。

農業に於ては穀物の價格が低落し、従つて生活は非常に苦しくなつた。工業生産は暴騰して、農民はその最も必要とする簡單な機械でさへ買ふ事が出来なかつた。既に一九一四年には、鋤一つが百キログラムの小麥に價した。此の農民窮乏の結果は新たな飢饉で、都市労働者には再び不満の色が見えて來た。併し危機が來る毎に、外國に所有を賣る事に依つて克服されたのであるが、それは又教會から金を取り上げ、飢饉に瀕して居る人々の穀物を單に奪ふ事に依つて達せられたのである。又新しい許可申請者が求められ資本主義世界はいつも自ら進んでボルシェビズムの經濟を立て直してやつた。ソヴェエトに運び込まれた機械は三回、否、四回にも及んだが、それは無謀にも破壊され、やがて又工業機構の建て直しをやるに云ふ様な有様であつた。利得が思ふ様に上らないと、資本主義各國の政府はその保障手段を用ひて援助した。何故ならば、各國政府はモスコ政府と政治的に協調する事に關心を持つて居たから

である。

ソヴェエトの内部では、此の經濟紛擾に當つて二派の對立が起つた。一見著しい差異のある反對方法で相對立して居る多くの黨派——ボルシェビストはかうした黨派の多くのものをその辯證法の中で識つて居る。併し實際は唯二つの派があるだけで、絶體的な主權の代表者の一派、及び思想も目的も一致して居ない變化極まりない反對黨の一派がそれである。スターリンが獨裁者として次第に入り込んで、勢力を扶殖したあのクレムリンの獨裁政治の反對黨が難ずるところ、此れに對してスターリン自ら反對黨を責めるところ——此れは我々の思惟にとつては純粹の理論である。此の反對黨の人々の一部はトロツキ一の陣營から來た者で、ボルシェビズム革命の彌次馬連であり、文士とか商人の類であつた。彼等の中には、ソヴェエトで唯、商賣をやらうとばかり思つて居る、ユダヤ人大銀行の直接代表者や代理人が居た。彼等は勿論色々の提議をしたが、それは諸外國の銀行から與へられたクレヂットの利子收入を目當としたのであつた、かう云ふ利得は一般に評判が悪かつた。假令支拂はれても、新しい相手と商賣する事を妨げた。そこで政府は此れらの人々の先手を打たなければならなかつた。死刑執行人が命を受けて出發した。

次に此の反對派の中には純理論家があつて、彼等は朝早くから夜遅く迄、マルクスの著書、或はマルクスに關するレーニンの著書を參照し、果して現下の行動は正しいか否かと云ふ事を検討した。のみな

らず實際に就ては何等知る事のないかう云ふ警告者の徒は不愉快な存在なので、スターリンは彼等を射殺せしめた。

ユダヤ法典化する反対派のかうした個々のグループに對して、與へられた色々の名稱は、各見解及びその見解を代表する階級の紛糾を表徴して居るが、かう云ふ見解の相違を來したのは、正統マルキシズムに關する十年間の争闘に依つて、人々が踏み込んだ邪道である。ボルシエビズムの權力にとつては、かゝる論議も、射殺も過程も決定的なものではない。それ等は單にソツィエトに於ける状態の一つの像を與へて居るのに過ぎないのである。

新經濟政策を二ヶ年やつてから、レーニンは一九二三年、再び戦争共產主義に歸らうと思つた。彼は無目的な負債經濟の缺陷を認め、マルクス主義的強制を再び引用する事に依つて、ボルシエビズム實際當初の數年間に達せられなかつたものを成就する事が出来ると思つた。他の者は世界革命に赴かうとした。就中トロツキーがさうであつた。トロツキーは、苦心して外國から借りた金を煽動目的に支出した事には反對であつたが、世界を煽動し、新戦争で革命事業をする事は彼の計畫に適つて居た。ソツィエトは單獨では未だ經濟的に充分な力を持つて居ないので、彼は知つて居たから、第三インタナショナルの活動を活潑にさせると共に、新經濟政策を繼續して行かうと提議した。併し後のスターリン派、即ち共產主義的國家經濟と共產黨の純官僚は此れに反對した。彼等がかゝる舉に出たのは、原料と人とを

持つて居たからである。若しロシア人の反西洋的本能を更に煽り、小所有の可能性、一般所有關與の利用可能性を餌にして眼の前にぶらさげてやれば、ロシア人は必ず働くだらう、と云ふのが彼等の考へであつて、何事も全然組織的に率先して行ひ、國內の秩序維持の爲には強大な陸軍を作り、國外では革命陰謀の爲の煽動軍を用意しなければならぬ、と此の派の者は言つて居た。

國家の諸官廳、工場、及び黨内で、次第に思惟的になつて來る人々の爲に、新しいマルクス主義理論——共產主義社會生成説——が造られた。

此の理論を黨の公式命令の中で何回となく説明したスターリンは、自由、平等、博愛と云ふスコロガ

ンに立脚し、彼の唯物主義的解釋に従つて、最大の價值を平等の説明に置いた。彼はボルシエビズム的國家管理の第一段階に於て、「社會主義的社會」を造らうと考へる。此の社會は、あらゆる人間がその能力に應じて働くべき平等の義務と、此の勞働に對して、各勞働者の成績に従つて報酬を受くべき平等の權利とを意味する。初め善意を以て勞働に従事すると考へられて居た者が、微用者がすつかり微用されてしまふと、案外さうでない事がわかつたが、かう云ふ人間は所有と云ふ好餌で釣つて、働かせる事が出来る。併し彼等をしてそれも出来るだけ早く自分等の爲に用ひさせる様に、此の所有を與へてやらなければならぬ。彼等は又報酬を與へられる。彼等は此れが爲に、その抱懐する共產主義思想の程度に應じて、凡そ彼等に委せられるものから、自分のものを得る事が出来る。

第二の段階は「社會主義的社會」である、此の社會に於て問題になるのは、あらゆる人間がその能力に應じて勞働すると云ふ平等な義務であり、あらゆる勞働者が、その必要に従つて報酬を受けると云ふ平等な権利である。スターリンは常に此の共產主義的社會形式こそ、理想的なものであると主張して居た。併し又、恐るべきテロと残忍な壓制をやつて、漸くソヴェエトに於ける社會主義世界の第一段階に達する事が出来た事も、彼は何等秘するところはなかつた。スターリンは更に説いて、吾人は社會主義社會の建設と、ソヴェエトに於てのみならず、全世界に於て、社會主義社會の準備とを行ひ得る様にならなければならぬ、と言つて居る。全世界破壊と云ふ、實際的結果を伴ふボルシェビズム帝國主義の目的達成の爲には、獨裁を極力強化する必要があつた。そして此の制度では、人間は單に機械たる事を許されるのみで、此れこそマルクス主義の極端な徹底化であり、かうなる爲に、何も今更ソヴェエトで數百萬と云ふ人間を殺したり、餓えさせたりする様な迂路を通る必要はなかつたのである。ボルシェビズムにとつて問題なのは、最早國際的親睦でもなく、國際的基礎の上に建設さるべき、プロレタリアートの獨裁でもなく、ボルシェビズムの國として全世界を獨裁する事であり、今尙存在するプロレタリアートの階級に對して、かうしてこそプロレタリアートは救はれるのだと云ふ遁辭の下に、少數の者が獨裁する事なのである。

かゝる種類の獨裁は、あらゆる他の理論——それが假令如何にマルクスの著書から説明出来るもので

も——を拒否せざるを得ない。又それは、精神力を出来るだけ抑壓し、此れに反して物質的肉體的力を出来るだけ促進する、と云ふ事を念頭に置かざるを得ない。人間は既に子供の時から、自分は將來ハンマーになるのだ、ベンチになるのだ、機械の車輪になるのだ、と自分の價値を考へる様に教育される必要がある。ロシア人特有の宗教的意思は機械に轉せられなければならない。家族制度は絶滅させられ、子供は始めから、ボルシェビズム國家及びボルシェビズム經濟と云ふ機械の廻轉して居るベルトに接合されねばならない。經濟、政治、其他の公的生活に自ら職場所を求めざる事は許されない。何も知らない年頃に職場所が指定され、體力は此處で一定の機械的利用の爲に造り上げられ、すつかり消耗する迄使用される。人間を經濟過程の中に、かうして挿入し働かせる事は、鐵片、雌ネズ、車軸等を勢輪に使ふのと何等選ぶ所はない。

此のボルシェビズム機械で、人間がその機能を充分に發揮する事が出来なくなれば整理されてしまひ、老齡に達すれば斃死するにまかせられる。人間が機能の障害を現はせば、即ち反省して、人間として反機械的立場をとるに至れば、シベリヤに追放されるか、強制勞働所に入れられるかする。そして其處で、體力はまだ使へる何等かの形で、ボルシェビズムの目的の爲に使用される。白海運河の開鑿などに倒れる迄從事させられたりするのである。若し人間が、機械の給油状態の悪い個所や脆い個所の様に、廻轉して居るベルトに混亂を持ち込むと、ボルシェビズム機械からつまみ出されて、塵芥の堆積の

中に投げ入れられる。此の世話をするのは殺人地下室のゲーベールである。今にも廢物になりさうな人間や、或は機械の中の勤勞を拒む人間は、簡単に油を塗つてすますわけに行かなかつたし、それかと云つて、結局彼等の頭腦を頼りにしなければならなくなつたので、此處に警告の制度が發明された。此の機械人の頭腦の中で、一原子でも反對の道を行かうとする者があれば、忽ちゲーベールの裝電鐵條網にひつかゝる。パンフレット、講演、授業等に依つて、或は又ラジオを通じて誰れも齎される警告は、嘗てはレーニン及びスターリンの親友であつた二三の大人物さへ、彼等が反對を唱へた廉に依つて死刑の宣告を受けた、と云ふ様なものであつた。テロは此のボルシェビズム機械の中で、モーターの油槽に油を補充する役をつとめて居る。

併し流石のスターリンでさへ取り除く事が出来なかつたものが一つある。成程人間を貶して機械にする事はいくらでも出来るが、頭腦の殘存物は依然として残つて居る。遂に反省の時が来る、つゞいてテロに抗する執拗な抵抗が始まる。殺人組織に反對する激昂が勃發する。權力が強ければ強い程、此れに對する抵抗は、一度生れれば益々大きくなる。それに対してはゲーベールも無力を證明した。ゲーベールは又もう一つの問題——個人の體力を他人を煽動する事が出来る位に強化せんとする計畫——も思ふ様にする事は出来なかつた。一つのモーターのピストンに特別な研きをかけ、或は一つの車輪に特別な精密加工をする事に依つて、その能率をあげられる程度は、器具で此

れと等價のピストンや車輪の場合より多い。併し人間を機械的手段に依つて、一定の仕事させせる事が出来るのは、飢餓と不安とが、人間を強ひて勞働させる間だけである。それ以上は、若し飽く迄人間から搾取しようとするなら、人間に於ける人間的なものを考慮しなければならぬ。

此の場合ボルシェビズムは人間の意思に頼る事は出来ない。何故ならば、意思を覺醒させれば、人間を直ちに機械的存在から引き上げるかも知れないからである。だから「スターハーフ制度」を用ひて、實際には存在しない他の人間の肉體上の創造力と云ふ手品を使ひ、それに依つて機械人を欺いて居る。勞働者に對しては、その勞働を適當に準備して、統計的に勞働量が確認されると、より多い生産物を供すべき可能性が與へられる。次に此の勞働者は他の者の隊から引き出され、此れに依つて残つた者は刺戟を受けて、假令短期間でも、その體力を生産能力以上に酷使させる。何故ならば、體力相當の程度以上に迅速に、仕事を仕上げようと思ふからである。かうして體力以上に生産をする者は、必ず自殺行爲をするのに等しいわけだが、そんな事はボルシェビズムは不關焉である。唯此の場合問題となるものは統計的結果だけなのである。

ソヴェエトのかう云ふ状態を一度認識すれば、此の害虫勞働の經過と事實とに對する説明は最早困難ではなくなる。先づロシア人の本質を頭に入れる必要がある。次に權力と狂亂は却て權力と狂亂を生む、と云ふ事を考へねばならない。かくしてこそソヴェエト人の運命は正しく評價される筈である。

戦争から歸還した兵隊は野卑になつて居た。彼等は敗北して最早何等の指導的役割は勤められず、緩慢な歸還輸送にあつて、屢々何ヶ月もボルシェビズム的煽動の餌食になつたのであつた。彼等は生活のあらゆる習慣を破つた。そこへモスコウや地方都市からボルシェビズム権力が現れた。人質がとられ、金持、貴族、市民は殺された。銀行は掠奪され、掠奪者は殺された。飢餓の爲に突然路上に斃死する者が出来た。そこへ政治警察が現はれて無理な事を要求し、人間の中に残つて居る最後の人間的なものを破壊した。テロと大量殺戮が行はれ、續いて飢饉と疫病が襲つた。

かうした生活では人間のつひ眼と鼻の先に死が待つて居るわけだが、戦場の兵隊でもそれ程間近に死に直面して居ない。後には數千の者が強制労働所に送られた。彼等は屢々隣接地帯から徴發されたもので、あらゆる街路、あらゆる村から送られたのである。そしてそれはボルシェビズムが發した何かの法令を、いはゞ犯す様な事をやつたと云ふ表面上の理由で行はれたのであつた。併し問題は、國民社會層の變化、機械人に依る一大移轉であつたと云ふ事情を大衆に隠す事は出来なかつた。ソ聯邦の最初の六年間には、殆ど二百萬の人間が殺され、七百萬乃至八百萬の人間が餓死した。ボルシェビズム主權者の陳述に依れば、一九三六年、二百五十の強制労働所に收容された「害虫」は六百五十萬人で、それ等は農民階級及び労働者階級の人々であつた。一九三二年には漸く二百五十萬だつたのであるから、四年間に一億六千四百萬人中の四百萬が、ソヴィエト國內の何千軒と云ふ距離を運搬されて、ボルシェビズムと

稱する大機械の爲に、その體力を沼地や原始林の中で、徴用されて遂に最早扶養する必要がなくなれば土に埋められたのである。

少くとも一億の人間にとつて、即ち以前のヨーロッパに於ける殆ど全國民にとつて、人間の肉體から生産物を強奪する爲に暴力を用ひる事や、人間を殺害する事などは、一種のわかり切つた事になつたのだと考へて差支へないと思ふ。クレムリンの煽動者やその直參の部下達が、何か經濟計畫を實行しようとするれば、彼等は始めから數千人の、否數萬の、否數百萬の人間を殺す事を勘定に入れて居るのである。彼等が企圖して居るところは、ソヴィエトの全石炭工業、金屬工業を、漸次ドネツ盆地から所謂ウラルクスネウク縣(北シベリアの數百萬平方軒に及ぶ地域)へ移さうと云ふのである。併し石炭産地と鐵産地とは相距る事二萬四千軒に及んで居るから、若し此の計畫が實際に遂行されるならば、五百萬乃至六百萬の人間を殺さなければならぬ。大抵の場合かうした計畫は貫徹される。若し此れが成功しなくても、その遂行の爲に必要な死を捧ぐべき大部の人間は、實際かゝる仕事に徴用される。目下コラ半島では數千萬の人間が産業幻想の犠牲に供されて居る。白海運河開鑿は二十五萬の人命を費やしたが、決して開鑿前の期待に添ふものではなかつた。而も多くの人命が失はれて居るのである。

ボルシェビズム煽動家の連帶責任で、幾多の人間を死に赴かせた者は、嘗ては一時同じテールを圍んでかゝる怖るべき殺人計畫を討議した二三の者に對して、大した顧慮もなく死刑宣告を決議するので

ある。銃殺の運命を負はされた者だけは、突然人間としての本質に立ち歸り、彼等が共々にやつた狂氣沙汰のわけがわかつた。併し時既に遅かつた。ところでボルシェビズムは、現在でさへ未だに此の人間を利用し、油として機械に注いで居る。先づ人間を責め苦しめ、而る後再び食を與へて扶養し、此れを説いて告白をなさしめ、芝居もどきの訴訟を踏んでうまい事をやる。何故ならばかくしてボルシェビズムは、何百萬と云ふ機械人の生産能力を、更に數週間も促進するからである。誰も彼も戦慄し、炭坑に働く者はシャベルを、ハンマーを、耕地に働く者は鋤を、再び手にするのである。

かうした空想的な狂氣^{キヤウ}ぢみた計畫を夢想し、人間としての能力を顧慮する習慣を捨てた者は、政治上でも勿論空想家になる。だからボルシェビズムの煽動家は容易にその慘虐事件を發明するのである。我々はかうした訴訟から、スターリンの舊友のラヂック、ジノツエフ、ビアタコフ等の供述を識つて居るが彼等は我々の知る限りではその迷妄に於て、他のボルシェビズムのお歴々に負けず劣らずである。偶然に辯護の辯證法に適つて居ると云ふので、名目上は獨、佛、英の有力者達と交される會談、談判、記録等が簡単に發明される。そしてすべては一つの目的に従屬せしめられる。即ち機械人の生産向上に對して、充分な作用を及す爲に、被告は出来るだけ多くの悔悟の情を示させられるのである。その上被告は出来るだけ卑賤に見える必要があるが、それはボルシェビズム國家の存続にとつての危険が出来るだけ大きい様に思はれるといふからである。

此れ等の陳述の個々のものにわたつて詳述する事は無意味である。何故ならば、我々が出會ふものは常に虚言であり、此の虚言が更に新しい虚言を生むからであつて、又、我々はボルシェビズムの目的や可能性（それは何等實際的意義はないものである）に就ての理論的對立の構成に出會ふからである。一方では訴訟が行はれて、死刑執行人がグーベーツの被害者の中で犠牲の背後から銃を鳴らして居る間に、ボルシェビズムの機械人は依然として働き續けて居る。ボルシェビズムの組織はこんな事で何等の變化も起きはしないのである。

ボルシェビズムは此の機械生存の中にある危険——害虫労働——をさへ克服する。訴訟に當つて此れに就ての陳述がされる時、或はモロトフが全ソヴィエト國民の事を思ひ起させて、害虫労働に就て語る時、事の真相は明かにされる。實際スターリンの全權委任者で、工業的企業建設乃至は鐵道設計に當つて故意に構成上の誤謬を犯し、かくして意識的に何千と云ふ機械人の生産物を再び破壊した者が居たのである。彼等は機械人の生産の結果を、一般人が浚渫機や起重機の作業結果を評價する様に評價しなれて居るので、我々とは違つた評價要素を持つて居る。前以て、有利でない事が判つて居る工業的企業を始めるやうに彼等に命せられた場合、實際彼等がやれる唯一の事は「害虫労働」だけなのである。何故ならば収益がなければ彼等は銃殺されるからである。だから彼等が助かる唯一の道は、故意に誤つた構成をやる事で、適當の時に建物を破壊させたり、列車を脱線させたりして、計畫が成功しないと云ふ事

に對する技術的根據を發見するのである。

モロトフの演説の中には、誤謬構成乃至企圖が詳に記述されて、かう云ふ事件が何百となく見出される。此れに對する防禦策として、ボルシェビズムは唯一つの方法を知つて居るのみである。それは共產主義思想に鍛へられた監督官を、出来るだけ多く機械人の間に置く事である。かくして被監督者の階級に對して、監督者の階級が増大し、ボルシェビズムの廣汎な收益人の階級が出来る。そして此の層に屬する人々は、全然生産に携はらないので、物的誤謬を犯し得ないから、出来るだけ多くの害虫をあばき出さうと云ふ關心ばかり持つて居る。

此の事は更にテロを強化する。併し生産を促進するものであると見做されて居る。

併しボルシェビズムが人間的にならざるを得ない一點がある。それは軍隊である。工業的作品は機械人を使つて造る事が出来、又恐らく此の工業を暫くの間動かしておく事が出来る。併し軍隊は人間が無くては作る事は出来ない。武器は意思が操縦するもので、機械人の自由出来るものではない。だからクレムリンと赤軍總帥部の間に絶えず軋轢が起る。ボルシェビズムはさうなると差當り清算と云ふ方法でお茶を濁す。併しかうして永い間には軍部中に緊張を醸し出し、それは自然的意思や各兵士の自然的人間の本質よりも、遙かに危険なものである。

ソヴェエトの現状を批判するに當つて忘れてはならない事は、國の廣大無邊さと可能性の無限さとが

此の妄想的組織の永續する理由だと云ふ事である。

モスコの事態を、二千軒を隔つた地方に祕密にしておく事は確實に出来る。又、さうした遠隔の地で起る事はモスコでは判らない。ほんの僅かの優秀な人物を側近に従へる事に依つて、獨裁政治がやつて行けるのは、全く此の理由のみに依るのである。かう云ふ優秀な人物は、遠隔地の秩序を視察する爲に派遣される。彼等がその指定地で活動して居る時は、全然保護を受けない。と云ふのは、彼等は全く未知の土地に、友もなく身寄りもなく、否時には全然未知の民族の間でさへ生活するからである。モスコ政府の風向き次第では、二人の人間が全権を託されて彼等の後を追ひ、彼等を密かに片附ける事も出来る。彼等の周囲の者はそれが爲に誰も心を動かされない。何故ならば彼等は常に遠い所から権力の要求に來るからである。此の権力が發現されなかつたり、維持出来なかつたりすれば、それはもうその周囲の者にとつて無に等しいものである。

ボルシェビズムの世界煽動

威望の回復と共に、ソヴェエト國內及び世界全國の暗黒界に再びボルシェビズム革命を起さうとし、國內に於ては権力、機械人、煽動者、飢饉、サディズム、外國に對しては大勢力の主張——此れがスターリンの作つた二面政策である。そしてそれはあらゆる者に對しても、又それ自身に對しても欺瞞と殘

忍の廻轉ベルトである。かゝる妄想が他く迄擴大強化されるとすれば、それは或は存在可能かも知れない。筋骨を持ったソヴェートの一億六千五百万の人間は物質であつて、彼等は鞭打たれては労働に赴かぬ。更に一時は上手に強制を受けてその數を増加させられた。労働者であらうと、農民であらうと、大使であらうと將軍であらうと、又人民委員であらうと、總て個々のものは無であり、計畫が總てであつた。計畫について計畫が行はれ、失敗は盡く新しい計畫で被はれた。ボルシェビズムの世界煽動の帝國主義的政策に於ても同巧異曲である。

ボルシェビズムはその對外政策及び對外經濟の行動に依つて、大抵その最初の助走で幾分の成功を収めた。恫喝は利いても、次に來る失敗はそれだけ大きい。失敗どころかそれは時には崩壊である。恫喝に始まつて痛ましい結果に終るかうした行動は、必ずしも一日乃至數ヶ月で行はれはしない。それはボルシェビズムの條約相手が満足する迄何年でも續くのである。ソヴェートの外交俳優、經濟俳優が國際會議の舞臺上に登場すれば、その當初の一週間は大抵紛糾のスターになる。ところが第二週目には、突き離され、嫌はれて、羞ぢ入つてホテルに引き込んで居る。彼等は除け者にされる。スターリンが軍事同盟を結んだ盟友にさへ除け者にされる。一九二七年のジュネーブ萬國經濟會議、一九三三年のロンドン萬國經濟會議に於てもさうだつたし、ジュネーブの國際聯盟でもソヴェート人はかうした目に會つて居る。共同保障組織擴大の爲に、ソヴェートが出したあらゆる提案には底意があつて、それは條約で相互に結

びつけられて居る國家が多ければ多い程、ボルシェビズムはあらゆる國境を越えて、益々盛に暗黒界にその魔手を振ふ事が出来る、と云ふのである。ボルシェビズムの全外交工作は、煽動する爲に外交界に出るといふ目的戰術にのみある事が屢々である。何故ならば、ボルシェビズムの大衆革命化は、依然として決定的な目標だからである。

一九一八年、早くもソヴェートは此れにとりかゝりフィンランドの失地回復が目論まれた。殺害された者、自由の爲の闘争で倒れた者は六千人に及んだ。此れに續いて起つた事は邊境國、オースタリー、ドイツ等へのボルシェビズム煽動の侵入である。ベラ・クトンはボルシェビズムの爲にハンガリーを占取した。多くの人民が處刑せられ、狂氣沙汰のテロが行はれてから内亂になつた。そしてボルシェビズムが敗れた。當時設立されたばかりの第三インターナショナルは、此の年早くも委員を南米に派遣した。ユダヤ人サロモン、ヤセルマンの指導の下に、アルゼンチンでは八百人も殺害され、數千人が内亂のために傷ついた。併しボルシェビズムは屈した。赤軍がアルプスに進出した時代、精密に作り上げられた計畫に従つて、當時の民主主義イタリアを解體して、此れを共產主義化せんとし、總罷業、工場占據(それは數年來フランスで用ひられて居る仕方と殆ど同じであるが)等に依つて、此の國に革命と完全な破壊の期を熟さしめようとした。併し此の弱い民主主義國イタリアでさへ敢然と抵抗し、遂にムッソリーニは此の妖怪を片付けてしまつた。

一九二二年ベラ・クーンはウランゲル將軍の本據だったクリミヤを奪還した。それは七萬人もの人間を殺害する事に依つて行はれ、彼等は皆機關銃でバタ／＼と倒されたのであつた。此處ではボルシェビズムの勝利に終つて、テロは激烈を極めた。

ブルガリアは一九二三年大規模な共産主義反亂の試みを體驗した。續いて一九二五年、ソフィヤの大寺院に於ける暗殺事件が起り、將校及び市民の死者二百十名、負傷者六百人を出した。一九二四年には又々邊境國の順番になり、續いて煽動はルーマニア侵入を試みた。第三インターナショナルは一九二五年以來その煽動者を支那に置いた。時も時モロッコ及びシリアに於ける共産主義反亂が始まつた。英國が經驗した最初の侵入は、一九二六年に於ける鑛山労働者のストライキであつた。此の年支那の内亂は擴大し、十八萬六千人の人間が共産主義煽動の犠牲になつた。それから第三インターナショナルは銚をオースタリーに轉じ、一九二七年ウィーンの大審院が焼かれた。此のたつた一日の騷擾で、死者百名、負傷者千人餘を出した。

その間にヨーロッパは、信用經濟の範圍内で經濟上の一時的飛躍を體驗した。ボルシェビズムは直ちに植民地へ、海外へその銚先を向け、共産主義反亂の試みは中米、近東地方、ベルシャ、印度、アフガニスタン等で企てられた。併し根本的な成功は得られなかつた。

すると又々ドイツに飢饉が起り、新たな失業状態が始まつた。一九二九年の五月一日、ボルシェビズムの

パリケードがベルリンに築かれた。メキシコでは、合衆國迫害の試みが共産主義騷擾の形をとつた。そして三年間に二萬人も殺害されたが、その中には三百人の牧師と二百人の舊教青年メンバーがあつた。一方支那に於ても、共産主義は不撓の活動を續けて居た。一時ブラジルも襲撃を受け、時を同じうしてベルギーもやられた。續いてモスコイでは北進の道が発見され、スエーデン及びノールウェーに於て、共産主義煽動者の力で急進社會黨の成立が着手せられた。スイスも煽動に引き入れられ、一九三二年には、ジュネーブで共産主義の大暴動が起つた。此處でやられた仕事は容易だつたのは、世界經濟會議以來、國際聯盟の中にも、ジュネーブで活動して居るジャーナリスト仲間の中にも、ボルシェビズムの煽動家が澤山居たからである。共産主義の妖怪を再び追ひ拂つてしまふ迄に、ジュネーブの市民は二ヶ月を要した。印度とテリーでは一九三二年に、共産主義的内亂が試みられたが、此の攻撃に撃退された。

一九三三年以後、第三インターナショナルはその威力を先づドイツ周邊の諸國に向けた。オランダ及びイギリスの艦隊には暴動が起り、アムステルダムでは一九三四年血腥さい反亂があつた。同年オーストリアには二月暴動あり、パリでは佛・ソ軍事同盟の交渉進捗とすつかり平行して、暴動が煽動されて遂に市街戦になつた。又一九三四年にはパリの海軍省焼失事件が起つた。續いてリタヴェンが煽動された。ボルシェビズムは此の地方に、ドイツと直接相接する國境を作る事が出来ると考へたのである。かくてリタヴェンには一九三五年にも一九三六年にも共産主義的大罷業と市街戦があつたが、此の國の國防軍

と警察はまだそれに打ち勝つ事が出来たのである。

かうした行動は、ファシズムに對する、行爲人に對するボルシェビズムの永遠の戦争の一部である。併し完全な機械化に對して反對する人間の數が少く、彼等が眞のプロレタリア大衆に對して智識の上層、否、富の上層を形造つて居る所では、かゝる行動も、試みられない。ボルシェビズムはかゝる國々に於ては他の方法で活動する。即ち當該國の經濟指導の上層を遮斷しようとするのである。それはいつも或る程度の成功を収めるが、その最もよい例は支那トルキスタンである。印度及び近東地方回教諸國に於ける反亂運動が鎮壓されてから、ボルシェビズムが成功しなかつた事が此處で貫徹された。機械と商品を供給して、此の地の人間を豊かにしてやるから、そうしたら革命遂行の爲に、ボルシェビズムの全權委任者になつてもらひたい。ボルシェビズムは暗黒界に向つて單にかう云ふ提案を以て交渉したのである。それは大抵、既に借金を背負つて、その國の文化の恩澤に充分に浴した土着の人々の社會から忌避されて居る無節操な人々である。彼等は新たに得た富に依つて、ボルシェビズムの無教育な成金として、更に無節操な要素を身につけて行く。かくてボルシェビズムは此等の國々では、ヨーロッパ諸國の場合よりも迅速に、生死をも辭せぬ多くの徒黨を得る。ソヴェト政府は、その後かう云ふ國々との貿易關係の進展に關する統計を公表して居るが、それを見ると、經濟政策の勢力は暗黒界から得られて、それが他日此の國の政府部内に要求を提出すると云ふ事は、最早隠し蔽ふべくもない。

ソヴェト自國內で行はれた民族政策も此れと異ならない。ソヴェト聯邦の十一ヶ國に於て、軍事的勢力、警察力、經濟力等の統一を多少なりとも實現する事に、クレムリンのユダヤ人專制者が成功したとすれば、それは此の各異民族暗黒界相互の緊密な結合に依るものである。ウクライナ、トルクメニスタン、ゲオルギヤ、アルメニヤ、アゼルバイジャン、白ロシア、キルギス、及び東アジア等の凡ゆる國に於て、ソヴェト聯邦の支配を受けて居る諸地方(異民族の住む)を現在統治して居る者は、屢々何百年と云ふ文化と行政の傳統を我物にした事のある原住民から、毛嫌ひされ蔑視された人々である。異民族異人種の移住者、罪人、此の地方の交通路と商業地から離れて、全く掠奪で生活して居る浮浪分子等が今日此れ等の國を支配して居る。彼等はソヴェト政府の保護を受け、他民族の同様分子と共に「暗黒界秘密集會所」を作る。そして此の集會所はモスコの民族會議に代表を派遣する。ソヴェト政府がスピッツベルゲン、フランツ、ヨゼフ地方、コラ半島等に新都市を建設し、其處に輸送する數萬の「移民」は、やはり人間道徳の埒外にある分子である。彼等は或は強制労働所から追ひ出された罪人であつて、彼等は其處へ行くと、小さな監督の地位から抜け出し、次第に政治犯追放者に君臨するに至り、かのゲーペーウの犠牲者よりも遙かに早く限られた自由を期待する事が出来る。又彼等は或はボルシェビズムの行政官廳から追はれた者で、所罰するわけにも行かないが、その犯罪的傾向の爲に、それ以上職に就かせてもおかれない人間である。

かくてソヴェト聯邦の外地には、暗黒界の人間から成る移民社會が生れたが、彼等は一般人間道徳を獸の如く憎み、クレムリンの専制者に盲目的に服従して、彼等の爲にはボルシェビズムの國を擁護する用意を持つて居る。何等の斟酌を知らず、眉一つ動かさず何干と云ふ屍を埋める機械人——彼等は此の機械人の番人なのである。

原住民の文化が幾分なりとも廣汎な層を把握した所では、經濟帝國主義と云ふ此のボルシェビズム的方法は効力がなかつた。近東地方の總ての國、回教國のあらゆる地方、トルコ・アフガニスタン・ペルシア等は、一時その侵入を蒙つたが、その後はソヴェトが屢々ヨーロッパに對して打つた外交芝居を此處でやつても、遂にボルシェビズムの煽動家を閉め出してしまつた。此れ等諸國はボルシェビズムが歩んだ道——ビザンソより唯物主義に至る東地中海文化の道——を、ソヴェトと共に辿らないのみか、前世紀に於ける回教民族の悲惨な歴史から教訓を得て、ビザンチン治下の、前世紀東地中海住民の本質の中に忍び込んで居た弱點を次第に克服し生活革新を行ふに至つたのである。

スペインの内亂

東地中海に於ける此の敗北は痛烈であつた。ボルシェビズムの帝國主義は先づ第一に、嘗てロシア皇帝がとつた道と同じ道——モスコからコンスタンチノープルへ——を辿つて行つた。すると中間のウ

クシイナが障礙となつた。其處には自然的、人間的な抵抗が未だに幾分残つて居た。又トルコは煽動に翻弄されなかつた。併しボルシェビズムはそれで斷念したわけではなく、煽動と権力の拳を振つて、地中海及びイタリヤを跨いでスペインに向ひ、其處で背後へはロシア人の古くからの野望の目標に對し、北部へはフランスに向けられて、更に前進を續けて居る前哨を奪取しようとした。かくてスペインの内亂が勃發したのである。

一九二九年プリモ・デ・リベラが没落した直後、ボルシェビズムはそのスペインに於ける工作に著手した。後日全く公然と、各種の國際會議の演説中に引用された第三インタナショナルの覺書から見るとソヴェト政府の見たスペインの事情は、次の様なものであつた。即ち、所有權分割の不公平がそれである。スペインはプリモ・デ・リベラ獨裁以前には、多くの内部的「革命」の犠牲であつた。内部的革命と云つても、事實は政權獲得と、徵收租税の沒收の爲に起された、若干の財團の暴動に過ぎなかつた。スペインのカトリック僧侶の一人々は、國家の社會的窮迫に對して、カトリック教會で普通されて居るより遙に理解を示しはしたが、教會は改革を行ふ事が出来る程強い意思を持つて居なかつた。若しさう云ふ意思を持つて居たら、教會は當時恐らく國を完全に我物にする事が出来たであらう。教會は國をしつかりと掌中に收めて居るものと思つて居たから、事態を餘り放任し過ぎたのである。信仰のお蔭で世界戦争迄ちつと隠忍されたカトリック教の生活原理を國民は漸く疑ひ始めた。そして工業化と共に大都

市にはヨーロッパの風習が輸入され始めた。固着した風習の中で把握されたスペイン人の生活をほんの少しでも緩めさへすれば、國家解體の毒は誰に對してもつき込む事が出来たのである。

ボルシェビズムはめざましい巧妙振りを發揮して前進した。政治的大會合も開催されず、差當り大衆示威運動も試みられず、性的挑發の夥しい書物がスペインの諸都市に送られた。道徳の紊亂と共に「自由への意思」が宣傳され、スペインの子女は原始的本能の虜となつた。此の國を政治的に占據する場合に、スペインにとつて好都合な道徳の強制が行はれて居るが、スペイン人を「自由を愛する政黨」即ちボルシェビズムに依つて、此の強制から解放してやらう、と彼等に約束させたのである。田舎では土地の所有者（貴族にせよ教會にせよ）ばかりを誹謗する煽動が行はれた。

續いてボルシェビズムは議會制度を利用し、政治の危機とか、議會中の妨害等は宣傳の用具になつた。ボルシェビズムはその懐柔して居る急進社會黨の議員に依つて、その次第に議會に於ける多數の議席を占め、その三分の一を得るに至つた。かくて過激な動議が提出され、色々の法律が要求された。それが否決されると、都市の民衆は煽動されて示威運動をやつた。新聞へは強力な放射線を送り、國家解體の思想を宣傳する文學のお蔭で、スペイン人は既に道徳の自然的羈絆から解放され、男女は相携へて街頭の政治的示威に赴いた。此處に於て當局は女子を射殺せしめたが、それは憎惡を煽る信號となつた。一地方から又他の地方へと滔々として此の煽動工作は擴大して行つた。

同様に、モスコ政府の證言から明かにされる所によると、目的は始めから確立して居たのである。一切は一枚のカルタに賭けられた。ボルシェビズムがスペインを帝國主義的全計畫の範圍内に於ける、ソ聯邦の一メムバーにする様な事があれば、爲にイギリスは一矢を與へられる事になるであらう。ボルシェビズムはピレネーを越えて南フランスを、それからバリを、占據しようとした。ドイツとポーランドを東西から包圍しようとするのである。人民戦線政策の範圍内に於ける共產主義煽動に依つて、フランス國民を叩き直し、以て南方からフランスにボルシェビズムを滲透させる目的に添はせようとしたのである。

一九三六年二月、ボルシェビズムはスペインに於て決定的な選舉を敢行したが、結果はボルシェビズムにとつて香しいものではなかつた。スペインは先づその半が赤で、半が白だつた。ボルシェビズムの指令を受けて既にマドリッドの政權を握つて居た人々は、二次選舉乃至新選舉をやり、結果を改竄して多數の赤を獲得した。それから此れもそのもとは既に周知の計畫に従つて、スペインの軍隊、及び此の國唯一の眞の保安隊たる市民守備兵を利用しての總暴動計畫が準備された。そして此の暴動は遅くとも一九三六年七月には始められる筈であつた。

最後の瞬間にモロッコのフランコ將軍が干渉した。彼は師團の將軍の一部の者を味方に獲得したのに過ぎず、空海軍と陸軍の一部は赤軍側についた。それにも拘らずフランコ將軍は、モロッコから祖國へ

の軍隊輸送の非常な困難を克服して、マドリッド近くに軍を進めた。其處で俄然足場が出来た。ソヴィエトはフランコ將軍の前進に不意を襲はれて、反亂計畫の範圍内での此の國の軍事的占領を、迅速に終結する事が出来て居なかつたから、フランコ將軍の本國侵入を前以て妨害し得なかつたのである。

併しソヴィエトはフランコ將軍が前進して居る間に、北部地方及び東部の全地域、並びに地中海地方に於て、軍隊の共產主義的編成を終つて居たばかりでなく、赤色衛兵を教育し武装させて居た。かう云ふ衛兵の中で服役して居る外人義勇兵の一部は、既に一九三三年以來バルセロナ、バレンシヤ、マドリッド、サラゴッサ、サラマンカ、セヴィラ、ビバオ、サンタンデル等に集まつて居た者である。ボルシェビズムと民主主義の煽動が言つて居る様に、彼等が獨裁者とファシズムに抗して、此の國の自由を保護する爲に來たのは、フランコ將軍のスペイン攻撃の後の事ではなくて、フランコ將軍が干渉する以前に、既に赤軍旅團の兵として、ボルシェビズムに募集されて居たのである。

ソヴィエトがフランコ將軍を敵として、スペイン防禦を引き受けると、此處にファシズム世界觀と唯物主義のマルキシズム世界觀との間に内亂が始まつた。それは行爲人と急進所有人の間の内亂であつて、後者は民主主義諸國の全所有人の中に、直ちにその同盟者を發見した。ヨーロッパを貫いて居る思想戦線はスペインでは今日でも尙武力戦線になつて居る。

スペイン國民は漸く事態の發展を除々に認識するに至つた。彼等は或時はヨーロッパに於ける發展に

全然觸れられなかつた場合があるが、その時は過激派や革命家に抗して、白い思想を持つて居た。又ボルシェビズムの宣傳の虜になつた時は、民主主義世界觀と、民主主義がマルキシズムの中に刻印されて急進的になつた世界觀との二つの他にもヨーロッパにはまだ第三の世界觀が有ると云ふ事を少しも知らなかつたのである。

十九世紀とボルシェビズムに對する二十世紀の革命は、前線が立つに至つて、始めてスペイン自身に始まつた。嘗て世界戦争も行はれた前線の一ヶ所に、戦争を營むと云ふ問題は、銃後に生活する人々(敵味方共に)から、或は莫大な物資の徵集、又は優秀な人的特質の徵用を要求した。先づ物資を持つて居たのは赤軍で、フランコ將軍は武器には非常に不自由した。殊に飛行機、重砲等の近代武器に於てはその感が深かつた。イタリア義勇軍の參戦後も、物質上の優越は常に赤軍側にあつた。それはソヴィエトが最後の考へもなく武器を供給し、又、フランスが誰憚るところなくスペインの赤軍と各國の混合兵團に、最新の武器を用立てたからである。

従つてフランコ將軍は、物質に抵抗する爲に人間を組織しなければならなかつた。彼は人間の日々の行動に依つて、經濟生活及び行政の新しい組織(特にスペインに於ては)に依つて、前線で戦つて居る人々を支持すると云ふ困難な問題の爲に人間を獲得しなければならなかつた。此の變化が始まつた。それは次の様な形になつて現はれて居る。即ち、スペインの若い娘達が教會の協力も借りず、社會的救済

事業に奉仕して活動して居る事、又此れと同様な組織に於て、男達が内亂中の秩序維持の仕事（以前は市民守備兵又は軍隊に委せられて居た）に奉仕して居る事等である。スペイン人は俄に國家からかうした仕事の義務を負はされる事となつたが、以前ならばこんな仕事を決して名譽の仕事としてはやらなかつたであらう。一言にして言へば、スペイン人は確固不動の戦線を要求する使命に直面して、最早民主主義的にも、純カトリック的教會的にもなつて居られなかつたのである。

革命軍側では先づ充分な所有を得て安心した。フランコ將軍は北部地方の占領も出来なければ、又此れ以上の進出も出来はしない、と革命軍の將兵は説明されて居た。もう時の問題に過ぎない、やがてフランコ將軍はスペインから放逐されるであらう、と云ふのである。併し此の豫言は實現されず、遂にテロが起つた。そしてソヴェエトの場合と同様、人間は機械にされた。前線に於てさへ兵に一種の自由が與へられたが、それは各國混合兵團の義勇兵や、スペイン軍所屬兵に對する顧慮を必要としたからである。彼等は若し壓制を受ければ、わけもなく武器を放棄してしまつたらう。のみならず、フランコ將軍、イタリア、ドイツに對して、又スペインの事實に着眼してフランコ將軍と事を共にして居る政治家に對して、人民戦線やあらゆるマルクス主義政黨がやつた煽動が敗北したのにも拘らず、革命軍は未だに餘命を保つて居る。

かくて二年有餘年に亘つて戦線が布かれ、スペイン人は相互に相争つて居る。ヨーロッパの兩前線――

――行爲人に對する所有人とボルシェビスト――は兵を擁して對立して居るのではなくて、一は非革命派に、他は革命派に助言を供し、援助を與へて對立して居るのである。彼等が此れにつき込んで居る所有は、實際出来る範圍より遙に少いものである。ボルシェビズムと民主主義とが、此の場合敵にして居る人間は彼等と同様な人間なのである。ドイツとイタリアがその援助を、モスコ、パリ、ニューヨーク、メキシコ等から赤軍に與へられて居る援助程強力のものにしようとしても、決して行爲人に據る事は出来ないであらう。スペインの人間は一部分が漸く變革の緒に就いたばかりで、所有人の敗北は非革命派のスペインでも未だ終結して居ない。差當りボルシェビズムだけは、何度侵入して來ても又々撃退されて居る。それは防禦であつて攻撃ではない。攻撃に至る迄には、行爲人の中に自己を覺醒させるべき自然力が足りない。スペインの内亂はヨーロッパで相闘つて居る多くの権力武力の鏡像を示しては居ないが、民主主義の弱點、その舊弊さ、その不撓性に對する教訓を與へ、政治的方法を問題とすれば、ボルシェビズムの残忍性を教へ、世界歴史を規定する者は、機械ではなくて人間であると云ふ事實を教へるものである。

回 想

民主主義諸國の民衆は、百五十年間も、所有人の獨裁をちつと堪へ忍んで來た。支配階級の所有人は、

彼等を總括して共同の仕事させずに、百五十年間も奴隸にして來た。民衆はマルキシズムの餘剩價値説に欺かれて居た。ユダヤ的マルクスの理論の自然に歸着する所はボルシェビズムである。ボルシェビズムがロシアを席捲したのは、ロシアには神祕的觀念に依つて、心的にも靈的にも自由にされる、無意思の大衆が居たからである。東方的思惟はギリシヤ的正教的理論を凌いでボルシェビズム打刻に影響した。英雄性に對する商人氣質——非アリアン人種の東洋とアリアン人種の西洋との、此の太古からの對立は、ユダヤ的ボルシェビズムの破壊本能と、アリアン人的行爲本能の對立となつて、再びヨーロッパに突如としてその姿を現はしたのである。

「微用と云ふ事を微用してしまふ」のは永遠の幸福である、と云ふボルシェビズムの馬鹿々々しい理論は、ソヴィエトでは數ヶ月にして失敗に歸した。それにも拘らずユダヤ人間の獨裁はロシア國民を支配して居る。ユダヤ人獨裁はロシア人に洩り知れぬ苦惱を齎し、あらゆる計畫をやつては挫折した。而もそれは歐米諸民族の多くのものから、その靈魂と行爲意思とを奪つた。ソヴィエトのボルシェビズム獨裁と全世界に於ける第三インタナショナルのボルシェビズム権力が、完全な終局の瞬間に救はれて、餘命を保ち得たのは、西歐民主主義諸國の政治家のお蔭であつて、彼等はボルシェビズムを全滅から救ひ、ユダヤ人やフリー、メーソンの關係グループの意思に服従し、ソヴィエト政府と協約をしたのである。かくて行爲人は抵抗と攻撃と云ふ二つの戦線を押しつけられた。即ちそれは、民主主義及びボルシェビ

ズムに對する抵抗であり、所有人及び機械人に對する攻撃である。

民主主義とボルシェビズムの同盟の端緒は世界戦争終結以來の事であるが、ボルシェビズムは民主主義との公式な親睦關係を、一九三四年に至つて初めて獲得した。併しボルシェビズムは實際には既に一九二一年に民主主義諸國から承認せられ、民主主義の此の決定の代價を、生命に依つて、或は生存の喜びを破壊する事に依つて支拂はなければならなかつたのは、ソヴィエトの何百萬と云ふ人々であり、又ヨーロッパの何百萬と云ふ人々であつた。

我々はヨーロッパ、合衆國、ロシア等のかゝる人々の苦惱を、スペイン内亂に至る迄觀て來た。ボルシェビズムの破壊意思の基礎としての残忍な侵略意思は、一九二二年以來ヨーロッパ諸國及び過渡期のドイツ議會に於けるあらゆる行動以上に、強烈にヨーロッパの歴史を特徴づけて居る。ボルシェビズムの政治的及び軍事的出陣に於て、又、ヨーロッパ各國の民族的力量を内部的に攪亂する爲に、暗黒界と云ふ戦場で行はれた闘争に於て、世界戦争のあらゆる經驗が利用され、實際、民主主義諸國は、今日に於ても相變らず此の危険に曝されて施す術もなくなつて居る。そして依然としてソヴィエト政府を窺つて居る。ボルシェビズムは唯一の敵——ナチズムとファシズム——を持つて居るのに過ぎない。

我々は第一章に於て民主主義の歴史を辿り、民主主義の唯一の目的はヴェルサイユ條約の現状維持、即ち世界戦争以來の民主主義の所有の保護にある、と云ふ認識を得た。民主主義はその爲に實力と好意あ

る勸告を用ひて戦ひ、所有庇護の爲にボルシェビズムと同盟を結んだ。かくて民主主義は三つのものに對して責任を負はなければならなくなつて居る。第一に歐米諸國民が二戦線に分裂した事、第二に行爲人の革命——あらゆる民族は同時に、又同じ程度に、此の革命の無限の恩澤に浴する事が出来たのであらう——が一定の限界内に抑留されてしまつた事、第三に行爲人の實行が、國民運動と云ふ刻印で現はれたのに過ぎないと云ふ事、此れである。

民主主義は第一にヴェルサイユ條約に依つて、團結の代りに權力を置き、第二にボルシェビズムをその自然的崩壊から救助し、従つて西洋に對するマルキシズム的ユダヤ的煽動、所有意思の低劣な形式、東洋的ユダヤ的貪慾を援助し、又第三には此のボルシェビズムの獨裁と共に、行爲人絶滅のみを目的とする同盟を結んだのである。

かくて民主主義は一九三三年（我々は歐米民族史を評價して、漸く此の年迄立ち至つたのだ）に至る迄、人類文化を危くする爲に、即ち戦争の爲に全力を盡し、平和の爲には何等なす所もなかつた。

歐米諸民族の歴史は、他日人類史の能動的方面に、民主主義とボルシェビズムに抗争した人々の功績のみを記録するであらう。

第四章 行爲人の勝利

清い精神を以て既に政治的尺度なりと考へるならば、民主主義ボルシェビズム、ヴェルサイユ條約、權力等に對して、斷乎抗争せんとしたドイツ人は一九一九年に約五百萬も居た。一九三三年三月五日、千七百二十萬のドイツ人はアドルフ・ヒットラー支持の投票をなし、三十萬のドイツ人が、舊國旗の下にある闘争戦線の人々に投票した。國會は前者に選ばれた議員で多數を占められ、ヒットラーは彼等から絶體委任の法律を與へられた。そして此の獨裁權こそ、彼に對して合法的にドイツ國民を獲得せしむる道を拓いたものである。

併し此の一九三三年三月五日には、政黨國家の思想から脱け切れないドイツ人が、まだまだ千四百二十萬も居て、彼等は舊政黨、社會民主黨、中央諸黨の候補者を選んだ。議會出火事件があり、又目覺めつゝあるドイツ人が、數千の事業團體借家團體となつて、反ボルシェビズム的熾烈な氣勢を揚げたのに拘らず、一九三三年三月五日には、殆ど五百萬の人間が未だに共產黨候補者を選挙し、残る五百萬人は反對の立場をとつて棄權したのである。

舊帝國と新國家社會主義ドイツとの間に横はる、國民意思統一の象徴的一幕は、三月二十一日ポツダムへの衛戍教會に行はれ、かくてドイツ人の革命が始まつた。此の革命は歐米民族の歴史、アリアン人

の行爲意思の最初にして且つ眞の動員である。東地中海と抗争して、肉體的精神的完成の均衡と調和が達せられ、従つてアリアン人の勝利が達せられたのは、ギリシヤ文化華やかに時代であつた。古代ローマの盛時には、國家と國軍に關して、アリアン人獨特の峻嚴な掟が世界を支配して居た。最初の帝國は、東洋的ユダヤ的思想の氾濫に抗して、アリアン人の土地を確保せんとする意欲に充ちて居た。此れが十字軍及び對法王權闘争の意義だつたのである。宗教改革に於ては、外國の制度、東洋的勢力、教會の所有慾等に抗する民族の國民意思が覺醒せられ、自由戦争に於ては壓制者に抗して、行爲意思を有する青年の行進が行はれたのである。

あの怖るべき作用を持つて居る原則——今日では民主主義に、當時は東地中海の諸勢力即ち舊教會とナポレオンに特有であつた——に對する防禦と行爲意思の動員とは、依然として國民社會の一部分に限られて居た。行爲意思の闘士は常にあらゆる自然的生活條件を自由にして居た。先づ飢餓と失業に對して次に行爲意思の社會を構成すべき人間を攪亂せんとする行爲に對して抗争せんとする義務は、ギリシヤ人、ローマ人、ドイツ皇帝軍、解放戦争の義勇兵も、此れを知らなかつたのである。

アドルフ・ヒトラーは行爲意思を覺醒させる爲のあらゆる前提を先づ一時に作らなければならなかつた。それから此の意思に形態と效力を與へてやらなければならなかつた。それと共に彼がやらなければならなかつた事はまだ多くあつた。外來思想の虜となつて居る同胞を解放する事、階級對立の克服、

國民をして如何にして共同體に到達すべきかを知らしめる事、失業撲滅、國民扶養の基本再建、一國民の健康に必要なあらゆる手段を盡し、國民の生活の種種の原則を教へる事……等である。此れにあつてらるべき期間は極く短いものであつた。此の大事業が數ヶ月にして成るか、或は反動——マルキシズム及び民主主義——の勢力が逼り来るか、その何れかであつた。國民社會主義の人間に依つてなされた革命が始まつてからも、尙多くの人々は、やくもすればかうした反動勢力を迎へんとする状態にあつたのである。

所有人からの離脱

アドルフ・ヒトラーは此の仕事を七ヶ月で仕遂げた。一九三三年十月、國民社會主義統一國家最初の人民投票に際して、彼は四千三百九十萬の投票有権者から四千六十萬の賛成投票を集める事が出来た。「反對」投票をした者は僅か二百十萬に過ぎず、約百萬が棄権した。殆ど四千百萬の大衆を一纏めにして、一舉にしてアドルフ・ヒトラーの下に赴かせた此の人民投票に當つて、いはゞ國家社會主義の成功（若しさうならそれはドイツ國民を欣喜雀躍させたであらう）が、前提となつたのではなくて、此の決定の基礎をなしたものは、一九三三年の方策の中に與へられて居る行爲意思の證明と、ヴェルサイユ世界からの轉換——此の轉換は國際聯盟退、軍縮會議退に依つて特徴づけられて居るものである——であつ

た。それは實際、諸君は總統の欲する所を了解したりや？、と云ふ問を提出して、ドイツ人の心の戸を叩いたのに過ぎなかつた。又それは國民社會主義ドイツに於ける、最初の黨大會の教程が理解されたか否か、國民は團結して民主主義とボルシェビズムに抵抗する意思を持つて居るか否か、と云ふ問題に對する試験であつた。

ベルサイユの世界に關與し參加する事は、十五年を通じて民主主義對外政策の最高哲學であつた。外國の模倣、外貨に對する渴望——それはドイツに於ける民主主義經濟政策の意義であつた、ところが今や國民社會主義者は彼等獨自の道を歩んだ。所有人を伴はずに、否、所有人に拮抗してゐる。

民主主義の總ての「經驗」は抹殺され、「人間は善なり」と云ふ認識が再び採り上げられた。併し此處から引き出された結論は、善なる人間は世界の萬物を所有すべきである、と云ふのではなくして、寧ろその反對に、善なる人間は、假令此の世界の大部分の財貨を拒まれても、彼が要求すべき總べての事を爲す事が出来る、と云ふのであつた。

ところで人間はほんとうに「善」でなければならぬ。人間を此の世の最高の生物たらしめたあらゆる特性は純潔に保持され、永續的な形成過程に依つて更新されて行く必要がある。

民族の純潔は決定をなし、血は人間を造る。そして民主主義の所有人と自由な行爲人との相異は、所有が前者からあらゆる人間的特性の純潔を奪ひ、行爲が後者を永遠に造り出した事、それである。前者は

享樂を生命とし、後者は闘争を生命とする。所有とは行爲によつて獲得されるものではなく、何等の行爲なく、機械的勞働に依つて利を擧げられるところのものである。所有は所有人に依つて無數の原子に分解され、彼方此方と推し動かされて利用される。勞働と「闘争」とは、所有人にとつて、所有の出来るだけ多くの原子を獲得する爲の手段に過ぎない。行爲人は共同社會に目を注ぎ、生存に於ける自己の地位の不動さを見つめて、全く獨立獨歩、勞働し闘争する。彼が「所有する」ものは單に目的の爲の手段に過ぎない。彼は物質の支配者として、己が内部の力に依つて此の世の財貨と力とを増加せしめる。社會はその業績に報ゆるに、彼に物質及び力の當然な分配を行ひ、此の分け前を以つて、更に新なる功績をなすべく利用せしめる。此れこそ「公益は私利に先んず」と云ふ信條の社會主義である。

人種的に純潔な人間が一切である。それは決して筋肉の器具でもなく、投機者でもない。ヒトラー總統は最も悲惨な形態をとつた人間、即ちボルシェビズムの機械人に、最も皮相な形態をとつた人間に、最高の形態の人間を對立させた。新たに造られた此の人間は意思と云ふ共同體に於てのみならず、教育行爲、責任と云ふ共同體の中でも總括された。此の共同體の中で決定的役割を演ずるのは統率であつて、それはドイツ史の盛時の例に洩れないのである。

最高原理は次の通りである。

黨は國家に命令する。併しそれは獨裁政治を行ふ黨としてではなく、常に國民の意思を、國家の最高

幹部に傳達する組織としてある。ナチス黨の最高指揮者は如何に小さい社會内の國民の意思をも探索する。國民社會運動のあらゆる組成内で、何百萬と云ふ義勇援助者が、前述の偉大な機構の中でかうした仕事に従事して居る。同時に黨、國家、經濟、保健事業、家族扶助、身體鍛鍊機關、教育事業等が、多種多様な組織形態に依つて互に結合されて居る。そしてそれに依つて階級、利害關係者、經濟團體、思想界等の對立は完全に除去される。ドイツ人に對する國民社會主義的教育事業は四ヶ年計畫と共に進捗した。外面的所有獲得の競争に代つて登場した職業競争は、幾多の人間が實際自分達の中に、再び行為意思を感じて居る事を明かにした。

我々は國民社會主義ドイツに於て、所有の代りに私有を置いたが、此れは社會の一員としての個人に、職業従事の爲や、或はその任務（それは益々高潮して行くその行為意思の衝動に依つて、國家の爲の無数の任務から、自ら得たものである。）の範圍内に於ける生活の爲に必要であるから與へられたのである。ナチスドイツに於ては、多くの人間の力が對立的に連結されて居るのではなくて、相寄り相助け、結合されて居るのである。

此處に一例がある。フンク藏相が恰も一九三八年九月の政治危機に當つて、バルカン及びトルコへのドイツ經濟進出の目的で旅行すると、その收穫を評價してロンドンタイムスは次の様に書いた。ナチスドイツの藏相は、いはゞ英國國民の全權委員とは全然別個の者として此の旅行にのぼつた。氏は一人で大

臣、銀行家、商人、生産者、交通専門家を兼ねて居た、云々。此れで共同體の外形が一瞥されて居る。事實、國民の統一は、その行為意思の連續的表明となつて、本質的に益々強くなつて居る。外國では相對立する六七人の人々に分割されて居る多くの全權を此の大員だけが唯一人で兼ねて居るのではない。商品製造する労働者、商品として買はれる農業生産物を消費すべき國民、商品を販賣する人々、價格を決定する人々、原料供給者、生産指導者、各職業部門、貨幣經濟の高度の經營指導、全經濟政治指導、否、軍事的國家政治的指揮——此れ等のものが總て一同體に總括されて居るのであつて、其處には最早對立はあり得ないのである。それは「總力」國家乃至「全體主義」國家の獨裁ではなくて、各任務に對する一國民の力の集合であり、獨創的管理の爲の極めてよく組織された原理なのである。

ナチスドイツの此の行為意思は、貨幣經濟の形式を打破し、國民經濟のあらゆる學說、あらゆる經濟實驗を破壊した。かくて資本主義經濟の缺陷は除かれ、その長所は増大した。ドイツ人の行為意思が覺醒された事は、實に幾多の技術家化學者の力、否科學的研究の活動力さへも、従前に守られた物質の限界を踏み越えた程であつた。原料の生成乃至獲得は、從來植物の生長や地表の地質學的發達にまつたものであるが、此の原料の代りに、物質上では殆ど無から得られ、力の點では唯、人間の精神的創造から生れる材料を用ふる事——それが我々には殆ど成功しかけて居る。彈性ゴムからとれるゴムは、太陽、水、耕地、及び人爲の産物であるが、合成方法に依つて造られるゴムは、原則的には此の原料とは殆ど

無關係に、寧ろ生長した彈性ゴムより、遙に人爲に關係して居るばかりでなく、行爲意思及びその創造的
的形成と密接に結び付いて居る。

我々は技術、經濟、貨幣制度、國家行政等、人間の生成、生長、繁榮、活動を成すあらゆるものを革命的に變革したと云ふべきである。

自由の獲得

此の新しいドイツの人間を得て、アドルフ・ヒトラーは一九三四年から同五年に亘つて、ドイツ國粹の自然的限界と自由を得んとする闘争に赴いた。彼は最初何等の防禦力もなく、僅かに人間とその信念を以て、此の闘争をしなければならなかつた。一九三五年一月十三日、ザールのドイツ人の力で、ドイツの土地は人民投票に依つて奪還された。それはザールへ侵入して來た外國移民の決定的な敗北であつた。彼等はザールブリュッケンやその他ザール地方の各所に、ナチズムに對する煽動及び政治的攻撃の本部を創設した。此の煽動機關は、西歐諸國の財政上政治上の援助に依つて組織されたものであつた。又此の投票の勝利は、ナチ革命の直後、宗教上及び政治上の清算を持てあまして居たザール地方を、その目的の犠牲にしようとしたボルシェビズムの敗北でもあつた。國際聯盟の方法はザールに於て始めて敗北した。ドイツの人間の此の勝利は、又舊教教會の二三の牧師にとつて苦々しい教訓であつた。

(194)

た。彼等はドイツの土地に於けるナチズムが、ドイツの人間に對して恐らく一敗を喫するものと考へて居たのである。

此の投票は同時に外交的軍事的大成功でもあつた。世界戦争から得た教訓に依つて證明された事は、その住民が到る所で國家的意識に醒めて居るヨーロッパの様な所では、彼等が血液上その屬する民族に歸屬せんとする國を、實力を以てさうさせまいと固執する事は不可能である、と云ふ事實であつた。フランスがヴェルサイユに於て、元々フランス領として要求したザール地方を領有出来なくなつた時、此の地方を聯盟の委任統治地とし、十五年後にはフランス領にし得ると云ふ牢固たる期待を以て、後日の人民投票に委せると云ふ計畫を實施したのである。ザール地方は他に何等の發展の可能性も考へられる事なく、フランスの軍事政策的組織に編成されてしまつた。メッツからザールブリュッケンを経てカイゼルラウテルンに至り、其處からライン河に至る地方を、フランスは軍の戰略的開進路にしておきたかつたのである。ザール地方を取り巻いて要塞地帯をつくり、ザール河畔の土地を此の要塞地帯の前面地たらしめ、佛軍のみの自由になる地域にしようとした。軍用道路が建設され、金で買はれてフランスの手に歸した工業と鑛業の管理方法は、戦時に於てもフランスの用に供され得る様な仕組にされた。ドイツ人はフランスの此の軍事的計畫を、漸く投票によつて無に歸せしめたのである。彼等は同時にその明白な裁決に依つて、獨佛間の清淨な國境を劃定し、かくて兩國平和に大なる貢獻をなした。此れこそ共

(195)

同體に一步を踏み出したドイツ國民の最初の成功であつた。

ロンドンとパリでは此の事件は未だ理解されて居なかつた。フランスに對する、此れ以上の領土的要求は斷念したと云ふ總統の言葉だけは承認されて居た。問題になるのは、以前パリ・ベルリン間で折々試みられた「諒解」である、と考へられたものだから、此處に新しい條約交渉が始められた。併しそれはナチスドイツの自然的目的設定とは凡そ矛盾するものであつた。何故ならばドイツは、丁度時を同じうしてポルシェビズムと軍事同盟を完了したフランスの様な國とは、凡そ條約締結など云ふ事は出来なかつたからである。ヒトラーは一瞬と雖もかゝる條約交渉には縛られずヴェルサイユ條約からのドイツの完全な解放、ドイツの平等權復活、自然的國境の制定等の計畫遂行に邁進した。英佛政府が未だベルリンで條約提案を交渉させて居る間に、ヒトラーは一九三五年三月十六日、ドイツ國民の國防の自由を宣言した。

ザール人民投票に始つた政治的成功は著しくその効果を擴大した。フランスも、英國も、ソヴィエトも動員を行はなかつた。永い事遂巡した後、英佛伊三國はストレーザで會議を開く事に意見の一致を見た。ムッソリーニは民主主義と提携して、その外交政策の目的を達せんとして最後の試みをした。彼の外交政策は、數年來あらゆる事件に就いて彼が斷平として宣言して來たもので、それはとりもなほさずヴェルサイユ條約の完全な修正と云ふ事であつた。ストレーザでは、各國は又々ロカルノ條約を恃み、ドイツ國境の擴大に對する保障を決議したが、その際ソヴィエトはほんの末席を汚したのに過ぎなかつた。パリでは對ソヴィエト軍事同盟が固執され、ロンドンでは此の同盟をよそに、四ヶ國條約を續行せんとする試みがなされて居た。かうした傾向は、ドイツ民族をして此れ以上勢力を發展させる事の出来ない様にしようと思ふのであつた。

聯合國は何等ドイツを攻撃する事なく、何故にドイツの國防の自由を默許したか？と云ふ問題を提出するならば、此れに對しては唯一つの明白な回答があるばかりである。それは即ち、彼等は責任を感じたからである、と云ふ回答に他ならない。軍縮と云ふ嘘八百の遊戯は、各國民に餘りにも見抜かれて居たから、再軍備のドイツに對して、彼等を立ち向はせようとしても出来はしなかつたであらう、ドイツ民族共同體の價値は、實際的政策にとつて、個々の問題を遙かに飛び越えて現はれて來たのであつた。ナチスドイツの任務は、今やとりもなほさず次の様な事になつた。即ち、同時に新しい國防軍を速かに完成して、以て民族共同體を強化するの必要——此れである。

それ故に國防自由の宣告に次いで、ニルンベルク法令に就いての國會の決議が行はれ、此の法令に依つて、ドイツ國民の團結した共同體の行爲意思に對立するあらゆる障礙は除去せられ、人種的健全化が始まつたのである。

相次ぐ法令と方策は、ドイツの責任者の眼を、所有の蓄積と云ふ目標から、共同體の意思及び全國民

の力を強化すると云ふ目標に、完全に轉せしめる事となつた。我々が自動車道路、新工業造營物、學校事蹟記念碑、集團家屋等を建設したのは、金錢や材料を以てしたのではなくて、人間を以てしたのである。一九三六年の秋、重大危機豫防の爲に、四ヶ年計畫を以て此の奪回された力の動員が始まつた。重大危機、それは兵、封鎖、糧道阻絶等に依る對獨豫防戦のそれである。

此れより先、一九三六年三月、ヒトラーの非武装地帯奪還の決意に基づいて、ドイツの國境はラインから西方フランス、及びベルギーに向ひ、ドイツ民族の自然的國境に迄推し進められたのである。

假令政治的にはフランスに屬さなくても、軍事的にはフランスに役立つ地域を獨佛間に介在せしめる事——此れはルドヴィヒ十四世以來のフランスの政策原則であつた。そして此の原則はヴェルサイユ條約にも挿入された。だからしてライン左岸をフランス歸屬させる代りに、例の非武装地帯が作られたのである。ドイツから全然獨立した特殊なラインランド諸國が實現されたとしたら、クレマンソーは寧ろそれを欲したであらう。併しそれはヴェルサイユに於ても、又分離運動を以てしても成功しなかつた。フランスの軍事政策は、ドイツが軍事的に支配し得ない地域、即ちとりも直さず事實上支配し得ない地域に依つて、既に充分な奉仕を受けたのである。

ヒトラーは一發の砲も打たずして此のフランスの軍事政策に、たつた一日で結末をつけてしまつた。此の行動に對する英佛の回答は、單に國際聯盟をロンドンに招集したゞけであつた。彼等は攻勢に出よ

うともせず、防禦の態度をとらうとさへしなかつた。ロンドン會議の目的は、議會の動搖を静め、國民に對して言譯ばかりの體裁を作り、ナチスドイツの完全な勝利を容易には承知しない人々を抑へる爲であつた。聯盟内のソヴィエト及びその一味の者がそれであつた。

併し此の度はロンドンに於ける聯盟の妥協政策さへ挫折した。英伊兩軍が占據すべき十五料の中立地帯を、ドイツに無理にも承認させようといふイーデンの提案は、全世界の嘲笑の中に水泡に歸した。少くとも評議員の少數の者を、抗議的行動を起たしめようといふフリットツインフの試みも同様に失敗した。かくて英國は、(ポールドウインの有名な言葉を籍りて言へば)最早その國境をラインに持つ事が出来なくなり、又フランスは、將來獨軍がマデノ線(その軍事的意義は、本來東方對獨作戦の軍の爲の後方確保線たるにある)の前面地に來る事を期せざるを得なくなつたが、ナチスドイツが全然獨力でなし遂げた事はかうして甘受されたのである。

ヴェルサイユ條約の軍事上のあらゆる規定を、斷乎として修正したのを、英佛がかうして敢て甘受した内的原因は、英佛兩參謀本部が、對ドイツ攻撃の無思慮を悟つたその認識の中に發見されるに過ぎない。ところで今や世界戦争の第二の教訓が明かにされる事になつたが、それは民主主義の權力に顯はれたのではなく、ドイツの力に現はれたものである。即ち、軍を進める爲には、軍事的行動の目標を確然と持つて居なければならぬ、と云ふ事である。大戦中ドイツは遠く東洋に迄軍を進めたが、何等一定

の目的を持つて居たわけではなかつた。ドイツがその全力をヨーロッパに集中しなければならなくなる、と勝手に東洋の占據は殆ど無價値なものになつた。又フランスは一九二三年、ヨーロッパに於ける工業の心臓たるルール地方に進軍したが、何等得る所なくフランスの一將軍は或る日、食事中に退軍命令を發せざるを得なくなつた。而も經濟的にも政治的にも、否精神的にも完全に無力にされた國民を敵にして此の始末である。フランスの參謀本部は此の教訓を決して忘れては居ない。

ドイツ民族の共同體、ナチズム三ヶ年間の成果を再び破壊する爲に、フランスは一九三六年に軍を進める事が出来た。たとへば一九二八年、佛軍がドイツを占領したとすれば、ライン沿岸に分立國家を建設し、ベルリンの北ドイツに對するものとは別の協定を、恐らくミュンヘンの南ドイツと結ぶ事が出来たであらう。その頃政黨組織の表面に居た一群の人々にとつては、ドイツ國民の統一などは、宗教上乃至經濟上の利害關係に對する關心程大きいものではなかつた。一九三六年には最早ミュンヘンにフランスの公使は居なくなつた。マイン線に於けるドイツの分割はすつかり問題にならなくなつて居た。一旦緩急の場合にはナチス國民の方はフランスの軍事的権力と相對峙した事であらう。併しバリ及びロンドンの責任者、殊に將軍連は、既にその常時にも賢明な態度をとつて、武器の力と新しいドイツ人の力との間の決濟を試みようとはしなかつた。彼等は此の鬭争を敢てしなかつたのである。

ヴェルサイユの終極

同時に民主主義の外交官は、彼等がそのヴェルサイユ主義の決定の爲に試みて來た鬭争に敗れた。彼等はイタリヤに對しては、ヴェルサイユ條約の強制制度を適用して一敗を喫し、ドイツに對しては、ドイツ人がいつまでヴェルサイユ條約の限界に相並立して居るなら、永久に此の限界の兩岸に分立させておかう、と云ふ主義を擁護して、遂に敗れざるを得なかつたのである。即ち、ムツリニーはエチオピアを獲得し、制裁制を撃破した。ヒトラーはオーストリアを獲得し、それに依つてヨーロッパに於ける民族權の爲に、戦勝の譽に輝く鬭争を開始した。元來はかけ離れた二つの本營から、ドイツとイタリヤに反ヴェルサイユの旗を擧げて進軍し、隣接する戰場で相會し、共に勝利を得、且つ同盟した。併し此の同盟は敵を撃滅させる爲ではなく、敵陣營の弱點を克服する爲であり、兩國の内的な力を強固にする爲であり、ナチズム及びファシズムの形となつて確證せられ、世界平和を確保する唯一のものたる生活原理を實現する爲であつた。一九三六年は獨伊親善關係の誕生の年である。此の友誼的關係は、一九三八年の春、過去のあらゆる誤謬が拭ひ去られて後に確證されたもので、その目的とする所は、物資の拘束から解放された人類の赫々たる將來である。それだからこそかうして此の親交の直正が認められたのである。

ムッソリーニはストレーザ會議の直後一九三五年四月、エチオピア攻略の用意をした。彼が問題とするのは、未だ嘗てヨーロッパの一強國の支配を受けた事のない、アフリカの一領域の占據のみではないのを、彼は断じて疑はなかつた。彼はイタリアの地中海支配権を宣言したのである。英國は此れに對して、ヴェルサイユ條約及び聯盟規約からその自由になる政治的權力を用ひた。イーデンはエチオピア王救助の爲の聯盟の責任を考案したが、それはエチオピア王に、事實上の權利乃至は似而非權利を與へてやる爲ではなく、最初の制裁戦を行ふ爲であつた。イタリアに對して、政治的經濟的全力を擧げて拮抗した事を對獨制裁適用の一種の前奏曲たらしめようと云ふのであつて、それは(ドイツの)國防の自由の宣言以來、英國が考慮して居たところのものである。

一九三五年及び一九三六年の制裁戦は全然失敗に歸した。ムッソリーニは糧道封鎖戦——婦女子の健康を破壊して、一國民を擾亂すると云ふ最も卑劣な方法——に抗して勝利を得、制裁戦につきものの政治的煽動をも克服した。英佛は此の制裁戦に於て、四度ボルシェビズムと協同戦線を張つた。何故ならばソヴェトが煽動指導者だつたからである。聯盟決議賛同者獲得の爲には、どうしてもソヴェトの手を借りる必要があつた。ユダヤ人フリーメイソン秘密集會所出身のボルシェビズム代理人たるベネツシュ及びチャレスキューは、決議、表決に際して、常に聯盟の代辯者となつた。ムッソリーニは民主主義とボルシェビズムの共同方に對して、恰もヒトラーが國防の自由獲得と非武装地帯獲得の闘争に用

ひた力と同様な力——イタリア人の力——を用ひたのである。聯盟の制裁戦に對するイタリアの勝利には、地中海の主權者たらんとするイタリア人の意思と、イタリア兵の勇氣とが決定的役割を演じた。ドイツが既に世界大戦中一度越さねばならなかつた峠、而もその取扱ひを誤つたが爲に、遂に打ち勝つ事が出来なかつた決定が、此度はムッソリーニの面前に横はる事になつたが、それは個々の點に於て、ドイツの場合とは多くの相異點があつても、大局からすれば同様な事態であつた。

一九一六年、ヨーロッパに於ける武器及び軍隊の實力が略々同等になつた時、ドイツはベルダン占領に依る軍事的大成果の試みに全力を賭けた。此れに對して英佛は、經濟封鎖と政治的煽動を始めたが、就中合衆國の聯合國側引き入れの目的を以てドイツに對抗した。若しドイツ軍のベルダン占領が成功したとすれば、英佛が同時にドイツに對して行つた「制裁戦」は水泡に歸したであらう。何故ならば、軍事的決定の効果は、經濟的政治的處置の權力や、商業戦の効果より、常に大きいものだからである。

若しムッソリーニが一九三六年、イタリア兵に壯烈なエチオピア遠征をさせて、此の國を占據し、アブスアベバを奪取する様な事がなかつたとしたら、恐らく制裁戦は本質的に尖鋭化されたのに違ひない。エチオピア戦の永續と、此の遠征が終始失敗に終る可能性を示唆して、イタリアの生命たる諸種の原料及び農産物を供給して居る國々が、制裁推進機の中を巻き込まれる可能性を、恐らく英佛は持つた事であらう。比喩的な言辭を弄すれば、ムッソリーニはエチオピア戦でベルダン占領に成功した

のであつて、かうして彼は此の制裁戦を簡単に片付けてしまつたのである。

此の場合、ムッソリーニはドイツの支持を受けたとは云へ、戦勝を完行したのはイタリア國民獨りの力である。制裁戦にはドイツのお蔭で大きな缺陷が出来た。併し厳格な歴史の吟味と云ふ意味でさへ、今日次の様な事實は断じて疑問の余地がない所である。即ち、イタリア國民は、一九三五年十月から此の制裁戦の終極に至る迄、ヴェルサイユ條約に打勝つたばかりでなく、ドイツ國民が遂に屈した權力の集合——民主主義とボルシェビズムの同盟——をも、少くとも明白な理論を以て克服したのである。かくて世界大戦の教へた種々の經驗に就いての認識は、此の決定點から出發して居る。

武器が物を言ふ時でも、一國民はその友を得れば、民主主義が敵殲滅の道具に用ひるボルシェビズムの煽動にも、打ち勝つ事が出来る。イタリアは行爲人の闘争に於て、此の試練に堪えて、よくその成果を収めたのである。

ところで、英佛に對するイタリア國民の勝利が、人間の能力に歸せられるのであるから、今や同様な經驗、同様な力の根源、同様な目的を携へて、ドイツとイタリアは自ら相會する事となつた。一九三六年十月、チアノ外相はムッソリーニの委任を受けて、ドイツ外相とミュンヘンに於て談合し、續いてベルヒテスガーデンに於て總統と會談した。一九三七年にはベルリン・ローマ樞軸が政治的に完成され、爾後二國民は結束して民主主義及びボルシェビズムに敵對する事になつた。獨伊二國民は侵略を欲しな

いが、その平和の軍の爲に、即ちその同胞の全體の爲に、必要な生活圏を要求する。今日平和の戰士は、誰も皆事業の成功にとつて貴重なものである。各人はその肉體的能力の完成と、その精神的發展の爲に、あらゆる手段を必要とする。イタリアは地中海に生活圏を求め、ドイツはドイツ民族が所有する生活圏（ドイツとの貨物交換の爲に、自ら定められた經濟路を、ヨーロッパ各地に向つて持つて居る生活圏）を必要とする。ドイツは八千萬の國民の國を必要とするのである。

一九三七年から一九三八年にかけて、ヒトラーはオースタリー及びズデーテンドイツの、ドイツ併呑の使命達成に着手した。それはナチズム當然の道を、更に行進を續ける事であり、又同時の防禦でもあつた。何故ならば、ドイツ人をドイツ人から切り離すと云ふ事は、ドイツ壓迫のあらゆる分法が、一度適用出来なくなつた曉の爲に、ヴェルサイユで工夫された最後の闘争手段だつたからである。ヴェルサイユの聯合國は、非武装地帯に關する諸規定と、ドイツの北部、東部、南部の國境線制定に依つて、ドイツをドイツ人から引き離した。又、オースタリーに合併を禁じ、土地の自然的前提が、ドイツを防護して居る場所では、ドイツ人を他國民の方へ追ひ出したのであつた。

オースタリーをドイツに合併せんとする闘争は、ナチズムに依つて、實力行使を考へずに着手されたもので、第三帝國とヒトラーの運動とが一種の武器を用ひる事が出来たのである。一種の武器——それはヴェルサイユでは考へられもしなかつたものである。何故ならば、一九一九年の政治家達は、國民

性の力など云ふ事は毫も考へなかつたからである。ドイツ精神がオーストリア國民の魂の中に呼び醒され、オーストリアの一部のドイツ人は教育されて行爲人となつた。それと同時に、ドイツの敵の煽動は撃退されたのである。

又もドイツ史の法則が、——此の度は國境を越えて——証據立てられた。正常な統率は、人種的に血統的に健康な人間を適當な時に覺醒せしめて行爲人にする。若しヒトラーが居なかつたとしたら、オーストリアのドイツ國民は唯物主義に沈溺してしまつたであらう。そして他人の恵みで生きる乞食となつた事であらう。

ロンドンとパリでは、ムッソリーニとイタリアに對する投機が行はれた。制裁に於ける勝利が、イタリア國民をヨーロッパの民主主義原理から遙かに遠く、イタリア政府をヨーロッパ政治原理から遙かに遠く、引き離してしまつた事を認識するには、英佛の眼に依然として曇つて居たのである。「現實政治」が云々され、ドイツがオーストリアを占據した場合、ムッソリーニはそれを「甘受する」であらう、と考へられた。それは「政治的所有」に對する所有人の政治的投機で、彼等は、ムッソリーニは政治的所有を放棄しないであらうと考へた。彼等はムッソリーニを、ドナウ諸條約に照して考へ、又、獨・伊間の緩衝國の、國境に關する政治的意義の中で考へたのである。併しながら、此の場合始めて政治を行つたのは、最早所有との取引ではなく、行爲の作用であつた。政治的自由獲得の際に於けるイタリアの功

績と平等權獲得の際のドイツの功績とは、此の樞軸政策の基礎となつたものである。此の事は既に一九三七年九月、ベルリンの國民大會に於て、ムッソリーニが一億一千五百万のドイツ人とイタリア人を前にして語つたところである。今や此の行爲の力が實證されて、信頼が生れるに至つた。平和と友誼の爲の最も強力な武器（此の武器の偉力の前では、簡條も條項も、爽やかな海風の前の塵芥の様に飛び散つてしまふ）が現はれ、未來の安全を保證されて政治的決意を固めた。ヒトラーはムッソリーニを信頼し、ムッソリーニは總統を信頼した。

此れに反して、大ドイツ帝國に抗して行はれた防衛の最後の試みは、何と取るに足りないものであつたらう。ユダヤ人、變人、愚物等は「オーストリア的人間」を發見した。シュシュニツクはロンドン及びパリの「信頼」の人となつた。一九一九年からつひ最近に至る迄に集められた、あらゆる反獨宣傳の道具を用ひ、彼等はシュシュニツクを手先にして、オーストリアの人間を威嚇し、ドイツ人になるのを思ひとませようとした。紙を以て闘ひ、血に對して虚言をつくのだ！

シュシュニツクは決して勇敢な男ではなかつた。清算か妥協かに迷ひ、ベルヒテスガーデンに赴いてあらゆる對立の平和的調整を總統と協定したが、此の協定を裏切り、従つてドイツを裏切つた。畢竟彼は、ラインランドに於ける分離主義者を作つた以外には何等の政策を行はなかつた。分離主義者にとつても、ライン地方の人間は一見ドイツ人とは違ふ人種であつた。分離主義者とシュシュニツクにとつて、

彼が考へ出したドイツ人の特殊種属は、平和主義者であり、民主主義者であつたが、それは前者或は後者が、彼等のドイツ特殊國の爲の、未來の國家組織を想像したのと同じ様な思ひ付きである。

シュンニクの裏切りは、ドイツ的人間の革命を以て答へられた。ザイスンカートの求援の叫びをあげるよりも早く、グラーツ・ウィーン其他の都市町村では、シュンニク制度の権力に抗して、ドイツ的人間が反旗を翻し、獨力で地盤を築いた。此れこそナチスの闘士であり、ヨーロッパの軍隊で集められ、兵營で教育を受けさせられる様な兵とは、全く種類を異にしたドイツ國民の兵である。時宜を得る認識と勇氣を持つた政治的兵だつたのである。

ザイスンカートの求援に應じて、ドイツ軍が進駐してから、ドイツ國民が體驗した事は、總統が歡呼の中に、ブラウナウからリンツを経てウィーンに赴いた事である。まだある、覺醒した民族に對して、未だ嘗て授けられた事がない様な熱烈な喜悅に胸を躍らせて、國民はその力の啓示を體驗したのである。此の時代こそ、眞に人間が物質に打ち勝つた時代である。歐米諸國民の所有妄想と我慾の外皮に蔽はれて硬化した心臓は、突如として強く高鳴り、全ヨーロッパ人の血管に流れる血はその速度を増した。世界戦争のあらゆる屈辱恥辱の克服、ヅエルサイユの罪惡絶滅、國際聯盟の廢案、権力及び説得のあらゆる制度の敗北——かうした事を何人と雖も拒む事は出来なかつた。

一九三八年四月十日、大ドイツ帝國投票有権者の九九・六パーセントは、四千八百八十萬票を以て、

ヒトラー支持の投票を行つた。何百萬と云ふ歐米諸國民は、オーストリア國民與隆の此の數週間に、新聞で、ラデオで、又スクリーンで、男も女も歡喜の叫びをあげ、隨喜の涙を流した光景を知つたのである。

併し彼等の背後には、既に権力の擁護者が控へて居た。オーストリア國民の歡喜を報じた新聞紙が、古新聞にされるかされない中に、此の民族共同體の活潑な様子をスクリーンにのせた最後のニュース映畫が、映畫館で上映されるかされない中に、もうドイツ國民の敵は又もやその仕事に著手して居たのである。彼等の合言葉は次の通りであつた。兩戦線の分立は絶體である。争闘は進行せざるを得ぬ、我々民主主義者は行爲人に征服せられてはならぬ、云々。煽動、暗號、外交陰謀——かう云つたものは、彼等がチェコスロバキアの戦場に集合した時携へた武器であつた。

豫防戦争に對する勝利

歐米を震撼した此の歡呼の嵐のさ中、獨・伊親交の祝祭が、總統のローマ、ネアーベル、フロレンツ訪問に依つて祝はれて居た時、戦争煽動者の手中にある諸新聞は、今こそチェコスロバキアがズデーランドドイツ人を失はない様に守つてやるべき時である、と云ふ言葉を申し合はせた様に記載した。ヨーロッパの事態を詳細に評價する暇さへなかつたのである。戦争煽動者は、八千萬國民國家への途上にあ

るドイツ國民を、救援しようと云ふ、イタリアの決断を云々する最後の疑惑が「既に取り除かれて居た事を見通して居た。ドイツのオーストリア併合の場合、イタリアが「イエス」と言つたからとて、ズデーテンドイツをもドイツに合併せんとするヒトラーの試みに當つても、再び「イエス」と云ふ必要はない——かう云ふ奇妙な考へ方が行はれて居た。

總統がイタリアから歸還して二週間経てから、ヨーロッパ戦争の危険を打診して、ロンドン、パリ、ブラーグの間で行はれた共同動作は、餘りにもシリーヤスに考へられたものであるが、ヒトラーを刺戟してチッコスロヴァキア攻撃の軍事行動を起させる爲に、五月二十一日ベネツシユは遂に動員するに至つた。此の行動の仕組まれ具合を見ると、自分等で締結した條約、その箇條、條項を知りぬいて居る外交官の、専門家的な手が看取される。その目的とする所は、實際にはロンドンの或る政治團體と、バリの人民戦線とが、ボルシェビズムと結託して企てたヨーロッパ戦争の責任を、ドイツに轉嫁せんとする事、即ち豫防戦争を、所謂民主主義擁護の戦争たらしめようと云ふのであつた。ナチズムとファシズムは、民主主義國家に對して、決して武力攻撃をしないと云ふ事はよく知られて居た。唯一の可能性は民主主義國家やアメリカ人の耳や眼（爾後既に五ヶ年も繼續して居る煽動に依つて曇らされて居る）に恰もドイツが責任者であるが如き印象を與へる事であつた。此れこそドイツが、ズデーテンドイツに武力進入をする場合の、對獨動員令なのであつた。三百五十萬のズデーテンドイツ人は、どうしても塵殺

から守らなければならない場合が起つた時にのみ、ヒトラーは此の武力進入をやるであらう、と云ふ事は一般に知られて居た。此の賭博はパリ及びロンドンの外交官達にとつて餘りに高價過ぎた。何故ならば、ズデーテンドイツ人の慘状と、當時ブラーグに於けるチッコの主權者が命じて居た壓制政策とは、餘りによく知られて居たからである。

だからドイツを刺戟する爲に、他の手段を求める必要があつた。ドイツの名義上の動員があれば、外交的にも、宣傳上にも論證の可能性が出来て来て、チッコが動員する。さうすればヒトラーに、チッコスロヴァキア國境に軍を集結せしむる事が出来るだらう……と云ふ様な事が考へられた。それからチッコ飛行機に頻々とドイツ國境を侵犯せしめ、國境軍に小競合をさせれば、遂にドイツをして越境進軍せしめる事が出来はしないか？ かうした考へ方が行はれたのであるが、世界の人々は、英國外交官の告白に依つて、英國も亦、否恐らく英國はフランス以上に、此の危険な賭事に參加したと云ふ事をよく知つて居る。

此のチッコの動員とそのバックに就いて、總統はその忌憚なき見解を述べた。チャーチルの演説から知られる所は、尙その背後に未だ他の計畫が隠されて居る、と云ふ事である。英國人はオーストリアのドイツ合併を、常に武力政策の一つと見做して居たが、民族は民族と呼ぶと云ふ事、一國が侵略されるのと、無理にも引き裂かれた一國民の一部分が、その故郷に歸るのとは、全く問題が違ふ事を彼等は

決して理解出来なかつたのである。ロンドンの戦争煽動者は、ドイツのオースタリー併合を以て、彼等の解釋に従へば、「民族思想を利用」して達せられた権力増大に過ぎぬとしたのだ。チャーチルは嘗て或る演説の中で、武力政策のかゝる形式は、將來中歐に於て、最早英國の許容しない所であらう、ズデーテンドイツ人を含めての中歐民族の一部の權利に對しては、英國も亦一臂の力を貸さんとも限らない、と述べて居る。こんなわけで、計畫と云ふのは、ズデーテンドイツ人の要求の支持者たる權利をドイツから奪ひ、ズデーテンドイツのドイツ併合を、永久に不可能ならしめる解決を、ドイツの手をかりずにチェコスロヴァキアに招来しようとするのであつた。ドイツは尙エルザスロートリンゲンをも併呑せんとして居ると云ふ虚報は、英國の新聞に、殆ど月に一回は掲げられて居るが、フランスはかうした虚報に欺かれて、此の計畫の片棒を擔がせられたのである。

かくてズデーテンドイツ問題に對する英國の干渉は、ランシマン卿の派遣となつたが、その際チェムバレンが危険防止の算段ばかりして居た事は確かである。チャーチルとその戦友達は、ドイツをチェコスロヴァキアの地から閉め出さうと企んで居た。フランスには何等の照會も行はず、ランシマン卿はブライグに赴いた。それ故に英國の方法は次の様になる。即ち、若し豫期通りに行けば、フランスの政治的稜堡をも自由に出来る。ズデーテンドイツ人には自治を與へよう、それ以上は、英佛は共同して、ズデーテンドイツ人に有利な如何なる規定をも設ける事も、一蹴しよう、——此れが英國の方法である。

(212)

チェコ人とズデーテンドイツ人とは、未だ和解させる餘地がある、と飛んだ考へ違ひをして居たロンドンの政治家達と同様、英國の戦争煽動者は誤算をやつて居た。ランシマン卿が、その公式報告に先だつて、既にロンドンに送つた報導はひどい幻滅であつた。チェコ人とズデーテンドイツ人の和解は絶望である、とランシマン卿は報じた。平和を維持しようと思へば、ズデーテンドイツ人をドイツに渡す以外には方法がないのである。

此の事實は、又もやナチストドイツに依つて、一兵も用ひず、單に政治的兵の力のみで成就されたのである。ズデーテンドイツ黨は、一九三三年、全ドイツ人を合同した單一黨になつて居たから、別に勤勉な調停者がエーゲル、ラインヘンベルグ、トロツボー等へ行つて、自治に關してチェコ人を交渉する用意がある、などと言ふ必要もなかつた。その頃尙ズデーテンドイツ人の代表者なりと自稱しながら、既に此れより先、ブライグ委員會でチェコ人と相會して居た僅かばかりのマルキストと變質者達は、ランシマン卿に代る役さへ演じはしなかつた。

ランシマン卿の報告が到着した當時、ドイツの状態に就いては詳細が知られて居た。不慮の事件を防ぐ爲に、又もやドイツ國軍は行動を起したのであつた。既に一九三八年二月二十日、ドイツ國會に於て、ヒトラーはオースタリーのドイツ人、及びボヘミア、メーレンのドイツ人の保護を引き受けて居た。二十一日のチェコの動員に對して、彼が與へた返答は、戦争煽動者が算用を誤つたものであつた。

(213)

五月二十八日に發せられた總統の命令は、今や全世界に、ヨーロッパに於ける大防禦工事として、又同時に、ドイツ國民の全防禦力の最大集中として知られて居る方法の實行の爲であつた。四十萬の人間が國軍に参加したが、彼等は英佛軍が西部からドイツに侵入する際、ドイツを絶體安全にする防禦の任務に就いたわけで、此の仕事こそは行爲人でなければ出来ない。ヨーロッパ諸國がその軍備に、それ迄數年を費して完成した以上の事が英佛のドイツ空襲防禦の爲に、ドイツでは僅々數ヶ月でなされたのである。

ドイツ國民防禦力の此の動員は、完全に他國民を奇襲した。彼等はランシマン卿の報告で、既に一敗を喫して居る賭事を、此度は脅喝に依つて再びものにしようとした。九月十二日のニュルンベルグ最終會議に於て、ズデーテンドイツ人のドイツ復歸要求を提起するであらう、と總統が暗示すると、その前夜、外務省で公報の責を荷ふべき一ロンドン外交官は、ドイツがチェコスロヴァキアを侵す様な場合には、英佛三國は同盟してドイツに當るであらう、と云ふ陳述を行つた。併し此の掛引の効果は零に等しかつた。總統は一定の短時日を限定して、ドイツの要求を宣言した。此の期日確定は、今日知られて居る所によると、ボルシエビズムとブラーグのフリーメイソン團の黒幕共に依つて組織されたチェコ人のテロ行爲から逃れる爲に、ズデーテンドイツ人が大舉して、ドイツへ越境逃避せざるを得なかつた事實と直接關聯したものである。

戦争煽動者とも、又外務省の「副次的零團氣」を形成する人々とも結ばず、實際に平和を欲して居たチェムバレンは、ランシマン卿の報告を見て、直接の方法による和平救済を試みようとした。彼は九月十五日ベルヒテスガーデンに赴き、民族自決の原則に従へば、ズデーテンドイツ人を當然ドイツに引き渡すべき事を、其處で明らかに承認した。併し此の會談には、明かに第二の決定的問題が残されて居た。それは、此の引き渡しの方法及び期日の問題であつた。チェムバレンは先づフランスの意向をきき、次に彼の反對派の人々とも協定しなければならなかつた。チェムバレンの反對派は二派に分れ、その一つは、是非とも平和の維持を欲したが、寸毫の犠牲を拂ふ事も好まなかつた。他の反對派は依然として豫防戦争を説く人々で、此の間にフランスで幾分少數にはなつても、未だに残存して居た人民戦線と提携して、彼等は既に一九三八年五月、豫防戦争行ふべしと煽動したのであつた。

九月十八日、ロンドンに於て、チェムバレン、ダラデエ、ボンネの三人は、民族自決原則の承認と、ズデーテンドイツ人のドイツ引渡しとに就いて意見の一致を見、チェコスロヴァキア政府に對して、英佛は覺書を與へた。英國及びフランスは、ズデーテンドイツ地方がドイツに讓渡されない限り、平和の維持とチェコスロヴァキアの死命を制する利害關係の安全とが、保障されたものと最早見做す事は出来ない、と云ふ結論に達するのやむなきに至つた——覺書には此の様な事が、明白な素氣なさで書かれて居る。更にその中には、英・佛の此の決定がランシマン卿の報告に基づくものであり、ドイツ人が住民の五十バ

ーセント以上を占める地方は總て譲渡さるべし、と指示されて居た。原則的には、ヒトラーが九月十二日の會議演説中の要求で提示した總ての事が含まれて居る此の英・佛覺書は、チェッコ政府に受諾された。それ故に一週間以内に、ドイツの要求は百パーセント貫徹された。併しそれにも拘らず、ベルヒテスガーデン會談の内容のみならず、ロンドン、ブラーグ間に交換された外交文書の内容に従つて、ドイツに當然與へらるべき事は、少しも實行されなかつた。と云ふのは、チェッコスロヴァキアは大體新國境線に従つて、ズデーランドイツをドイツに割譲すべし、と云ふ事にチェンバレンとダラヂエが一致したと時を同じくして、英國にもフランスにも反對運動が起つたからで、兩首相は此の反對運動の勢力に左右されざるを得なかつたのである。彼等はその反對派の人々に動かされて——チェムバレンはイーデン、チャーナル、ダフ・シューバー及び勞働黨により、ダラヂエは左翼黨、従つてソヴィエトにより——チェッコ政府が受諾し、異議なく決定された決議の實行を遷延しなければならなくなつた。さて此の反對行動は第一に、割譲實行の遷延に依つて、時を得ようと云ふ試みとなり、第二には、ロンドンで取り極められた決定を、此の間に再び取消さうと云ふ試みとなつて現はれた。民主主義國家の政策はかうしたもので、その政權を握る政治家達は、實行が完結した時に初めて、彼等が立てた計畫が成功したかどうかを知る事が出来るのである。

反對派の此の反對行動の爲に、チェムバレン、ダラヂエは深刻な憂慮に沈み、彼等がチェッコ政府に通

(216)

告し、チェッコ政府が此れを受諾した決定を、敢てドイツ政府に公式通告をする事すら出来なかつた。更に言葉を變へて言へば、割譲は短時日の期間に實行さるべし、と云ふ總統の確固たる要求に會つて、彼等は此の期間に就いて彼等の意見を述べざるを得なかつたであらう。併しさうすれば、彼等の反對派の人々をひどく刺戟したであらう。反對派の者達は、チェッコ政府にあてた九月十九日の英佛覺書の中で、「今」と云ふ唯一つの言葉を例外とすれば、期間に關しては一言も言及されてない、と云ふ事——正に此の事實を恃んで居たのである。

かうした情勢の下で、チェムバレンは九月二十二日ゴードン・ベルグに赴いた。彼は英・佛決議を細目に至る迄携帶して來たが、一定期限付實行の計畫は少しも持つて來なかつた。チェムバレン個人としては、確かに此の行動を尋常に終らせようと思つて居たのであるが、さうすると、數多くの保障手段、保留條件だけでなく、俄然人民投票（此れに就いてはベルヒテスガーデンの會談中、彼は何等關知したがらなかつた。）迄伴ふ譲渡を意味する事になるのを彼は知つて居た。チェムバレンは又、國境劃定に就いて、當分協定を續けて居る事が必要であると思つて居た。彼はズデーランドイツ割譲に就いて、ドイツが短期日を限つて要求して居るのを知つて驚いた。或は一見驚愕の色を示したと言つても可い。第一次會談の後、彼は詳細の點の確定を、文書による方法で試みるのを可とした。その際割譲の範圍と期限に就いて腹案が、ヒトラーから提出されたが、チェムバレンはそれを公式には受諾しなかつた。と云

(217)

ふのは、さうすれば彼の反對黨を刺戟するかも知れなかつたからである。併し平和を危くさせない爲には、此の計畫を拒否したくもなかつた。そこで彼は一つの逃げ道を發見したわけであるが、それは九月二十四日の腹案をロンドンに携行し、更にそれをブラーグ迄持つて行く、一方彼個人としては、政治的に何等の束縛も受けない様にする、と云ふのであつた。

チェムバレンとヒトラーとが交渉を續けて居る間に、ロンドンとパリの反對派は大馬力で活動して居た。彼等はその活動の場所をゴードスベルグに移した。九月二十二日の第一次會談をすまして、チェムバレンが夕方ベルスベルクの宿に歸つて来るか來ない中に、かうした場合にはつきもの、流言が既に飛び始め、外國新聞の本部では、ドイツの動員云々、交渉決裂、開戦の惧れなどが話題となつて居た。此の夜外務省は、チェッコ人に完全な動員を許したが、而もそれを、民主主義國家に常套的な妥協形式で行つたのである。即ち字義通りに、次の様な報告が行はれたのに過ぎなかつた。チェッコ政府は與へられた非動員の勸告は、最早維持し難いものとなつた、併し同時に、動員の危険に對しては注意を促さざるを得ない、と云ふのである。一九一四年、此れと同じ様な狀勢の下で、エドワードグレイ卿と云ふ人が、政治的發展に對して、戦争への決定的一撃を加へたのも、正に此れと同じ筆法であつた。ロンドンとゴードスベルクの責任者で、誰がそれを知つて居たであらう？

チェッコスロヴァキアは動員した。その果結ロンドンでとられた處置は、九月十一日夜、既に外務省の「副

次的雰圍氣」を通じて發せられた聲明を、もう一度繰返す事であつた。若し同盟の塵がフランスに與へられれば、英國のみならず、ソツエトも亦、ドイツに對して武力干渉を行ふであらう、と言はれて居た。

民主主義が行爲人の革命を妨害する爲に、ボルシェビズムと協同して恫喝に出たのは、二十世紀の歴史上此れで五回目であつた。イギリスの此の聲明と動員勸告に依つて、チェッコ政府は勇氣をもち返した。かうなるとホッヂヤ政府は、ズデーテン割譲に對する賛意を、最早持ち續けては居られない、と聲明するに至つた。併しそれを明白な言葉を用ひて言つたのではなくて、外務省の二外交官の辯を繕りてしたのである。九月二十五日、イギリス外相に到達されたチェッコスロヴァキアの覺書は、ドイツの提案が、英佛の腹案で受諾されたものを、遂に越えた過重なものであると主張して居た。即ちドイツの提案に依れば、チェッコスロヴァキアは、細心に準備をととのへた防禦施設の大地區を放棄しなければならず、新根據地に防禦施設を構成するか、何等かの防禦準備をする事が出来ない中に、ドイツ軍を奥地に入れる事を許さなければならなかつた。ヒトラーの此の腹案を受諾すれば、チェッコスロヴァキアの國家的經濟的獨立性は「自動的」に消失するであらうと云ふのである。

かうして反對運動は、早くも非常な發展を遂げ、チェッコスロヴァキアの獨立性が讓渡の延期を要求する、と云ふ論據を擧げて、ブラーグ政府はチェムバレン及びグラヂエの反對派の主張する期限を求めると至

つた。かくて此の期限は、ヒトラーが九月二十七日付のチェムバレン宛の書面の中ではつきり言明した様に、新要塞線建設の要求に依つて、数年とは言はないまでも數ヶ月は延期される事になつたのである。

此の覺書、それを英國外務省及びフランス外交官が暗黙裡に受理した事——かうした事の爲に、恰もチェムバレンが、ベルヒテスガーデンに於てもゴードスベルクに於ても、ズデーテンドイツ割讓の保證を與へなかつたかの様な、又それに就いて英佛間の協約が成立し、チェコ政府が此の協約を受諾したかの様な事態が生れるに至つた。

かくてドイツは爾後、此の事實を考慮しなくてはならなかつた。ロンドン及びパリの戦争挑發者が指令した反對行動は成功し、チェムバレンとダラヂェは、和平救済と促進の爲に協約した行動を實行する事が出来なかつた。ズデーテンドイツをドイツに歸屬せしめる爲ばかりでなく、平和を救済する爲、戦争防止の爲に、ドイツは此の協約、(その出来上る過程には、ドイツは何等關與しなかつたが)を擁護して闘争しなければならなかつた。此の闘争は未だチェムバレンのゴードスベルグ滯在中、始められたが、この場合問題となつたのは、ドイツの敗北とか、英佛の敗北とか言ふのではなかつた。運命に對する間ひは全然違つて居た。ドイツが勝利を得れば、ズデーテンドイツの割讓を貫徹するであらうし、従つて平和を實現するであらう、又一方、チェムバレン、ダラヂェ、チェコ政府の三者が與へた同意が、嚴守

されなかつたならば、即ち英佛の首相に對する戦争挑發者の反對が、勝利を得たならば、今尙好機を掴んで、平和の爲に貢獻せんとする男々しい心を起した人々の敗北となるであらう。さうなれば五月二十一日以來、戦争挑發者が徹底徹尾望んで來た對獨豫防戦争への道が、天下晴れての大道になる事であらう——運命に向つて投げられる間はかうしたものであつた。

此の危険に對してナチスドイツには唯一つの防禦があつたのみである。即ち、一九三五年三月以來全力を擧げて再建された國防軍と、國民の全防禦の參加がそれである。今や行爲人はヨーロッパの和戦決定に踏み出さなければならなかつた。ムッソリーニは直ちにドイツに與した。フランスは西部に於けるドイツの無敵防禦帯と、イタリアとを敵とした二回戦か、平和か、その何れかを選ばなければならなかつた。ソヴェトがフランスを支持するかどうか、それはかうした決定的瞬間には、佛ソ同盟締結の際、規定された程には、最早確實なものではなかつた。ホルンシェビズムの威嚇は突然内部崩壊をしたのである。

英佛協力の事實上の價值も此の當時明かになつた。英國は直ちに制海權を握つたが、それはドイツの海軍々備を、英國のその三十五パーセントに制限して居る、あのドイツの忍従で出來た海軍條約に基づくものであつた。併し陸上に於ては、フランスは、英國の有效な援助を恃む事は出来なかつた。チェコスロヴァキアほどの道絶望だつた。ドイツとイタリアとは、兩國の全力を擧げて、必ずや對ベネツシユ

勝利を収めんとして居ればかりでなく、他國民も同様な考へを持つて居るならば、實力に物を言はせても、ヨーロッパの平和を樹立すべき用意を、斷じて整へて居たのである。ヒトラーは實力に訴へる事なく、ドイツ人をドイツに歸屬せしめると、言明しておきながら、決定的瞬間になると實力で威嚇した、などと云ふ様な亂暴な歴史の偽造が、既に今日行はれて居る。ヨーロッパ人の此の重大危機に當つて、ドイツとイタリアが威嚇したのは一回に止まらない。和平確立に乗り出す時は、決して實力政策を用ひはしない。英佛兩國が結んだ協定を持続せんとする健氣な心を、ドイツ、イタリアの兩國民が示したのに過ぎない。何故ならば、此の協定の不履行は、戦争を意味するかも知れなかつたからである。

ヒトラーは一九三八年九月二十六日、(月曜日)ベルリン遊技館で行つた演説で、此の政治的情勢を明白な言葉で述べた。ゴッデスベルグから歸つてからも、反對派が醸し出した戦争勃發の惧れを見くびつて、依然としてベネツシユとの長たらしい會談を考へて居たチムバレンには、漸く真相が判つて來た。ヒトラーが重要軍事行動の二十四時間延期の下に、九月二十八日(水曜日)正午を期して招請した四巨頭會談に、チムバレンとムツソリーニは出席する事に意見の一致を見た。和戰決定を前にして、最後の交渉をなすべく、總統が此の懇請に應じる事に依つて、戦争煽動者は既に敗北したのであつた。チッコスロヴァキアは救はれ、ロンドン協定に従つて、又ヒトラーがゴッデスベルグで立てた腹案によつて、チッコスロヴァキアの割譲は成功を見たのである。

一九三八年九月二十九日、五億七千萬の歐米諸民族の恐らく九十五パーセントが、物質に對する人間の勝利實力に對する平和の勝利を體驗して、血を躍らした熱烈さは、あのドイツ軍オースタリー進駐の日に、八千萬のドイツ人が、戰勝の體驗をした時と同じものであつた。

人間の心に魂から逆り出る革命を阻止せんとして、戦争と云ふ暴力の絆を解かうとすれば、歐米諸國民は決して心と魂を以て此れに與りはしない——それは今や永遠に確固たる眞實である。英佛米の國民は決して臆病ではない。一度命令が發せられれば、勇んで戦に赴いたであらう。五億七千萬の人間はその兵を先に立て、一九一四年當時と同様に、彼等の義務を盡した事であらう。民主主義の理論によつて、それ迄彼等の生活を幸福にしてくれた總てのものを、彼等は惜しげもなく棄て去つて義務人となつたであらう。併し彼等の中に、餘りにも遅く醒めた義務は、僅かに彼等をして相討ち相滅す事を餘儀なくせしめるに過ぎなかつたであらう。彼等は相對峙する爲に全物質力を集中し、全身の勇を鼓したのであらう。併し民主主義諸國の人間は、最早民主主義者ではなく、義務人になつて居るであらう。

我々は全ヨーロッパ人が經た一つの體驗を忘れたくない。ロンドンでは九月二十七日、二十八日の兩日、まるで早くも動員が行はれたかの様に、軍隊や裝甲自動車、戦車などが市中行進をした。英國民は人垣を作つて默然と傍觀して居たが、萬一は覺悟して居た。同日バリのブルバールにも同様な光景が見られた。ベルリンでは軍隊、裝甲自動車、戦車がウイールヘルム街を北から南へ行進した。ドイツ國

民はナチズムが與へてくれたあらゆる成果と幸福を以て、ズデーテンの三百五十萬の同胞の爲に身を賭すべき用意をしなければならぬ事を知つて居る。又ヒトラーが侵襲をしない事も、豫防戦争に對する防衛が、民主主義世界に對する行爲人の力強い攻撃となり、一共同體の力の發現となる事も彼等は知つて居る。

當時戦争挑發者に對するドイツ國民の憎悪は激しかつた。それは發現した力に對する喜びよりも更に大きいものであつた。英佛國民に對する憎悪ではなかつたが、議會や内閣各省に於て、對獨戰を欲して居る人々に對する憎悪であつた。英佛國民は同じ血を分けた戦争挑發者に對して、ドイツ國民と同じ様な憎しみを感ずる事は出来なかつた。彼等は止むを得なければ此の煽動家達の尻馬に乗つて行く覺悟であつた。併し兩國國民は、戦争には最早敵の殲滅と云ふ目的ではなく、戦争の責任者を撲滅すべき目的があると云ふ事を、或は悟るに至つたかも知れない。かゝる戦争が行はれば、民主主義制度は最早その存在を許されなくなつたであらう。

英國では、今日又もや多くの者が、民主主義の自由を叫んで熱をあげ、フランスでは、過去十五年の政治家の罪を云々する言論が、又もや區々になつて居るが、英佛兩國國民はその眞の感情の偽らざる確證を二回に亘つて與へて居る。その一回は、例の決定に先だつ兩日に於ける黙從に現はれ、その二回は、ミュンヘン協定の翌日に於ける絶大な歡呼に現はれて居る。ヒトラー、ムッソリーニ、チェンバレン及

びダラヂエの力で勝利が完行された時、傳統のあらゆる障害は去り、民主主義諸國の人間の憚りと云ふ憚りは總て無くなつた。四巨頭に依つて救はれた人類文化に、これからも奉仕出来る幸福を持つた唯一の歐米民族が、かうして數日は存在したのである。再び人間となり、一つの共同體の中で、あらゆる人間の間的なもの力と成果に喜びを感じる事、——此れこそ世界全人類にとつてとは言へなくても、五億七千萬の人間にとつて生存内容になつたのだ。

近年の英佛政治家政客たるダフ・クーパーよ、イーデンよ、チャーチルよ、ビエール・コートよ、マンデルよ、エリオよ、御身等の首都に於て、チェンバレンやダラヂエに喝采を贈つた人々の中で誰か、又合衆國や南米で、當時の此のヨーロッパの歡呼に、ラヂオの電波を通じて加はつた人々の中で誰か、小協商國の事、ソヴェトロシアの事、ヴェルサイユの條約事、國際聯盟の事を考へた者があるだらうか？御身等はかうした事に就いて、御身等の事務室、俱樂部、祕密集會所の裏部屋で語つたのに過ぎない。人類の大平和祭たる此の時に當つて、御身達が直ちに考へた事は、如何にして御身等の敗北を再びとり戻す事が出来るか、と云ふ事であつた。御身等は決した、假令歐米諸民族五億七千萬の意思に反しても、又人類文化の總ての代表者の意思に反しても、今後再び全力を擧げて、豫防戦争煽動を開始しなければならぬ、と。そして御身等が此の煽動を既に再び實行し初めたと云ふ事は證明済みであらう。

何故に全世界の意向がかくも速かに再び激變したのであらう？ 各國民は平和を欲して居た。併し彼

等が何十年この方、その運命を戦争煽動者に委ねて来た事、戦争煽動者の敗北には、彼等の意に任せられた組織の敗北が、密接な關係を持つて居なければならぬと云ふ事を彼等は忘れて居る。民主主義は平和に仕へないで、戦争の下男を勤める様になつた以上、その権力地位は放棄されざるを得なくなつた。チエムバレン、ムツンリーニ及びヒトラーは平和を樹立したばかりでなく、一九一四年から一九三八年に至る政治に判決を下したのである。

今や英佛國民は此の判決から結論をとり出さなければならない。何故ならば、彼等は平和救済を歡呼で迎へて、此の判決を是認したからである。而も一九一四年から一九三八年に至る政治を弾劾したのも彼等である。ヴェルサイユ條約の現状維持の爲にされた、あらゆる防禦工作が失敗した後、當然彼等が見出すべき無の状態から、彼等は新しい何物かを、ヨーロッパの眞の平和の基礎を、作り出せるかどうか——此れが彼等のなすべき事である。

此の場合彼等が忘れてならない事は、ドイツとイタリアは暴力で戦つたのでもなければ、暴力で勝つたのでもない、と云ふ事である。ドイツとイタリアはその國民本來の力のみを用ひたのであつて、此の力を以て、ヨーロッパの新秩序(その下に於ては、何人も失ふ事なく、意思あれば何人も得る事が出来る)の爲に戦つたのである。彼等はヨーロッパにヴェルサイユ條約を與へず、如何なる點に於ても、その反對のものを與へた。勿論軍事的優越性と、ヴェルサイユ條約に基づいた經濟的優勢とは除かれ、政治經濟の權

力品具としての小國協商、對ソツイエト同盟、ドイツの喪失植民地、國際聯盟等は、最早英佛にとつて存在しなくなつた。國際的高度財政を以てしても、ユダヤ人勢力、フリーメイソンの勢力を以てしても、最早ドイツ人及びイタリア人を抑壓する事は出来ない。かかる権力地位は徹底的に失はれてしまつたのである。

回 想

世界戦争は、民主主義の唯一の實際的力の源泉たる所有を、實力に訴へて守らんとする試みであつた。此の目的は、ボルシェビズム暗黒界との同盟に依つて漸く達せられた。民主主義の全物質が戦争に賭けられて後も、尙行爲人の抵抗は止まなかつた。そして民主主義諸國の防守同盟の試みは、その利己主義の爲に相互に挫折した。英佛米間の條約は成立しなかつたが、その代りに廣範圍の防守機關が作られた。それは最早存在しない。民主主義は、ヴェルサイユ條約の現状維持の爲に、人類文化を三回に亘つてボルシェビズムに賣つた。イタリアに對する制裁戦に依つて一九一八年、一九三四年、及び一九三五年の三回である。かくて民主主義は多大の苦惱を人類の上に齎し、自らを內的に弱體化し、ヴェルサイユ條約を失つたのである。

行爲人の反抗、ナチスドイツとファシストイタリアが無かつたならば、ボルシェビズムは早くも人類

文化の空地に、著しい侵入を見せて居た事であらう。

第三帝國とイタリア帝國の方の伸展が無かつたならば、人類文化は既に非常な危険に曝されて居たであらう。ドイツとイタリアは平和を救済し、平和の力を増大し、二十年に亘つて、所有人を敵として、行爲人の戦線を大いに強化したと云ふべきである。

一九一九年には、高々五百萬のドイツ人が、行爲の原則の代表者たる用意を持つて居たのに過ぎず、五億五千五百萬の所有人が此れに對立して居た。今日歐米民族に屬する人間は、ソヴィエトロシアを除いて約五億七千萬で、その中の一億七千六百萬はアメリカ大陸に居る。此處では略々九千萬の人間がヨーロッパ文化も識らずに生活して居るのである。五億七千萬の中、今日行爲人の戦線に參加して居る者は、ドイツ國內のドイツ人八千萬、在外のドイツ人千三百萬の中少くとも七百萬、四千三百萬のイタリア人、及び少くとも千五百萬のスペイン人等で、總計一億四千五百萬になる。かくて残る者は、アメリカにある一億七千六百萬の所有人と、ヨーロッパにある二億四千九百萬の所有人乃至民主主義者で、總計四億二千五百萬になる。上述の二億四千九百萬のヨーロッパの中、又々少く見積つても、確かにその六パーセントは常に行爲の理想を抱いて居る者で、その數は千五百萬に達する。アメリカ人の四パーセントも、確かに、今日既に行爲理想を奉ずる者で、その數は七百萬になる。かくて一億六千七百萬の行爲人は、約四億の所有人と相對して居るが、前者の數は日増しに増加し、後者は次第に減少して行く。後

者は此の外に民主主義の絶體的擁護者ばかりでなく、暗黒界のあらゆる人間、ソヴィエトロシアの國外に居て、ボルシェビズム思想を抱く人々をもその戦列に加へて居る。

併しヨーロッパだけでさへ、二億三千四百萬の民主主義者に對して、一億六千萬の行爲人が居る。此の對立は二十年前には三億八千九百萬對五百萬だつたのである。民主主義の中には、その理論に依つて作られたのではなく、經驗に基く法則と云ふものがあつて、殆ど多數を占めて居る者が此の法則に従つて、早くも多數を得て居るのである。此の法則はヨーロッパに於て、ドイツとイタリアの爲に、眞實である事が證明され、既に全世界に向つて影響を及ぼして居る。

我々は「戦争か平和か？」と云ふ問題を提出する。眞の平和が戦争に依つて危くされるか、と云ふ問題ではなく、既に長期に亘つて續けられて居る戦争から、眞の平和が生れ得るか、と云ふ問題である。行爲人の革命は平和の爲の闘争であり、世界には再び指導が存在すると云ふ事を我々は確認した。行爲人は所有を欲しない。彼等は物質に對する人間の支配を再建せんと努める。此れに對立するものが民主主義の所有妄想とボルシェビズムの破壊狂躁なのである。

此の闘争の將來如何？武器の分配状態は如何？二十世紀革命の武器は、高度に完成した自由な人間である。民主主義の武器は所有であり。ボルシェビズムの武器は、機械人と所有である。民主主義とボルシェビズムとは、假令その同盟が解かれても、依然その結合を續けるものである。何故ならば、ボルシェ

ビズムは、民主主義的所有妄想の當然な結果だからである。ソヴィエトロシアのボルシェビズムが瓦解する様な事があつても、所有の「幸福」に對する信仰は、持たざる者に對する憎悪と、彼等を滅さんとする狂暴な慾望とを常に呼び起すであらう。ボルシェビズムの暗黒界は民主主義の中に、その存在を永久に續けるであらう。それ故にボルシェビズムの將來如何と云ふ問ひは、附隨的問題に過ぎない。

民主主義の將來は決定して居る。それは暗黒に包まれて居る。我々は此の闇の中で、政治的評價の鋭利な斧を揮ひ、誤れる偏見と時代遅れの觀念の籐の中に光を投げ入れなければならない。今や民主主義及び所有人の暴力の決算書が作製されるならば、それは他人の所有物を奪はうとして、掴みかゝる時こそ遅しと、その隣人や競争者に注意を拂つて居る様な、民主主義の侵略者輩の目的設定などで作られるのではない。我々は所有を欲しない。我々は行動力の爲に、自由な土地を要求する。我々はあらゆる者に奉仕せんが爲に、自然的發展に道を明けたのである。

行爲人の發展を展望する事は容易である。今日歴史を作つて居る者は彼等である。彼等の發展が、民主主義に對する客觀的評價の結果に拮抗せしめられるならば、次の事を理解しなければならぬ。

戦争勃發の危険はあるか？

此れに對する責任者は誰か？

如何にして此の危険は豫防されるか！

第五章 民主主義の將來

歐米諸民族の運命は、所有人の意慾能力の從來のあらゆる發展と軌を一にして、懸つて行爲人の指導と力とにある。十九世紀には、所有人があらゆる權力を持つて居た。彼等が政治賭博で幾度も負けた事は、我々が見て来た通りである。ヴェルサイユ條約に現はれた彼等の權力の絶頂に續いて、二十年後に革命的變化が起つたが、それを我々同時代人は漸く徐々に認める様になつて居る。歴史はミュンヘン會議の日を二十世紀の革命啓示の日として萬人の爲に嚴守するであらう。

それ故に、將來に向つての第一の問ひは次の様なものである。

今後民主主義の意思は如何なる道を進んで行くか？ 英佛米の政治は如何なる目的を持つて居るか？

民主主義の彌次馬や、此れ迄經濟的に、乃至精神的に民主主義に依存し、未だ完全には發達せず、ヨーロッパの運命戦争に遅れ馳せに馳せ參じた國民等はどんな態度をとるか？——此れが將來に向つての問ひである。

一九一九年、民主主義は完全な権力組織を作つた。即ち、軍事上の一方的優勢、經濟交通貿易の完全獨裁、世界財寶の獨占、横暴な國境線に依るドイツ國民力の分散、全世界に亘る同盟、陸海空の軍備の平衡と、歴史的になつた所有限界の固守とに依る民主主義列強間の利害の分割、制裁戦を以てする「戦

勝國」の國際法上並びに刑法上のヘゲモニー、所謂戰爭責任者に對する道德の專制、「戰敗國」に對する文明からの閉塞、暗黒界との同盟、後に至つては、ソヴェエトロシアで國家が組織したボルシェビズムとの同盟、等々。

所有入席の豊かな贈物のテールからは、始めから遠ざけられたイタリアとドイツとは、今日軍事上の平等、國民性の自然的國境、道德的同權等を著しく取り戻した。同盟組織は權力政策上の重要點で粉砕されて居る。ドイツはライン河畔の開進地帯を、イタリアは地中海の制海權を、英佛の軍事政策から奪取した。ドイツ東部のフランスの軍事的殘堡は爆破され、英佛の手はバルカンから奪はれてしまつた。國際聯盟の中で求められた權力地位は驅逐され、最初の制裁戰は失敗した。經濟上、貿易上、交通上の完全な獨裁は破壊された。列強は相互に締結した條約を保持する事が出來ず、海軍協定は寸斷された。共同の貿易政策、通貨政策は必ずしも固守されなかつた。ヴェルサイユ條約では頓坐したが、繰返し繰返し更新される試み——英佛米間の同盟に依つて、民主主義の權力を救はんとする試み——は依然として残つて居る。世界の全財寶を獨占せんとする要求は、原則的には固持せられ、ボルシェビズムとの同盟は、未だ公式に廢棄されては居ない。

併し民主主義の權力組織の此の點に、或る決定的變化が行はれた。一九一八年、ボルシェビズムの暗黒界はドイツに對して動員され、行爲人の權化たる兵に向つて、ヨーロッパの無定見な犯罪要素ユダヤ

人及び無政府主義者が用ひられた。彼等は用命が濟めば野犬の様に口笛で呼び戻して、再び汚らはしい穴に抛り込むか、又は東にして射殺するかする事が出來ると考へられた。一九二一年、ヴェルサイユ條約の聯合國側關係者は、又々ソヴェエトのボルシェビズムを扶け起したが、それは恐らく、後日ヴェルサイユ條約擁護の爲に、踵を返して對獨戰に赤軍を利用したいと云ふ腹なのであつた。一九三四年、ボルシェビズムはヴェルサイユ式組織の中心に採用され、今日ではその二面外交組織のお蔭で、民主主義をその權力下に置いて居る。又、完全な反動の獨裁と、所有妄想の完全な唯物主義への伸展の獨裁とを、民主主義諸國の暗黒界に行使し、其處から各大臣の椅子近く迄進出するに至つた。ボルシェビズムは所有入を、機械人と云ふ恐るべき運命に追ひ込んで居るが、ソヴェエトでは此の機械人に依つて、ボルシェビズムが工場の車輪を動かし、耕地のトラクターを運轉して居るのである。ボルシェビズムの將來はどうかであらう？

ボルシェビズム反動

ソヴェエトロシアはどうなるか？と云ふ問題に對する解答は、一義的には與へられない。ソヴェエトロシアで誰も知らない事を、ヨーロッパで誰も知る筈がない。我々が見るのは停頓狀態、常に同じ様な状態のみである。毎年實らない種子を見、機械の運轉、恵み豊かな生産物にはならない原料や石炭の隠

匿を毎日見るばかりであり、毎年の様に計畫又計畫で、それが次々に又新しい計畫に依つて打ち壊され行く。以上は何人も知る所である。それにも拘らず。民主主義世界では、世界公論の大部分がボルシェビズムの自由になつて居る。一七八九年の革命の理論に、反動的に執着し、二十世紀の革命を前にしてせん術もなく茫然たる多くの知識人は、ユダヤ主義及びボルシェビズムと同盟し、彼等の全精神力を用ひて、人間の中なる靈と意思とを破壊しようとする。此の知識階級は、一部分既に東歐から、又中歐のスイスから、否フランスからも英國に渡り、其處から更に合衆國に渡つたのであるが、彼等はソツイエトロシアへ至る橋である。血も土地も持たぬ此れ等の知識人の群から出た多くの者は、今尙民主主義諸國の議會や新聞編輯局に残つて、新聞記事を書き、本を著し、演説をやり、さては神學試験を通つて、キリスト各派の教會に迄侵入した。彼等は屢々社會的の大事業の先頭に立つ事があつて、その福社を破壊の宣傳に利用した。又彼等がボルシェビズムの崇拜者である事は、彼等がボルシェビズムを拒否して、此れを根絶しようとしないので、充分判るが、そればかりでなく、彼等はソツイエトにとつて、民主主義世界解體の爲の橋でもある。民主主義的人間の良心と審判に對して、彼等はヨーロッパ犯罪界の辯護人（法廷の前であれ、新聞の中であれ、彼等の著作の中であれ）である。

ソツイエトロシアに就いての謬論を、全世界は時き散らして歩く精神病の保菌者はユダヤ人である。彼等はモスコの「人民委員」をユダヤ主義の騎士と見て居る。ユダヤ人にとつて、唯物論的虚無主義

は、アリアン人絶滅の爲の好ましい力であり、ソツイエト輸出に依る、多利な投機の絶好な基本金をなすものである。ユダヤ人文士と新聞記者とは、略々十年間も新聞紙上の煽動を續けて、遂に民主主義とボルシェビズムの同盟を物にした。彼等はソツイエトロシアを「民主主義の天國」と化し、共産黨社會黨に一票を投ずる民主主義の大衆と、その市民の彌次馬とを抱き込んで、ボルシェビズムに臣事させるに至つた。かくして民主主義は下から鎖で縛られる事になつたのである。

ソツイエトロシアのボルシェビズムが、益々反動へと——此の世の財の徴収から悪用への、永遠に變らぬ循環の全く機械的な流れへと——硬化すればする程、益々此の鎖は固く締められて來た。ソツイエトに關する智識の殆どあらゆる源泉は、ユダヤ人の陰謀に依つて涸渇せられ、統計は偽造せられた。恐るべき事を隠蔽する爲に偽はられるばかりでなく、恐るべき事を少しでもひどく見せまいとして、虚偽の報道がなされるのである。スターリン殺害せらる、と云ふニュースが、民主主義新聞に記載されるとして、此の「虚報」は勿論の事、凡そボルシェビズムに關して流布されるニュースと云ふニュースが、總て眞實ではない、と云ふ事を主張せんとすれば、かうした報道すら故意に流布せられる。

我々自身でさへ、此の毒物から免れる爲には、適當な急突を以てするより他はない。死を意味する停滞状態を、ロシア人は他日超克するかどうか、と云ふ問題に依つて、初めて我々は眞相に近づく事が出来る。

ロシア人がボルシェビズムの虜になつた時、彼等はその思想や日常生活に於て全く同質で、ボルシェビズムは彼等を同じ様に取り扱ふ事が出来た。當時はロシア人であつた彼等は、今や機械人になつた。彼等の僅か十パーセントが當時の知識人で、従つて彼等は、ロシア草原地帯の國境外を一瞥した者であり、パリやロンドン、ベルリンやローマに就いて、機械や化學的發見に就て、世界の山や海洋に就いて、哲學や文學藝術等に就いて、幾分なりとも識つて居た者である。ロシア國民の此の部分は絶滅せられ、その代りに新しい「知識人」が現はれた。それは各市長村に於けるボルシェビズムの全權委員である。

歐米民族の文化現象と、少しでも關聯のある知識乃至思惟力を備へて居る人間が、今日でもソヴィエトに居るだらうか？如何なるドイツ人も、如何なるフランス人も、又イギリス世界帝國の如何なる白人も、合衆國人の大部分も、高等の學校を出た者にせよ、小學校だけで終つた者にせよ、一生の中に何か學んだ事がある者にせよ、唯單にその手仕事で日々の活計を追つて居る者にせよ、彼等は皆一様に古代に就いて、中世に就いて、新舊の教會に就いて、或は機械の發達に就いて、農業に就いて、芝居に就いて、映畫の搖籃時代から今日の形式に至る進歩に就いて、夫々相當の知識を持つて居るし、醫學に就いても、人間及び地球の發生に關する解釋の多種多様な事も、或は地質學に就いても、宇宙に就いても識つて居る。此れ等の知識は、時には極度に單純なものである。併し家を見ても、通り過ぎる自動車を見ても、給油所や教會の存在からも、飲食店や博物館の存在からも、或は一人一人には判り切つては居るもの、

而も何世紀も續いた文化に、その基を置いて居る都市の裝飾からも、庭園、橋梁、港灣、煙突等を見ても、我々歐米民族は常にそこから知識を汲み取り、それを各人の能力と任務の程度多少に應じて再び利用する。此の自然の知識の、大半がロシア人には缺けて居る。舊ロシアの多くの人々は煙突を知らず、彼等にとつて鐵橋は想像の外にあり、芝居と云つても、てんでその概念すらなく、藝術的舞踊とは何か考へもつかない、自動車にしても大工場にしても同様である。かうした人々やその祖先達は、寺院の圓柱も五階乃至六階の高層も、舗裝道路も、自然の河川でない航行運河も見事はなく、歐米民族の多くの人々には自明な哲學的表象に就いても、少しも識つて居なかつたのである。

併しボルシェビズムがロシア人を、全然機械的存在にする爲に用ひる諸概念は、我々の表象界から取つて來られたもので、此の對照、表象界の此の完全な分裂は、ボルシェビズムにとつて、極めて有利であつた。煽動者は數言の極り文句（それは何とかしてロシア人の心の中で反響しさへすればよかつた）を用ひて、我々の事は爪の垢程も知らない人間の所で、いとも巧みに魔術の世界を現出して見せる事が出来た。最も具體的な例を引けば、歐米國民の唯一人として、新しい一つの機械は幸福である、などと云ふ主張を、おいそれと眞に受ける者はないであらう。歐米人なら、まだまだ非常に單純な者でさへ、此れに對する批評的反證を束にして持つて來るであらう。例へば、機械は運轉されなければならないばかりでなく、人間が生きる爲には、機械を用ひてやる仕事は支拂を受けなければならない、と云つた様

な反證である。又多少なりとより高い思惟の階梯にある歐米人ならば、此の生産の意義及びその利用の可能性を問ふであらうし、或は原料は何處から持つて来るかと質問するかも知れない。少くとも自身身の労働範圍に於て、此れ等の重要な前提及び歸結に就いて、或程度は精通して居るであらう。クレムリンの煽動者は、ソヴィエトロシアで唯次の様な主張をすればよかつた。機械は社會主義だ、社會主義こそ諸君が求めに求めて来た幸福である。怨恨に満ち、惘然たる心を持つたロシア人よ、機械は諸君を解放する、等々。かくて新しい救世の教義が生れ、新しい宗教が生れたのである。

ロシア人の魂を刺戟して、憎惡の織り込まれた唯物的救世教義を信じさせる此の仕事にボルシェビズムの煽動者が成功した事を、我々は忘れるわけには行かない。彼等は正統教義の狂信的尊崇者から、一晚の間に機械の崇拜者を作り出した。ソヴィエトではボルシェビズムが計畫されるのではなくて、元々ボルシェビストが居るのである。だからソヴィエト人がこれから先どの位ボルシェビズムに耐へ得るか、などと云ふ設問があつた場合、我々には判り切つた批判の論證を供する必要はないのである。我々の批判の如きは彼等の識る所ではない。反對に彼等が識つて居るのは、我々には無意味なボルシェビズムの論證である。彼等に我々の批判を嚙んで含める様にきかしてやつても、無駄であらう。何故ならば彼等には我々の經驗と云ふものが全然ないからである。その上彼等に言つてきかせてやる様な人間は、ソヴィエトに一人も居ない。實際ソヴィエト人は、歐米の全「プロレタリアート」は彼等より更にひどい飢

餓に類して居るものと信じて居る。何故ならば、彼等は事情は正に此れと違つて居るとは少しでも考へる事は出来なくて、彼等が受けて居る限りない困苦こそ、幸福の階梯に過ぎないのだ、と尤もらしく言ひくるめられて居るからである。若し資本主義の咎の下に身を賣るなら、決して此の困窮から抜け出して、共產主義の黄金時代に躍進到達する事は出来ないぞ、と彼等は説かれる。

クレムリンの煽動者は主張して、ソヴィエトロシア工業化の最初の結果は、資本主義がヨーロッパで百五十年費して成し遂げたものを、遙に凌いで居る、と言ふが、彼等はいかう言つて少しも反對を受けはしない。反對の餘地もない程確實な多くの證人が、報告して居る所に依ると、ソヴィエトの村でならとも角、中位の都市でも、否モスコの大工場に於てさへ、話の序でに尋ねられた事は、ベルリンやパリに實際地下鐵があるか、と云ふのであつて、而もそれが率直に、訝り顔にきかれると言ふ。地下鐵などと云ふ大事業が出来るのは、ボルシェビズムだけだ、と云ふ様な言ひ草もきかれるさうである。以前のボルシェビズム信奉者、思索人が、ソヴィエトから非常に驚いて歸つて来て報告して居る所に依ると、彼等は學校で、フランスにも小學校があると云ふのはほんとうか、と怪訝な顔できかれたさうである。

ヨーロッパでは、社會主義者は或る理論で生きて居て、實際に統治する任務を持つた事がないから、その理論の缺點を知つて居ない。又若し一時此の任務が課せられれば、嘘を言つて生きてる事になる。つまり、此の次には此れ此れの過失は犯すまい。自分の理論は實を結ぶだらう、などと嘘を信じこむの

である。それでは普通の民主主義者は何で生きて居るか云ふと、背後に残忍な所有人を隠して居る常套語で生きて居る。ヨーロッパのボルシェビズムは、所謂幸福人を憎悪し、社会主義的民主主義的無能を輕蔑して生き、劣等の者を煽動して卑劣な犯罪人にする事に依つて生きて居る。ソヴェートのボルシェビズムは、機械の技術的労働、新鹽運河、集産等を讚美し、此れ等は皆、世界中の如何なる生活よりも、遙に偉大なよいものである、と云ふ嘘をついて生きて居るのである。

以前のロシアには約五百萬の知識階級が居たが、それが十萬に減少したと推定される。此の「知識階級」の子孫と、知識と云ふ権利を以てしても、「知識階級」には入れられない人々とは、今日リシエンツィと呼ばれ、全く権利を剝奪された者になつた。彼等は食物を徴收されて、事實上死刑の宣告を受けて居るわけである。一村落ソヴェート、乃至一都市に於ける各種のボルシェビズム行政組織の監督を委任されたお蔭で、思索の時を持たざるを得なくなつて來た新「知識階級」を構成する人々からは、彼等の思想を何處かで試みる外的な可能性が、既に奪はれて居た。彼等の讀むのは共產主義の新聞と共產主義の書類に限り、見るものは唯共產主義の方法ばかりである。彼等が大部分唯物的にさせられて居る状態はひどいもので、凡そ彼等の持つて居る意思と云ふものは生存の維持の爲に利用されなければならぬのである。

労働者の中で最下級の者は、強制労働宿泊所の人々で、精神的發展の點では彼等は問題にならない。

工場労働者は一種の行政組織と懲罰制度の下に立つて居る。彼等の給料は比較的いゝが、大部分はソヴェート組織の生活以外には何も知らない。物價の高い事は勿論である。今迄の荒地に新たに建設された工場部落に於てさへ、その宿泊所は、まあヨーロッパ諸國の道路工事宿泊所バラックの小屋より、ずうと原始的なものにも拘らず、此の居住法が尋常なものと考えられて居るのである。今日の工業労働者の大部分は、子供の時に村から都市へ來た者で、ソヴェートの工業は一九二八年に千六十万の従業者を持つて居た。それが一九三五年には二十四百三十萬になつた。總計約四千二百萬人がソヴェートで工業的企業に關係して居る、と推定される。それは少くとも工業に従事する人間の八十パーセントが、彼等の家族の前時代に源を發して居る都會生活や工場労働と云ふ傳統を知らずに、いきなりかう云ふ境遇に移されたと云ふ事を意味するのである。工場労働者の四十パーセントが女であり、都會人の七十パーセント以上が世帯を持たずに、工場の食事で生活して居る事などは、彼等にとつてあたりまへの事に考へられて居る。彼等は極度に搾取する請負制度に反抗したり、彼等に支拂はれる賃銀が、事實高い物價に適應して居るかどうか、などと算定してみたりする能力を、彼等は持つて居ないのである。村に居た彼等の先祖達は、舊ロシアの農民の間で特に發達した手工業的労働で、日用品の大部分を自ら作つて居たから、彼等は買ふと云ふ傳統を知らない。彼等の先祖達は、年に一回乃至二回、隣り町の市場に出掛けて行つたが、それが村の世界以外の他の世界との、唯一の連絡なのであつた。

かう云ふ人々にとつて、商店に三通りある事は、今日當然の事に思はれて居る。その第一は國立の商店、第二は集産農場の市場、第三は特待黨員や特待工業労働者の爲の供給所である。國立商店の幼稚な生産物の他に、一度集産農場の市場で他の商品を買ひたい、それでなければ、工場の特殊配給所で、正確に半ポンドのバターを渡される地位に昇進したい——彼等はこれを生活の目標にして居るのだ。かうした労働者からかう云ふ状態に對する批判を聴かうと期待するのは、ソヴェートの人間は全く間違つた評價をして居る、と云ふ事を意味するであらう。今日でも總じて田舎出の工業労働者は増加し、ソヴェエトロシアの査定に依れば、一九三六年には四十パーセント以上の増加を見たとさうである。彼等は一定の制度に従つて田舎から連れて來られる。既に集産農場では、農業労働者を失ふ事が頭痛の種になつて居る。それ故に集産農場の管理者と工場維持係の黨官吏とは、若干の農業労働者と新しいトラクタ―とを交換して居る。

考へても見るがよい、ソヴェエトロシアの工業労働者の殆ど半數は、一九三六年に十八歳乃至二十四歳だつたのである。だから彼等は、ボルシェビズム革命當初の一九一七年には、未だ生れないか、或はせいせい五歳だつた者である。帝政ロシアを知つて居る證人としての彼等の祖父は、最早此の世になく、父は大抵殺されてしまつて居るか、さもなければその子の現在の滞在地も知りはしない。だから彼等がボルシェビズム制度に對して、ヨーロッパ人の高度の文化と高度の知識から進み出た精神的反抗が有り得

ようなどとは、どうして豫想する事が出来よう。彼等はその生活を當然なものとして考へて居るばかりでなく、恐らくは幸福なものと思つて居るのである。

次に農民であるが、一九一三年、ソヴェエトは九千萬の人間が獨立農乃至職人として田舎に生活して居た。彼等の生活は細々としたものであつたが、地主の貴族に依存して居てもいつも満足して居た。彼等は日常の必需品も日常生活の商品も、自ら耕作し自ら製作して持つて居た。彼等と共に生きて居たのは約千七百萬の地主と大農であつた。一九三四年、ソヴェエトには尙約三千七百萬の獨立農が居て、國家に監督され、全然共產主義の黨機關に從屬して、穀物を生産し、それを公定價格で、公定量だけ賣つて居た。此の獨立農達は、それが土地に一番よく適すると知つて居ても、自らの生産的能力で耕作する事が出来なかつた。彼等は個々の農場の爲に、強制された計畫を、履行しなければならなかつた。其の他一九三四年には、既に七千七百萬の人間が、國家の使用する農業労働者として、集團農場に生活して居た。彼等は僅かにその小庭園を持つて居るのに過ぎず、まがよければ牝牛を二頭持つて居るだけであつた。大農、地主、比較的大きな獨立農等の此の數は崩壊し、一九三四年には總て十四萬九千人の所謂「Kulaken」になつてしまつた。それはソヴェエトロシア農民の過半數が、一九三四年に、早くも財産も自作耕地も持たなくなつた事を意味して居る。

大戦前のストリピンの農業改革に依つて、農民が大地主に對する義務から解放せられ、私有所有地を

得るに至つた事を考へるならば、此處に始めて此の大變化が理解される。農民はかうしてその故郷を得たのであつた。彼等は新經濟政策の時代ばかりでなく、更に後に至つても、共產主義に反抗して、ソヴェトロシアの己が土地を根限り守つたのである。併し一九二七年以來、集産化は間斷なく管打たれ通してあつた。殘存獨立農と集産農場の自由になる農業利用面積の状態は、既に一九三六年播種面積の九十七パーセントが集産化されて居た事を確認すれば理解される。それ故に獨立農も、事實上一片の耕地の所有主に過ぎず、彼等は其處で、いはば彼等の國家的義務を履行し得るだけの量を耕作する事が出来るに過ぎないのである。大抵の場合、自己扶養の爲には彼等には一物も残らないのが普通である。のみならず彼等も亦集産農場に行く。それがボルシェビズム農業經濟の目的だからである。

此の集産農場はいはゞ組合と云つた様なものではなく、その持主は國家であつて、國家は農民に多少の用畜と小さな菜園とを委託する。農民はボルシェビズム國家の奴隸になるのである。

ロシア農民のかうした沿革にあつて、何處に反抗が起る事になるだらう？ 自分の土地を自由にするとすると、農民とても人間だ。その仕事を自分の意思で始めて、此れを飽く迄やり遂げなければ氣がすまぬ。收穫は自分の能力の結果の管だ。集産農場の農業労働者は、奴隸状態に置かれた上に、ボルシェビズムの嘘八百の煽動に説得されて、ボルシェビズムに抵抗する様な精神力を持たないのである。ボルシェビズムの獨裁は、ソヴェトに於て、效果的な抵抗のあらゆる可能性を排除する事に成功し、

ボルシェビズムを信奉する知識階級の間で行はれる激烈な闘争にも、一時は觸れられないで居た。レーニンかトロツキーかと云ふ事が今尙問題になつて居る。依然として尊崇されて居るマルキシズムを、先づソヴェトに於て完成し、然る後此れを世界に及ぼさんとするか、或は全般に亘つて世界革命を起し、ソヴェトも他のあらゆる國家も、同時にボルシェビズムの樂園に導き入れんとするか、かう云ふ問題もある。そして此の問題をめぐつて、クレムリンと軍との對立は激化して居る。軍人は討論なんか少しも判らない。討論でユダヤ法典の知識など振り廻されたら、どうしても理解出来はしない。多くの赤軍高級仕官は銃殺され、國防の全組織は、ヨーロッパに於ても極東に於ても覆へされた。ソヴェトロシアは政治的大敗北の苦杯を嘗めなければならなかつた。チェコスロヴァキアとの同盟を餘儀なくされたのもこれが爲で、何とも辯明の餘地はないのである。一九三八年十月に催された國際共產主義會議の席上で、モロトフ、リトヴィノフ、デイミトロフ等がやつた遁辭は笑止の至りである。ズデーテン及びチエコスロヴァキアが、その自然的境域に復歸する事を、ソヴェトが實力を以て妨げ得られたならば、ヨーロッパの政界に於けるあらゆる地位を奪つた政策上のあの敗北を阻止する爲に、スターリンはあらゆる力をこれに參加せしめた事であらう。

ところで此れが爲にボルシェビズムに變化が起きるだらうか？ 否、毫も變りはしない。自らの肉を引き裂いて喰ふ此の巨人國は、強制労働で倒れる多くの人間を毎日食つて居る。大地の豊穡性を食つて

荒野を生せしめ、莫大な原料を食つても、生長しない。力も所有も増大しない。所有を利用し、所有を増大せしめる技術——民主主義はそれで生きて居るのだが——さへ、自然の大寶庫たる此の國では徹底的には行はれて居ない。いつも民主主義を救つて來た人間——氣立てのよい、常に勤勉で寡欲な無数の人々——が居ないのである。

ソヴェエトロシアは世界最大の森林を有し、國內消費量を遙に越える穀物を産出する事が出来る。鐵あり、金あり、銀あり、亜鉛あり、銅あり、黒鉛あり、である。現存貯藏量の誇大評價はホルシェビズムの好んでする所であるが、ソヴェエトが石油産額に於て、合衆國に次ぐ第二位に立ち、世界貯油量の三分の一を持つて居る事は確實である。ソヴェエトの石炭埋藏量は十億二千萬噸にのぼつて合衆國に次ぎ、ヨーロッパ第一である。又恐らく世界泥炭産出の約六十パーセントを持つて居るであらう。鐵の産額は今のところ無盡藏である。既にその緒についた工業的諸企業、石油精練、諸成品工場等の生産物は、開發された諸原料の分量次第で著しく大きなものになるかも知れない。技術的效果或は技術的能力の不足の爲に、生産は絶えず停滞する。併し機械人を全く人間扱ひにしないから、獲得原料に對する生産物の價值及び割合は決定的なものにならないので、ソヴェエトはその亂脈な經營をいくらかでも續ける事が出来るのである。五ヶ年計畫が完成されようと、その結果が豫定の統計より遙に劣らうと、そんな事は決定的ではない。歐米國民の場合なら、それはどんな工業にとつても致命的であらう。併しソヴェエト

では殆ど關係がないのである。何故ならば、石炭、石油、鐵及びその他のあらゆる礦産物が無盡藏だからである。舶來機械の緊急な需要を満し、世界中の政治的煽動を賄ふに足る爲替を維持する爲に、工場は中央で管理されて居るソヴェエト經濟が要するだけのものを、如何なる場合でも生産して居る。

ロシアの農産物を評價する場合も此れと變らない。ロシアが一九一三年産出した穀物は、一億四千萬の人口に對して八千萬噸であつたが、今日豊作凶作の年評價の平均は、一億六千五百萬の人口に對して五千萬噸乃至六千萬噸である。既に永年に亘つて穀物の輸出は行はれて居ない。都會と田舎の人口の比は、依然として一對四であるが、國內供給は收穫の三十パーセント乃至四十パーセントになつて居る。都市の得る穀物は、その需要を満す事さへ出來ないから、従つて田舎では、大量の不足を告げざるを得ない。だから不作の年には災害が起る。例へば一九三二年、三三年の如きは、饑饉の爲、或は農産物強制供給の際の暴力手段の爲に、五百萬の人間が死んで居る。その結果は大抵の場合、種子の缺乏と再度の不作である。麻、綿、砂糖等の例をとると、ソヴェエトは總産出高に於て、著しい増加を見る事が出來たが、ヘクタールあたりの收穫は減少して居る。それは農民の生産力が目立つて低下したからである。

ホルシェビズムにとつては、如何なる喪失も、如何なる浪費も、當分の間は、無關係である。ホルシェビズムが必要とする唯一の利得は、ホルシェビズムの代理人を、あらゆる方面に派遣させるに足る外國爲

替である。煽動者が扶養されて居れば、それでスターリンの五ヶ年計畫は達成されて居る。二面政策はどうしても續行する必要があるのである。一旦此れが崩壊するとすれば、ソヴェトは混沌への道を辿るであらう。混沌——それは今日の此の國の状態より餘り悪くはないであらう。組織的殺人、あらゆる財貨の組織的破壊は、全然秩序と云ふものを缺いた混沌よりも更に悪い。混沌からは再び人間が生み出されるかも知れないし、その人間と共に、再び新しい秩序が生れるかも知れない。ボルシェビズムにとつては、唯一つの此の危険を防止する爲に、スターリンは繼續的煽動に依つて民主主義者を動員する。

スターリンは民主主義世界の寛容と幫助で生きて居るのである。スターリンがやつて居る安全政策が、意識的に依つて來る所は、行爲意思と人間性の意識に立ち歸つた單一なヨーロッパの干渉戦が始まらない限り、ソヴェトの生命は續く、と云ふ點にある。ボルシェビズムが我と我が身を守る爲に用ひられて居るのは、赤軍の威嚇ばかりではない。又赤軍が武器に依つて提供して居る援助だけでもない。其處には外交上の色々な手管が用ひられる。それに依つてボルシェビズムは——ジュネーブが完全に閉め出しを喰はず様な時でさへ——ヨーロッパ各國外務省の控へる間にうまく通る資格を得る事に成功するのである。かう云ふ場合最適の代理人はロンドン、パリ、ニューヨーク等のユダヤ人銀行家である。彼等は信用取引の交渉相手にして居るボルシェビストの中に、先づユダヤ人根性を持つた人間を見出す。合衆國のユダヤ系新聞が、世界ユダヤ主義の希望は、モスコーに於

けるユダヤ人の優位に頼つて居ると公然と述べた事がある。

レーニンとトロツキの闘争は、モスコーに於ける各種ユダヤ閣確定の闘争であつた。世界ユダヤ主義は、ボルシェビズム國家組織の中に、一致して、ユダヤ人支配の維持を保證する一連の人々に、次々と地盤を張らせて行つた。彼等は——假りにリトビノフとしてもカガノヴィツチとしてもいゝが——スターリン及びその敵達を弄んで居る。ニューヨーク、サンフランシスコ、ロンドン、パリ等のユダヤ系銀行では、スターリンが何百人暗殺させようと、何千人暗殺させようと一向無關心で、スターリンが没落する様な場合には、早くもお代りを用意しておいて、その男に表面上の獨裁を行使させ、事實上の権力はユダヤ人で握らう、と云ふ事になつて居るのである。若し此の男がユダヤ人で無ければ、モスコーに於けるユダヤ人の優勢を僞裝出來るので好都合である。一九三五年の第七回共産黨世界會議の席上では、統治及び煽動の此の組織に就て、人民戦線に就いて、佛、英、米等の諸國への進出に就いて、全く腹藏なく意見が述べられた。テイミトロフはボルシェビズムの爲に民主主義的人間の愚直と所有暴狂とを同時に利用する事を目的とした計畫を作り上げた。それ以來年々成功の報告が行はれて居る。

暗黒界の大衆には、庶民階級の物慾が説かれ、庶民階級にはファシズム國家による危険が説かれる。民主主義國民の鈍い感情は、所謂無限の所有が、危険に曝される懼れがあるかも知れないと思ひこんで、ファシズム國家を「此の所有の略奪者」と思はせる策略に巧みに引つかゝつてしまふ。民主主義國

家の大部分の國民は、世界政治的、世界經濟的發展の事實に對しては、鈍感で單純なもので、こんな有りふれた嘘が信じられるのである。民主主義國民の愚昧さが彼等をボルシェビズムの手に渡し、社會黨の人々と民主主義國人とは競争策略で手中に落ちてしまふ。約する事の多い者は大衆の間で收める結果も大きい。だから社會主義者はボルシェビストの後を追つて走らなければならない。兎に角フランスのボルシェビズムは二年がかりで遂に、共產主義者たる事が、愛國的であると大衆に信じこませてしまつたのである。

英國の知識階級に説かれた事は、全く同様なもので、英國人には耳ざはりよく、フランスその他のヨーロッパ各國の意には反する所のものであつた。合衆國のボルシェビズム煽動は、ニューヨークの銀行及びホワイトハウスの権力者の帝國主義に倚つて居る。ヨーロッパ以外の所では、國家的理由でヨーロッパ人の支配に對して反抗する大衆がボルシェビズムの捉へるところとなつて居る。ボルシェビズムの煽動は同時に二つの事柄に成功して居る。即ち先づロンドンでは、英國の世界支配を永續せしめんとするならばマルキシズム的方法に依るべき事、至上權の統一を維持する爲には、世界の富者から貧者に墮ちなければならぬ事などを説き、黒人村では、反英煽動をやり、黒人を刺戟して反白人暴動を起させて居るのである。

レーニンにしろ、トロツキーにしろ、スターリンにしろ、クレムリンの煽動者は一人残らず、一様に

その天稟を發揮した。口説き落さうとする國のその都度の状態に應じて、彼等の煽動に弾力性と適應性を與へる天賦の才である。ボルシェビズムがロンドンに現はれば、御殿の絨毯を敷きつめた階段を上り、マンチェスターに現れれば事務所の階段を上る。又英國の田舎では庭園のバーテューに顔を出すと言つた様な具合である。

英國の共產黨は、その數に於ては貧弱で、今日正式黨員は略々一萬と評價されて居るに過ぎない。併し労働組合の機關とか、慈善協會とか、文學的定期新聞等には、到る所にその聯合が見られる。兎に角英國の共產主義新聞「ザ・デイリー・ウーカー」は、殆ど二十萬の讀者を持つて居て、その中労働者は所謂市民知識階級に比して遙に少數である。パンフレットは何百萬部といふ數で各地に頒布されるが、大抵の場合、宗教上の小競り合ひ、一寸とした社會的支障、地方のストライキ、工場の閉鎖、軍備上工場労働者の特別負擔の必要等の機會をねらつて行はれる。英國人の生活の小さな徴候が數多く採り上げられ、全然英人の耳に適する様な辯證法を用ひて、共產主義煽動の爲に利用される。英國の「文化」は共產主義者の主要なテーマになつて居るのである。英國自治領のカナダ、オーストラリア等に於て、共產主義煽動が上流富豪階級の間でやる工作は、ロンドンやマンチェスターの場合と同じ方法で、下層大衆の間では、又も反富豪階級煽動が行はれて居る。議會では確かに時たま注目を引いて居る效果、勞資間の交渉の場合とか、又物質的に惠まれた境遇にある青年男女が、ディレダントとして文學的遊戯を樂し

む場合とかには、常に到る所で目に立つて居る效果に就いて、及び此の煽動の巧妙な方法に就いては、第三インタナショナルの専門文獻が無数の例を示して居る。

共産主義運動は、合衆國に於て人道主義的團體に近づき、多くの學校や大學を頽廢させて居る。煽動者は何處でもユダヤ人である。農民が何かで困つて居ると、ユダヤ人は自分達の體験から得た論證で彼等を説得し、ソヴェト聯邦の「農業天國」を見せびらかす。都會で物價が騰貴すれば、ユダヤ人は農民を罵る。此の意味は常に變らない。國民の個々の階級を不安にし、此れを解體し、潰亂せしめようと云ふのである。

第三インタナショナルの會議毎に、ソヴェトが公然と、又詳細な報告を以て述べて居る所に依れば、世界各國から來た男女を、この國の煽動の爲に特に養成する學校が非常に多いと云ふ。彼等が熱心に教へられるところは、政治、及び經濟の範圍のあらゆる重要知識、統計、社會的發展の自然的障害等であつて、それが全く實際に即して教へられるのである。それから此の事實材料を歪曲し、共産主義煽動の種にする方法が指導される。かくて此れらの男女は、一國政府のやる事は何でも、此れを捏造して、直ちに該政府に對する攻撃の材料に化する事を會得するに至る迄教育されるのである。

さてモスコから各國に送り歸される煽動者は、共産黨の派遣者や第三インタナショナルの代理人と共に、人道主義的團體と關係を結び、間斷なく材料を手に入れる。彼等は共産黨の派遣員から、再び

モスコの委任を受けて、各地方各植民地に向けられる。共産主義者が統一戦線運動、人民戦線運動に依つて、社會的團體や中立黨のグループに進出して行けば行く程、煽動材料は益々容易に、益々豊富に彼等の手に流れ込んで來て、モスコの命令を受けた彼等は此れが爲に忙しく立ち働かなければならぬのである。

イギリス、フランス、サンフランシスコ、ニューヨーク、カナダ、オーストラリア等に於て、或は印度、南アフリカ、ヨーロッパ小國の英國政府當局に於て、内閣や銀行の権力者が、反共産主義運動のや

る絶えざる警告を嘲笑すると、共産主義者は満足的笑を洩すのである。ボルシェビズムはかう云ふ方法に依つて、(本國に於ける勢力の實際上の程度は此れに對して決定的なものではないであらうが)ヨーロッパの暗黒界を絶えず活動させる事が出來同時に、各内閣を手始めにヨーロッパの政治に迄その勢力を及ぼす事が出来る。ソヴェトがボルシェビズムを奉じて居る間は、永久に暴動を賄ひ、代理人を派遣し、歐米を不安に陥れるであらう。此の危険を絶無にする爲には、ボルシェビズムに對して二方面の攻撃が必要であらう、而もそれが自覺して行はれる事が必要だと思ふ。ロシア人は自らボルシェビズム獨裁、ユダヤ人獨裁を攻撃し、此れを征服しなければならぬであらう。同時に民主主義の主權者は、その暗黒界を根絶すべき勇氣を養はなければならぬであらう。而もその上に、必ずや民主主義世界の革命が必要になつて來るに違ひない。といふわけは、今日の狀態は暗黒界に

生存の内的力を興へて居るからである。所有を讚美し、それを生存の要素と見做して居る者は、常にその下に居る者から脅かされて居るのである。

民主主義は二重の重い責を負つた。民主主義がヨーロッパと世界を獨裁して居た時は、下層社會に向つて自分を通す事もしなかつたし、又西方から東方への進出もやらなかつた。今日のヨーロッパは餘り、人間が多すぎる。併し同じ構成の人間には豊かでないから、既に數で制約を受けて、他大陸の人間に對抗する事が出来ないであらう。ヨーロッパは重要原料に乏しい。ロシアが文化と經濟の點でヨーロッパに屬して居るとすれば、歐米民族、殊にそのヨーロッパの部分は一層強大なものであらう。東方に對するヨーロッパの數百年間の誤つた立場は、今になつてその報を受けて居る。ヨーロッパがその胸を廣げ、その腕を世界に伸した時、スラブ人はヨーロッパに引き寄せられはしなかつた。ヨーロッパ人の前には西方が開け、海を越えてアメリカやアフリカに渡る事が出来た。他大陸の占領が終ると、ヨーロッパ人はアジアの周圍をめぐつて、海からばかりアジア大陸に侵入して行つた。彼等は抵抗の少い線を選んだのである。

東方にはヨーロッパの如何なる動きにも觸れられなかつた地方に、特性ある人間が残つて居た。ヨーロッパ人は彼等を征服する事は出来なかつたであらう。若し彼等と共に生活しようとするならば、彼等を掌中に入れなければならなかつたらう。ヨーロッパ人の唯物的見解が此の過失の原因である。東方

人をして、ビザンツ正教會の誤つた教へを捨てさせ、西洋の發展に身を奉げしめる事が出来たとすれば、それは恐らくアリアン人のよりよき類例にして始めて可能であつたらう。貪慾一點張りて、海外渡航の本能に驅られ、精神は淺薄で魂のいぢけたヨーロッパの如きものは、とてもロシア人を惹きつける事は出来なかつたのである。

ヨーロッパは何百年間も、ロシア人の内的健康力を理解せずして、此れに相對して居た。スラブ人に對する關心が起れば、幼稚なやり方でフランス革命の思想をロシアに轉用し、それによつて人間を更に弱いものにした。さうでなければロマンティックな考へ方が行はれた。後になると、ロシアは簡單に利用された。ビスマルクがロシアと結んだ再保障條約は、政治的必然であつたが、ロシアに對する積極的政策ではなかつた。フランスは永い間ロシアを弄んで、遂にロシア人の武力供給を受くべき同盟を物にしたばかりか、英國をも誘つて、己が味方に引き入れるに至つたのである。

ヨーロッパとソヴィエトロシアとの間には、その頃所有人にも行爲人にも越え難い境界があつた。ユダヤ人だけが自由に此の境界を越えてモスコに至り、又モスコから西方へ歸る事が出来た。行爲人はホルンビズムの害を受けない。所有人の間にあつて、ソヴィエトとの同盟の羈絆を脱し、又その國民をも解放してやり、暗黒界の脅威から身を守らうとする者は、その國民の無氣力化、罷業、怠業を考慮する必要がある。

フランスやイギリスで積極的對外政策をやらうとする者は、單に民主主義者の利益の爲の、或は下手すれば、同時にボルシェビズムの目的の爲の御用を勤めては居はしないかどうかと一應疑つてみる必要があるであらう。近年對外政策の觀點を少しばかり改革して、自然的發展の眞價を認めようと努力した民主主義の政治家は、誰でも苦い經驗を嘗めさせられた事であらう。彼等は皮相な投機の利得收獲の邪魔になるものを、寛容する事が出来ない。民主主義世界の對外政策は、銀行の利益になる様に行はれる。ところで此の銀行を支配して居る者は國際的ユダヤ民族であり、ユダヤ人はソヴェエトロシアの味方である。ミュンヘンの四ヶ國會議で明かにされた變化に従つて、民主主義の新しい對外政策が行はるべき色々の腹案の背後には、ユダヤ的意思も、否ボルシェビズムの意思さへも隠れて居る、とは考へられぬいだらうか？

第二豫防戦争

民主主義、文明、制裁戦争に就いて、率直にその思ふ所を書く健氣な氣持を、これ迄持つて居る唯一人の英國人、フラー將軍は、或る書物の中で、第二次國際聯盟戦に就いて述べんとした。彼の意見に従ふと、今以てジュネーブで武力政策上結合して居る民主主義列強が、ドイツに對して起さうとして居る戦争を、彼は第二次國際聯盟戦であると考へて居る。フラー將軍の考へは、恐らく思ひ違ひである。ズデーテン

ドイツがドイツと合併する以前に、ヒトラーが第一次聯盟戦を阻止してからは、ジュネーブでは最早次の對獨豫防戦の準備はされて居ない。聯盟規約は最早その働きを中止されて居る。併し豫防戦が準備され、起される方法は、殆ど聯盟のこれ迄の習慣と違つて居ない。民主主義の能力ではなく、先づその政治的意思に就いてだけ述べて、民主主義の實力に就いては、後によく吟味してみよう。

今日、英、佛の普通の民主主義者に向つて、否、合衆國の民主主義者に向つてまで、一體権力武力あらゆる手段を盡して獨、伊に對して行はれて居る戦争が、果して民主主義に勝利を齎すものかどうかとさいてみれば、彼等は絶體に然りと答へるであらう。民主主義國家が、「全體主義」國家を絶えず追窮出來る爲に、武力強化、而も大々的強化が必要である、と云ふのが輿論になつて居る。パリ、ロンドン、ワシントン等の政府は、時の一般に流布された見解を疑ふ興味を持つて居ない。民主主義の國民が、如何なる軍事的、經濟的、政治的事實に直面する時でも持つて居るあの素朴さの中に、彼等は所謂「戦争の可能的な」一部分を、事實上の戦争力の一部を見て居るのである。

「全體主義」國家に對する、民主主義國家の戦争が、必ず勝利に終るべきものである云ふ見解は、明かに専門家の見解ではない。英國の野黨及びパリの人民戦線派が、九月にやらうとしたあの豫防戦争が若し勃發して居たとすれば、フランスは三方の戦線に向つて戦はなければならなかつたであらう。又次の様な事が想像される。フランスの東部國境には、全軍の大部分を要塞地帯に釘付けにして、おく事にな

つたであらう。若しドイツの國境を越境する事が出来たとすれば、ドイツ西部要塞工築の當時の状態に於てさへ、それは夥しい犠牲を拂はなければ不可能だつたであらう。併しフランス軍當局は人員を節しなければならぬ。何故ならば目下佛軍は、極度に貧弱な出産年度の徴候にあるからである。又佛、伊國境には少くも有力な大軍を集結して置かなければならなかつたであらう。佛西國境は空中戦に開放された地域となつた事であらう。最近のチエムバレン・ダラヂエ會談の後、佛英の諸新聞は、フランスに對する英國の陸上援助が非常に微弱になつて居る事を、あからさまに述べて居る。それに依れば、英軍は非常豫備軍として働く爲に、本國に残り、先づ英國領土軍を武装させた上徹底的教育を受けなければならなかつたであらう。英國の自由にして得る全陸軍をフランスに向けたとしても、フランスの三面戦の本質的輕減は起らなかつたらう。その代り英國は、海戦及び空中戦で、大いにフランスを援助したであらう。併し英佛空軍のドイツ攻撃に對する防禦軍は新鋭だつたであらう、英國は世界戦争の時ほど、海軍で大成功を収める事は出来なかつたのであらう。ロンドンとパリでは一も二もなく當にして居る合衆國は、ヨーロッパの民主主義國の爲よりも、恐らくは寧ろ全アメリカ大陸の完全な兵備の爲に、大馬力をかけて軍備に躍起となつた事であらう……かうした事が考へられるのである。

三民主國の全經濟力を、特に組織的に總括する事が必要だつたらう、と云ふ見方も、専門家は持つて居た。彼等はその軍備討議の最中にも、經濟關係の新秩序を忘れはしなかつた。益々多くの砲、戦車、

飛行機が造られ、ば造られる程、益々多額の金錢の調達を必要とするが、その金は民主國では、たゞ貿易と運輸に依つて集められるだけである。その國の防禦力と攻撃力を強化しようとすれば、英、佛の大臣は誰にせよ金を考慮に入れなければならないのだ。國民が經濟的に軍備の完成迄持ちこたへられるかどうか、それを誰しも怪しんで居るのである。

英國現藏相ジョン・サイモン卿は、嘗て此れに就いて腹藏なくその考へを述べて居る。それに依れば、英、佛兩國ともに、巨額のクレデットを前提としてこそ、軍備の完成を期し得る、と云ふ事を我々は知つて居る。今日貸した金は、他日返済されなければならない。國民の特別な精進、金でなく、生産となつて現はれる能力に依る經濟状態の均衡は、所有人には不可能事である。その點に於て民主主義國の軍備制度は、行爲人のそれと著しく相違して居る。

さてサイモン卿は、現在軍備の爲に得て居るクレデットの返済と利子の支拂とに、英國國民はどの位永くたへられるものか調査させたが、試験期として一九七〇年が選ばれ、その際次の事が確認された。即ち、若し英國の生産力が引き續き向上すれば、來るべき十年の間に利子及び元金の皆済は確かに可能である。此れは遙か一九七〇年迄に片付ければいゝクレデットだけで新軍備が賄へる、と云ふ事を意味して居る。併し若しも人口減少と國民収入の減少（此れは未だ英國の計算に考慮されて居ない）の爲に、國家の収入増を齎さない場合には、英國國民は一九七〇年に至つてさへも、今日既に得て居るクレデット

が要する元利の返済にたへる事は出来ないであらう。……

軍備の効果、國民の能力と云ふ點に入つて行くと、自分を辨護する事はどうもうまく行かない英、佛の大臣は、この調査に對して特に大きな信用を與へなかつた事を、我々は識る事が出来るのである。

軍備に對する懸念が大きくなれば大きくなる程、益々他の武器——世界戦争の時英佛が最初に携へて現はれた武器——を手にする様になる。制裁——此れがその武器である。所謂侵略戦の罪を犯した國に對する制裁發動の可能性が、聯盟規約の中で——豫め考慮されて居るのは、實力行使の最も卑劣な手段の一つを、國際法的に裝飾する爲に過ぎない。英國は世界戦争中、國際法にも基づかないで、ドイツの婦女子を飢餓に晒せしめて敢て憚らなかつたが、今日は此の糧道隔絶と云ふ武器を用ひて、アラビア人や印度人と闘つて居る。

假令聯盟が完全に崩解しても、それが爲に制裁戦は放棄されないであらう。否その反對に、ヨーロッパに於ける二陣營間の緊張が激しくなればなる程、武力で豫防戦に勝利を得る見込みが、益々英佛側に少くなればなる程、その敵を征服する手段として、封鎖と飢餓戦術が用ひられるであらう。近年經濟方面に於て、英佛が合衆國と協同して講じたあらゆる手段は、結局制裁戦の爲の軍備を強化する事を意味して居る。英米新通商條約は、英國及び合衆國には、決して最惠國待遇及び自由貿易の原則に背離せずと云ふ口實の下に、ドイツを莫大な重要商品から閉め出して居る。一旦緩急の場合、對獨戰遂行に利用

すべき貨物を、英國經濟と云ふ概念に般入する爲に、對獨貿易及び交通に依つて得られる利得と、或種の原料を投機してこそ始めて得られる利得とが犠牲にされるのである。英國の欲する所は第二に貿易と交通とを、ドイツを除外した商品の交換に習熟させようとするのであつて、既に今日でも、戦争用武器の助けを借りず、通商條約の助けを借りて、封鎖と云ふ武器をドイツに對して用ひようとして居る。此の全然戰時的な手段（ドイツは此れに對する自衛法は知つて居るが）の背後に居る者は、恐らく通商條約に調印したイギリスの政治家ではないであらう。ドイツの侵害者は英國の與黨の中に、否それよりも特に、合衆國のユダヤ人とフリーメイソンの中に求められるのである。又反獨の目的で行はれる恐るべき宣傳、ユダヤ人問題調整に關聯した無節制な煽動等も亦此の制裁戦の一つである。それが爲に英國は、對伊制裁戦の時より、本質的に大きな犠牲を拂つたのである。

豫防戦争への共同經濟武裝は、ロンドン及びパリの或る種のサークルが、今に至つても對米同盟を物にする爲に行ふ政治的討議の前奏に過ぎないと考へられて居るのである。パリのダラヂェ政府の下では、合衆國の尻を追ふのはよくないと云ふ認識が濃くなつては來て居る。若しドイツと和協出来るなら、先づそれを携行して、然る後にワシントンに行けば、それだけ高く買はれるだらう——かう云ふのがフランスの考へである。ところがロンドンでは眞直にワシントンに向つて行く方法がとられる。英國、合衆國、南米相互の間に於て、太平洋及び中米附近の海洋上のあらゆる政治的對立は、故意に公然

と抑壓される。英國がその世界帝國維持の爲に頭を悩ました懸念は樂屋に移され、舞臺では英米の政治家が、外交一致の場を演ずるのである。

此の政策は由々しい結果を持つて居る。英國の政治家、及び彼等と歩を共にして居るフランスの政治家は、ニューヨークを源として合衆國をも支配して居る國際經濟へ、益々依存して行く事になつたのである。金錢上の利害關係を離れては、最早民主主義國民は面倒を見て貰へないのである。民主主義三列強の結合の最もすぐれた宣傳者はユダヤ人である。一九三一年から一九三四年に至る間に、佛ソ同盟を纏め、英國を直接此の同盟に密接に關係させたあの同じ銀行家、ユダヤ人新聞記者、フリーメイソンの首魁等は、三民主義國の緊密な結合の斡旋者になつた。ユダヤ人はニューヨークとモスコで勢力を張り、民主主義國を保障した様に思はせる政治的掛引を用ひて、商賣をやつて居る。民主主義列國が、大々的の平和行動をやりさうだ、と云ふ印象が興へられれば將來取引所で、株が高價に買はれる見込みがある、と云ふ事を知ると、眞偽取りませたニュースを流布し、又投機もやつて、莫大な取引所利得を得る事が出来る。國際的ユダヤ主義の政治的掛引きの背後には、唯此の商業的利害關係があるばかりである。自由貿易、通商條約上の最惠國待遇の形式を、ロンドン及びパリのユダヤ人主権者が極力斡旋するのは、その際の利得の方が、國民の爲を思つて、國家が管理する貿易の場合より大きいと云ふ理由のみで依るものである。フランスの財政經濟の重大危機に當つて、絶體に必要な國家管理に對して、パリで

起つた反對氣勢は、ユダヤ人及び彼等に依存してゐるサークルの意思——假令國民困窮の只中でも、出来るだけ金儲けをしようとする云ふ意思——からのみ説明されるものである。

一方では商賣を、一方では豫防戦を目的とした此の戦備の點で、責任者の企圖はあらゆる民主主義國でバラ／＼になつてゐる。當該政府と反對黨の間には、何處にも對立が見られるが、それが政府側では、豫防戦争ではなく、所謂ドイツの攻撃に對して、あらゆる國防手段を次から次へと講じようとし、反對黨は此れに反して、豫防戦争の爲の公然たる準備をしようとする云ふ形で現はれて居るのが目下の状態である。前者はツェルサイエ條約に基づいた政治組織のお蔭で、最近二十一年間に嘗めざるを得なかつた經驗に照して、幾分の諛歩をしようとし、後者はツェルサイエ條約の中で現状維持し得る部分があれば、此れも絶體に擁護しようとする云ふのである。國民生得の權利を確立する爲の、全く新しい政治組織を、民主主義國に作らなければならぬ、と云ふ考へに諛意を表する者は、概して政府及び反對黨の責任ある地位に就いてゐる人々には見出されない。それはほんの時たま、新聞、週刊雜誌、小冊子等に現はれるだけである。合衆國の背而擁護を受けることにしてもほんとうにドイツと手を握らうとする責任者でさへ、結局は彼等の足りない認識で、行爲人の力の中味を抜く事が出来ると考へて居る。彼等は行爲人をありのまゝに解さうとせず、彼等の國民の中の覺醒した行爲力に基づいて、行爲人と平和裡に競争しようとして居る。彼等のなさんとする所は、行爲人を寝かし付けて（チエムバレンでさへ最近それを暗示し

て居るが)再び民主主義者にしようとするのである。

責任者、殊に最近數ヶ月中、ヨーロッパの政治を本家本元から聽かせてもらふ機會のあつた人々が、以上の様な考へ方をする動機に一番恵まれなかつたと主張する事は決して出来ない。彼等は行爲人、或は彼等の言を繕りて言へば「全體主義」國家の力から、大きな利益を得たと云ふべきである。英國にして若し信頼の念(それがなければ一體政治なんと云ふものは行はれないが)があれば、我が總統がミュンヘン協定の翌日、英國首相と取り交した聲明を當にしてもよい。フランスは今日、ドイツの聲明(それはフランスの國境を絶對に保護して居る)を意の儘にして居る。今日見られる様な平和の状態は、此の六十八年來獨、佛間に無かつたのである。英國にもフランスにも、「全體主義」國家からの攻撃を懸念する様な原因は少しもない。かくて此處から出て来る結論は殘念ながら次の様になる。即ち、他國の總ての軍備——國防の爲でも制裁戰の爲でも——は、對獨直接攻撃の目的か、或は制裁戰の目的かの何れかを持つて居る筈であつて、此の目的を標榜するに當つて、吾人は假令直接武力攻撃を受けなくとも、ドイツ及びイタリアに於けるあらゆる發展に對して防禦しなければならぬ、と主張されて居るのである。かうした識見が特に重要なのは、民主主義國の大勢が更に下り坂になつて行けば、政治家は絶望の餘り遂に武器を握るかも知れないと云ふ危懼の念を解いてやるからである。何故ならば、民主主義國家に今も尙残つて居る考へ方にあつては、突如として直面する窮境は、何でもかんでも簡單に「全體主義」

(264)

國家のせいにしてしまふからである。こんな場合戰爭挑發者は豫防戰遂行を如何に容易に出来る事だらう。彼等は政府より少しばかり厚顔しく、聲高く叫びさへすればいいのだ。さうして、大衆が、彼等の制度の通らんとする崩解の前に見て、遂に絶望の淵に沈んだなら、豫防戰の爲に大衆を得る事は易々たるものである。英佛の國內状態の危險が實際に逼迫した場合、誰が此れ等二國を統治するか、我等の知る所ではない。併し、英國の反對黨は公然と豫防戰の準備をし、フランスの反對黨は餘り強大でないから、戰爭好きなボルシェビズムの勢力から免れる事が出来ない——これだけは明々白々たる事實である。

英佛の施政者に缺けて居るものは、よく考へぬかれた新しい思想、即ち反對黨を飽く迄追窮するに足る唯一の武器である。若干の英國人乃至フランス人から、兩國民の精神的革新に就いて屢々述べられた卓越した思想が、政治的價值に置き換へられない限り、此れを喋々とするのは意味の無い事である。差當り我々の識つて居る事實は、民主主義が今日迄所有に縛りつけられ、下から来るボルシェビズムの壓力の下に立つて居る事、加之上からはアメリカの壓力加はつて居ると云ふ事だけである。我々にとつて政治界で最も安全なものは、今日我々が甲の政治家乃至乙の政治家に捧げる信頼の念以外にはない。ところで此の信頼は、我々が仕合はせにも我が國防軍に捧げる信頼より遙に小さいものであり、又、十九世紀革命と二十世紀革命との協定の中で、これ迄英佛の冷靜な大衆に向けられた信頼よりも更に小さ

(265)

ものである。

回 想

政治的に見れば十九世紀には殆ど存在しなかつた行爲人は、二十世紀には異常な擡頭をした。今日所
有人はヨーロッパに於ける彼等の地位を得んが爲に闘はなければならぬ。民主主義の將來は、或はポ
ルシェビズムに、或はアメリカに、或は民主主義自身の認識の深度にかゝつて居る。民主主義者は一七
八九年から一九三三年に至る迄政治的争闘の法則を與へた。併しそれ以來此の任務は一部分行爲人に移
された。民主主義者が此の二陣營の争闘で、眞の平和意思の證明を與へたのは、若干の人間を目標にし
た證明に過ぎなかつた。大衆は依然として絶えず煽動されて居るのである。

英佛國內の反對黨は豫防戦の主張者である。彼等は一人残らず所有妄想にしがみついて居る。所有は
人間能力の發揮の妨げとなるもので、行爲のみが平和を保證するものである、と云ふ考へは、英佛の政
治——合衆國は扱置き——では未だ効力がないのである。「文明」は今尙民主主義の人間の神殿である。
民主主義「文明」の眞價を吟味しなければ、我々が持つて居る安全さの程度、行爲人保護の爲に我々が
持つて居る手段の量等を計る事は出来ない。

第六章 文明の革命

民主主義的人間は近年殆ど變化しなかつた。併し一般政治經濟上の發展で、自分の障害となる總ての
ものを片附け、工學及び化學の大發見を成し遂げる事が出来る位、依然として充分に彈力を備へて居
る。又物質を集約的に利用する事も心得て居るし、石炭保護の爲には勞働者を自由に使ふ事が出来る。

鐵は精鍊され、化學界の發明に實驗室から工場へ、工場から商業へ、廣告へ、消費へと導かれる。僅かば
かりの伶俐な創造的人間が、物質から造るあらゆる物の爲に、生産器具が具つて居る。生活維持に必要で
ある限り、民主主義者は様々な強度で働く、そして此れと並んで生産の川益者が生活して居るのである。

一旦何等かの難局乃至大危機が到來すれば、その經過と外觀的終極は、「景氣學」の法則に照して評價
され勝ちである。危機を調停し、平常の舊態に復する事は經濟管理と稱せられる。その際盡力する者は
僅かな人達で彼等は「經濟指導者」と呼ばれる。民主主義世界に於ける此の特殊地位に至る道は、所有
を越えて通じて居るのであつて、所有を蓄積すれば蓄積する程、その人間は益々指導に適して來るのであ
る。その上民主主義世界人の大半が素樸である。彼等は一定範圍で、その頭腦と肉體を、總體の幸福の
爲に賭する。そしてそれ以上はその欲する所をやつて居る。併し彼等は特殊な仕事に身を打ち込む事は
許されない。例へば何かに全力をあげて取り掛り、突如として心中に考案を得た場合、その人間はそれ

だけで危険な人物となるのである。多く所有する事は危険でなく、多く考へる事は殆ど犯罪とまで見做される。各國では殊に正常人の状態が好まれ、彼等の公的生活を確定するものは憲法でなく傳統である。其處では他人より多くの所有を欲する者も決して妨害されない。併し特殊な精神的努力を意味する手段を用ひて、此の數的優勢を得んとする者は、それを許される前に、先づ極度に莫大な所有を蓄積する必要がある。

民主主義の人間は正常化されて居る。それは生存保持の爲に有利なのである。併し萬一此の正常化の基礎、即ち所有が俄然失はれる様な場合、それは同時に、徹底的崩壊と云ふ恐るべき危険をも内蔵して居る。その際誤認してならない事は、民主主義世界に若干の差別があると云ふ事である。ヨーロッパの民主主義的人間は、早くも第一撃を受けて安全性を缺き、既に二年このかた新しいものを求めて居る。併しそれに就ての確固たる觀念はない。貯金帳や資本利子を當にする事が危険になつた、と云ふ認識が恐らく大衆の意識の中に横溢して居るのに過ぎないかも知れない。英國及びフランスの民衆の間には、不安な氣持から、既にボルシェビズムに煽動の危険に對する意識が生れて居る。此れに反して、合衆國乃至ヨーロッパの二三の民主主義國、殊に北歐に於ては、社會主義的共産主義的煽動、或は純ボルシェビズム的煽動に對する抵抗は遙に微少である。それはアメリカでは幾分甚しい社會的對立に關係して居る。合衆國東部の諸都市では、資本家がユグヤ人煽動家ボルシェビズム煽動家を直接援助して居る。北

部諸州には、數的には貧弱でも、世界貿易上の地位に依つて、絶大な勢力を有する飽滿したブルジョアが居る。彼等は戦争の經驗を知らず、精神的刺戟の點では著しく損をして居る。精神生活に代つて淺薄なロマンチズムが現はれたのである。彼等の社會主義的政府には、今尚ボルシェビズムとの直接結合を誇つて居る人間が居る。ヨーロッパの二大陣營間に實力行使が起る場合、飽滿人に對する不満を使喚煽動する事に依つて、合衆國北部諸州の地域と人間とを、掌中に收める事が出来ると云ふ期待を、ソヴィエトは今尚持つて居るのである。此の北部諸州及び中央にある行爲人の顯著な發展に影響されて、最近始めて、認識と良識に溢れた青年の一代が生れた。併し彼等の時代はまだ來て居ない。

所有は當分の間、民主主義人の思想と行爲の獨裁的權力となりおはせて居る。それ故に所有の歴史とその將來を指示する事は、文明の將來と民主主義の將來如何と云ふ問ひに對する回答と同じ意味になるのである。

所有の現品目録

歐米民族の所有人は、今日地球表面の三十五パーセントを、植民地、委任統治領として、乃至はその他の從屬形式で、我物なりと主張して居る。イギリス世界帝國は地球表面の二十七パーセントを支配し、ソヴィエト聯邦は十五パーセントを包括して居る。又フランスは九パーセントをその手中に收め、

合衆國は六・八パーセントを所有して居る、總計五十八パーセントである。イギリス世界帝國、フランス、合衆國、ソヴィエト聯邦の四ヶ國は、此の地球表面上に、世界原料貯藏の八十五パーセントを所有して居る。ソ聯はその原料持分を己が領土内に有し、合衆國は原料所有の大半を自國內で賄ふ事が出来る。然るにイギリスとフランスとは、原料貯藏の大部分を國外に持つて居る。鐵、鋼、鉛、亞鉛、石炭、石油、羊毛、綿等の原料供給では、ソヴィエトと合衆國とは殆ど自給自足である。民主主義國經濟の見地によると、ソヴィエトは又、その不足原料を、自給出来る他の餘剩原料で償ふ事が出来ると云はれて居る。と云ふのは、ソヴィエト以外では世界でも餘り發見されない特に收益の多いマンガン鑛を持つて居るからである。

合衆國は帝國主義的政策（それは尙詳述すべきものである）に依つて、若干の原料の不足に殆ど惱まされなくてもよい様になつて居る。此れに反して英本國は、石炭の餘剩を持つに過ぎず、既に鐵鑛に不足を感じて居る。油及び綿（エデプト）及び印度で栽培して居ても、全需要を満すには足りないの補給不足を例外とすれば、イギリス世界帝國は近代工業の爲の殆ど全原料を持つて居る。

行爲人の國は遙に劣つて居る。ドイツの餘剩は石炭のみに過ぎず、イタリヤの餘剩は亞鉛だけである。行爲人の輸入需要は莫大である。のみならず英米の二國、場合によつてはフランスも亦、世界の大半に對して、貴重な原料及び製品の貿易をその手中に收め、通貨、經營等に就いての、三國間に存在する

協定の範圍内で、此れ等の商品の價格や市場を統制管理する事が出来る。ところで此の所有は永遠のものであらうか？ 現在民主主義國家の自由になつて居る所有を、永久不變なものにしようとして、此れを永遠に保證する道德的權利を、民主主義國（歐米何れのものにせよ）は主張する事が出来るであらうか？ 民主主義國は、人間の眞の本質的幸福を決定する行爲力から、所有に對する要求を演繹する事が出来るであらうか？ 政黨、見解、宗教上の信條、乃至は世界觀等の相違を問はず、民主主義國家のあらゆる人間、あらゆる所見人は、此の設問に對して次の様に答へて居る。我々も、又何百年來我々の祖先も、我々の勞働と能力に依つて此の所有を集めて來たのである。此れを支配し、此れを増大せしめる經驗を有する者は我々だけである。何故ならば我々は「文明」を荷ふ者だからである。所有を相續し、或は所有の許可を得て新しい所有を獲得する者に與へられる幸福——文明こそ此の幸福である。

文明は恒久なものである、と彼等は言ふ。文明は民主主義と同様不易なものである。兩者はその歸屬する所を二にし、主義として又生存形式として相補つて居る。人間の衣服、食物、生業の形式、金錢の使用、娛樂、生殖等の中にきつちりと固定された存在——此れが文明である。此れ等の總てのものは不易である。何故ならば、文明の代表者の意に適つて居るからである。文明に反抗する事は、民主主義に反抗するよりも大きな罪惡である。何故と云へば民主主義は、衷心の義務感情からにせよ或は又所期の物質的利用の觀念からにせよ、公的事務にたづさはらなければならぬ、と考へて居る人々の、政治的

活動の表現形式に過ぎないからである。使し文明は何人にも關係を持つて居る。即ち文明は存在である
……等々。

又次の様な事が主張される。世の中には文明を羨む者が居る。非常に「不道德」な人間である。文明の代表者も社會だと云ふ事を、彼等は理解しようとしなないのだ。文明の代表者は必ずしもその所有物の一部を割いてはくれなかつたらう。勿論彼等は、文明の非代表者で絶対に必要な人々よりも、與へる所は少かつた。何故ならば、文明に關與しない者は、彼等の祖先が此の世の何處にもある「無限の」所有を機を逸せずに獲得しなかつた事の報ひを、今正に受けなければならぬからである。何故ドイツ人はルーターの時代に、海を越えて船をアメリカに送らなかつたのか？ 何故好機を掴んでアフリカの海岸を占據しなつたのか？ 他大陸の人間と貿易をしようと云ふ冒険心が、何故彼等に缺けて居たのであらう。ヨーロッパで生れた多くの發明を、他大陸の要求の水準に照して直ちに變形し、それに依つて何故金錢獲得の擧に出でなかつたのであらう。此れはいはゞ、家族の爲に生命を賭して、小財産を獲得したあの先祖を持つ、文明の代表者の罪であらうか？ 此の文明の傳統は、一見道徳的權利を與へて居て、文明の代表者は、彼等の發見にかゝるものがよい事は自明の理である、と主張する。彼等は言ふ、吾人の發明するものは使用されざるべからず、文明の反對に逢はずして推薦されたものは買はれざるべからず……等々。

文明の代表者は此れらの發見や發明、或は生産に對して、資本を投じて居るではないか？ 彼等が世界に有する地位の結果、此度はその投資した金に利を生ませようと云ふ要求を持つのは當然ではないか……等々。

文明を危くさせたかのように見える此の責任をも、決定する事が出来るのは、やはり文明の代表者だけである。世界貿易の曲線が動搖し、乃至は年額經常費を考慮して豫め算定された範圍内に、資産形成が行はれない場合には、機構の何處かに故障があるのに違ひないのである。文明の代表者は仲々太つ腹で、その生存形態が永遠であり不變であるにも拘らず、時には機構の中に故障が現はれる事もあるのを承認する。それから彼等は、此の故障調査の爲に、特別委任者を用ひるが、それは丁度、機械技師を用ひて、自動車の氣化器が變な音を出す原因を確かめる様なものである。此れ等の委任者は、精密に練られた制度により、彼等の統計に従つて、直ちに全世界經濟の徹底的研究に着手する。彼等はどの點で生産が減じ、取引が停滯したかを觀察する事が出来る。此れ等の統計家は、重要原料の採取中、何時故障が起さるのかよく知つて居る。あらゆる調査の結果は、部厚な公示書類に記載され、どの方面に就いても試験され考量される。フリーメイソンの團員で指導的地位にある者とか、銀行の總裁とか云つた、名のある文明代表者の處置が、餘り感心しない様な事が起れば、下役の者遂に此の過失を隠蔽する爲に、直ちに或る制度が用ひられる。上位の者に對する下位の者の信用が損はれると具合が悪い。さう云ふ時には、

景氣と價格に従つて、原料、生産乃至世界貿易に就いての新しい理論が述べられ、文明内部の創造人の氣は安せられる事になる。文明の代表者には、かうした過誤を贖ふ事が出来る程、思ふ儘の金銭的手段が常に有り餘つて居り、又商品も原料も腐る程あるのである。

ところで文明界外の人間が、何か正常な利得を阻害するに足る事を企てたと云ふ事が、かう云ふ文明の統計家乃至國民經濟學者に確定されると、或は彼等がさう云ふ確定をせざるを得なくなつたとすると、それは一大事である。さうなると文明の代表者の間では、かゝる罪人に對しては宜しく重罰を課すべしと云ふ事に、直ちに意見の一致を見る。何故ならば文明は神聖だからである。次に彼等は戦争で脅迫する。そして文明の全銀行及び全工場の總支配人から、最下級の補助職工に至る迄、全従業員を従へて、彼等を後楯にする。文明の圏内で生活して居る人間は誰でも、人間の持つ生計の不安と云ふ自然の方則に従つて、人に依つて程度の差こそあれ、かくも魅力ある金銭利得の可能性が、奪はれてはならぬと云ふ點に、皆が皆連帶責任を持つて居る様に感じるのである。文明は神聖だから、その本源を究明する事は禁せられて居る。そんな事をすれば、文明の永遠性、乃至は文明の道德的權能に對する信頼を搖がす様な事が、明るみに出されるからである。

併し我々は敢然とやつて見よう。文明の基本要素は商品の交換である。食物と衣服を自ら生産し、それで満足して居る者は、今日では最早文明人ではない。こんな人間は文明から販賣市場を奪つて居る。

既にそれだけで刑罰に値する。一方商品交換に依つて利を得、或は利を得んとし、その目的に即して造られた機構——取引所にせよ、商業會議所にせよ、國立販賣聯合、國立生産聯合、國際販賣聯合、國際生産聯合を問はず——の一員になつて居る者は文明の代表者なのである。歐米民族の貿易による商品の交換は能ふ限り悪しきを捨て、善きを探ると云ふ形式で十字軍の時に始まつて居る。地中海が貿易、及びそれと同時に現代文明の或種の形式を知つたのは既に古い事である、併し、中歐、フランス、特に古代ブルグンド、英國等をその故郷として擧げる事の出来る今日の歐洲民族の、本來の核心をなす部分は、いはゞ政治的權力を滿喫して、始めて他國及び他大陸との商品交換をやる様になつたのである。

「文明」の最も古い形式は、南歐から東洋に至る近東地方貿易で、それは正真正銘の物々交換であつた。かうした物々交換に際しても、既に重要な原理が觀察せられる。即ち、商品が交換される時、此の文明的現象の眞の價值にとつて、實際に商利を得る者は誰かと云ふ事が重大なのである。文明の歴史が書かれると、そこには此の點に就いて全然統一された見解が見られない。殊に歴史家が當事者の史料に關係してをれば尙更である。誰も彼も勝つたと言ひ張る。當事者の記録を通じて、眞相を掴まうとする國民經濟學者に依つて、鬭争は大抵の場合（失禮ながら）素朴な熱慮を拂はれて決せられ、商品の價值は今日の觀點に照されて評價される。だからかう云ふ見方をすれば金、緋衣、寶石等は貴重なるものであり、小麦、油、香料等は遙に價值の少いものとなるのである。

ところで此の解釋は絶対に正しいものだらうか？例へば十字軍の時代、當事者本位の商品交換に當つて、自分の持たない必要原料より金の價値の方が少かつた事がなかつただらうか？外來の商品がその國の國民にとつて、實際どれ程の價値を持つて居るものだから、商品交換毎に充分吟味する必要はないのではないか？此の際屢々起る事は、使用價値、即ち社會の爲の實際的效用と交換價値との間の相異である。一例をとつて見れば、十字軍當時、絹、綿、砂糖、金、緋衣等が東洋からヨーロッパに渡つて來たが、ヨーロッパでは此れ等商品の多くのもの、交換價値は至つて少いものであつた。ヨーロッパでは金で防禦用の甲冑も製作されなかつたし、鋤頭も造られなかつた。砂糖は生活を快適にしたけれども、必需品ではなかつた。當時のヨーロッパ人の大半は絹も綿も必要としなかつた。だから當時買ひ入れられた物は、上流階級や富裕階級の奢侈品であつた。又その交換物として供給されるものは、國民産業の結晶たる生産品で、主として東洋に無い毛織物、硝子等であつた。だから當時は上流階級の若干の者に、東洋商品の享有を斡旋してやる爲に、都會の職人や農民迄組織で勞働させられたわけである。

此れは決して社會的觀察とは言へない。使用價値と交換價値の差異を記したに過ぎないと云ふべきである。當時の商品の交換價値は東洋の爲になつた。東洋は毛織物を上手に使用する事が出来たし、又硝子製品も必要として居たのである。かゝる商品の東洋に於ける使用價値は、ヨーロッパが東洋から供給された商品の使用價値より大きかつた。東洋は西洋より良い商賣をし、商品の價値と起原に就いても、

西洋よりよく通曉して居た。イタリア乃至南ドイツの者で、此の取引に關係した人々は、十四世紀になつても、絹、綿、砂糖等の原産地に就いても詳細さへも知らなかつた。だから此れ等のものに就いては、荒唐無稽な傳説が流布された。絹はシリヤ、メソポタミヤ、及び支那から來たのである。併し既にイタリア及び南ドイツには、此れ等の商品の加工工業が起り、その完成製品を東洋に賣り返して、利を得ようとして居た。さうなつても絹と綿の原産地さへ知られて居なかつたのである。

ルネッサンス、知識の向上、及び權力感情の増大と共に、人間を探究し發見せんとする慾望が現はれ、商品の本原を掴まんとする努力が起つた。かうしてイタリアに至る道が求められたのであるが、イタリアは、依然として無何有郷の報道や、又それよりはましな據り所から考へて、當時のヨーロッパの、或種の社會層で熱望された商品の産地だと思はれて居たのである。その際明かに盛に介在した仲買人が居なかつたら、恐らく更によい商賣になつた事であらう。

他大陸から來てヨーロッパだけで消費されるか、或は再び加工されるかする原料の出所を知らうとする此の慾望は、ポルトガル人のアフリカ沿岸航行及び沿岸諸島發見の原因となつた。直接購入の方が仲買取引より有利な事が、此處で始めて確定された。ヨーロッパ人はアフリカ海岸で商品を直接に買入れて、購入商品の使用價値と、供給商品の使用價値との關係を、自分の見積りで定める事が出来る様になつた。そして交換が生む利得を懐中した。商賣は上々に進んだ。當時早くも奴隸賣買が好んで行はれた

が、この場合の購入商品は、硝子玉、毛織物等の等價物に比して、その「廉價なる」事正に典型的であつた。遂にはポルトガルから持つて來られた商品さへ、金と引き換へに賣られる様になり、元は對價物と考へられて居た黒人の商品は、暴力で掠奪されるに至つた。かくてアフリカの海岸からは、金粉、象牙、麝香、生薑等が齎された。

次から次へと新しい交易地を開發して、此の商賈を出來るだけ利潤の多いものにしよと云ふ慾望は、ポルトガル人を驅つてアフリカ沿岸を回らせ、一四六八年希望峯が発見された。一四九七年、バスコダガマはアフリカ南端を迂回して、印度に向つた。そこで文明史上特記すべき最初の思惑はづれが現はれた。アフリカ沿岸を航行し、全くの未開地を開拓して居た間は大成功であつたが、印度では傳統に出會つたのである。地中海から沙漠を越えて、それ迄印度人と商品交換をやつて居たアラビヤ人を、完全には閉め出す事が出來ない事がわかると、ヨーロッパ人は心中面白くなかつた。何となれば沿岸都市の印度人主権者達は、ヨーロッパ人の持つて居ない交換商品を要求したからで、印度人は「手堅い爲替」、即ち金、銀、珊瑚等を、香料、緋衣、寶石等の對價物としてほしがつたのである。東洋の仲買商人は、西洋の産物たる硝子、毛織物等を自家用に使用し、西洋がそれと交換せんとした物、例へば香料、寶石、緋衣等を、金、銀、其他仲買人の領域に産する原料で印度から交換して居た、と云ふ事が明かになつた。バスコダガマが、印度と直接取引をしようとした最初の試みは、かう云ふ事情で成功しなかつた。

た。

併しポルトガルのマヌエル王は、ヨーロッパによる他大陸拓殖の方法を考へ出したが、此の方法は繼續的に用ひられ、最初常に歐米民族の利益となつたが、後には屢々不利になる様になつた。そこでマヌエル王は、希望峯を廻つて印度に向ふ次の航海の爲に、各船舶に砲を裝備した。そして此れを印度海岸の交易地で、二三發發射したゞけで、其の地の主権者達に、彼等の商品を、ポルトガル船で運んで行つた商品と交換する事を承知させた。文明の「より高度な力」はよりよい武器と云ふ形をとつて、此處に始めて明かにされた。それ以來、ポルトガル及びスペイン海岸から派遣される船には、周到な武裝が施された。既に一五〇〇年には、偶然にもブラデルの海岸が発見され、其處から染料材が持ち歸られた。ポルトガル人は早くも一五五七年には支那に海外代理店を持つた。經濟的成果は必ず火器使用の恩恵を蒙らねばならなかつた。スペインは當時三百隻の武裝船舶を持つて居た。その上スペインは世界最大の奴隸市場であつた。

コロンブスは一四九二年、早くも北米大陸を発見して居たが、彼の目的も亦金であつた。貴金屬を産しない土地は無價値なものと思はれて居たのである。

かくてスペイン人とポルトガル人とが、アフリカ、印度等の海岸、否、支那やアメリカの海岸に益々蔓つて來れば來る程、近東諸國の貿易は益々衰運に向つた。かうしてヨーロッパは、その民族のあら

ゆる發展に對して、重大な、今日になつて見れば危険な裁決を與へたのである。ヨーロッパにはその相次ぐ數多くの主權者——騎士、州知事、諸侯、國王等——に至る迄、義務と勞働意思に率ゐられた人々が多かつた。既に人間の定住を見る様になつた中部ヨーロッパのロース川、ライン河、ドナウ河、及びそれらの支流の沿岸には、殷盛な産業都市が生れ、人々は組合に結合されて、個々のものゝ價値を、總體の爲の價値に準じて評價する法則に従つて生活して居た。社會に對する義務の此の不動な拘束は、當時ヨーロッパ人の全社會層に普く行き互つて居たのであるが、それから脱れようとする者は、新發見の大陸行に應募し、硝子玉を懐にして去つては金を持つて歸つて來たのである。

銀漁艦隊が艦裝せられ、手に入れた銀の大半は、王や諸侯が増倍階級とグルになつて著服した。植民地産物の價格は次第に騰貴して來た。

ハンザ同盟がその眼を常に共同體に向けさせられて居た爲に、如上の收得に與らなかつた事を特記すべきである。近東諸國の貿易は、他大陸の富による取引が非常に容易で活潑だつた地方より、寧ろ上下で永つゞきがした。利得漁りは漸くスペイン及びポルトガル海岸から、徐々に北歐及び中央に移つて行つた。アントワープが西洋及び植民地のあらゆる産物の交易所になつたのは、リスボンよりすうと後の事である。アントワープでは、スペイン諸王の直接勢力から遠ざかつて、市民階級に迄此の商賣を擴張しようとする試みが起り、此の地は金錢關係の事の世界取引所になつた。

その後、スペイン及びポルトガルの勢力は地に墜ち、一五八八年には、スペインの無敵艦隊は没落した。かくて英國の勃興となるのであるが、最初、貿易は自由になつたオランダが最高を占めた。蘭領東印度會社が生れる。その資本金は六ヶ年の間に六百五十萬グルデンから三千三百萬グルデンに増資され、やがてオランダの植民地は希望峯から臺灣に達する。

一方ドイツでは三十年戦争が荒れ狂つて居た。ドイツでは舊教徒と新教徒の世界觀の戦争が始つた年、即ちグスタフ・アドルフが上陸したと同じ年に、英國人ウォルター・ラリーは國王ヤコブ一世に宛てた建白書の中で、「海を支配する者は貿易を支配し、貿易を支配する者は世界の富を制する、従つて世界そのものに君臨する」と述べて居る。

島國イギリスの世界政策上のモットーは此の言葉で與へられて居る。世界中の商品で貿易して、全人類の所有の歩合をイギリスに落さうと云ふのである。此の原理に則して、英國民の眼は、生産、發明、自國産の原料の利用等から、否相當長期間に亘つて所有略取の可能性からさへもそらされて、専ら貿易と交通に向けられる事になつた。使用價値と交換價値の間に生ずる取引價格差の利用こそ、英國を富ました制度であつた。英國にも勞働を欲する人間は居た。「メイフラワー」號でバーデニアに渡航した清教徒達は義務人であり行爲人であつた。併し英國民の大部分はラリーが立てた原則から出發して、英國航海條例(英國輸入品は總て英國船に依る可しと云ふ英國航海條例)へと、最大の利得は貿易に依つてのみ得らるべし、と云ふ法則の確立へ

と進んで行つたのである。一六五一年の航海條例の規定する所は、植民地生産物の英國への輸入は、英國船のみに依る事、ヨーロッパ商品輸入が英國船以外の船舶に依る時は、原産國の船舶に依らざるべからざる事等である。英國はその勢力範囲内に於ては、航海が英國の用務たる事を指令した英國民自身の貿易は、ともするとロンドン經由の、他大陸ヨーロッパ間の通過貿易に過ぎない事があつたが、此の貿易の力から、全世界貿易に於ける英國船航行の獨占を、かうして獲ち得ようとした。

航海條例制定後の數年間、英國は自國の植民地獲得に着手したが、それは實際には、先づ對オランダ戦で始められた。英國が自ら占據を行はなかつた事は屢々である、貿易で育つた勢力のお蔭で、他國の所有を自己のものにしたのである。英國自身の推算によつても、一八〇四年から一九一一年に至る迄に、地球上の二千六百八十萬平方呎に及ぶ土地を略取して居る。平均一日六百八十八平方呎になる。

一七一三年、ユトレヒトの媾和によつて、英國はデブラルタル、ミノルカ、ニューファウンドランド、ハドソン灣、ニュースコットランド等を得た。英國は自國の貿易會社を創設し、此の會社はオランダ系會社の勢力を驅逐してしまつた。一七六七年には北米を失つたけれども、ナポレオン戦争を利用して、その勢力を全世界の海上に膨脹させた。交通が全くその手に歸して、諸外國に於ける經濟及び貿易の柵をとり除けば、必ず自國の利益になつて來る様な状態に至つてから、英國は初めてその重商主義經濟の制度を自由貿易に變へた。かうして英國の文明は作られた。「自由」は經濟的獨裁の旌旗に過ぎないのであ

つた。

今日の英國植民地は、最後に十九世紀に至つて作られたもので、此れも亦、全世界貿易路上に於ける權力地位擴大と結びついて行はれたものである。運輸界に君臨した事は、英國工業品販路を保證し、英國は貿易上他國製品を壓迫する事が出來た。英國は農業國に對して、他國が出來るより遙に安い價格と運賃で、自國の工業生産品を供給した。更に他國の通貨事情に對する干渉と、ロンドン取引所とに依つて、同時に世界貿易と世界金融のゴツを會得した。かくて英國は、對外貿易に依つて個別價格を確定した様に、自國勢力範囲で、一定原料の貿易の專賣權を得た場所、一般價格をも規定する事が出來たのである。

文明の成果は、遂に投機となつた。最早取引は手持商品のみを以て行はれず、不在商品を以て行はれる。そればかりではない、生産評定やら、運輸見込及び消費に就ての知識やらに基いて假定された將來の價格と、現在の商品價格との差異を用ひても取引が行はれて居るのである。かうして勞働に代つて所有が決定的なものと思はれる様になつたばかりか、個人が物質の所有者としてではなく、變革の專制者として、商品の上に絶大な勢力を振ふに至つた所で、利得が汲み取られる様になつたのだが、それ程行爲と云ふものが見捨てられたのである。原料、原料取引、製品取引等を支配する者は、價格を決定する事が出來、價格の程度で利を得るばかりでなく、價格の變化に依つても儲ける事が出來るのである。

その場合瞞着されるのは、世界貿易主権者の力を信頼して、固定價格を當にする者である。そして此の制度で勞働を引き受けせられるのは支那の米作農民、英領マレーのゴム栽培者、カナダ森林地の木樵、及びヨーロッパの旋盤工等である。利得は商品の交叉點で捲き上げられ、金は商品をよそにポケットからポケットへと移される。行爲に代つて商人的智能の支配が登場したのである。

此の文明を刻印したのは英國である。他の民主主義國はその驕尾に附したに過ぎない。或は單に植民地と云ふ所有を持つて居るに過ぎない。英國はその世界貿易世界投機上の地位を利用して、その世界帝國內に原料國を築いたが、それによつて次の様に自給して居る。銅七五%、鉛九〇%、羊毛七五%、ゴム七六%、錫六〇%、亞鉛七〇%、小麦五六%、綿三七%、米五六%、茶に至つては八五%、黄麻は完全に一〇〇%、砂糖二一%。

巨大な原料資源地を自由にして居る合衆國でさへ、その強大さは現在英國に及ばない。英國が文明を支配した爲に、フランスは現在の國體で、文明の上に据ゑられた國として、英國に頼らざるを得ないがその過去には、嚴然と二分された植民地歴史の二時代を持つて居る。フランスは先づその諸王の權力をかりて、英國やオランダと同じ様な商業を營まうとした。此の二國に比べると、フランスは世界交通支配の爲の智能の點では劣つて居たが、他大陸にある所有獲得にかけては、先づその執拗さと云ふ點で優つて居た、ナポレオン戦争の時には、大部分の植民地が英國に奪はれた。

ナポレオンの没落後十五年、一八三〇年になるとフランスは新植民地を求め始め、アルジェリアを占領した。併しフランスがその所有の礎石を置いたのは一八七〇年及七一年の戦争の傷手が癒えて後初めて、即ち前世紀の八十年代の中頃の事であつて、それは今日「北阿フランス」と呼ばれて、「佛領北アフリカ」などとは言はれないのである。一八八三年チュニス占取、同九十三年、西部海岸からアフリカ奥地へと侵入した。そして既に四百年前ポルトガルが根城にした場所に在外商館を建てた。象牙海岸はフランスの物になつたが、ナイル河迄進出せんとする試みに、一八九八年、フアショダに於てイギリスの爲に阻まれた。フランスは一九〇七年から一九三四年に至る長たらしい戦争でモロッコを占據したが、此の戦争で巨額の費用を支出した爲に、自國の爲になる物質的利益は、今日に至る迄現はれて居ないのである。併しフランスにとつて北アフリカは重要原料を産する領土であるばかりでなく、フランスが今日最も切實に必要を痛感して居るもの、即ち人間——大都會のフランス文化人には、最早適しなくなつて居る勞役に用ひたり、兵隊にしたりする人間——を産する土地なのである。

オランダは今日、イギリス世界政策の蔭に置かれて居る。印度に於けるその植民地は、ゴム、油、茶等を巨額に輸出するが、その地位は日本に脅かされて居る。

コンゴは一九〇八年以來ベルギーの植民地になつて居る。金、ダイヤモンド、銅、錫、ラヂウム礦等の礦物資源に富んで居る。ベルギー領コンゴは世界銅産額の入パーセントを産し、綿の産額は最近著

しく増大した。併しベルギーの植民地所有の運命も、イギリスとフランスに懸つて居るのである。

此れ迄は全く英國の水路を航行する義務を負はされて居たポルトガルは、英國の羈絆を脱しようとする。併し英國はデブラルタルに至る安全な航路としてポルトガルの海岸を必要とし、希冀峯に至る航路の石炭補給所として、ポルトガル領アフリカ西部海岸の島嶼を必要とする。

全然獨存自主の立場にある持てる國で、英佛と肩を並べられるのは合衆國だけである。合衆國が他の兩民主主義列強と根本的に異なる所は、自國領土内の自國原料を基として、文明を建設する事が出来ると云ふ點である。しようと思へば、自給自足の最も可能性の多い國なのである。英國、アイルランド、ドイツ等からアメリカへ移住した人々は、ニューヨークとサンフランシスコの間に横はる廣大な土地を、彼等の意の儘に耕作し利用する事が出来たばかりではない、やらうと思へば此の廣大な地域が生む原料を、合法的に使用する事も出来たであらうし、それに依つて、英佛の文明と民主主義に背を向ける事も出来たであらう。此處には収入と生活の新天地があつたのである。合衆國移住後の最初の十年間に、彼等が知つたものは土地の飢餓だけであつて、必要とする限りの工業製品を、故郷から取り寄せなければならなかつたと云ふ事實は、歐米民族の悲劇の一つである。

勇敢な先驅者に次いで、初めて商賈自當の者達がやつて來たが、彼等にヨーロッパ文明の制度の中で、破船の憂目を見た人々であつた。彼等には、株の儲けや取引所の相場取引に必要な「律儀さ」さへもな

かつた。唯此の新大陸へ文明の惡徳を齎したのに過ぎなかつたのである。彼等の仲間入りしたのが東南ヨーロッパから來たユダヤ人であつた。此のユダヤ人は勞働を厭つて逃れて來た者で、各地の都合で、アメリカ大陸の地下資源や小麥を賣り、それで思惑利得を吸はうとしたのである。

此の新世界の文明に於ては、次から次へと新しい所有を求めて行く事が、生存の唯一の契機であつた。アメリカの土地に益々多くの原料が発見され、ばされる程、合衆國外の原料獲得の爲に、帝國主義政策をとらんとする慾望は増大して行つた。又、機械が多く手に入れられれば入れられる程、アメリカ西部の耕地は益々酷使された。耕地の肥土は長い間自然の力を奪ひ取られて、遂には廣漠たる荒地と化した。それ故に全所有を少しでも失はない様に、帝國主義的手段を用ひて、合衆國外の豊饒な土地を侵略したり、現存所有の實力に物を言はせて、外國を威嚇して穀物を廉價に供給させたりしなければならなかつたのである。

今日合衆國が産出するものは、一部は自國の需要に供され、他は輸出されて居るが、差し當り世界産額に對する割合は次の様になつて居る。銅三六%、綿三九%、油六一%、玉蜀黍四二%、亞鉛鑛三一%、石炭三六%、煙草三〇%、鉛二〇%、羊毛は依然として一二%。同時に合衆國は世界石油埋藏量の一六%と石炭埋藏量の五〇%を占めて居る。併し合衆國は更に砂糖、錫、マンガン鑛、ニッケル、茶、就中ゴムを得る爲に侵略をしなければならぬ。一八九八年、同九九年の米西戦争の結果ポルトリコを得て、

キューバに保護國を建てた。一九〇三年にはパナマを「獨立國」とし、此れを略取した。一九〇七年セント・ドミンゴを處理したのも同様な手管である。一九一五年にはハイチにニューヨーク取引所の財政監督を設けた。パナマ運河の不便を償ふ爲に、第二の運河を開鑿する可能性が見えたので、合衆國は一九一六年に全ニカラガアを押収してしまつた。

メキシコ、ベネズエラ、及び他のあらゆる中米諸國に於ける合衆國の政策は、事實上次の様な點にある。即ち、國民は表面上の大統領を戴いて居るが、大統領はその給與をニューヨークの銀行から受け、ドルに依つて政治的に服屬させられて居るのである。合衆國は英、佛、和に對抗してアメリカの割前の中の「ドル帝國主義」を行ひ、クレヂット及び高利支拂義務を用ひて他國を征服して居る。財政上の支配が確立されると、その國民を安じる爲に、又各黨各派を政治的に使ひ慣らす手段を手中に收める爲に、その地方に法則を布く。實際はアメリカ政府とニューヨークの銀行の間の緊密な結合によつて、專制政治を行つて居るのである。全西印度、中米、コロンビヤ、ペルー、ブラヂル、ボリビヤ、チリー、ウルガイ、アルベンチン等も同様な手で處理されて居る。合衆國の主權者は絶えず原料に牽きつけられる。チリでは銅、ブラヂルではゴム再栽培の可能性、及びマンガン鑛、ペルーでは銅と銀、等である。

此のドル帝國主義が王位に登つたものが汎アメリカ政策であつて、それはルーズベルトが、合衆國初代大統領として、國外會議列席の爲ブエノス・アイレスに赴き、リマの第二回會議で、全アメリカに適

用さるべき軍備政策に關する要求を提起せしめた事に依つて始めたものである。

併し、ニューヨークとワシントンに於ては、所有獲得だけでは満足されなかつた。交通上の要衝支配と云ふ英國の法式をも模倣して、太平洋上のハワイ島の一隣接島にある真珠灣に海軍根據地を建設したが、此處はパナマ、サンフランシスコ、アリユツシャン列島、フィリッピン等の諸點を結ぶ圓の直徑上にある重要地點なのである。英國は今日も尚、大西洋、地中海、印度洋を支配して居るが、合衆國は太平洋の王者たらんとして居る。

此れが持てる者の所有獲得の歴史と、民主主義文明の建設と完成の爲の権力略取の概要である。

反 歐 大 陸

民主主義人の原料、耕地、金錢、金、及び其の他の有價物の所有は、或は土地侵略に由來し、或は資本主義的機構に依る發明の利用に由來して居る。その場合、民主主義經濟發展のどの段階に於ても、人間の能力は如上の有價物に比して微小に評價せられた。發明家は利慾の目的物にされ、發明は投機の対象になつた。自動織機の發明から電氣の包括的利用に至る迄、歐米民族の技術的大發展の歴史は、常に發明の資本主義的利用の一上一下で特徴づけられて居る。一つの新しい機械、又は鐵道の様な革命的發明は、學者の書齋や技術家の實驗所等から、株式會社の助けをかりて一般生活の中へ移し入れられた。

ありとあらゆる資本主義的利益の中で、最もズバ抜けた途方もない収益が、新しい發明で得られると豫言され、そんな將來への展望が手傳つて、誰も彼も出来るだけ多くの金を掻き集めるのであつた。出資者は、利得關與者たる事を保證される株を得た。株主に出来る限り巨額の利得を約束し、さもなければ少くとも後日約束額の一部でも支拂はねばならぬ約束があるので、殆どあらゆる發見毎に、技術上でも經濟上でも不正な計算が行はれた。又新製品に對する需要を過大評價したり、生産中に先を急ぎ過ぎたりした。大量生産を急いで、新製品試験の全階梯が省略された。發明利用の爲に、投機と云ふ土臺の上、建てられた、かう云ふ株式會社の目的は、金儲けであつて生産ではなかつた。それは自動車、鐵道、ラヂオ、自轉車等の歴史の中に記録されて居る所である。その際損害を蒙つたのは小出資者であつて、銀行などではなかつた。各種の生産物及び企圖から生ずる自然的差異を一度外視すれば、民主主義世界の經濟指導は、二代もつづけて三代目の持主の時、初めて店になつて行く様な、町角の小カフェーで生れる、あの醜聞の多い物語りと何等選ぶ所はない。併し相續む破産のかうした制度と、途方もない利得とに依つて、莫大な賣上金を手に入れた連中もある。金のなる木にとまる事を心得た者は、それで利益を得た。大衆と無産者とは、此の制度の下で、彼等の勞働ばかりでなく、その金錢をも犠牲に供しなければならなかつた。

誇大と失望とを伴つた此の經濟指導は、除々に訂正されて來た。今日では新發明の爲に、株の公告で

金を得る事は、約三十年以前程さう簡單ではない。あらゆる歐米民族の人々は、かう云ふ企業に際して、全く批判的になつた。彼等は金儲けしようと思へば株式市場へ行くが、それは投機の擴大された今日では、本質的には富籤に一枚加はるのと異なる所がない。今日では民主主義世界の「所有」の中に、即ち物質を民主主義世界の爲に用ひる事が出来る權力の中に、疑もなく金融のモーターが不足して居る。

所有の第二の源は他大陸侵略である。イギリス世界帝國、フランス植民地帝國、オランダ植民地、其の他の民主主義列國海外領土に於ける、所有の價值を理解する爲には、本來此の書物の頁數を遙に越えた廣汎な調査を必要とする。此の問題を深く掘りさげて行かうと思へば、科學的吟味と云ふ全然新しい土臺を築かなければならない。何故ならば、國民經濟學は今日迄所有制度崇拜の弊は深く陥つてしまつたから、ドイツとイタリアが、資本主義制度の數々の原則を脱却して、國民に再びパンと勞働とを與へた、あの經濟的過程を解明しようと思へないからである。此處に民主主義が政治的に企らんだ目的に對して、重要な確認を行ふ爲には、大抵の場合政治的にばかり注目されて、經濟的には充分に觀察されない世界の諸事件に眼を向け、二三の例を引用するより他はない。

他大陸でヨーロッパ人が略取した所有を利用する最初の形式は、耕地の收穫沒收と、金及び金屬の掠奪であつた。後になると、土着民の勞働力から生れた生産物が取引された。此れに續いた試みは、耕地を自ら開墾する事であつたが、さうすると、大抵失敗の方が収益より大きかつた。併しその他の點では、

ヨーロッパ人は、土着民の生産品と本國の必需工業品とで取引して、それから得た利益で満足したのである。

ヨーロッパ人に依る他大陸原料利用の制度は、未だその日は淺い。今日海外からヨーロッパに搬入される大抵の原料は、八十年前には使用されなかつたものである。此れ等の原料の原始的な利用から始まつて、次第に英、佛並に合衆國の勢力擴張となり、遂に廣大な經濟圏に擴げられたのである。今日ではヨーロッパと他大陸との間に、原料獲得の闘争ばかりでなく、此の經濟圏の奪ひ合ひが行はれて居る。極東では英、米、佛に對抗して、日本が滿洲國及支那の經濟圏を占取して居る。經濟圏は最近の二十年間に、ヨーロッパ諸國が國境で遮斷されて居る位嚴重に鎖されてしまつた。國民經濟學の統計に依れば、かくして世界經濟は著しく後退したわけである。併し此の統計は表面上「世界經濟」の膨脹を記して、次の様に述べて居る。一九〇〇年現在の取引八百二十億、それが一九一三年迄に千六百億に、一九二九年迄に二千八百五十億に増大したと。此れに續いたのが、深刻な不況による減少である。一九三七年には再び一千三百億となり、一九三七年の中頃以來は激減が見られる。因に數字全體の増大は、信用經濟の擴大から説明されるばかりでなく、世界人口の増加と、各國民間の貿易用立てられて居る商品の増加とからも説明する事が出来る。此の事を考慮すれば、世界經濟は事實上、略一九一三年から絶えず後退して來たのである。

更に發明の歴史の中に配列された統計を見ると、ヨーロッパと他大陸間の取引高増加に對する利益のみに、權威が與へられて居て、發明の中に表現されて居る能力などは物の數にもされて居ない事が判る。併し蒸汽機關、鐵道、ダイナモ、電話、電燈、無線電信等の發明は、何れも經濟上の取引高増加から生れたものでない事を、統計は教へて居る。寧ろ逆に、かう云ふ發明がある度に、資本主義經濟の範にならつて、發明を利用して直ちに大商賣が始められるから、世界經濟の取引高に膨脹したと云ふべきである。能力は常に民族的に制約されて居て、商賣ばかりが國際的なものである。世界經濟のあの波瀾萬端の時代には、所を問はず、人を問はず總て貿易の激流に押し流されて、出來るだけ利潤の多い據點を占據しようと我勝ちになり、此處に英國が勝利者となつたのである。資本主義制度の適用に、次第に修正が加へられて、到る所で再び行爲が所有より、より高く評價される様になつて居るので、此の十年以上前から、遂に取引は後退したのである。列強は關稅條約で作られた強固な境界で、自國の經濟圏を獲得した。ヨーロッパの中樞に於て、行爲人は國際貿易から完全に閉め出された者もあり、その一部は彼等の内的再建が終ると、國際交通路上に横はる投機的利得の可能性などは此れを顧みず、ひたすら自己の完成に急いだのである。

英國は世界地表の二十七パーセントと、世界人口の二十五パーセントを擁して、今日最大の經濟圏を持つて居る。此れを本國に依つて確保する事が、十年以來英國の最も大きな頭痛の種となつて居るとこ

るなのである。此の經濟圏の統一を擁護しようとする、計畫が數年前カナダのオッタワで起された事がある。英本國及び自治領の代表達は、此の會議の席上でイギリス世界帝國内の經濟交換の爲に、色々の原則を提出した。周圍には關稅の高壁をめぐらし、その中では自由貿易の原則を奉せざる聯邦の設立が希望されたが、事實上此の制度は完成されなかつた。イギリス世界帝國の若干のメムバーは特殊關稅を實施したのである。オッタワの諸條約は、事實上一九三八年十一月の英米通商條約に依つて崩壊せしめられた。自治領の利害關係は後退せざるを得なかつた。そして政治的理由から、合衆國と緊密な連絡を保たうと云ふ本國の利害關係が勝利を得た。

専らヨーロッパ一般の利害關係、即ち、豫防戰の場合合衆國の力を借りて英佛を支持しようとする關心は、この時既にかくも重大視されて居たのであつて、さもなければ真先に取り上げらるべき利得の考慮が、かうして退却せざるを得なかつたのである。一方には自治領に、全然ヨーロッパ以外にある經濟的活動の可能性が與へられたが、それはイギリス世界帝國に缺が入つた事を意味して居る。イギリス世界帝國内のあらゆるものは、ヨーロッパの利益にのみ向はしめらるべし、と云ふ既存の專横な見解は、完全放棄されたわけである。何故ならば、此の場合の英國の行動は、決して全ヨーロッパの利益とはならず、寧ろ、一二の民主主義の利益になるからである。此處に一二の民主主義國とは、ヨーロッパの行爲人に向つて、最早ヨーロッパに依つて身を守らうとはせず、他大陸にあつてまづ既に優秀を認められ

て居る力を借りて、防衛せんとして居る國々を指して居る。

かくて既に久しい間經濟的には存在して居た傾向が、政治的にもその特徴を現はすに至つた。以前にはヨーロッパが各大陸を支配して居たが、今日では各大陸がヨーロッパに對抗して立つて居る。若し、世界貿易の統計を、全銀行、全取引所の總額利潤から見ずに、各大陸の利得から見れば、此れを分析する勞を厭はなければ、此の變化は科學的にも證明せられるであらう。勿論金錢利得ではなく價值利得に照して考へた場合である。

何百年このかた、ヨーロッパ人が他大陸を支配して來た道具の技術的優越と云ふ物が、最早存在しないと云ふ事を、彼等は時々忘れてしまふ。我々の出來る事は、南米、オーストラリア、南アフリカ、東アジア、印度等の人間だつて我々と寸分違はず出來るのである。機械は他大陸の人間にとつて、最早決して神祕なものではなくなつて居る。簿記、取引所制度、銀行制度等が、他大陸に於ても多くの人から信用されて居る事は我々の場合と少しも變らない。世界の一民族は、數百年を通じてその智識を秘密にして置く事は出來ない。ヨーロッパ人が他大陸の人間を支配するのに用ひて來た知識は、次第にヨーロッパ人以外の者にも與へられる様になつた。ところで「所有」即ち有用な力を、他大陸の原料や農作物から、ヨーロッパの爲に作り出したあの優越性は、此處に破壊される事になつたのである。

ヨーロッパ人は他大陸の原料を、彼等の從來の本性に従はず、實力に訴へて利用して來た。どの商品

にも價值創造の乗數と云ふものがある。此れは一原料と、完成生産物にする變化から生ずる利得の大きさを表現したり、或は計算したりするのに用ひる一定の數字である。此の算術の問題を外來産出物に適用すると、先頃ストックホルムでフォン・エツプ將軍がなした講演（それは殆ど顧みられなかつたが）で確認されてる様に、手工業、工業、運送、貿易等で、一原料が完成生産物にされて得る價値の増加は、本國の原料で出來る製品の場合より、植民地の原料を用ひて出來る製品の場合の方が本質的に大きいと云ふ事が明かになつて來る。六十五ブフェンニエの生綿一疋からは、十マルクの靴下十足を製造する事が出来る。海外で活動するヨーロッパ人は誰でも、此の價值創造の乗數と云ふ馬鹿々々しく大きなもので、他大陸から利を擧げて居たのだが、今日では最早かうした形式ではこんな利は得られなくなつて居る。

硝子玉と金の交換から始まつて、支那に於ける株式會社設立と云ふ全く手のこんだ制度に至る迄、何百年このかた、ヨーロッパの爲に、は他大陸との貿易から生ずる「餘剩價値」と云ふものがあつて、民主主義國の人間は此れに依つて生きて來たのである。大資本の利子の一部は此の「餘剩價値」から流れ出て、英佛の支配階級の勢力を保證した。今や他大陸の人間は此の「餘剩價値」に抵抗する。彼等はヨーロッパに對して、經濟的同權を要求し、その大部分を戦ひとつた。それは全自治領で獨立運動が起つて居るイギリス世界帝國に於ける發展が示して居る。イギリスが印度で手を焼いて居る難局もその一つである。併しその最も顯著な例は、東亞かヨーロッパ勢力から離脱した事である。此の「餘剩價値」が何

十年となく奪ひ取られて居た地域の大部分は、日本が滿洲國及び支那にその經濟圏を作ると共に、ヨーロッパから失はれてしまつた。一九〇〇年以來、對支輸出は輸入より斷然多かつた。一九一一年には輸出十四億四千萬マルク、輸入は十一億四千萬マルクに過ぎず、三億マルクが「餘剩價値」として支那人から奪ひ取られたのである。英國が得た此の利益の配當は法外に巨額なものである。一九一一年ドイツが得た利益の配當は僅かに七パーセントに過ぎなかつたが、英國は此れに對して二十一パーセントも得て居る。併しヨーロッパの勞働力の點では、ドイツの持分は當時既に二十三パーセントに達して居た。一九二二年になると、二十八億マルクの商品が支那に輸出されたのに對して、輸入商品は僅かに十九億マルクに過ぎない。「餘剩價値」は九億マルクにのぼつて居る。現在此の「商賈」をして居るのが日本であつて、而も日本はヨーロッパとは根本的に異なる原理に基づいてやつて居るのである。何故ならば日本は支那人勞働力を利用するが、簡單には支那人を搾取しないからである。支那人は心では日本の侵略に反抗しても、日本軍の上海入城、廣東及び漢口占領に依つて、ヨーロッパ人が征服された事を、心から喜んで眺めて居た。この場合、支那人と下手な取引をした者は驅逐された。當時ドイツがかう云ふ取引に關與しなかつたと云ふ事を、友那人は敏感に感じた。支那人を壓迫したヨーロッパ人と、大戦前支那に於ける狭い活動範圍で、支那人に行爲能力を喚起してやつたドイツ人との間に、今日の支那人は區別を立て、居るのである。

「余剰價值」の消滅は、イギリスとオーストラリア、イギリスとニュージラランドとの間の經濟關係を攪亂し、ひいては政治的關係にも影響を及ぼして居る。南阿人は彼等の土地から奪ひ取られる商品と、英國工業品とを交換して生活するよりも、自ら經濟價值を作り出さうとするので、英本國も南阿聯邦との關係は益々惡化して來る。

「余剰價值」退歩の極端さ、此の世の財寶に對する民主主義人、即ち文明代表者の取扱ひ方の不合理さ無計畫さを確認する爲には、恐らく個々の原料の歴史を書かなければならぬであらう。英國はヨーロッパに重要なあらゆる原料に對して、殆ど此れを自由にする權利を持つて居たのみならず、全世界の小麥、綿、羊毛等に對しても處分權を持つて居た。今日でも依然として、石油及石炭の支配權をアメリカと二分して居る。諸礦物を掌中に收めて居る事はフランスの比ではない。合衆國の豐饒な土地に、方針もなく亂暴に機械をおつ放して、遂に耕地の肥土から灰分を取り去つてしまつたのだから、何と云ふ殘忍な浪費をしたものであらう。合衆國の大砂風、大洪水は、人類の食物の爲の貴重な財寶、即ち土地を單なる營利心から濫費し荒廢せしめた人々の罪と、小麥投機の勘定とに歸せられる。茶、羊毛、綿等も同じ様に浪費されたが最もひどい例はゴムである。

ヨーロッパ人はブラヂルの原始林で、印度人が久しい以前から使用して居た一つの原料を發見した。木から流れ出るゴムは、永い間様々な實驗を経て精製され、遂にそれからゴム靴が製造されるに至つた

ゴム使用の可能性は著しく増加した。電氣工業はゴムを必要とした。自動車のタイヤが發明され、ゴムは最大の事業になつた。

ゴム生産は一九一二年迄、大體に於てブラヂルだけに限られて居た。幸福にも所有人は、既に世紀の轉換期の頃、原始林の大搾取を終つて居た。ゴムは産出が稀であつたから、英國は如何にして此の事業をすべきか思索し始めた。手を代へ品を代へた秘密の掛引(此處でそれを一々とりたてても面白くない)をやつて、ブラヂルからゴムの木の嫩枝をロンドンに運び、それを更に英領マレーに移植した。數年後には大資本を投資して、其處にゴムの木の植付けが行はれた。ゴムの木の嫩枝は、夜と霧に扮れ、オランダの植民地にも運び込まれゴムは此處でも生産される事になつた。今日では世界のゴムの五十二パーセントが英領マレーで生産される。併しそれは、永い間には決して確實な營利ではなく、又慎重に計畫されたと言へる程の生産ですらないのである。何故ならば英領マレーにゴムの木を移植した爲に、土民の食料として必要缺くべからざる米が、最早自國で得られなくなり、輸入しなければならぬ始末になつたからである。

ゴム生産の利益の恩澤は、土民にも與へられたが、流れ込んで來る金は彼等の經濟形式に適さないから、此の利得は却つて有害になつた。そしてそれは豫測されなかつた事であり、又取り除かれもしない。英領マレーへも、蘭領印度へも、シンガポールを通じて支那人がゴム商賣に殺到して來る。誰も彼も唯

金儲けだけを考へて、十年計畫の規定の經濟管理の事など考へる者はない、ゴムの價格は投機の利害關係に従つて一々變る。合衆國の株式市場や銀行の懐を肥やす爲に、再びブラジルにゴムを栽培するとかリベリヤに新しくゴムの植付をやらうとか、さう云つた計畫は大資本が投せられる。ブラジルでは氣候に原因する障害が克服されず、リベリヤはゴム栽培の過激な労働に堪へない土人の懶惰をどうする事も出来なかつた。金儲けばかりを目當にして居たのだから、かうして總ての事は無計畫に行はれたのである。

今日ゴム栽培者及びゴム投資をして居る資本家の誰もが、直面して居る事實は、一定期間後には、合成ゴムの方が天然ゴムより良質で廉價になる、と云ふ事である。ドイツばかりでなく、諸外國に於ても將來合成ゴムの工業的大量生産が實施されれば、ゴム投機はなくなると云ふ事を、彼等は今日早くもよく知つて居るのである。何故ならば、若干の知能人の創造的能力から生れて、その他には殆どその依つて來る所のないゴムは、今後永年に亘つて、その一定量が一定價格で賣られる可能性があるからであるが、さうなればゴム關係の「所有」は姿を消すわけである。その時は平時に於ても戦時に於ても、ゴムの生産の支配に依つて、これ迄英國がほしまゝにして居た此の威力——此の所有——に期待をかける事は出来ない。

此の事は單に一例として擧げられるだけである、と云ふのは、民主主義諸國間の所有財貨交換と云ふ

全機構の中に存在する缺陷と、無計畫性とを、此れが最も明白に示して居るからである。新製原料に原因するにせよ、新經濟機構に原因するにせよ、不安定價格に對して、將來の相當期間固定される價格が對立せられる様になれば、その瞬間、所謂世界經濟の各方面にあつて、各原料を扱つて居る總ての投機業者と取引所とは覆滅の憂目に會ふ筈である。それ故に「全體主義的國家の經濟に、今日早くも民主主義國家の經濟に優る事數等である。國家の最高統帥部から、労働者の一人に至る迄が、生産及び利潤のあらゆる問題を一樣に解釋し、規整するならば、價格の動搖と云ふものはない、又、原産物、加工、中間取引、販賣等の間に横はる利潤段階にも、賃銀にも動搖はない。かう云ふ機構を持つた經濟社會から出來る生産物は、一定不動の價格で相當期間供給される事が出来る。それは又一方手形振出人の仕事を楽しにする。穀物、油の如き大量の商品の生産に當つて、ドイツ國內の需要を目當にして居る國や、ドイツでそれ等の物を賣らうと努めて居る國に對して、今日ドイツはその對價物として機械及びあらゆる工業製品を、長期に亘つて國定價格で提供する事が出来る。さうすれば能力の利を超越し、如何なる管轄心にも妨げられない商品交換が生ずるわけである。農業生産國に於ける場合、又は油井掘鑿の場合とかには、植民、機械調達、新資源開發等の方策が今後十年に亘つて講せられる可能性がある。ドイツに於ても工業品製造の量が、今後十年に亘つて詳細に確定される可能性がある。その爲に労働者を植民させる事も出来、原料調製は事前に規整しておく事が出来る。

此れこそ正規の經濟である。民主主義國には附き物であり、文明の最大特徴たる無秩序の經濟に對して、截然と對立して居るものである。

他大陸民主主義國の所有の價値に現はれた此の徹底的變化、所有の利用と、各國相互の商品交易とに現はれた革命的變動——それは今や、全世界に於ける英佛の政治的勢力の大々の喪失を併發するに至つた。東亞に於ては、その利得が失はれたばかりでなく、彼等の威望も地に墜ちたのである。ヨーロッパの威力は、他大陸の人間に對して、最早余り暇みがかなくなつた、と云ふ認識が東亞から次第に波及して行つて、印度へ、アジア内地へ、遠くアフリカへ迄到達したのである。今日ロンドンで、イギリス世界帝國の實力を、一九一四年の状態に比べて決算してみると、恐るべき結果を發見する。イギリスが此の三十年間に賭けて失つた民主國人の所有は、實に莫大なものにのぼつて居る。そしてそれに依つて他の民主主義國家を、不安の中へ、逼り來る文明崩壞の中へひきづり込んだ。勿論フランスもその卷添を食つた國の一つである。

フランスはヨーロッパの典型的原料たる鐵の産出國である。その經濟構造は健全であり、經濟圏は殆ど理想的である。植民地は南フランスのすぐ門前にある。併し此の國の所有は大多數の國民から投機に用ひられず、今やフランスは全世界の民主主義國の中で、最大の危機を體驗して居る。その一原因をなすものは英國依存である。フランス當局の見解が利となすものは實際は不利である。英國仕込みの大工業

家の御曹子や産業王の居る北佛とパリは、物質生活に於ては英國の立場に追隨し、さう云ふ見地から投機が行はれ、世界經濟が形造られる。此の部分のフランス人の大半は、英國が作り出す利得に依存し、又パリの政治的動向は、北佛の工業から著しい影響を蒙つて居る。併し正常のフランス人は、經濟及び政治のかう云ふ型を、深い疑惑を以て見下して居るから、社會の幸福の爲に献身努力して居る人々に對して深甚な敬意を拂ふ事も、或は無條件信頼を以て此れを遇する事も、一體に忘れてしまつて居る。

マルキシズムは英國模倣の資本家とは反對の事をする。英國では文明の手段を用ひてマルキシズムを抑止して來た。併しフランスでは極力此れと和解する必要がある。二ヶ年を通じて、(表面的には人民戦線内閣となつて特徴を現はした)マルキシズムは障礙を取り除いたのである。マルキシズムはフランス國民の所有を騙つて、原料の投機に赴かした。それは市價、投賣、濫費等による鞘取りの投機ではなく、無産者の財布を利用する投機であつた。マルキシズムが細民に對してやつた實驗は、細民をして實に多大の犠牲を拂はしめたのであるが、それは恰も、一路崩壞に頻する産業の創立者や銀行が、細民のポケットからその金を奪ひ取つたかの觀があつた。

何故多くのフランス國民は人民戦線の議員を選んだのか?、彼等は、人民戦線の人々を選べば、富裕になれる可能性を、將來細民に與へてくれる何物かが約束されてでも居る様な印象を受け取つたのである。フランス正國民は、人民戦線の綱領に従つて、勞働を減じ収入を増すべし、此れこそ民主主義文明

の理想である、と云はれて居る。

此の實際は無慘にも失敗した。無い袖は投機とても振らせる事が出来なかつたのである。所有そのものが既に著しく後退し、より高尚な労働能力のみが、人間生活を保證出来る様な時代には、人民戦線の人々はフランス人を誘ひ込んで、その行爲力を巧みに詐取したが、併しさうするとパリの銀行の金準備さへ持ちこたへられなかつた。フランスは今日、先づ以て喪失した生産を取り戻す必要を感じて居る。フランスの愚物共は、前代未聞のたちの悪い冗談をやつて、必要不可欠なものとは正反對の事をし出かした。だからフランスにとつては、民主主義的資本主義の悲劇が、特殊な（古代希臘劇の後で演ぜられる一種の喜劇）「森の神の喜劇」を持つたわけである。週四十時間制によつて、既に大損害を蒙つた小企業家は、かうなると更に又危機の重荷を負はされる事になる。途方もない高物價に直面する利子生活者と、週四十時間制の夢で欺かれた労働者は、それでも民主主義の恩恵を信じさせられる。所有は最早絶望である。フランスの必要な軍備を如何に賄ふかと云ふ事さへ混沌として居る。フランスが此の傷を迅速に癒す事が出来るかどうかは、一にかゝつてフランス自身にある。兎に角先づフランスの勢力は脆弱にはなつて居る。

ところでフランスは、金の室を抱へて居るにも拘らず、最早昔日の勢力を擯にする事が出来ないものでヨーロッパでも近東地方でも敗北し、かくして、フラン工業と貿易にとつて、巨利を生んでくれる多く

の商品の生産地に於ても敗れるに至つたのである。近東では英國も勢力を殺がれて居る。此處の葛藤は既に危機に類して居る。假令實力を行使してアラビヤ人を鎮壓しても、此の危険は依然として去りはしない。併し十年前には、まさかその出現を考へられなかつた、回教の國粹主義に對して、英佛は共に防衛にとめて居る。回教の宗教的熱情と覺醒した國粹主義とは、一時土耳其にもベルシャにも、アラビヤ、埃及、アルヂェリヤ等にも競ひ立つた。ロンドンとパリの當局は、此の運動の危険性に就いて、自國民に告げる以上の事を知つて居る。イヅン・サウドがメッカを占據し、然る後埃及の回教と聯合するや、地中海よりメンボタミヤに至る英國の道は危険に曝された。此の重要交通路の安全性の回復は、パレスチナの英國が、ユダヤ人の運命よりも關心を持つて居る所である。

一九三七年、土耳其、イラク、イラン及びアフガニスタンの間に結ばれた四ヶ國協定は、ホルシエビズムと英國に對して共同戦線を張つて居る。若しホルシエビズムが、（そんな事は嘗て一度も成功しなかつたけれども）回教の國粹主義と提携する様な事があれば、それは決して英國の得にならない。併し回教が完全にホルシエビズムを遠ざければ、英國の危険は更に大きい。何故ならばそれは、英國が實力を以て今後何事もなし得ない位の、回教の底力を意味するからである。ところで回教の地は英國にとつて、綿と石油を供給してくれる資源地である。近東に於ける石油の特權を得ようとして、英米がやつて居る角逐を眺めて、賢明な回教徒の或る者は、ヨーロッパ人が此れ迄當り前だと言はぬばかりに要求して來

た物を、一度思ひ切つて拒絶したら、自分達はどんなに強くなれる事だらう、と思ふ様になつた。
エジプトに關係のある「スエズ運河特權」は一九六四年までの期限である。此れも亦、將來埃及に於て、綿の栽培の場合、やらなければならぬかも知れない、國民運動の鎮壓を以てしても、エジプトに於ける英國の紡績業樹立を妨げる可能性のある問題である。

英國は今日でも、回教の變化に對して臨機應變の處置をとる可能性を持つて居る。併し出来るだけの所有を、異民族の富から搾取する事が出来ると云ふので、此れを奴隸化した民族と條約を結ぶ様な事をすれば、やがて政治的勢力と豊富な所有とはおさらばである。ヨーロッパ人種の卓越性に對する信念が、近東で失はれたのだ。イタリアはその農民をアラビヤ人の間に植民して、此の信念を取り戻さうとして居る。今日イタリアは六百萬の回教徒を擁して居るが、その中の四百萬はエチオピアに居る。回教徒地方の將來は、英佛にとつて累卵の危きにある。イタリアはそんな事にお構ひもなく、機を捉へて此の危険に對應せんとして居る。イタリアの植民方法は侵略ではなくて、アフリカの土地に於ける土著物の振興であり、イタリア人の勞働である。

民主主義國家の人々は、彼等の文明の危機と内部空洞に就いて、何を知つて居るであらうか？、彼等の政治家達が、憂慮にとざされて世界に眼を向けて居るのを、彼等は知つて居るだらうか？ 眞に重大な記事の各行の間や、或は慎重な演説の形式の間に秘められて居る事を、彼等は了解して居るだらうか？

文明の敵こそ今日の真相である。それは抑壓されて居る。何等の疑念もない人間は、感知性のある人間より御し易い、と民主主義政治家は考へて居る。民主主義國の人間にとつては、世界は欺瞞の霧に蔽はれて居るのである。

英佛人のアメリカに就て知る所は何であらう？ 金持の強國——と彼等は考へる、恵まれた民主主義者の居る國——と彼等は思ふ。其の筋の見解に合するものとか、對來の同盟國に對して所有及び文明の強力な擁護者の様に思はせるものばかりが、ニューヨークからロンドンとパリへ電送されるのである。アメリカでも實際は所有が失はれて行く事、ヨーロッパ勢力と云ふ所有が、否、將來はアメリカの支配力と云ふ所有も失はれて行く、と云ふ事は、固く口を緘して語られないのである。

アメリカ人の欲する所は何か？ 彼等の追求はヨーロッパ民主主義者の目的程制限されて居ない。彼等は既存のものを所有しようとしては居ない。アメリカ人は、嘗てその祖先の人々が望み、又或る期間

は、此處彼處にそれを實現する事が出来た、あの生活を欲して居るのである。
北米及び南米の來住者は、勤勉な勇敢な人間であつた。彼等の欲したものは單純な人間の幸福であつた。作物のとれる土地、生活を支へ、更に利子を生む收穫、憂へのない晩年——此れが彼等の望みだつた。彼等は此の幸福を、十年しては西へ、十年しては又西へと求め求めて行かなければならなかつた。此の國への來住者が多くなれば多くなる程、都會や移住民の稠密な地方では、益々此の幸福を發見する

事が困難になつた。廣茫たる大草原や深い原始林などを開墾して、生産的な土地にする必要がある所だけでは、人々はその勞働の収益を滿喫する事が出来た。東部では銀行家がのさばり、移民を投機に誘ひ込んだ。残忍な守錢奴は移民を剝滅し、機械を働かせて土地を耕さうとした。今日の合衆國には、銀行と投機の奴隸になつて居る人間が、太平洋岸に至る迄全國をウウウヨして居る。土地は分割せられ、残忍性が勝利を得て、守錢奴が國と經濟を支配して居るのである。東歐のユダヤ人街から出て、ヨーロッパ諸都市で露天商行商をやり、流れ流れてニューヨークの貧民窟に入り込み、幸福な夢を始終心に畫いてはやがて其處からす早く豪華住宅にゴールデンする事を心得て居たユダヤこそ、此の守錢奴の莫逆の友であつた。

合衆國の公的生活は、十年間と云ふもの、貧乏人の息をつがせまいとする金持の意思で充滿して居た近年の恐慌、所有の清算が出来ない金持の無力さ、——それは到る所で民主主義を生む天性の缺陷と相換つて、残忍な金持に對する信頼の念を揺り動かしした。下から上への批判が活動の機を得て、國家當局はそれだけで早くも危険に曝された。遂に警察でさへ犯罪人を制御する事が出来なくなつた。それ故にワシントンでは、内政改革が考慮し始められた。勞働に依つて、晩年を養ふに足るだけの所有の分け前を得ようと云ふ、單純な人間の此の古い理想が、再び取り上げられた。人間が自らを救はないならば、守錢奴が臺無しにしてしまつた土地を、結局どんな株式仲買人でも、經濟理論家でも、政治家でも救ふ

事が出来ないものだから、どうしても再び手を通して勞働に頼らざるを得なくなつた。

當分平靜化される見込のない葛藤は明かに所謂單純な人間が自由を欲して居ると云ふ事を意味する。獨力で前進したいのだ。彼等が團結して共同體を作らうとしさへすれば、助力が與へられる可能性がある。併しそれは民主主義の原則に背く、それ故に民主主義は、後から後から「單純な人間」を守錢奴の手に渡すのである。細民に與へられる國家的救濟策を握つて居る唯一の人間が此の守錢奴達なのだ。かくてアメリカ人は何時迄も投機の犠牲となつて居る。

一部の人は扶養社會主義の中に活路を求めた。それに依つてマルキシズムはその志す所に向はせられた。既にストライキ事件あり、養老年金（勤勞所得ではなくて、金持の過剰金から徴すべしとされたもの）の要求が起つた。さう云ふ時、何等かの政治的實驗の支持者を得ようとして、國家は養老年金を約する私的事業師や夢想家と争ふ事になる。

こんな状態で、どうしてアメリカの政治は、目的設定をやる事が出来よう。事實アメリカの内政も外交も、到底癒え難い渾沌である。或る者は英佛に頼つて、未だヨーロッパに存在すると稱せられる「健全な」民主主義原理に従つて自國を救はうと思ひ、又或る者はヨーロッパ民主國との提携を、斷乎として拒否し、純然たるアメリカ政策の中に救濟を求めて居る。ナチスドイツ反對のラヂオ演説をやれば、アメリカで人氣を博す事が出来る、と考へて居る英國の政治家に對してさへ、アメリカ人は嘲笑を浴せ

るのである。一般に政府、教會、政黨、ラヂオ、ユダヤ人、新聞、煽動家等は、ヨーロッパの行爲人に罵言を吐くのは極めて簡単な事だ、と一様に考へて居る。何故ならば行爲人は、所有から閉め出された者や、刻苦して所有を得んと努力しながら、遂に目的を達しなかつた人々にとつては、生來の敵の様に思はれるからである。行爲人は國外から見ると「堅實」に見える、彼等は斷乎として前進する。ナチズムとファシズムの背後にあるものは、残忍性でなくして、内的な力である事を、ニューヨークやワシントンの人間で考へる事が出来る者は一人も居ない。

民主主義者でもボルシェビストでもないあらゆるヨーロッパ人に對して、アメリカ人が敵意を感じる原因は、豫感を知らぬ人間の羨望である。

政府はその苛責なき反ナチズム宣傳に依つて、對外政策上の帝國主義をやらうとする。カナダからニューヨークやワシントンに至る迄の全大陸を、統一した政治的主権と軍事的權力の下に置くのが、合衆國の政治の目的である事を、翌二三年前迄は、ニューヨークやワシントンでは誰も否定する者がなかつた。アメリカ内海の全島はおろか、遠くハワイを過ぎて、日本の港を鼻の先に見る迄の、全太平洋の島々を占據しようとして居る事も秘密にされはしなかつた。此の地域の占領が軍に依らず、大抵ユダヤ人銀行の金（總計五十億ドルが南米に投資された）の力で完了した時、アメリカ人は恰も被征服者に自由を取り返してやるんだと云はぬばかりの振舞をした。アメリカ政府の全權委任者達は、公式には此れ等の小

共和國から退き、フィリピンには獨立が約束された。アメリカ大陸及びその周囲の全島よりなる一種の「國際聯盟」を作つた方が、アメリカの獨裁權を確立する事が出来る、と考へられた。ルーズベルトは一九三七年、ワシントンからヴェニスアイレスに赴き、合衆國大統領としては、最初の要求——南米に於ける合衆國のヘゲモニーに對する要求——を提出したが、その時は未だ敗北して引きさがらざるを得なかつた。アメリカの要求に對する英國及び共產主義の反對と國民的感情とは、南米中米の諸國で熾烈を極め、遂に此の汎米會議に於けるアメリカの計畫は斥けられたのである。

かくてアメリカは、今度は大軍備の宣傳と並んで、反ヨーロッパ行爲人煽動を盛に行つて、アメリカの全所有を結局己が勢力下に收めようとして居る。合衆國が金、海軍、通商關係等の力で、南米で確保した獨占的勢力を、再び取り戻すと云ふ様な事は、最早到底問題になり得ない。

ところで合衆國の所有を評價して、行爲人に對するヨーロッパ民主主義人の所有より、強力だと言ふ事が出来るだらうか？ アメリカの所有は、ヨーロッパ民主主義者の、所有の取扱ひ方より巧みに、統御されてゐるだらうか？ アメリカの帝國主義は、將來南米、カナダ、及び中米海洋上の諸島の人間の自然意思——ニューヨークやワシントンの人々と同じ物を所有せんとする意思、否、同じ事をしたいと云ふ意思——の中に、その終末を見出さざるを得ない。武力で占領された物は行爲で防禦せられねばならぬ。金力に依る侵略は永續しない。

回 想

歐米民族には二つの戦線——所有人と非所有人——がある。ボルシェビズムも亦前者に属する。民主主義とボルシェビズムとは世界観の上でも、政治的にも、互ひに結合して居る。民主主義人の生活形式たる文明は、行爲人の革命と一は反對に、無思慮、浪費、營利心で營まれて居る經濟の車輪の下に、巻き込まれたかの觀を呈して居る。所有人に對する此の行爲人の運動は、決して人爲的なものではなくして自然に發生したものである。所有人は一世紀以上も、大發見大發明を、人間の眞の幸福な状態に適應させる時を持つて居た。併し彼等は常に、利得と投機を目的として居たのである。

一七八九年の革命人と文明に對する反抗は、行爲人の覺醒によつて、文明が自然的終末を遂げる直前に初めて現はれて來た。民主主義の最後の支柱は軍備、制裁、政治的煽動等に依る權力である。民主主義は世界財寶の獨裁的處理に依つて、文明を救はうとする。所有人の意思通りになるなら、行爲人を再び民主主義人にしようとする。ソヴィエトロシアの所有は死滅し、民主主義の所有は累卵の危きにある。ボルシェビズムは反動として、民主主義を壓迫する。アメリカ民主主義の、未だに無約束な所有は、ヨーロッパ民主主義人の重荷となつて居る。彼等は今に至る迄、自己の發展路を發見して居ないのである。さて我々は、此の書物の開巻第一頁に提出した問題に、再び歸つて行く事が出来る。曰く「戦争か平和か？」

實力行使をやらないうで、不斷の戦争から平和を實現させる事が出来るかどうか、民主主義の豫防戦と行爲人の勝利の後に、始めて平和が得られるのかどうか——今や我々は此の問題に對する回答を發見する事が出来る。

第七章 権力か能力か

一九一四年と云ふ年は、所有人権力の全盛期を表はして居る。彼等が兵を動かして、その所有の権力たる鐵、火藥を戦線に参加せしめ、アメリカの清新な兵と共に、新世界のあらゆる原料を動員してドイツに當らせた時、帝政ドイツの強大な軍備を以てしても、尙且彼等はドイツより優勢な兵備を持つて居た。此の歴倒的勢力に對して、ドイツの兵及び國民は、長期持久、防戦此れつとめたが、遂に民主主義國政治家は、ドイツ軍の背後に暗黒界の人間を活動せしめて、ドイツ國民の魂を無力にしたのである。一九一四年と云ふ年は、民主主義権力の頂點をドイツ自身にも移し入れ、第二帝國の内政には、民主主義生活のあらゆる誤謬が横溢して居た。

民主主義、文明、營利慾、驕慢、階級分立、議會主義、政治の混亂、——かうしたものを、今日のドイツはすつかり清算して居る。民主主義國の軍事的實力は、最早一九一四年當時程強大ではない。この場合、陸海空の兵力の數字的計算ばかりが問題になるのではない。「戦争の可能性」のみでなく、經濟力組織、政治的宣傳をも考慮して、決定的なものは人間である。一九一四年、戦争勃發を體驗して、始めて夢をさまされざるを得なかつた行爲人、一九一九年、領土上でも、實力上でも、懸てヨーロッパに見られなかつた程弱小であつた行爲人、——彼等は今日、ドイツでも、イタリアでも否、全ヨーロッパに於て如何に強正になつた事か、ヨーロッパの歴史が、他大陸發見以來、未だ嘗てその例を知らない程である。

(314)

行爲人が此の様に強力化したので、數字上の比較さへしなければ、我々は以前にもまして、従つて如何なる敵に對しても、軍事上の力を驅使する事が出来る。我々は今日、四ヶ年の世界大戦當時に比べて更に優れた人間を持つた民族として、卓越した自衛力を發揮する事が出来る。ドイツ國民の經濟力は、我々の能力の覺醒に依つて著しい成長をした。我々は組織に於ても、生産に於ても、一九一四年當時より強力である。この場合、我々が八千萬の國民になつたと云ふ事が決定的なのである。併し總體を問題とすれば、我々の賭するのは人間の數ではなくて、人間の能力である。此の力は結合されて居るから、個々の八千萬の力を、並列總計したものより、遙に大きなものである。それに依つて我々は、萬人にとつての眞の平和を、攻撃に非ず、防禦に非ず、解決を心する權利を與へられて居るのである。

政治的宣傳も、今日では最早我々を恐れしめる事は出来ない。今日ラデオに依つて、如何に無茶苦茶に煽動が活動しようとも、政黨や階級の分裂を知らず、不規律多様な思想で容易に動搖されない國民には、そんな煽動の作用は及びはしない。我々を攻撃する者があれば、その時こそ、我々全八千萬の國民は、一つの精神となり、一つの思想となり、一つの行爲となるのである。敵は我々の精神をも、魂をも征服しなければならぬ。さもなければ我々の一人さへ得られない。此れこそ正に行爲人の本性であり、

(315)

彼等は此の點で所有人より秀でて居るのである。

我々が今後政治的宣傳を取扱ふに當つて、一九一四年から一九一八年に至る間、その煽動によつて、半ば我々を屈服せしめた人々に比して、その方法に於ては大差ないけれども、その効果に於ては、根本的に彼等を凌ぐであらう。我々とはとに角、生活の各種原則の正しさを、他國民に確信せしめんとする、既決の斷手たる目的を固守する事を、學んで來たのである。我々の生活の一方面に於て、又全方面に於て我々が進んで來た道を我が八千萬帝國國外の人間の、如何なる勸告に依つても、警告に依つても、又威嚇に依つても、我々は踏みはずす事はないであらう。敵は我々總てを説得しなければならぬ。然らずんば我々の一人をも得る事は出来ない。一方我々八千萬同胞は、我々の共同體の中にあつて、總統が我々に示した道の正しい事を確信して居る。

我々は我々の共同體、行爲、生活が、他に模倣される事を欲しない。ナチズムは人類的制約を受けて居るものだ。ドイツ國民にだけ可能なのだ。同様にファシズムも、人種的に、歴史的に制約を受けて居る。ドイツ及びイタリアの政體、生活形式、行爲形式等を、如何なる民主主義者も模倣する事は出来ない。

行爲人はボルシェビズムに對抗して、世界政策上の國境線を引いた。先づドイツはボルシェビズムの羈絆を脱してそれを根絶した。共產主義煽動のあの手この手を用ひる、ボルシェビズム思想の火が、街

頭や家庭で今でも萬一燃え上る様な事があれば、共同體は直ちに出勤して、此の毒物の所持者を殲滅してしまふ。ドイツ青年及び既に實生活に活動して居る二世代の人々の教育は、ドイツ行爲人の原則に背理して行動する事を不可能ならしめて居る。

イタリア人も亦、ファシズム制度を實施してからは、ボルシェビズム及び民主主義の害毒に對して、ドイツに劣らぬ抵抗力を示して居る。更に獨逸國境外に於ては、日本との防共協定に依つて、ボルシェビズムに對する防壁が築かれて居る。此れは別に、ドイツ、イタリア、日本の三國が、支那に對して此の城壁を作り、その蔭で、銃口から眼を光らせ様と云ふのではなく、寧ろそれとは反對に、此の防共三國民は、全世界の生活の中心に立つて居るのである。彼等は他國民の生き方を知らうとして居る。彼等は一刻と雖もボルシェビズムと云ふ敵を忘れない様に、永久にその危険から眼を離さうとしない。フランスのボルシェビズムが、政治的經濟的混亂の中に秩序の光をさし込ませようとして居る者に對して、下からの煽動の餘を向けるならば、世界の反共國民はそれから何事かを學ばうとする。彼等が適當な防禦法を知らないとするれば、防共協定を結ぶ事に依つて、彼等自身適切な處置をした、と云ふ事を今更ながら感じるのである。有効な反共運動が起る事が判れば、彼等はそれに一臂の力を借すのに吝かではない。併しその助力は、彼等が防共の爲に自己の中を得た特性を以てするのではない。ボルシェビズムに對して、內的に強固になるのは、各國民自身の任務である。暗黒界の如何なる叛亂も、最早反ボルシェビズ

ム國家を攪亂し解體せしめる事は出来ない。此の事は、ドイツにとりては一九一八年に比して、又、イタリアにとつては、ムッソリーニがローマに軍を進めた當時のイタリアの状態に比して、決定的な相異を示すものである。

ところで此の事實は我々にとつて、次の様な意味を持つて居る。即ち、假令一九一四年當時の所有の全力が、今尙民主主義國にあるとしても、又假令民主主義文明の危殆と、民主主義政治組織の崩解に就いて、此の書に述べられた總ての事を、英佛米の三國が克服して、再び一九一八年當時と同じ權力を、我々に向つて振ふ様な事があつても、我々は此れに對して、少くとも一九一八年の場合と全く變らず、否、それ以上に抗戦するであらう。ボルシェビズム暗黒界が參加しても、我々は此れに拮抗して、毫も我々の秩序を攪亂せしめないであらう。一九一八年には、民主主義の名に於て、ボルシェビズム暗黒界の動員が行はれ、遂に戦争の幕が閉ぢられる事になつたが、此度は決してさう行かないであらう。實際萬が一にも、民主主義國の人間が、暴力行使に總てを賭ける様な事があれば、ボルシェビズムに依る人心攪亂が起るのは、恐らく我々の戦線の彼方であらう。我々は決してボルシェビズムの犠牲になる事はないであらう。列國こそボルシェビズムの犠牲にならない様に要心すべきである。我々はボルシェビズムの如何なる攻撃に對しても、とにかく各戦線から防衛して、此れを敗退せしめるであらう。

行爲人の力が常に成長して行く事を、我々は忘れたくない。此れに對しては如何なる反抗も存在しない。

い。イタリアは地中海圏に秩序を齎し自國の爲に獲得した。アフリカの土地を植民地化するのに、新しい形式を見出して居る。ドイツは外交の新形式を進展させたが、其の中には、ヴェルサイユ條約のあらゆる方式とは凡そ縁のない、行動の法則が我々の手で規定されて居るのである。我々は土地を、而も我々の行爲力を活動せしむべき土地を渴望して居る。併し我々は、民主主義國人がやる様に、此の土地で其處から産出する原料や農産物を廉價に購ひ、更に此れを高價に轉賣して、利を貪る様な真似はしたくない。少數の者に夥しい利得を齎さんが爲に、新發明を出来るだけ迅速に資本主義化すべき株式會社の爲に、我々は其處で金錢を集めようとは思はない。土民を奴隸化し、或は土民からその所有の一部を奪ふ爲に經濟圏を獲得する事は、ドイツ對外政策の目的とする所ではないのである。

我々は我々が築きつゝある經濟圏の中で、ヨーロッパ諸國民——漸くにしてその能力完成への、發展の緒についた諸國民——に對して、一臂の力を貸さんとして居る。此れ等の東南ヨーロッパ諸國民は、最後の者として、その力を意識するに至つた。彼等は不安定な境界内に生活して、今日は經濟的帝國主義の犠牲となり、明日は國民政策の犠牲になつた。それから所有妄想の波に押し流された。パリは彼等にとつて、ヨーロッパの光の都であつた。パリには銀行あり、取引所あり、娛樂あり、享樂あり、であつた。英國のクレヂットが諸國に流れ込み、利子の事などは殆ど心に懸けられなかつた。舊オースタリー・ハンガリー領の此の土地には、戦争後新しい國々が建てられた。ハンガリーの様に、永い間狹隘

な土地に、鎖國的な社會をなして生活して居た民族は土地を失ひ、未だ若々しい存在のまゝ、簡単にフランスに與した民族は、國土を廣げられた。フランスは小國協商側と共に、ヨーロッパに於けるその權力野望を、軍事的にも經濟的にも支持すべき機構を造り、國際聯盟に於ける政治的策路の爲の協力を獲得した。

東南ヨーロッパの諸國民の生活は、ヴェルサイユ媾和後二十年の間決して幸福ではなかつた。彼等の手からはクレヂットが流れ出し、大地の財寶は蕩盡された。國民は平安と能力とに慥れる。かゝる時に當つて、東南ヨーロッパの經濟圏で彼等を救ふ事の出来るのはドイツである。此れ等の諸國とドイツとが長期に亘る固定價格で商品の交換をする場合、其處には征服者とか被征服者とかは存在しないのである。其處にあるのは、共々により高い生活様式に向上する事だけであつて、ドイツは經驗及び豊富な行爲力を與へて、他國の技術を促進せしめ、その國民を健全に扶養する爲の土地の財寶を維持してやるのである。かうした土地でドイツが勢力を得れば得る程、經濟圏の「侵略」と「開發」との差異を、世界は益々認識するに至るであらう。

此れも亦、行爲人の革命と密接な關係のある、一ヨーロッパ革命である。かう云ふ原理に基づいて、ドイツはその舊植民地の反還を要求する。ドイツはアフリカに於ても經濟圏の所有を欲するものであるが其處でも決定的な事は殘忍な利得ではなくて、商品の交換である。

今やドイツは此の原則を、自國內に於てのみならず、出でてはヨーロッパ諸國民の福祉の爲に追求して居るのであるから、ドイツ國民はユダヤ人を、經濟上の公的生活から、徹底的に驅逐してしまはなければならぬ。何故ならばユダヤ人は、明かに營利本能、投機本能の代表者だからである。彼等は所有妄想の波の爲に、ユダヤ人街から押し流されて來た者である。ヨーロッパ及び世界の、國際貿易交通の夥しい交叉點に於て、民主主義國の人々が、發明を利用したり、他大陸から携へて來たりして、掻き集めて來られる利得には、誰しも與る事が出來たので、ユダヤ人はそれに依つて利を得たのである。投機のある所ユダヤ人あり、勞働のある所ユダヤ人無し、と云ふ有様であつた。

ユダヤ人は首尾一貫、東歐のユダヤ人街から出て、ドイツの商業地を通り、それからパリ、ロンドンの株式市場に流れて行つた。當時其處で世界經濟の流れから汲み取られる利得は、東ドイツ諸都市の古物市場や、ドイツ西部の百貨店で得られる利得よりも遙かに大きかつた。ロンドン及びパリの世界經濟が漸次衰退して、投機利得が乏しくなればなる程、益々多くのユダヤ人のアメリカに移住して行つた。彼等は今では帝國主義合衆國の、投機を中心をなして居る。彼等は合衆國で、少くともニューヨークで利慾一點張りの下等な活動力を持つ人間になつた。ニューヨークはシカゴやサンフランシスコより大きな勢力を持つて居るのである。ユダヤ人が投機で巨利を博する事、此の投機は一種の災禍であつて、それは人類がその文化の現状を維持しようとするれば、彼等を根絶せずにはおかない不幸である事が、將來

合衆國に於ても感じられるであらう。そしてその時は、人間が所有から行爲に覺醒變化して、ユダヤ人は除々にその古巢に退去する様になるであらう。

我々は漸く原料經濟の變化の緒についたに過ぎない。他大陸の原料に關しては、ドイツは依然として民主主義諸國人の處理權の下にある物資に依存して居る。所有人はドイツに對して、現在より一段と經濟的に門戸を閉ぢる事が出来る。それは制裁戰の強化を意味するであらう。併しドイツを敵として、所有人の間に如何なる通商條約が結ばれようとも、それは我々にとつて、我々の行爲力に拍車をかけるのに過ぎない。大戰中、チリ硝石を絶たれた我々は窒素を發明した。世界の廣大な小麥畑から閉め出されて、我々は我々の土地を、更によく耕作する事を知つた。ドイツの農民は最近の五ヶ年に、實に驚歎すべき事を成し遂げた。ドイツの耕地で成し遂げられた業績が、僅少たりとも失はれない様に、ドイツ人を適當に、工業及び農業に従事せしめると云ふ課題をも、我々は配慮するであらう。

今日、人的資源は以前にも増して貴重なるものである。民主主義列國でさへ、早くも人口減少を憂慮して居る。ドイツの生産數は再び増加して居るが、一九〇〇年當時の出産率に達するには未だ前途遙遠である。所有人との避け難い戰爭に當つて、來るべき時代の人々が、餘りにも少い人的資源を持つて苦しまない様に、我々は一九〇〇年當時以上の人間を生まなければならない。此の能力に就いても、我々は配慮する所があるであらう。

併しドイツ國民が、四ヶ年計畫の中に準備された豊富なあらゆる行爲に、關與するに至つた時に、我々は八千萬の國民と共に、豫防戰爭を以てする如何なる威嚇に對しても、泰然として耐へる事が出来るのである。戰爭か平和かと云ふ問題のバロメーターになるのは、軍備上の數字のグラフではなく、所有人と抗爭する人々の行爲のグラフである。併し此のバロメーターは、少くとも戰爭に對する抵抗力の強化を示すものである。

ヨーロッパには、進展の新法則が現はれた。前進を欲する者は平和の味方にして、止まらんと欲する者は權力の行使者なり、と云ふ法則である。前進せんと力を致す者は、止らんとする者が今日既に行ひつゝある、經濟戰、政治戰、思想戰に對して防衛しなければならぬ。我々は此の鬭争を怖れはしない。我々はヨーロッパに於て勝利に次ぐ勝利を得、遂にナチス八千萬の國民となつたのである。戰爭煽動者が、未だ大臣の椅子迄進出して居ないから、今日でも砲は沈黙を續け、爆撃機は未だ行動を制止されて居るのを我々は知つて居る。萬一英國乃至フランスの責任ある首相が、他日對獨戰の命令を下す様な事があれば、その時こそ我々は、罪は誰にあるかを知るのである。

一九一四年は、行爲人對行爲人の戰爭が行はれたが、政治を行つたのは兩軍共に所有人であつた。ドイツの不幸は此處にあつた。當時戰爭の責任と云ふ問題が、政治的に評價された。それは一方の側、又は他の側へ、何時動員命令が下されたかとか、所謂戰爭阻止の意志を、どんな形式で敵味方夫々の外交

官が用ひたか、とか云ふ様な事を、記録から確定しなければならぬ、と云ふ意味ではなく、誰がその所有維持の爲に戦争を欲したか、戦はずして和解に達しようとする信念を、誰が持つて居たか、と云ふ事が評價されたのである。和解を欲したものはドイツであり、権力を用ひんとしたものはドイツの敵であつた。

併し今日では最早、生命と云ふ大問題に對する、共通な立場に基いて、責任問題は論じられなくなつて居るだらう。我々は戦争の責任と云ふ非難のあらゆる可能性を、遂に超越するであらう。我々は他國の所有を欲しない。彼等がその所有妄想から癒えて、從來の権力を超克し、發展して行爲に醒めてくれれば、それこそ我々の欣快とする所である。その時こそ我々は、能力と能力を交換出来、今日では未だ夢想を許されない幸福な將來を、人類に與へる事が出来るであらう。

さうなればヨーロッパの人間は、否恐らくは合衆國の人間も、最早階級や権力政治國境に従つて、分割されては居ないであらう。國民の力こそ國境を劃定するであらう。保證國境と云ふものはなく、限界性、起原、發展可能性等に依つて規定される行爲の國境があるばかりであらう。我が社會主義は、他國民の中に、その積極的對重を見出し、我々は總て前進するであらう。我々の周圍には最早、不安に驅られて群をなした他國人は見られないであらう。各人各様の歩調、各國民の魂から響き出る歌、種々な工具、各國各様の勞働方法、各國民獨自の教育——かうした相異の中にも、一國民に次の一事がある。即

(324)

ち我々を人間にするのは、我々が持つて居るものではない、と云ふ事である。我々が出来る事——それだけが我々を前進せしめるのだ。ヨーロッパは世界に於ける、その勢力の退却を取り戻すであらう。未だ所有の誘惑に陥らず、物質の陶醉の虜とならなかつた嘗ての様に、我々に再び尊重せられるであらう。「西洋の没落?」——我々行爲人と民主主義人とは、既にそれを脱して居る。併し民主主義人は、「西洋の停滯」と云ふ標語を選んだのである。

併し停滯は没落の危険を防ぐ事にはならない。西洋が「救済」されて、新しい平和に向ふには、即ち更生される爲には、あらゆる人間の——今日の行爲人はかりでなく、全ヨーロッパ人の——行進による他はない。用意萬端整へて我々が待つて居るのは、攻撃の態勢ではなく、此の共同行進の爲である。

何故に我々は強大ならん事を主張するのか? 一國民が平和を標榜して、世界歴史の埒内に登場すれば、思想及び武器の、如何に多くの内的外的の力が必要であるかを、我々は認識したからである。人類の革命は如何ともし難い。所有の時代は終り、行爲の時代が始つて居る。戦争は此の新しい時代には役に立たない。戦争は、所有人の余命をつながせると云ふ意味しか持ち得ないであらう。所有人は攻撃と豫防戦争を企圖するかも知れないが、我々が軍備を整へるのは、單に防衛の爲である。更にその上に、我々にはより高い目的がある。各國民の爲に、彼等の許にある行爲人をして勝利を得しむる事である。此の目的は我々だけでは達せられない。それには總ての人の意思と認識とが必要である。此れに至る道

(325)

は外交的方式に依るのではない。二つの國民は、條約や協定に依つて、親善關係も保ち得るし、又敵對關係にもなり得る、併し生存と將來に對する希望とが、危殆に瀕して居る事を、二國民が共に認識すれば、假令その希望實現の努力を、條約協定によらぬ他の色々の方法でやつても、かうした二國は友好關係だけを持続出来るものである。力を與へるのは此の認識だけである。認識しない者は、權力を用ひて力を得る事が出来ると信じて居る。

我々はあらゆる者を變革する此の生活革命の中で、来る日も來の日も、憂愁にとざされつゝ「戦争か平和か」と云ふ問題を提出しなければならぬのだらうか？「此の永遠の戦争から、如何にして平和を齎す事が出来るか？」と云ふ問題の焦點に、我々は眼を合はす事が出来るだらうか？

ヒトラーの平和意思は不動である。ドイツ國民は平和の爲に戦つて居る。一方、現代は我々を求めて居る、現代にはあらゆる者が認識——所有妄想に對する行爲人の革命と云ふ認識——を得るに至つたか否か、と云ふ問題を、今尙提出する余地が充分にある。我々は問ふ、「物質か精神か？ 古いヨーロッパか新しいヨーロッパか？ 權力か能力か？」と。我々は斷乎として此れが撰擇をしたのである。

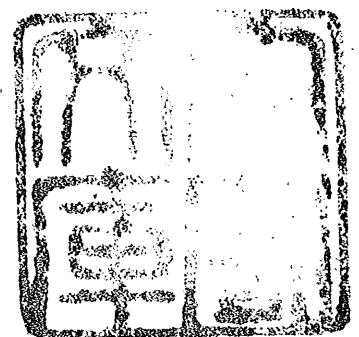
結 語

此の書の根底となすものはドイツの政治が得た體驗である。二十世紀のあらゆる記録や證言を、後日

科學的に検討すれば、第三帝國の豪快な闘争及び赫々たる勝利の眞只中で、或は國會で、會議の席上で眼や耳が把握したものとは一致しない結果が、個々の點に於て現はれて來るかも知れない。次に十九世紀の歴史的研究は、少數の例外を除けば、自由主義の體驗から脱する事が出来ない、と云ふ結果も生れた。來世の爲に創造の努力を致したわけでもない偉大な人々の業績は免も角として、一七八九年から今日に至る、人類發展の線を求めるなら、それは我々の思想を、形式的に過去に移して見ると云ふ様なものではなくて、開明を意味するものである。

此の書物の書き方は科學的ではなく、政治的である。文獻を擧げる事は出来ない。此處に述べられて居る政治的體驗は、著者の個人的見聞と、手に入る限りのあらゆる新聞、雜誌、パンフレット、書物等から得た知識である。有用と思はれた材料は總て採り入れた。此の書の中に、豊富に盛り込まれて居る信念は、除々に成長を續けて居る。此の書を書かした信條は、古いヨーロッパと闘争して獲ち得たものである。

我々文筆人と共に、ヒトラーの爲に、闘争活躍し、ナチス共同體の偉業に従事して、總統と共に、權力に抗する能力の闘争に専心して居る公人や、多くの同業者に對して、著者は感謝の念を捧げるものである。此の書の思想及び知識の大部分は、正に此の共同體の中に誕生したものに外ならない。



本書は
国定規格A5判